町民C、勇者様に拉致される

つくえ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
町民Ｃ、勇者様に拉致される

【Ｎコード】
Ｎ５６１１Ｖ

【作者名】
つくえ

【あらすじ】
のほほんと生きてきた町娘。戦闘能力もからきしの彼女がある日突然拉致される。その相手は、なんと勇者様だった！？　町民Ｃ視点で送る、主にコメディ、時折シリアスのファンタジー小説です。

町民C、拉致される

働いているパン屋に出勤しようとしたら、拉致された。

冗談みたいなホントの話。冗談で言ってるんだったらどんなによかったか！

正直、わたし自身冗談であって欲しいと祈ってる。祈るだけだけど。今はどうにも硬直して動けない。

「うあー」

ほら、うめき声すら乙女の声じゃなくなってます。自分で乙女って言ったら思ったより恥ずかしかった！

乙女じゃなくとも、せめて人間でありたい。私は荷物じゃありません。声を大にして言いたい。私は荷物じゃありませんから下ろせ！！

誘拐犯は軽々と私を肩に担いで、朝っぱらから町を歩いています。堂々としてるな誘拐犯！

ほら、通りがかったおじいちゃんがビックリしてるじゃないか。おじいちゃーん、助けてー。いや、拝まなくていいから。何で拝んでんの。まだ声が出せない。このまま動けないなら、助けを呼ぶこともできない。

誘拐犯が歩くたびに、みぞおちにヤツの肩が食い込み、ぐえ、ぐえって声が出てしまう。膝の裏を片手で抱えて押さえている様子。

軽々と持ち運ばれるさまに、先月ダイエット頑張らなかったらよかったとわけの分からない後悔が押し寄せてくる。まあ、減ったのは僅かな体重と胸だけでしたが。胸だけでしたが！！そこは減るなよおおおと泣き崩れたのはちょっぴり苦い思い出だった。減らなか

ったお腹周り。そこに幾らやわらかお肉があるとしても、肩にみぞおち食い込んでるから！　みぞおちって、人体の急所だから！

ちなみに私はタダの町民Ｃの分際なので、体なんて鍛えてありません。

筋肉なんて無いよ！　町民Ａ、Ｂでもすらなく、町のにぎやかし要員、それが私だ！　そう自負してる！　地味顔、田舎娘服装、ほーらどうみてもお金持って無さそうですよー、拉致しても意味無いですよー、と心の中だけで叫ぶ。声に出して言いたいけれど、唇開いても出る声ってぐえとかうあとかしか無いってなんなの。

なんでこうなった。

呆然としながら自分の長いみつあみの先っぽが、顔の横でゆらゆら揺れてるのを眺める。

目立たない薄茶色のくせっ毛が誘拐犯の歩調に合わせてぴょこぴょこ跳ねる。

あ、誘拐犯の癖に生意気な。このマント、相当いい素材だわ。肌触り滑らかです。

ワーちょっと冷静になってきたかも。

いける！　この勢いで今の状況を整理しよう（きりっ）

えーと、今朝は特に夢もみず、すっきり目覚め。

お気に入りの緑のワンピースが乾いて無いから、代わりに水色のスカートと白いブラウスと茶色のブーツで家を出た。どうでもいい話っていわないでください。一応、乙女として身だしなみは大切なんです。

そうしてパン屋のエプロンと財布が入ったかごバッグをもって、家を出たところで視界がぐるっと回った。

気がつけば担がれて街中を移動中。

いや、状況整理できて無いから！　自分で自分にツッコミだよ。

だんだん頭に血が上ってきたあああ。それにしてもこの人一体どこに連れて行くの。見当もつかない。周囲の風景をグルグル見回してみても、人通りが少ない所通っているのが分かった。

土地勘のある人間の犯行ッ！　でもこんなマント使ってるような知り合いなんていないし。

はっ。

実は変質者！

営利目的ではなく、そう、変態行為目的での犯行か！　食べても美味しくありませんよ。食事的な意味でも、性的な意味でも。ほらほら、担いでるなら分かるでしょう、私のまな板具合がな！

パン屋のおかみさんが、胸は作るものだといってた。名言である。でも上手くメイキングできません。寄せるものが、無いのでね！お腹の肉はあるんだけど……。だんだん辛くなってきた。精神的な意味で。

そうこうしているうちに、周りの風景が変わってきた。

宿屋街だ。

まさかの展開ですよ！

町娘C、このあといろいろいたされた挙句、鋭利な刃物とかで切り裂かれて死体発見、あらたな事件の予感とかな！

隣のおばちゃん、「あの子は普通のいい子でしたよ、なのにどうしてあんな事件に巻き込まれるなんて」ってぐらい言ってくれるかな。

そうして町を訪れた勇者さま一行に、町人Aさん辺りが噂として

伝えるんですよ。恐ろしい事件がありましたよ、多分魔族の犯行ですねとかってさ。

色々考えてたら悲しくなってきた。頭に血が上っているせいか、だんだん目が潤んできたのが分かる。

何でこんな目にあってるのか、妙に悲しくて、悔しくて、いろいろこみあげてきた。

お父さんやお母さんが死んだ時、強く生きるって決めたのに。ここで人生終了したら天国で会えるかなあ……。

ひとりしんみりムードになってきた。やばい本気で泣けてきた。

うえー。

べそかいてたら、いつの間にか誘拐犯の足が止まっていたらしい。

わたしは泣いてたから気付かなかった。

「あなたはいったい、何やってるんですか！」

神様！　どうやら常識的な人がいたようです！！

町民C、拉致される（後書き）

※誤字修正

町民C、泣きべそをかきまくる

私は唐突に下ろされた。
腰をひょいと掴まれ、人形を下ろすように、こう、ストン、と。
ひどい泣き顔を人様にさらすわけにはいけないので、とりあえず手で擦ろうとしたら、

「女の子泣かせて何してるんですか！」

と先程の声の人が、常識的なことを叫んでくれた。
もっと言ってええぇ！
さっきの拝んでたじいちゃんとは違う、助けてくれる予感がひしひしとしている。それにしてもあのじいちゃん、何を拝んでたんだ。ちょっとボケの心配をしてしまったし。

とにかく、助かった！　安心して涙腺が緩みまくりました。ぼたぼた涙がこぼれてくる。止まらない。下を向いて泣いている私の頭の上を、会話が通り過ぎていく。

「とりあえず、持ってきた」

「まあ、確かにさっきの抱え方は持ってきた、ですが……」

いや、そこは納得するところじゃなかろうよ！　もっと頑張ろうよ！　私はとうとう堪えきれずに、主張した。心の声を聞かせてやりたいね！　下を向いたまま、しゃっくりの間になんとか口を挟んだ。

「っく、わたし、も、物じゃないです！」

何故か背後で息を呑む音がした。

「喋れたのか」

ちょっと待て、私のことをなんだと思ってるんだ。

というか、今の声は、明らかに目の前の人と違うわけで、えーっと何か大事なことを忘れている気がする。

「ああ、お嬢さん、どちらにしても申し訳ないことをしました。これで涙を拭いてください」

下を向いた私の目線の先に、すっと差し出されたハンカチを受け取った。指先にとてもやわらかい素材が触れる。ちょ、これもかなり高級な布だよ！　こんななめらかハンカチつかったことないよ！　略してなめカチだよ！　いやな響きだな……。

とりあえずハンカチを拒むいわれが無いので、ありがたくお借りして涙を拭く。色々乙女としてはいえないことになっている顔を整える。目が腫れている気がする。うー。いやだなあ。知らないひとの前で大泣きをしてしまった。と、ぼんやり考えながら、ハンカチを畳みなおした。

腫れた目では恥ずかしいけれど、下を向いたままでは失礼だ。私は意を決して顔を上げた。

「あ、ありがとうございました……」

目を上げると、そこには神々しい笑顔の美人さんがいらっしゃいました。

ガチン、と再び硬直する私。

白い肌に金色の瞳、流れる銀の真っ直ぐな髪。なんと神々しい。
あれですか、最近流行の小説風に言えば、『水晶を集めてろ過した月光を束にしたかのような髪、そして蜂蜜と黄金を形にしたような瞳、薔薇の花びらを浮かべた唇』とかいうあれですか。
耽美ってやつですね、これが耽美か。
目がつぶれる！
こんな主人公オーラ出してる人みたら、町民Ｃとしては目がつぶれるううう！！
私の狼狽をものともせず、美人さんはハンカチを受け取った。あれ、ちょっと手が硬かった気がする。そして渡してから気がついた。そのハンカチ、私の涙やいろいろ染みてますよ！　洗って返しますううう。と言おうとする機先を美人さんは制して、

「うちの連れが、大変ご迷惑をおかけしました」

と仰った。

ちょっと待て。

ウチノツレ。えーっと。
私は反射的に一歩あとずさった。一歩あとずされば、そこにあるものにぶち当たるわけで。がつ、と背中と肩に硬いものが当たった。

おそるおそる振り返ると、深い深い蒼の鎧が目に入った。鎧があるということは、その上にひとの顔があるというわけで……。
そうだ！
何か重大なことを忘れてる気がしたんだ！

私の背後には誘拐犯がいたんだあああああ！

私は声無く絶叫した。

町民C、再び泣きべそをかく

声なき絶叫の後、私の頭は真っ白になった。で、妙に冷静になった！　クールになれ！

頭真っ白のまま、見上げたそこにある顔に、私は眉根を寄せて考え込んでしまう。なんだか見覚えがあるような、妙に懐かしいような変な気分がもっさり沸いてきた。

まじまじと見る。

……うん、やっぱり知らない！

私がガン見している間、相手はじっとこちらを見下ろしていた。無表情で。

というか、忘れてたけど、私の背後にいるひとは誘拐犯だよ！　眺めている場合じゃなかった。

忘れていた自分にナチュラルにショックだ。さっきのじいちゃんのボケを心配している場合じゃなかったみたい。自分がボケだなんて。目の前の美人さん効果で忘れてたことにしておく！

「じゃ、そういうことで」

私はパン屋で鍛えた接客スマイルを振りまき、踵を返して鮮やかに立ち去ろうとした。が、そうは問屋がおろさない…よね……。がっちりと腕をつかまれました。痛い痛い腕が痛いです！

「腕、痛いんですけど！」

「そうか」

そうか、じゃなあああい！

それにしても誘拐犯、鮮やかな蒼い鎧を着けている。こんなに目立つ格好ならば、すぐに通報されるに違いないのに。

「うー」

興奮しすぎると上手く言葉に出来ないのは、私の悪い癖。とりあえず睨む。

び、びびらない、私被害者！　あっち加害者！　びびってる場合じゃないけど……こーわーいー。

負けない！　目に力を入れてぐぐぐと睨み返す。

睨んでいたら気がついた。

こいつも無駄に美形である。ただし表情が無いことで減点だな。

そして誘拐犯ということで素敵さ五割引大セールだよ！　つまりかっこよさ五割だよ！　多分、一般男性レベルです、五割引で。

長めの黒い髪はわずかに乱れているものの、私の髪みたいに癖は無い。切れ長の蒼い目が冴え冴えとこちらを見下ろしている。背が高い。妙にそのせいで威圧感があるのか、ホントにこーわーいー。

怯えて後ずさりたいのは山々ですが、手をがっちりホールドされているからあとずされないぜ。

まさにぴーんち。

だんだん言葉が乱暴になっているのはかなり余裕が無いからです。

それにしても、……うん？　どっかで見た顔……どっかで見た……。

「おお、勇者様！」

朝早く出発しようとした商人達の団体が、こちらに気付いて手を振っている。

そうだ、ゆうしゃさまだー確かにどっかで見た顔だわ。

って、

「勇者様あああ？！」

私が魂からの叫びを上げてしまったとしても、仕方が無い事は紳士淑女の皆さんなら分かってくださると思う。

酸欠のようにあうあうと喘ぐ私を、にっこりと笑顔で美人さんが封殺しました。
目が笑って無いです。黙れ。あの表情はそれだ。私空気読む子！
了解いたしました美人さん！

「おはようございます、皆さん。もう出発ですか？」

勇者様（のはず）は、くるりと商人に向き直る。先程までと別人のような爽やかな声と笑顔である。
ぞぞぞぞぞぞ。
トリハダどころか、私の髪も逆立ちそうな勢いなんですが。
誰、これ！　いや、こっちが素なのか？

私が頭で記憶していた勇者様像と、目の前の男が結びつかなかったのは、まさにこれだ。

一昨日、勇者様が町にやってきた！　とのことでなぜかお出迎え式典とやらが執り行われていた。そこで見た顔だった。
やけにキラキラしてるひとが二人いるわ、と思いながら、仕事帰りに横目で見たんです。
遠かったのと、チラっと見ただけだから覚えてなかったのはご愛嬌ということで！

まだボケじゃないよ！　しつこいけどね！

そのとき、わー爽やか笑顔だー、と思った覚えがある。

目の前の無表情男と全然違った。が、今、商人さんたちに向けているいい笑顔は確かに必殺！　勇者スマイル（私命名）でした……。
こういうのも必須科目なのかな、勇者って。笑顔の見せ方キラッ

とかさ。

そりゃあんな笑顔見せられたら、隣のおばちゃんも「私があと十歳若ければどうにかするのにねえ！」とか言い出すよ。て言うか実際言ってたよ。どうにかしちゃったら、旦那さんはどうなるんだろう。ちょっと気になります。

勇者様は、その代ごとに、通称がつく。

偉人とされ、生きる伝説である彼らの名前は何故か伝わっていない。

俗世との関わりを絶つという意味があるとかないとか無いとか。深い経緯なぞ私は知らん。で、今の目の前にいるはずの人は、確か、「深蒼（あお）の勇者様」だったはず。口に出すと恥ずかしいな！

鎧が青いのは人ごみの隙間から見えたから、ああ、なんと安直な命名だと思ったんだけれど、こう近くで見ると、その名前の由来は瞳の色なんだろうな。

すごい蒼い。

こちらを見ていないからまじまじと観察できるんだけれど。というか、手を離してくれないから逃げることもできません。

商人のおっちゃん達と勇者様（らしき人）がしばし和やかにトークをして別れるまで私ぼんやりと立っていました。空気になれ！空気になるんだ私！　空気になれば、この手もすり抜けられ……るわけないか。

で、おじちゃんたちがいなくなった途端、勇者様（らしき人）から笑顔がなくなりました。

だから怖いってその変化！

勇者様（らしき人）の顔の変化を見上げて、びびってる私に、美人さんが声を掛けてきた。

「ところでお嬢さん」

「はい？」

「私たちと一緒にお茶でもいかがですか？」

ナンパ……ですか？

予想外のことに、私の頭はついていけません。

私の人生が荒波にもまれすぎて難破しそうです、マジで。

町民C、誘拐犯と話し合う？

気がついたらお洒落な食堂の端っこにいた。
はっ、いつの間に移動を！　私、それほどまでに魂抜けてたのか！　今更気付いた！
それにしてもこの食堂、朝早くから開いてるんだなー……って！

「あっ！　出勤しなきゃ！」

がたーん、と椅子を蹴倒しながら私は思わず立ち上がった。だってさっき出勤途中だったんですよ。パン屋は朝が早い。朝が早い代わりに、早上がりできるんだ。いい職場です。って、遅刻確定だよおおお。今までショックで忘れてた。人生の終わりだと思い込んでたしね！
　でもここで無断欠勤しようものなら、別の意味で人生終了のお知らせですよ。社会的な意味で！
「まあ、せっかくのココアが冷めてしまいますし、どうぞ一杯だけでも」
美人さんがにっこり笑顔で勧めてくる。
「いや、あの、」
「どうぞどうぞ」
この人分かってやってるだろ！　私が小心者で断れないのを見抜かれている！
　座ろうとして、椅子を蹴倒したのを思い出した。けど、椅子はいつの間にか戻されていた。あれ？

「座れ」

彫像、もとい無表情勇者様（たぶん）が、くいっと椅子を指し示

した。戻してくれたんだね！　ナイスガイだね！　さすが勇者様！
いらんとこに気が利きますね。
「あ、ありがとうございます……？」
お礼を言うべきなのか……？
ここまでされたら大人しく座らざるをえないでしょ。すとんと腰を下ろす私。
私の前に置かれたココアは、ゆったりと蒸気に甘い芳香を混ぜながら私に誘いかけてくる。淡い茶色には幸福が溶けているんだよ……ぶっちゃけ、好物です。断れないから手に取り、くん、と匂いを鼻腔に吸い込む。わーいいにおい。
むっ！　これは濃厚な牛乳で作ったココアではありませんか！！
僅かに表面に張りかけている膜がその証拠！　タダでさえ牛乳は高級なのにっ。それで作ったココアなんて、私が飲めることなんて滅多に無い。
これは迷惑料に違いない……と懐柔された感たっぷりに私はココアに口をつけた。しょ、食欲に負けたわけじゃ、無いんだからねっ。
ふと目を上げたら、ものすごく温かい目で見守られてたあああ。
その、愛玩動物がごはん食べているのを見守る眼差しは止めてええ。
いたたまれず視線を外せば、食堂のお姉さんがチラチラこちらを見ている。
そうだよね、気になるよね！　私だって気になるよ。何で小娘捕まえて勇者様たちがお茶してるんだとか！　なんでだよおお！　説明もとむ！

本当に、本当に私は普通の庶民ですから。

大体、才能がある人は見出されてそれなりの学校に通ってるっていうのが常識だ。
人間には適正があり、それはある程度神様が見出してくださる。
星都（せいと）……あ、これは神様の大神殿がある都のことね、あそこには神

様の声を代弁する大神官『神の声』と言う御方がいらっしゃるそうなんだけれど、地方にいる神官も神様の道具を使えば人の才能に関するお告げぐらいならできるのだ。

もって生まれた才能は、たやすく延ばすことが出来るそうな。ただ、適正と望む職業が一致するとは限らないんだって。それはそれでなりたい職業があるっている意思は否定されるはない。ただ、才能が無いからかなりの努力と学校へねじ込めるだけの財力が必要なわけなんだけれど、閑話休題。

結局剣術にしても、魔法にしても、神官職にしても、はたまた町の鍛冶屋のおっちゃんにしても！　一定のラインで適正が計られているのだ。

私は何も無い。やったね！　……特別、にあこがれたこともあったけど、あれは大変そうだなって言うのが本音。何も無い人のほうが九割。殆ど大多数なんだ。普通万歳！

この世で今現在一番なんでもできるという可能性を持っている人、それが私の左斜め横に座っている人が持っている称号『勇者』であり、『神の手足』である。神様の代わりに、世界を立て直すために、神様の手足となるから、とか何とか。詳しいことは、裏の家のおばあちゃんに聞いて！　私は聞いたけど覚えれなかったから！　気軽に聞いたら話が五刻位かかっちゃたんだ。苦い思い出です。

美人さんがカツ、とテーブルを叩いた。指先で軽く弾く程度なんだけど、思わずはっとして注意を戻す。

「で、貴重なお時間をいただいた理由なのですが」

背筋をしゃきんと伸ばして、聞く姿勢を整える。そう、ようやく説明タイムが来た！！　これを待っていたんですよ。説明カモン！

「どこから説明をすればいいのかわからないぐらい、色々面倒なので本題だけ言います」

なのに美人さんがいきなり話を省略した。その中略はひどくね?!
多分今んとこに大事な事隠されてた！　ちょ、まだ私ついていけてないよ！
嫌な予感がひしひしとしながら、耳を塞ぎたい衝動に強く強くかられた。

「私たちと一緒に旅をしませんか?」

は?

町民C、誘拐犯とでは話し合いにならない

えーっと。

無理。

無理無理無理。
光の速さで否定するね！
私がついて行った所で、荷物入れの皮袋以上に役に立ちませんとも！

ぶっちゃけ、リアクションが取れませんでした。唐突過ぎるって。口をあんぐり開けてしまったことに気がついてぱくんと閉じる。乙女にあるまじき……このセリフはもういいって？　失礼しました。

とにかく！
だから、私には何のスキルもないんですって。人の話を聴いてください。

「そういった人材は、王立魔法院とかでお求めになってください」

適材適所！　いい言葉ッ！
乾いた笑いを浮かべながら言ったセリフは、検討するにも値しなかったようだ。
私の拒絶ッぷりを眺めながら、青い鎧の誘拐犯様がこう零しましたよ。

「面倒だ。持って行った方が早い」

そこの男おおお！　なんつー物騒なことをさらっと言うかな！
勇者の癖になんつー黒いセリフをおおおおお。
いやいやいやいや。ここできちんと行くつもりがないよと否定しないと人生終了のお知らせだ！　と強く思った私は、なけなしの勇気を振り絞り、主張をした。
ここまで強く主張をするなんて、人生始まって以来だよ！
初めてづくしだね！　ひゃっはー！

「私を連れて行ってもお荷物以上にしかなりませんよ！　魔法は使えない、歩くにしても半日で足がパンパンになります！　それに血を見たら気絶する自信があります！」

私は語った。熱く語った。拳まで振り回した。言えたよ、天国のお父さんお母さん！　ちゃんと怖い人たちに意思を伝えることが出来ました。私、やれば出来る子！

しかしそんな私の拳を振るった熱弁は、あっという間に却下された。

「そのあたりは力技で何とかします。残念ながら財力と権力にだけは溢れていますので」

にっこり笑う美人さんに、私のトリ肌は立ちっぱなしよ！
この人も危険すぎるのか。常識人に思えたのは嘘だったのか。

「神に誓って、あなたを全力でサポートいたしますよ」

美人さんがさらりと出した首飾りは確かに星神様に使える神官が持つ護符（アミュレット）だ。というか、神官様だったんですねー。

「体力はそこの勇者が有り余るほど持っています。疲れたら私が魔法で何とかいたします。まあ、男二人だというところに不安を覚えてらっしゃるなら、それは我慢していただけると幸いですが、そういった危険性はありませんし」

私が呆然としている間に話がすすんでしまっているようだ。なんて強引な展開！

と、いま色々聞き流してはいけない言葉を聞き流しそうになったんだけど。

「えっ。男性の方だったんですか……？」

「はい。よく間違えられるんですが」

私の質問に、美人さん、もとい、神官様はにっこり笑って流してくださった。

ですよねー。

いろいろ女性として悲しくなってきた。だってお肌の艶とか負けてる気がビンビンしますよ。

「詳細な話をしたいところですが、ともかく私たちも色々困っていることがありまして、あなたの力をお借りしたいのです」

愁い顔もさまになります。だが！　私は！　流されないっ。

「勇者様たちに解決できない難問が、私ごときが解決できるとは思えません……」

だんだん主張も尻すぼみ。ですよね、世界中で信仰されている星神様の神官様に、強くいえませんってー。

「残念ながら」

唐突に会話に介入してきた滑らかな声に、私は反射的に跳ね上がった。

置物と化していた勇者様だ。この人、威圧感半端無いくせに、たまに静か過ぎるから存在を忘れてしまう。はっ、気配を絶つ達人とか！　まさかねー。

「お前に用意された選択肢は二つしかない」

高まりゆく緊張感に、私は思わずごくりと喉を鳴らした。

「歩くか、担がれるかだ」

二択どころじゃなかった。

勇者様は斜め上を行ってらしゃった……。

どっちがいい？　無表情なままでじっとこちらを見る勇者様に、私はこう、言うしかなかった。

「歩きます……」

完全に負けた。

◆神官、勇者に確認をする（前書き）

※本日は「残酷なお話」がまじったりしています。
町民Ｃの出番はありません。シリアスです。

◆神官、勇者に確認をする

溜息がテーブルの上に落とされる。
神官は軽く首を回した。
少女を説得するなんて、生きてきた中で全く経験がなかった。正直疲れたといっていい。
これだと魔物と戦っているほうがいい。あれには敵愾心（てきがいしん）しかないから、余計な思考を回さずに済む。星職者（せいしょくしゃ）としてあるまじき考え方ではあるが、事実そうなのだから仕方が無い。
店員を呼び、少女が飲み干したカップを下げてもらう。笑顔を向け、礼を言えば、頬を染めた女性店員が機嫌よく立ち去った。町の人間が彼らに向ける好意は分かり易い。憧れと、信頼と、そして他に潜むもろもろと。
ただ、その必要以上の注目は今は不要であった。
手で軽く呪印を切り、一定範囲外への空気の振動を抑える。こうすれば彼らのテーブルから外に声が漏れにくくなるのだ。

少女は本当に普通の女の子だった。金茶色の頭髪をみつあみにした、清潔感のある町娘。それ以上でもそれ以下でも無い。道ですれ違っても、印象に残らないだろう娘。
だから神官は勇者にもう一度確認を取る。

「本当にあの子なのですね」

ゆっくりと勇者と称される男がこちらを見た。肯定である。
蒼の瞳は底知れぬ輝きを宿している。それに怖気（おじけ）ることなく、神官は真っ直ぐに目を見かえす。問いはただの確認だった。そして、本気で彼女を連れて行くしかないという事実を自分に言い聞かせるものでもある。

勇者が嘘をついた事は無い。彼は虚言と最も遠い場所にいる人間だ。幼馴染としてともに育った神官は一番知っていた。

彼がそうというならば、そうなのだろう。

少女を眺めながら、実際にどうなのか軽く能力判定のための走査術をかけていた。彼ぐらいであれば、道具などなく簡単に行える術であった。結果、本人の自己申告どおりに、驚くほど少女には能力がなかった。勇者の言うことが確かならば、それは完璧な隠蔽（いんぺい）だといえる。一つ疑念を持てば、様々なことが連なり、疑問ばかりが増えていく。

その一つは、この町があまりにも平和だという点だ。

今、世界は魔物の侵食によって脅かされている。

勇者が最後の砦と称されるのは、誇大な表現ではない。

隣の大陸の国家は繰り返される戦闘により大きく疲弊しているという。隣の大陸は、現在彼らがいるここより気候が温暖であり、災害が起こりにくい。そのため、食料の自給率が増し文明も国力も増し、様々な国家が繁栄していた。

しかし、それが今、揺らいでいる。

魔物の発生である。

魔物がどこから沸いて出るのか、それを詳しく知る人間はいない。その時々で違うのだ。

魔物たちの欲望には際限は無い。あれらは特に人間に対して貪欲だった。何がそうさせるのか、魔物は人間を襲い、殺す。恐らく魔物が増えずにいれば、人間社会も大きな発展を迎えていたに違いな

い。

魔物を迎撃するために、様々な研究が行われている。しかし、不思議なことにそれらの研究が実を結ぶことが無い。何故か魔物に襲われ、新しい技術が花開くことが無いのだ。

それを人々は魔王の呪と呼ぶ。

先程の少女も口走っていた「王立魔法院」でも確かにそのような研究が行われている。

能力により人々を選別し、高い力を持つものを囲い込む。

そのような機構を設けているのも、この魔王の呪のせいでもあった。

危険な研究を隣人が行っているとすれば、そして、そのせいで自分も魔物に襲われる確率があるとすれば。

普段大人しい庶民たちが急に変貌するのだ。

一時期、魔法使い狩りが行われたという闇の歴史もある。

魔物に襲われた町の人間が混乱し、「魔法使いが研究をしていたせいでこの町が襲われたのだ」という流言を信じた。それにより町の人間が町に暮らしていただけの魔法使いたちを殺害し吊るし上げたのだ。

皮肉なことにその町は、力ある魔法使い達を失ったせいで程なく滅んだという。

これをその町の名前をとり、ツワナアゲート事件と呼ぶ。

この後、魔法使い達のための学院が各国に設けられ、魔法文明が進んだと言っても過言では無い。災いが転じた例だ。不思議と平和利用の研究のためであれば、魔王の呪は発動しないことが多いのだ。

今、神官の前に置かれている冷やされた果汁もその恩恵である。

ここ五十年で魔法の技術は庶民の生活に浸透するほど広がった。

しかし、勇者の旅には魔法使いは同行していなかった。
神官以外が同行していた時もある。
だが、彼らのたびにそのまま付いて来られるかということは別問題だった。

ひと時の仲間ではなく、本当の意味で同行してもらうには、勇者達と『同じ』でなければならない。これればかりはどうしようもない。逆に言えば、条件さえ合えばそのあたりはどうとでもなる。

先程の町民は、根本的なところで、どうしようもなく、勇者達と『同じ』だったのだ。
本人がそれを知ったところで、頑なに否定するだろう。彼女の常識を打ち破るのは難しい。だから彼女には結論だけを伝えたのだ。人のよさそうな、小動物的な少女は、怯えながらも同行を許諾した。結果さえあればいい。神官はそう考えている。
面倒だから説明を省く。その言葉には、様々な意味を込めていた。

この町は平和すぎる。
かといって、星職者が多くいるわけでもない。
むしろ神官の姿など見かけなかったといえる。

魔物が増えると同時に、神官の数が増える。貴族の子弟がこぞって押し寄せるのだ。星神殿では実際魔物を寄せ付けない結界を張る能力を習得しているものが多い。
戦えなければ、寄せ付けないようにすればいい。たとえ自分に適性がなくとも、能力がある人間を囲い込むことが出来れば安泰。そういう考えが透けて見えるのだ。保身もここに至れりといえるのだろう。
だが、それを臆病とはいえない。実際魔物の脅威は白い布に落とされたインクのようにじわりじわりと人々の心を染め上げていく。

そして、それは幾ら拭ったところで容易には落とせない。シミのように常に暗い影を落としていくのだ。
どの町にいっても人々の顔は暗い。

しかし、ここの雰囲気は全く別のものだった。
例えて言うならば、春の日差し。人をまどろみに誘う、やわらかい空気が流れている。
魔物の存在など、御伽噺でしかないと錯覚しそうなほどに。

「ここは、平和すぎますしね」

皮肉に近い声で神官はぽつりと洩らした。
何かに守護されているかのような平和。人の力とかけ離れたところで蠢いている理(ことわり)の力。
理不尽ではないか、と神官は思う。世界に蔓延(はびこ)る流血と悲劇に比べ、守護されたまどろみのあまりの甘美さに。

「俺は分かる気がする」

珍しい勇者の発言に、机に落ちたままだった視線を引き上げる。
勇者は窓から外を見ながらぽつりと呟いた。

「ずっと見てるなら、平和なほうがいいだろう。意思があるなら、そういうことじゃないのか?」

まさか、と笑い飛ばせるならよかった。が、この状況がそうすることを許さない。
誰のための平和か。
神に贔屓があるなど、神官としては知りたくなかったが。

「それも、そうですよね」

とりあえず、彼の言葉には同意だけを返しておくことにしたのであった。

町民C、身辺を整理する

支度金としてぽんと渡された金額は、私の年収でしたあああああ。

大混乱中の、町民Cです！　自己紹介しながら落ち着け自分。

今まで持ったことのない金貨なんて物を抱えてるから、挙動がいつもより不審になるよ！

こんなに小さいのに、私の年収だよ！！　頑張って貯めても銀貨一枚ぐらいの生活です。

何故大金を持っているかといいますと、いただいたからです。拒否権は私に存在しない。人権はありますか？　ありますか？　ちょっぴり今から不安です。特に勇者様に対して聞きたい。でもその答えが怖いから聞けない！

金貨を渡されて固まる私に、旅装は思ったよりも高いんですよ、と神官様が仰った。いや、高いとかどうとかよりも、ポンと渡しすぎだよ！　なんか本気度に驚いたよ。この人たち、確かに無駄に権力と金に溢れてるって実感した。なめカチ（なめらか肌触りのハンカチ）持ってるしね！　これからの旅に必要なものを教えてもらった。旅なんて出たことがないからね。実は町からも出たことがありません。いや正直必要ないでしょ？　親類はいないし、この町以外に知り合いはいないし。いきなり旅とか飛躍しすぎだろ。

これからの予定も話された。通告ですね！　相談ではなく通告ですね！

私は買い物に行って色々揃えて、明日集合とか。

随分ゆっくりだなと思ったら、「お家の解約とか必要でしょう？」とのこと。

私どこにつれていかれるんですかあああ！！
ちょっとの期間って雰囲気じゃないよ！
あれ？　なんだか町民Ｃは色々大事な情報を聞いていないのではないだろうか。今更だけど！

とりあえず、職場のパン屋に恐る恐る出勤してみると、朝の混雑は終わってた。
そして怒られることもありませんでした……。ほっとしてまた泣きそうになったのはひみつ。
おかみさん、怒るとホント、怖いんだから！
無表情勇者様とタメ張るぐらい怖いんだから！

なんでも、私が今日遅れるという知らせがあったらしい。
そんな使いの人なんてだした覚えないよ！　勇者様……はそんなことしそうにないから（偏見？）おそらく神官様だろう。あの人あれ見えて苦労性に違いない。それも偏見？
おかみさんに、しばらく休みを貰うことを切り出してみた。すると、大丈夫だとのお返事をいただいた。あえて期間は言わなかったけどね！　そこには私の希望も含まれてるけどね！

なんでも隣の大陸に嫁いでいた娘さんが、魔物の被害がひどくなってきたから帰ってきたとのこと。一応、手は足りるそうだ。
また帰ってきたらいつでも復帰してくれたらいいよとは言ってくれたけど。

帰ってこられるのかな。遠い目になりそうなのをぐっと堪えましたよ！
ホント、勇者様の旅についていくなんて信じてもらえそうに無いから、遠くの親戚が危篤で、と言っちゃったせいもあるんだけれど。良心がちくりとしました。でも本当のことといっても、やばい子扱い

だよ！　庶民なのは私が一番知ってるよ！

勇者様の旅についていって、帰ってきたら職が無くなってたらどうしよう……。

これは、養ってもらうしかないのか？　終身雇用でお願いします！　役に立てないけど。

でもあんな人を世間のお姫様たちが放っておかないに違いない！　どこかのお姫様とあの人たちがくっつくとしたら、正直邪魔者ですよねっ。小姑状態になりますよねっ。

うっかり養ってもらったりしてたら、そしてそのせいでお姫様たちにらまれる羽目になったら、私は縮み上がる！　美人さんたちとは戦えなどしない！　初めから逃亡確実です。

そもそも勝負にならない！　この無い胸、無い色気！　どこに勝負できる要素があるよ！　……。あっ、自虐ネタ言ったら自分で悲しくなってきた……。はう。

とりあえずお家の大家さんにも同じ話をして、荷物を整理した。結構物に執着が無いから、ぽんぽん捨ててしまう。

結局一抱えある箱ぐらいの荷物が残った。困っていると、大家さんが帰ってくるまで取っておいてくれると言ってくれました。戻ってくるつもりはあるので、助かります。

裏のおばあちゃんありがとう！　あ、物知りおばあちゃんは大家さんです。

そんなこんなで知り合いの人に声をかけつつ、商店街で毛布代わりにもなるマントや丈夫な衣服やもろもろを買い込んだ。こんなに思いっきりお金使うの初めてだよ！　いつも銅貨一枚レベルで悩む生活なのにね……どうしてこうなったのか。なにかと。

で、必要だといわれたものを買い込んだだけなのに、荷物まみれ

になった。
　買うたびに増えていくのは仕方が無いんだけど、道端でカバンに整理できないから中途半端に溢れて、持ちにくい！
　よろよろしている私の荷物を、誰かが支えてくれた。
　引ったくりに注意！　とか頭に浮かんだけど、見る人を勝手に犯罪者扱いするのはよくない。本当に支えてくれただけみたいだしね！　絶妙なバランスにゆらゆら揺れる荷物がちょっと固定される。
　助かった。
　ありがとう、親切な人！
　礼儀としてお礼だよね。

「ありがとうございま……」

　す、が言葉にならなかった。見上げればあの蒼い瞳がじっとこちらを見下ろしていた。
　ある意味犯罪者より怖いです。

　何してんですか勇者様。

町民C、気まずくなる

人通りの激しい大通りで勇者様登場とか。

絶対騒ぎになるよおおお！　退避！　総員退避いいい！　といっても退避するのは私だけだけどね！

と思ったけど、はて、あまり注目をされていない様子。ちらりと過ぎった違和感に、私は勇者様を上から下まで眺めてみた。

あの派手な鎧を纏っていない。

洗いざらしの生成りのシャツに、茶色のズボンと同じく皮のブーツ。

使い込まれた風の皮の剣帯で剣を腰にぶら下げている以外は、そこら辺にいる兄ちゃんといった風情だった。勇者オーラ的なものはあまり無い。

えっ、勇者様って、鎧で認識されるもの？　ちょっとそれって不味くね？　勇者的な意味で。勇者って、こうキラキラギラギラして控えおろうははーって感じじゃないんですか？

「家に帰るのか？」

まじまじと勇者様の服装を観察していたら声を掛けられた。

「ひゃい！」

思わず舌を噛んでしまったのは仕方ない。そう、あれだ。彫像が喋った時の驚きみたいなものだ。私の返事だかなんだか分からない叫びを勇者様はどう受け止めたのか、荷物をひょいひょいと勝手に取り上げてさっさと歩き出した。

私は慌ててそれを追っていく。

足長いし！　一歩の距離が私と違いすぎる！　追いつけないって。

荷物が半分……いや、さりげなく重いのを持ってくれているみたいだったから、半分以下になったけど、歩くには邪魔だ。
その上、この人と歩くの早いです。
私は小走りでやっと追いつける。普通の歩行もこんな感じかな。
徒歩の旅だったら、もしかして私オンリーマラソン状態ですか！
持久力に自身はありませんよ！
二人で歩くというか、私が勇者様を追いかけるという、私だけにとってのデッドレースはようやく終着点へたどり着こうとしていた。
程なくして、住宅街に入り、私が借りている家の前に到着する。

ゴオオオル！
ただいま、私のおうち！　まあ、今日までですが。

はあはあと肩で息をしている私をよそに、勇者様は相変わらず無表情で家を眺めている。勇者様、息なんて切らせてませんよ。これが基礎体力の差か！　基礎体力セレブめ！　あ、私が作った言葉です。基礎体力が凄い人たちを羨ましがる言葉です。

しばらく勇者様は庶民の家を眺めていたようだった。
が、不意にその視線が私に向けられた。ばちっと音がしたような気がする勢いで目が合ってしまった。反射的に息を吸い込んでしまう。野生動物と目があったら逸らせないあれですよ。そ、逸らせない。
だって怖いし！
この一瞥（いちべつ）は、鍵を早く開けろって言う意味ですね、荷物持たせてすみません！　了解しました！　お待たせしましたああ！
慌てながら荷物をとりあえず横に置き、鍵を探す私に、勇者様はぽつんと、
「早かったか」
と呟いた。

何の話ですか！
妙に意味深だな……。緊張で手が震えてなかなか鍵が開かない。
数度目のチャレンジでようやく家の中に入れました。勇者様は特に何もコメントすることなく、じっと荷物を持って待っていました。

沈黙が気まずい。
さっきは歩いていたから、会話のことなんて考えなかった。
何も話すことがない、が、沈黙が重過ぎる。
あーいい天気ですね……ぐらいの話題しか思いつかないわ。
所詮、私の社交スキルはこの程度である。

扉を開けながら、私はようやく勇者様の言葉の意味に行き着いた。
というか閃いた。

歩くのが早かったかという確認か！！

勇者様って、まさか翻訳係が必要な人？　言葉、足りない人？
私もそのうちこの不思議空気に慣れることが出来るんだろうか……。

私、慣れることが出来なければ終わりかもしれない。だって記憶力なし、学なし、体力無しの上に言葉も通じないなんて、何重苦なお荷物人間が出来上がるんですかあああ。

扉を開け放つと、狭い我が家が良く見える。

私の部屋は、もうほぼ片づけが済んでいた。あとは今日寝るだけのスペースと着替えぐらい。イスとかもそのままにしていくから、すっきり物が無い状態です。あ、しまったお茶も出せない！
「なんもお構いできませんがどうぞ」
と家に上がるようにとりあえず礼儀として勧めてみた。けれども勇

者様は動かない。変わりにこんな事を言い出した。
「荷物はここに置いても？」
「え？　あ、はい」
玄関先に勇者様は荷物を置き、
「もう少し、警戒心を持て」
と淡々と告げる。
唐突に始まった話に、理解が追いつかない。
「はあ……」
私の生返事に、それ以上の言葉は続かず、
「では明日」
と勇者様は踵を返した。
色々と口も疑問もはさむ隙がなかった！

颯爽としてるな。さすが勇者様、歩き去る動きまで爽やかだ！

私はようやく大事なことを忘れていることを思い出した。
「荷物、ありがとうございました！」
背中に私の声が当たっているのだろうが、勇者様は振り返らなかった。肩で風を切るって、あんな感じなんですね、実際見たらすごいな。
背中を見送り、ドアを閉めた。

荷造りしなきゃなあ。勇者様って意外といい人かもしれない。
ちょっとは上手くやっていけるかなーって考えてて、ふと気付いた。

私はさっき、勇者様の歩調に追いつけず、ずっと後ろを走ってた。
なのに勇者様は迷うことなく、私の家にたどり着いた。

何であの人私の家知ってるんだあああ！

謎だけが深まった午後であった。

町民C、ようやく旅立つかもしれない

朝ですよ！

日の出ちょっと前にパッチリ目を覚ますのが、私の毎朝です。

勝った！　隣の日之出鳥に勝った！　日之出鳥というのは、裏のおばあちゃんが飼っている鳥で、日の出と同時にけたたましく鳴く種類の鳥のことです。名前はヒナちゃん。成鳥でもヒナちゃんです。

おはようございます、町民Cです！

今日はかなり朝もやが掛かっています。もやっとしてますね！
まさに絶好の旅立ち日和です。
朝もやにまぎれて、どさくさで旅立てるんじゃないんでしょうか！

まあ、自分の意思での旅立ちじゃないですけどね！
目立たないで旅立ちたい……。切実に。

朝ごはんをもそもそ食べて、用意した水と食料その他もろもろを持って、マントを羽織る。
服はなるべく露出をしない格好で。足を出してうっかり虫や蛇にかまれたら危険ですよ、との神官様の言。センパイの言葉は重要だよ！
食料って意外と重いな。これがなくちゃ生きていけないのは、分かってるけど重い！
荷物の重さにふらつきながら、最後に鍵を取る。大家さんの家に、この鍵を返したら、部屋とお別れのときが来る。
入口から、ちょっとだけ部屋の中を見回す。

ここで過ごした時間が、ふっと頭を過ぎった。

もう何もなくなった部屋がちょっと寂しい。

思わず部屋に向かって、行ってきます、と呟いたけれども、その乙女的行動（笑）に自分で恥ずかしくなって心の中で悶絶した。いたたまれませんよね！！！

とりあえず、締まらないけれども。

こうして私は旅立った。

とりあえず家からは旅立った。

本当に、生きて帰れるんですかあああ！！　神様！

待ち合わせの門の前、勇者様と神官様は目立たないローブを被って待っていました。

灰色のローブで、しかもそのフードを深く被った人が二人です。

軽く引いた。

だって、ローブですよ！

うさんくささ倍増ですよ！

だって想像してみてください。朝霧がうっすら掛かった場所で、フード被った二人組みがひっそりと気配なく佇んでいるんですよおおお！　暗殺者か何かと間違うって。

私が近所の人だったら、自警団に通報するレベルです。

神官様がちょっとフードを挙げて挨拶してくれないと、私遠巻きに見守るところだった！

実際、今も少し距離をとっていますけれども。

中身をさらしても困ることになるけれど、フード姿も胡散臭いです。どっちにしろ、困るのは私だけか！　そうか、そういうことか！

そんな心理的葛藤を知ってかしらずか、神官様はあっさり挨拶をしてくれた。

「では、これからよろしくお願いしますね」

「は、はい！」

びし！と返事をする私。勇者様は相変わらず頷くだけで会話に参加している様子。

勇者様、たまには喋らないと、喉が退化しそうですよ！

こちらの門は、あまり人気の無い地方へつづく門のため、利用者が少ない。今日は私達だけかもしれない。霧が出てるせいで、旅立ちを見合わせている人がいるのかも？　旅素人の私には分からないがな！

「この町から出るのは、初めてですか？」

神官様の問いに、私はこっくりとうなずく。勇者様の真似じゃ、無いよ！

この町には様々な思い出がある。

しんみりするなあ。

広い世界に、旅立とうと思ったことなんてなかった。

何で勢いで旅立ってるんだって、ちょっと冷静になったら危ないかもしれない。

このテンションのまま旅立つよ！

「じゃあ、いきますか」

何の気負いなく神官様と勇者様が歩きだす。

私はその後を追って、初めて門を越えた。

が。

越えたところで、ぶつ、と意識が途切れてしまった。

町民C、なんの感動もなく旅立つ

遠くで、声がする。

不思議な声。

ざらりとした、心のひだを撫でて行くような、掻き分けるような声。

それでいて無機質。

――……存在率の九割五分は……で埋まってい……

――この町を出ると…の望みと反するため…

――受容器とし……耐性は

――それでも、これにかける…か……とするか…

人が寝ている耳元で、さわさわ話している声が聞こえるって、すごおおく不快じゃないですか？

寝ているときに虫とかが耳の周りを飛び回っていると、めっちゃくちゃ気になって気になって眠れません。安眠妨害だよ！

皆さんもそうですよね！

私、夜中にキレて、跳ね起き、真っ暗な中見えない敵と戦うぐらいの勢いで虫を追い払うことに専念したことがあります。だって虫のために明りつけるなんて、ランプの油もったいない。それにつけたところで虫が見えるぐらい明るくならないから、暗いまま戦ったわけですよ！　あれは辛かった！　三つ子月の明るさをもってして

も厳しかったね。辛い思い出です。

まだ脳に話し声が届く。

いらいらが積もり積もって、とうとう私は爆発した。

「うるさいっ！」

反射的に叫んでがばりと身を起こす。

が。

場所があまりにも想定外でした。

えええええええええ?!

何故か私、勇者様に背負われてましたああ!!　あ、おんぶなんですね。

前回の荷物担ぎより、ちょっと人としての扱いを受けている気がする！　やったね！

「無事に起きたか」

勇者様が淡々と一言で状況説明してくださいました。

私、寝てたんですね。

私がいきなり身を起こしても歩く姿は全く揺るがないです。

それに、くっ、この人、できる人ですね！　耳元で叫ばれたにも拘らず、表情が全く動いていません。三歩ぐらい離れて歩いている神官様のほうが正直ビックリしています。

真横にあった無表情に、私のほうがトリハダ立ててしまう。

この人、すごいマイペースなんだろうか。私だったらとりあえずうるさいのと驚いたので、地面に落としますよ。ええ、落としますとも。勇者様の評価がグッと上がったね！

「あ、ありがとうございます……？」

今回も微妙なお礼になってしまったのは、状況把握が出来ていないせいです。

とりあえず、きょろきょろしてしまいます。

草原のど真ん中みたいです。左右に緩やかな丘陵地帯が広がって、地平線は見えない様子。残念！

お日様はガンガン日光をご機嫌に降り注いでいます。

これは、日焼けするわ……。

そういえば、初めての旅の醍醐味（だいごみ）、外から見る私の町！　をしてみたかったので、グッと振り返ってみる。

麗しのわが町が背後にッ……って、やっぱり見えないわー。

どんだけ離れたんですか、私が寝ている間に。

逆か。どれだけ寝てたんですか、私。

勇者様の足取りは確かで、全く乱れが無いです。

ざっ、ざっ、ざっ、っていう感じ。鎧装備して私抱えて、このひとやっぱり基礎体力セレブだ。実感しました。おんぶしてもらっているのに、汗臭くないよ！　どうなってるんだこの鎧！　鎧はくさいって向かいのじいちゃんが言ってた。勇者オーラですか、勇者オーラですね！

神官様ものんびりと歩いているようで、ちゃんと付いて行っている。インドア派に見えたのにね。

横には一頭、荷物運び用の黄緑色の陸馬（うま）が歩いている。

背中に括られた荷物の中には、私の荷物も見えた。

陸馬（うま）は大きさは成人男性より大きいぐらい、四本足で首がそこそこ長くてゴツイ毛が生えている動物です。

毛の一本？　ひとかたまり？　まあとにかくその太さが私のこゆびぐらいはある。そんな毛がもっさもっさしているから、見た目巨大なモップが歩いているように見えます。そして色がとんでもなくカラフルな種族です。実際今横に歩いているのは黄緑色だよ！　草原だが、保護色にならない。いいのか野生。

大人しいけれど、丈夫で働きものだから旅人は重宝するらしい。これも物知りおばあちゃん情報だよ！　あと、生息地の違いで天馬や海馬、森馬とかどこまで本当なのか分からない仲間がいるらしい。

陸馬をじっと見ていたら、唐突にヤツが「ポー」と鳴いた。え、ポーって鳴くの！

「お昼ですね」

えっ、時計代わりなの？！

神官様に目線で問いかけると、

「知りませんでしたか？」

と逆に言われた。馬族は、体内時計が恐ろしいほど正確らしい。どうやら定期的に一定間隔で餌を取れなければ急に動けなくなるという種族なんだそうだ。

とりあえず、草原のど真ん中ですが休憩ということになりました。

「下ろすぞ」

予告してくださったので、とても華麗に着地できました。

ぐっすり眠ったので、元気ですとも！

わりとどこでも寝られる特技は持っています。

「重かったですよね。申し訳ありません」

とりあえず勇者様に謝罪を述べると、

「そうでもない」

と答えが返ってきた。

なんとも微妙な……。

「そこは嘘でも軽かったというべきなのでは？」

と神官様のお言葉でした。

それ、フォローのつもりですかあああ。

まだまだ口に出してつっこめない私。いつか、つっこんでしまうんだろうか……。

色々将来の自分が不安になってきた。

はっ……もしかして、このたびに私が必要とされたのはツッコミのため?!　そんな役割を求められているのですかっ！　大体このツッコミだって、心の中で喋っているのにっ！　神様並に神通力をお持ちですね、もしや！

うろたえる私をよそに、神官様はがりがり地面に絵を書き出しました。えっ、何が始まるの。ゲー術ですか?　ゲー術というのは最近流行している、爆発する術だそうです。小説に載ってた。アートを作ることによって爆発するらしい?　素人は手を出してはいけないそうです。

「それはゲー術ですか?」

はいっと手を上げながら質問したところ、神官様はビミョーな表情をした。

「いえ、これは普通の術ですよ」

何でそんな表情なんだろう、と首を傾げると、勇者様が、

「これは新星術(しんせいじゅつ)だ」

とまさかのフォローをしてくださいました。予想外の場所からのフォローに、思わずびくりとした。

「しんせいじゅつって、なんですか?」

「平たく言えば、今、一般的に星教(せいきょう)で使われている術式のことです。始原(しろ)の勇者以降に体系付けられました」

えーっと。いまいち、その、勇者様の名前でどの人がどの勇者様かなんて聞きわけがつかないです。ぽかーんと口を開けていると、神官様はその顔で察してくださったようです。

「勇者の順番を覚えていらっしゃいますか?」

苦笑する顔も美人さんは得ですね!　エレガント!　私の相手をしながらも、地面にがりがりと図を書いている。大人二人が手を伸ば

したぐらいの直径の円だ。円の周りに星のめぐりを配置して記入している。あれ、星の配置なんて私知ってたっけ？　占いでもするために覚えたかなあ。

どちらにしても、星の配置は分かっても、勇者様の順番は、

「ええっと」

正直、覚えていません……。ごめんなさい。

えへ、と笑う私に、神官様の作業を眺めていた勇者様が、またしてもフォローですよ！

ますます勇者様の株が上がります！　このままだったら大きなカブに育ちますよ！　意味はありませんけど！

「勇者が現われたのは、始原（しろ）の勇者、紅蓮（あか）の勇者、黄金（きん）の勇者、夜闇（くろ）の勇者、の順だ。大体星が一巡りか二巡りの期間を置いて現われる」

星の一巡りは、大体、百年ぐらいだから、百から二百年毎なんですね！

意外に短い周期な気がしないでもない？　むむむ。

「そして、始原（しろ）がはじまりのひとと呼ばれる場合があります。それまで複雑だった星術を整えて新星術に編纂しなおされたのがこの時代ですね」

へー。

「という辺りまでは流石に一般常識だと思っていたのですが……」

そんなかわいそうな子を見る目で、見ないでください……。

視線を避けるようにそっと目線をずらすと、陸馬がもっしゃもっしゃ雑草食べてたのとバッチリ目が合った。陸馬がびくっと跳ね上がる。大丈夫だから。私はその草は取りません。君の餌です。ちょっと和みました。勇者様と目が合ったときとは大違いだけどね！

ともかく、神官様の地面への落書きは意味があったらしい。

「では、星都セレスタイトいったん戻りますよ」

にっこり笑って神官様。な、何のおはなしデスカ？
神官様が、土の文様を蹴ると同時に、何かの言葉を口にした。

「Ｊｍｎｗ　Ｋｓｈ　Ｓｈｍｓ，」

その宣言のような言葉と同時に、足元の模様が光りだした。
真昼間なのに光ってるのが分かるってある意味凄い。
謳うような声が草原を流れていくのですよ。ちょっと詩人風に解説してみた。

「Ｔｎ，
Ｚｈｙ－２５７７８９５－　Ｋｒ　Ｚｈｙ－４５８７５２１－，Ｏｙｓ　Ｓｈｔｒｙ　５７８６，”Ｍｓｈ”　Ｓｈｇｂｔ　Ａｒ，
Ｊｍｎ　Ｋｙｎｓｒ，Ｍｎ　Ｋｈ　”Ｄｚ”　Ｓｈｋｔ，」

ふ、と神官様の声が止まった。模様は光りっぱなしだ。まだ途中なのにどうしたんだろ？
ぼんやりとその様子を眺めていたら、勇者様がおもむろに私を担ぎ上げた。

「ぐえ」

また、荷物担ぎですか！　私ってやっぱり荷物？　さっき復活したような人権はどこへ行った。
人権の消失ですね！
勇者様が私を担ぎ上げ、陸馬を円の中に引き入れる。
その様子を見て、神官様が最後の言葉を放つ。

「Ｊｍｎｗ　Ｓｈｒｙ　Ｓｈｍｓ」

えええええええええ！
円の外の世界が、ぐにゃぐにゃに混ざっていきます。
うわーん不気味だよおおおお！　反射的に勇者様のマントを握ってしまった。

――　こうして、私の旅立ちはよくわかんないまま終了するのだった。えええええええ。
感動も、何も無いよ！

町民C、なんの感動もなく旅立つ（後書き）

一部訂正しました。

町民C、知らない場所にやってくる

きーもーちーわーるーいー。

荷物状態に担がれ、おなかを圧迫されているのを差し引いても微妙にくらっとくる。

なにがどうなったんだろ？

星都へ帰るとか何とか聞いた気がするけど……？

歪む景色を見たくなくて、ぎゅっと閉じていた目を開いた。変な感覚が収まったから恐る恐るにだけれどね！

開くんじゃなかったと後悔しました。

ええ、後悔しましたとも！！

ここ数日で後悔することばっかりだな！　そんな気がする！

周囲には十人ぐらいの人がさわさわ話しながらこちらを見ていました！！

大！　注！　目！　ですよ！

私から見えるところだけでこれだけ人がいるんだから、全体だったらかなり多いんだろうね！　その中を荷物担ぎで登場の私は一体どういった位置づけなんでしょうね！　あ～。

下ろしてほしいけど果たして下ろしてもらっていいものなのか。

むむ、と悩んでいたところ、また軽々と下ろされました。意外と下ろす時は丁寧だね！　担ぐ時こそ、その気遣いがほしいですよ！

一言声を掛けるとかね！　いや、声を掛けてもらってもどうなん

だろう……。ともかく！　気遣いは人間関係の潤滑油です。上手いことといいました。

下ろしてもらったおかげで、足の下に地面を感じます。

夢じゃないのか。実感がわいてきました。

なにがどうなったかよく分かりません。

ここがどこかも分かりません。

やたら綺麗な芝生ですが、ここは本当に立ってもいい場所なんでしょうか！　ふかふかした芝生が丁寧に敷き詰められ、整備されています。勇者様も陸馬も平然と立っているからいいんだろうか。私、芝生様を踏みつけないよう、状況によってはちゃんと靴を脱ぎますよ！

ひとりで混乱する私をよそに、事態は進行していたようです。

「お帰りなさいませ」

目の前にやたらキラキラズロズロした服を纏った一団が近づいてきました。

しかも、礼を取っているよ！　庶民の私にとってはこれはビックリ状況でしかありません。硬直してしまいますよ！　あんなに金糸の縫い取りをした服を着ている人なんて、見たことが無いよ！　目がつぶれるううう！！！　しかも美しく整列しています。乱れが無いって綺麗だけど思った以上に怖いです。

「用が済めばすぐに出ます。陸馬（うま）をしばらく預かって置いてください」

神官様がセレブリティたっぷりな雰囲気で、集団に声を掛けていらっしゃる。慣れてるのかな？　もしかして本物セレブ？

神官様はそれ以上何も言わずに歩き始める。集団がささっと両側

に避けて道を作る。えええええ。なんか怖い！　勇者様は無言でそれについていくし。私はどうすれば！

はっ、周囲の人からあいつは一体なんなんだ目線をじわじわ感じます。突き刺さるよ！

そうだね！　どう見てもハイパー庶民が混じりこんでいるね！

なんでかは私もよくわからない！　聞くなら先頭の神官様に聞いてええ！！　私のほうが知りたいです……。

そんな中、勇者様が二歩ほど歩いたところでふと私を振り返った。視線をじっと注がれます。

これは、待っててくれているのかな。

慌てて歩き始める。芝生様、踏みしめてごめんなさい。

私がついてくるのを見て、勇者様は歩き始めた。待っててくれたんですね！　多分……。

このさいだから観光するつもりでいいよね！　絶対に庶民では入れない場所の匂いがぷんぷんするから！

私は開き直って周囲を観察してみた。

見れば見るほど変な感じです。

異常に高い壁が周囲を包んでいる庭っぽい場所だった。

壁の上部を見ようとしたら、口が開くぐらい上を見なきゃいけない。顎と首のラインが真っ直ぐになるよ！

壁は白い。とにかく白い。混じりけのない白がキラキラ陽光を跳ね返している。

木は一本もなく、芝生広場がただただ広がっているだけ。

空は青空が突き抜けて見えるから、屋外なんだろうと思う。それにしても、私の家二十戸分ぐらいの広さです。なのに何も無い。芝生と壁だけだよ！　何のための場所なんだろう？

ふと先程までいた場所を振り返ると、陸馬が近寄ってきた人に引かれて、おそるおそる移動していたのが見える。そうだね！　怖いよね！　分かるよ！　陸馬に親近感をぎゅんぎゅん感じます。次に逢ったときは親近感たっぷりにお世話するよと心に誓った。待っててね陸馬さん。

周囲をきょろきょろ見渡しながら歩いていたら、私はちょっと遅れてしまったらしい。勇者様がじっとこっちを見てましたああ！　いや、声を掛けてくれたらいいのに！

勇者様と付かず離れず歩いていった先には、また壁がありました。そこに神官様が手を触れると壁にうっすらと切れ込みが入り、入口になる。つなぎ目は一切わからなかったけどね！

周囲を取り囲むキラキラ集団は頭を下げたまま神官様が通過をするのを待っているようです……。あ、あそこの間を歩くんですかあああ！　とんだ羞恥（しゅうち）プレイだな！

挙動不審な私に、流石に勇者様が見かねたようです。

手を差し出されました。

手ですか！　迷子対策ですね！　すみません！

それにしてもこの人も喋らないな！　神官様が十喋るとして、一喋るかどうかだよ！　つまり十対一の割合ですね！

びくびくしながら手を重ねると、そのままエスコートされる形で歩き始めました。

手は本当に重ねるだけ。あ、意外と手が大きいですね勇者様。

というか。

というかあああ。

こ、こ、これは恥ずかしい！！！！！！！！

何でこの人は素なんでしょうか！！　色々と恥ずかしいな！　多分色々と訓練されてるんですね！　何の訓練かは分からないですが！

手を引かれた混乱でグルグルしている間に、あの人々で作られた道は終わったようです。

室内に入ると、やや暗いです。

ちょっとだけ目をしぱしぱしていると、

「歩けるか？」

と声を掛けられました。全力で頷きますよ！

「歩けます！」

いまの言葉に不穏な響きを感じたからです。ここで、歩けないなんて言ったら……荷物担ぎされる！　そんなムードが漂ってましたから……。

町民C、もう帰りたくなる

他の御付の人はぞろぞろとは付いてこなかった！

よかった。あの行列がついてきたら本気で心臓止まりかけるところだった。

残念ながら通路は二人並んでもゆったりとした広さがある。だから手を離すタイミングを逃したまま歩いています。さりげなく、勇者様の気遣いを無駄にしない感じで離したい。考えれば考えるほど、今の状況を意識してしまいます！

重ねた手から意識をベリッとひきはがし、また周囲の観察ですよ。

通路はこれまた白い壁だった。

床にはふかふかの青い絨毯（じゅうたん）が敷き詰められている。

靴に当たる感触がやわらかいですね！　靴から泥が落ちていないか本気で不安です。でも気付いた。靴に泥が付く暇なんてなかったことに！　町は石畳で舗装されているし、草原では一回勇者様のおんぶから下ろしてもらっただけ、そして気がつけばさっきの芝生広場（仮称）ですよ！　安心した！　万が一汚してしまったら、自分で掃除をする所存です。ええ。掃除はこう見えて得意ですし。弁償はカンベンしてください。払えませんって。

それにしても長い通路です。延々と同じような景色が続いています。ところどころに燭台が置かれて光を放っているおかげで足元が良く見える。それにしても、これは高い蝋燭ですね！　ふわっと蜜の匂いがします。庶民には手の届かない蜜蝋ですよ。たぶんね。だって聞いたことしかないし。それを常時灯（とも）してるとか。贅沢だな！

……で、つまりここはどこだ。疑問は膨れっぱなしよ！

足音さえ絨毯に吸収されるから、物音は本当に衣擦れと鎧とかの音だけ。静かな雰囲気の中、質問するのは、はばかられます。く、口を開けない！　この沈黙嫌だああ！

不意に先頭を歩いていた神官様が足を止めました。行き止まりのようです。のっぺりとした白い壁だけが前にあります。

くるりとこちらを向き、神官様はあからさまに驚いた顔をした。

えっ、ていう表情でした。

重ねた手に凄い視線を感じます。そんなにこのエスコートもどきは恥ずかしいことだったんですか？　誰か指摘してえええ！　勇者様を見上げても、いつも通り無表情だった。

ゴクリ。さすが勇者様……ゆるぎないぜ。

ですが、これだけガン見したにも関らず、神官様はなかったことにしたようです。なんでだ。ツッコミはいつでも歓迎ですよ。さらりとエスコート状態のことを流したまま、

「この先、もしかしたら面倒なことが起こるかもしれませんが、しばらくの間我慢していただけますか？」

と仰る。何の事だか分からないのは相変わらずだけど、そう言われたなら仕方が無い。岩のように口をつぐむよ！　実際心の声はぺらぺら喋っているけど、口に出してはいない純情乙女でございます。自分で純情とか言ってるけどね。

「分かりました」

とりあえず、勇者様のように動作だけで返事をせずに口を開いてみた。神官様はかすかに頷いて、苦笑したようだ。

「いろいろと、しがらみが有るんですよ。まあ、何も無いかもしれませんが念のためです」

セレブには気苦労がつきものなんですね。大変ですね。

「なにがあっても、喋らないでください。私たちがフォローします

から」
たち、っていうところに疑問がありますよ！　勇者様は果たしてフォローしてくださるのか！　乞うご期待ッ！
　神官様は壁に向かい、杖をかざした。またあの不思議な韻律の言葉が謳われる。

「Ｊｙｍｎｗ　Ｋｓｈ　Ｓｍｓ，

—Ｋｊ（開錠呪文），

Ａｋｔｂ　Ｎｙｒｙｋ　—｛Ｋｍ　Ｈ　Ｎ　Ｍｃｈ｝（合言葉入力　神への道），

Ｊｍｎｗ　Ｓｈｒｙ　Ｓｈｍｓ．」

壁がゆらりと揺れて、無くなりました。壁が無くなった！？　い、いちいち驚いていたら身が持たない！　そうですね、魔法って不思議ですね！　もうこうやって自分の中の常識と折り合いをつけていかなきゃいけない気がした！
「行くぞ」
一声掛けられてから、軽く手を引かれる。
「あ、は……ぃ？」
見上げた勇者様は、笑顔でした。

もう一度言う。笑顔でした。

勇者スマイル装備ですよ！！！！！　ゆうしゃは　えがおを　そうびした！　ぱららららったらーん。

でも今の声は笑ってなかった気がするんですが！

笑顔装備しなきゃいけないって！　この先は一体なにが待ち受けているんだああ！

旅一日目ですが、帰っていいですか？

町民C、びびりまくる

扉を潜り抜けたら、とんでもない空間が開けていました。さっきから口が開きっぱなしですよ！

まず、天井が高い。

さっきの壁ぐらい、高い。

でもさっきの壁より恐ろしいのは、ここが室内だということです。ひ、広すぎる。何のためにこんなに高い天井に設定したのか……。

天井を見上げるとまた顎と喉のラインが一直線になったよ！　人は何故上を見るときに口が開くのだろう。自分的に謎です。

天井には一面に絵がびっしりと描かれていました。天井だけに、天上の様子ってね！　冗談ではすまない感じですが！

凄く写実的な人の絵が、生き生きと綺麗な彩色で描かれています。描いた人って、上向いて描くんだろうか。絶対肩こりになるよね！

むしろ苦行かもしれない。

絵を眺めていたら、色々見つけた。頭が白い人がいる。あれが始原の勇者の物語かな。そうだとしたら安直ですね！　なにがというか、ネーミングが……。

と、天井に目をとられている場合じゃない。さっき神官様が不穏なことを言ってたばかりじゃないか。かぽんと口を閉じて、前を向く。

だけど、また閉じた口を開けそうになった。

前もとんでもない感じだった。無理！　これで平常心とか無理だ

からあああああ！！！

白い壁には金で作られた装飾がツタのように這っていて、それがまた窓から差し込む日差しを受けてキラキラ光っている。金ですか！　ゴールドですね！

ひい！　何という金の無駄遣い！

窓には色ガラスがはめ込まれて、それも何かの物語の絵になっています。普通の窓じゃ駄目なのか！　どうあっても装飾を施す気か！　このセレブ空間め！

窓をすり抜けた日の光は、廊下にも物語を映し出している。それらが幻想的に映し出されている床は、陽光の色彩を計算しているのか、これまた白い大理石だ。うっすらと入る黒い模様が上品ですね！

ツルッツルに磨き抜かれている表面は、鏡のように窓の光を反射している。ゆらゆらと輝きが天井にまで拡散して、色と彩りが乱舞して、本当に幻想的な雰囲気をかもし出してる。そうか、これがゲー術かっ！　爆発したとしても、仕方あるまいな！

そして、私の思考は初めに戻るのだった。

だから！

このどう考えても豪奢な建物は一体！

どこですか！

気後れしている私の手をくいっと勇者様が引っ張った。

ギラギラブリリアントなゴージャス廊下を進むらしい。この、豪華空間を進むらしい！

この大理石で滑ったら、ものすごく恥ずかしいんですけど！　慎重にならざるをえないよ！　恐る恐る足を踏み出してそーっと歩く。

旅装そのままの私は、本当に場違いだな。場違いすぎて、ばちが

当たるぞ！　おおっと、私が滑る前に、ギャグが滑ったあああ！！　自分で言ってて寒かった！　これは寒い！！　厳冬並みである。く、くだらないことを考えたら、気分が落ち着くかなって思ったんだって！　信じて！

私が誰かに弁明をしている間に、いつの間にやら廊下を一行で粛々と歩いていた。半分、私の魂が抜けかかっているがな！　見よ、この口から出た魂を！

いろいろキャパシティが限界になってきた。いや、とっくに限界を迎えてたのを気付いてない振りしてました。歩くのだけで、正直一杯一杯です。

「背筋を伸ばせ」

横の人から声が掛けられた。ぼそっと呟きレベルの大きさなのに、耳に滑り込んでくる。反射的に私は背筋を伸ばす。

「顎を引いて前を見ろ」

言われて初めて、目線が下を向きがちだったことに気付く。顎を引いて、前を見ると、視界が広がった気がする。

「その靴はある程度は滑り止めがある。滑らない。かかとから着地しろ。胸を張れ」

きわめて自然につなげられた指示に、私は何も考えずに従った。頭、真っ白ですから！

「頬と口角を上げて目をもう少しパッチリと開け。笑顔を作り、敵意が無いことを示せ」

無理やり笑顔を作る。か、顔が引きつってる気がするけど、そのあたりの指摘はない。何とか合格ラインなんだろうか。

「前方から王族の気配がする。そのまま姿勢を保て。俺が合図で手

を少し前に突き出したら、左足を引いて一礼しろ。あとはあいつに任せてじっと立ったまま笑顔を保てそれだけでいい」

頭の中で今の指示を反芻する。よし、覚えた！　多分！

色々教えてくれてありがとうございます！　心の中で師匠と呼ぶよ！　意外と面倒見がいいお兄さんなのだね！

というより、今の発言の中で幾つか不穏な単語が混じっていた気がするけど、私は全力でスルーするよ！

ええ、スルーさせてください！

そう、無心になって歩くんだ。無になれ。

おうぞくってなにそれ。

……いや！　考えちゃ駄目だよ、考えたら負けな気がする！

町民C、お姫様は無理だと悟る

真っ白になって歩くことしばし。とうとうその時が来ました。

「深蒼（あお）の勇者様！　お帰りを、お待ち申しておりましたわ！」

静寂を破ったのは、鈴が鳴るような声と花の香りでした。

前方から何かが近づいてきます、先生！

声の主は、若い女性だった。先頭に立つ彼女が一番華麗で、そして何かのオーラを纏っています。その背後からは付き添いと思われる人がずらずら付いてきている。先頭の彼女より簡素だけれども、綺麗な揃いの服装です。その意味は深く考えたくない！　どう考えても王……いや、気のせい！　気のせい！

見事な金色の巻き毛を複雑に半分だけ結い上げ、生花とティアラで愛らしく留めている。背中に流した髪は金の滝のようだった。周囲の彫刻に負けてないぐらいゴールデンでぴっかぴかです。キューティクルというのは、ああいうものをいうのか！　ゴージャスな風景にしっくり溶け込んでいらっしゃる。

物語の挿絵ぐらいでしか見たことのない、ふんわりとパニエでふくらませた薄紅色のドレスをちょっとだけつまみながら、紫色の瞳を輝かせて小走りに近寄ってくる。本当にあんな丸いドレス、あるんだー。ビックリするほど肌が白いから、淡い色がよくお似合いです。

それにしても顔が小さい！　目がぱっちりと大きくて、桃色の唇がほんのり色気をかもし出している。簡単に言えば、美少女です。同じイキモノですか？

淡い色で全体がまとめられている姿は、春の妖精みたい。

私が少女小説風な表現をしちゃうぐらい、本当に可愛いです。

でも、どっかで見たことがあるね！
お祭りでよく売ってる国王様一家の絵姿で見たことあるような気がするなんて、気のせいだよね！

彼女はふわふわした雰囲気の笑顔で、こちらに――訂正、勇者様に駆け寄ってくる。
なんだろう、とてもヤバイ予感が。脳裏に警鐘がガンガン響くぜ！

反射的に、勇者様にひかれている手を、すっこめようとしました。が、あろう事か勇者様は握りました。握りやがりましたあああ。ちょ、離してええええ！　絶対面倒ごとの予感がするからあああ！

「勇者様、お帰りをお待ちしておりましたのよ」
両手を胸の前で組んで、うっとりと勇者様を見上げる彼女。勇者様は、日頃のあれがどこへ行ったのやら、にっこりと笑いかけ（ここで私のトリハダが一気に増えた）、
「ありがとうございます」
と答える。全体的にぼやかされた言葉を、そつなく笑顔勇者様は返します。
その返答に美少女はポッとあからさまに頬を染めたあと、
「あの、よろしければ旅のお話などを聞かせていただきたいんですけど」
ともじもじしながら仰いました。
「申し訳ございません、王女殿下」
ここで神官様の登場ですよ！
この話の隙間からねじ込んでいく能力は感嘆に値します。私は絶対無理！　姫君はここでようやく神官様のほうへ向き直った。って、王女様って言ったあああ！

混乱は顔に出さないッ。それが庶民としての立ち位置を守るのだああ！　クールになれ！

神官様は相変わらずのクールっぷりで話を続けます。

「今回は神殿に立ち寄っただけでございますので」

神官様の笑顔は本日も炸裂中です。あえて語尾をぼかすテクニック！　お断りムードを察しろということですね！　でもちょっと黒いものが見えてる気がするな。気のせいだと思いたいな。姫君の御付きの人がちょっと緊張した様子。そうだよね、下っ端って、敏感になるよね！　ちょっと親近感を覚えました。

さり気に黒い神官様に、それでも姫君はマイペースを崩さない。

「あら、神官様もお帰りなさいませ」

神官様に今気付いたのか？！　ようやく勇者様を見上げる乙女モードは終了したようです。神官様へ向き直り、にっこり。しかし、彼女は諦めなかった。

「でも、少しぐらいお時間はいただけませんこと？　ひとやすみも、重要だと思いますわ。美味しい焼き菓子が手に入りましたの」

お姫様のスルー力は凄いな。わたしも見習わなければならない。だが、見習わなくて大丈夫なようだ！　今、私、全力でスルーされている気がするよ！　ああ、すっぱり私の存在がなかったことになってる！　いや、このままでいいよ！　私を無視してくれてもいいよおおお！　いや、無視してくださいマジで。

「姫様」

勇者様（笑顔）が爽やかに姫君に声を掛ける。はい、と姫様は本当に嬉しそう。

「まことに申し訳ございません。本日は時間が取れないのです」

本当に、残念そうに、情感を込めて勇者様は仰った。普段とのギャップはなんだろう！

そういえばその件について聞いたことがなかった。二重人格なのか、それともなんかどっちかが偽者の俺的なんだろうか。どっちにしても、普段のぶつ切り会話ッぷりを知っている身からすると、正

直、トリハダが止まらないんですが。

ここで初めて姫様の視線が私に流されました。

ちょ、見ないで！　怖いから！

町民C、ジョブチェンジするらしい

お姫様の視線が突き刺さる先は、一つしかない。
勇者様が握り締めやがった手です。
だから！　離して！　ほしかったのに！

神官様はお姫様の視線に気付いたらしい。にこっと笑いかける。
「こちらの方は、私たちの旅を手助けしてくださる方です。ご紹介します」
神官様の無言のうながしに、勇者様が手を少しだけ前に出した。

前に出ろって、いじめですか！　と叫びかけたが、先程勇者様に言い聞かされたことをかろうじて思い出す。

合図で手を少し前に突き出したら、左足を引いて一礼！

ぎこちないながらも、一礼をした。ギクシャクどころじゃないよ！　庶民にはこれが精一杯。
でも、挨拶の口上も分からない。
あれ、自己紹介って身分が下のものからするんじゃなかったっけ？
でも、私は黙っていろって何度も言い聞かされた。とりあえず、敬語もぐちゃぐちゃだと思うから、大人しく黙っておく。
神官様が私の一礼を見届けてから口を開いた。

「こちらが新しい神子になられる方です。これから、セイヒツの間に入り、星原樹（せいげんじゅ）の選定を受けていただくところです」

ちょ。

ちょっとまてえええええええ！！！　何も聞いてない！　聞いてないですよおおお！

みこってなんすか。

なんかその煌びやかな呼び方ってなんすか。

これから気軽に職業が名乗れなくなりますよ！

ご職業はなにをされていますか？

神子です。

ッ、言えない……！！！　この平凡顔のまな板娘では名乗れない！

笑顔を保ちつつ、頬がぴくぴく痙攣（けいれん）するのが分かります。

私の知らない衝撃の事実！　どどーん。

いや、ホント知りませんって。

それならそうと、はじめから話してくれれば……信じませんよねー。ですよねー。

姫様は、ご不満のようです。

ですよねー、どう見ても庶民が勇者様（笑顔効果で三割カッコよさ増量）の手を握ってる図、ですしねー。御付きの人たちからもビュンビュン視線が飛んできます。視線が針だったら、私、ハリトカゲみたいになってるはず。ハリトカゲは全身針で出来たトカゲの魔物です。俺に触ると怪我するぜ、みたいな。

はっはー。

緊張しすぎてようやく落ち着いてきました。

平常心だよ！　もう私平常心保ってる！

お姫様がうろついているって事は、神官様が仰ったとおりここは星都なんだと思う。

で、星都って言うのはイコール王都だ。ただ、この国に関しては王より神が上って感じなんだよね。だから、星神の都という意味で星都ってよばれているのさ！　冷静に誰かに解説してみた。

「この方が……？」

スーパー疑惑の眼差しですよ、お姫様。

私もそう思いますよ！

あやしいですよね！　とってもあやしーいですよね！

何でこうなったのか意味が分からない。

全体的に、まあ、私を拉致した誘拐犯（勇者様）のせいだということだけは理解しているがな！

「はい。なので一刻も早く儀式を行いに行きたいのです」

畳み掛けるように神官様。要約すれば早く行かせろってことですね。

「では、その女性があの星神官（せいしんかん）の代わりというわけですか？」

お姫様も負けずににっこり。

ん、なんだろう、今の言い方が引っかかる。

代わり、といわれるからには、私の前に誰かがその神子とやらをしていたのだろう。

星神官、ってあまり聞き覚えの無い役職だ。

「あなたは、これからのことに耐えられて？　わたくし、同じ女性としてとても心配しておりますの」

お姫様は私に向かって両手を胸の前で組みながら語りかける。

何の、話でしょう？

私は口を開きたいが、開けない。そう約束したから。

でも彼らも私に色々話さずにつれてきた。なんか、おかしいよね？　いや、今更って言わないでくださいいいい！　一応、世間的に、地位も名誉もある方々だから、変なことをするはずがないって思って付いてきたんですがああ！！！

「男性の星神官でも一月で心を病んでしまわれたの。過酷な旅にな

りますわよ」

わたくし、心配で、という姫君。なのに、何故か私を心配している風にはちっとも聞こえない。私の耳が悪いんでしょうか！　それとも女の嫉妬は怖いねっていう話で納まる話題なんでしょうか！

それにしても内容がいきなりヘビーですよ！　聞いてないよ、その二ですね！

私が異常な緊張のせいで、掌に汗をかいたことに気付いたのだろう。勇者様が少しだけ、手に力を入れた。それを見逃さないお姫様。ますます笑みが深まり、言葉に刃が潜む。

このひと、こーわーいー。

無表情勇者様の怖さなんて、子猫のひっかき攻撃ぐらいに思えてきた！　こう、じわじわくるのがたまらないーしかも美少女なのがまた怖さを増やすううう！

「選定されるまえでしたら、辞退できますわ。辞退されても、わたくしが悪いようにいたしませんわよ」

ふと、もし私が辞退したらどうなるんだろうと思った。辞退しても、大して変わりは無いんじゃないだろうか？　所詮一般人です。

「姫君」

ここでようやく勇者様の介入です。姫様はぴたりと口をつぐみました。

「この方の不安を徒（いたずら）にあおらないでいただきたいのです。世界は刻一刻と魔物の侵食を許しています。それを食い止めるには、神子が必要なのです」

愁いをたたえた勇者様の言葉に、姫君は流石に勇者様の前でこれ以上何かを言うのは諦めた様子です。この笑顔バージョンの勇者様が本当にお気に入りなんだろうなあ。分かりやすすぎる対応ですね！

それにしても、いつの間に、こう、急展開になったんだ？

私だけがついていけません……。

町民C、いたたまれなくなる

私を他所に事態は進んでいるようです。私にとっての非常事態ですがね！

お姫様からは睨まれるし、後ろの人たちも怖いし、勇者様たちは説明が無いためもうどうしようもないわ！　付き合ってられません。奇声を上げて踊りでも披露したら、逃げられるのでしょうか……？

いやたぶん駄目だな。居場所が廊下じゃなくて、牢屋になるだけですね。

だらだらと冷や汗を流しつつ、この居たたまれない雰囲気をスルーしようと精一杯頑張っています。でも発言はしちゃ、駄目なんだよね。恐ろしい角度からいろいろ抉り取られそうな予感がします。ペンペン草も生えない感じに全滅フラグですよ！

「お姉さま、そのあたりでおよしになったらどうです？　見苦しいですよ」

横から涼やかな声が割り込んできました。全員の目がそちらに向きます。私も思わず注目！

カツカツといい音をさせてブーツのかかとを鳴らしながら、王子様っぽい服装の方が登場です。

短く切った癖のある黄金の髪をなびかせ、明るく淡い色使いのお姫様と対照的に、深い緑と黒を基調とした軍服を纏っています。イメージも真逆。お姫様がふわふわしているとすれば、この方は怜悧で颯爽としている。腰には繊細な細い剣を佩いている。でも高そうな剣です。鞘にまで金とか！　あんな立派な服が仕事着なのか？　どう見ても男物なんだけど、でも女性の声だったよーな。

「主神殿でまで男性の衣装を纏うあなたよりは分別はありましてよ？」

お姫様は笑顔で皮肉を投げ返しました。

また一つ分かった事があるね！　ここってしゅしんでんだって！

えーと。どっかで聞いたな。どこだっけ。

そして新たな王子さまっぽい方は女性らしい？　人間、見た目で判断してはいけないって、神官様で学びました。まあ、昨日ですが。美人に性別は意味無しだよ！

王子さまっぽい方は、姫君と同じ紫色の瞳をすっと細めて、

「この方が動きやすいのです。これから剣の稽古ですから。この服装については陛下と睨下のお許しはいただいております。頭の中まで砂糖菓子とおしゃべりがつまっているお姉さまと、一緒にしないでいただきたい。お姉さまこそ、ダンスの時間ではありませんか？」

と言い放ちました。

ぞぞぞぞぞ。

ひい！　私のトリハダは休むことを知らない……！！

涼やかに笑う姿は、うん、立派な王子様ですがセリフに棘がありすぎるよ！　ざっくざく相手を攻撃してるううう。

お姫様は流石に慣れているのか、表情が変わらないようです……いや、こめかみの辺りがぴくっとなった気がする。私、目だけはいいんです。見逃さないよ！

お姉さま、というところを見ると、どうやら姉妹らしい。

と言う事はこのお姫様が第一王女の華姫と、第二王女の騎士姫だろうなあ。姉妹の折り合いがたいそう悪いと町の噂で聞いたことがあります。あんだけ離れた町まで話が届くって、どれだけ仲悪いの。

まあ、こう、お二人揃ったら一目瞭然ですがね！　空気が軋みを

上げていますよ！　退避ー！　総員退避ー！
騎士姫様が、お姫様から目を離さず、声だけで勇者様に呼びかけた。
「勇者殿、急がれているのだろう？　早く救世の旅の続きに戻るといい。世界の一大事に、お姉さまも分かってくださるだろうよ」
先程までわがままで引き止めていたのを明らかに知っていますね！　いつから見てたんですか。そして、セレブって皮肉のエスプリが効いた会話以外は無いのか。
いたたまれません。
この毒気にいたたまれません！
私の笑顔はとっくに硬直しているよ！　お面状態です。

勇者様はこの好機を逃しませんでした。
「ありがとうございます」
と軽く礼を言い、歩き出します。
勇者様の笑顔とお礼に続いて、神官様も丁寧に礼をした後、颯爽と歩き始めます。私も慌てて礼をして、追いかける。追いかけずとも、手を握られているので引きずられることになりますがっ。
騎士姫様は、悪戯っぽく笑って手を振っていらっしゃった。
姉姫様が何か仰りたそうにしたけれど、妹姫の手前、沈黙を選ばれた様子。

何はともあれ。

ようやく刺々しい空間から脱出できて、大きく溜息をついた。先程と大して変わり無いけど、空気が美味い！　胸いっぱいに吸い込んだね！

勇者様の手と重ねた手が、結構汗ばんでいるのに気付いた。乙女としてこれは駄目なんじゃないでしょうかっ。外してくれなさそう

だから、後で即行謝罪することに決める。
そして今更気付いたけれど、勇者様はちゃんと私の歩調に合わせてくれていたみたい。昨日のように置いてけぼりにならずにすんでます。勇者様には気遣い大王の称号を与えたい。でも荷物担ぎはＮＧな！
しばらくそのまま無言で歩きます。天井の絵は、進むにつれてだんだん逆に勇者達の時代から創星（そうせい）の時代へとさかのぼっていきます。絨毯が足元の衝撃を吸収してくれるから、歩きやすくてたまらない。

そして、行き止まりにはこの高い天井まで届く、デカイ扉がドーンと存在していました。
白い、何の材質か分からない、つるっとした扉には浮き出し模様が彫られています。

その扉には樹の模様と、そこから果実を取る人の姿。
創星記ですね！　流石に知っていますよ！　始まりの樹と万物の果実ですね。
これは石になった人間が貼り付けられているといわれても納得しそうな彫刻です。
こんな馬鹿でかい扉（推定石材っぽい？）、どうやって開けるんだ？
まじまじと近づいてくる扉を上から下まで眺めます。

ここで神官様が立ち止まり、くるりとこちらに向きました。

「先程の姫君の言葉を聞きましたよね？　それでもこの向こうに一緒に行ってくださいますか？」

神官様はあくまで私の意思を聞こうとしている。……らしい？

えっ、今更ですか！　今まであんまり意思を聞かれた覚えがなかったんですがっ。

町民C、やっと説明を受ける（かもしれない）

ようやく発言を許された感じの私は、恐る恐る切り出した。
「えっと……、いろいろお伺いしたいことがあるんですが、ここで聞いてもいいんですか？」
一応、黙っておけ発言があったしね！　どこまでが駄目なのかちゃんと聞いておかなくては。さっきみたいにお姫様たちがひょっこり現われたらいたたまれないよ！
「大丈夫ですよ。ここには近づける人間は滅多に居ません」
え、なんで？
また疑問が増えましたよ！　なんですかその選別されてるっぽい発言は。ここは不思議ゾーンですか？　不思議ゾーンですね！
私が首を捻っていると、
「ここは星神の力がもっとも強い場所でもあります。耐性のない人間はまず近づくことすら許されません」
それでさっきのお姫様たちは追ってこなかったのか。何で大人しく見送っているのかと思いました。特に姉姫様はハンカチとか噛締めてキーッとかしそうだったぐらいの眼光だったしね。
「私、そんな不思議な耐性はあまり無いと思うんですが。星神様の力？　とかも感じませんし」
「……本当に、何も感じないか？」
不意に勇者様が口を開きました。いつも通りに平坦な調子で、もう無表情に戻っています。　やっぱりこっちが素顔なんだろうか。あ、これも聞きたいことですね！
何を感じるというのだろう。
ぐるーっと首を回して、壁、床、天上、目の前の扉を見ました。
うん、高そうな調度品ですね、とか庶民丸出しの感想でいいんだろうか。

微妙な気持ちがにじんだ表情を、神官様は読み取ってくださったらしい。

「私でもここの濃密な空気は苦手ですよ。不快ではないんですが、常に全身を軽く圧迫されているような気がしますから」

反射的に私はもう一度、周囲をきょろきょろ見回した。

だ、だまされてるとかじゃないよね！

本当に何も感じません。ぶっちゃけて言えば、さっきのお姫様たちのバトルの方が重苦しかったです！

勇者様がじっと無言で私を見下ろすんですが。これが重苦しいぐらいですよ！

何も感じていないのはこの反応であらからさまだったようです。神官様は続けてこう仰いました。

「それがあなたを連れてきた理由なんです。他のものは耐えられませんでした」

自分が何も分からないから、いまいち理解が追いつかない。だって、重苦しい雰囲気とか、何も感じないんですって！　耐えられない、でふとさっきの会話を思い出す。

「先程の王女様が仰ってた、星神官（せいしんかん）様のことですか？」

なんだか地雷の匂いがぷんぷんして聞きにくいことだけど、私の身体に関わりそうなことだからね！　今のうちに労働条件を把握するために聞きまくりですよ！

「あの方は、元々耐性は殆どありませんでした。ですが、私たちの旅に同行することになったんです」

何が起こったんだろう？　勇者様が一発で分かる補足をしてくださいました。

「王族だったからねじ込まれた」

不穏なムードが漂ってきましたああ！　権力って怖い！！！

「王位継承権の上でも、私たちの旅に同行したという実績が付きますしね。いい感じの箔（はく）付けだと考えられたのでしょう」

色々権力闘争があったみたいですね！　怖いからつっこまないけ

ど。ついでに言えば、これ以上は聞かないほうがいいんでしょうね！
「同行したはいいものの、彼は耐性がなかった。本来果たすべき神子の代理は果たせませんでした」
あ、また出てきた単語ですね！　なんか派手な響きの神子！　ここで質問だ！
「神子ってなんですか？」
そんなけったいなものになるつもりは無いんだけれどな！　なんかこう、派手な衣装を着て、歌ったり踊ったりするんじゃないのかな。
「神子とは、尊から発生した言葉です。神の体現者であり、代理者として御言を発する方という意味があります」
むむ。これは私の知識とはちょっと違ってきた。
「神様のお言葉を伝える方って、『神の声』の大神官様のことじゃないんですか？」
都の神殿にいらっしゃる大神官様は、文字通り星神様のお告げを代弁するお方だというのは子供でも知ってることですよ！　流石の私でも分かります。勇者様の順番は知らなかったけどね！
神官様はほろ苦い笑顔を浮かべた。何でそんな顔をされるんでしょうか？
「『神の声』は文字通り代弁者なのですが、乱暴に表現すれば、そうですね……預かった言葉を読み上げるだけなのです。ですから分類としては尊ではなく、預言者であります」
むむ。また難しくなってきました。
「じゃあ、神子と預言者の違いはなんなんですか？」
さっぱり分からないぜ！　両手を挙げて万歳降参ですよ！　プリーズ説明担当！　か、噛み砕いて、優しくお願いしますね。
「神子は神との意志を通じることが出来るものです。『神の声』は一方通行でありますが、神子はある意味双方向で意思を交わすことが出来るそうです」
ソウデス、って伝聞形ですか？

「現在まで、本当の意味での神子が立った事はなかったからな」
勇者様がぼそりと呟きます。えー……驚きが大きすぎて、わけが分かりません。この二日間でこの単語ばっかり使ってる気がする！
どちらにしても、私が神様と繋がるとか、無い無いって！
ということは、神子、とは呼ばれても神子の代理なんだろうな。うん、代理だったらいけそうな気がする？　ぶっちゃけ、あまり星教の勉強とかもしたことがないんです……。信仰心、普通ぐらいだと思うよ。修行とかあっても全力でお断り申し上げたい！　滝に打たれるとか無理だから！　あと苦しいのも痛いのも駄目ですよ！
「選定とか、仰ってましたよね？」
「大げさなだけですよ、この部屋に入って、箱に触れるだけです」
神官様が指したのは、背後の大きなどでかい扉。あんぐりと見上げる。本当にこの扉、開くのか？
「樹があるだけの部屋だ。恐れる事は全く無い」
なんだか労働条件がよすぎて、凄い落とし穴がありそうですよねっ。またしても何か聞き逃したのか？
鳥アタマを自他共に認める私は、すぐに大事なこと忘れちゃうんですよねー。
あ、手を握ったままだ。解くタイミングが窺えないっ。しまった、ついうっかり。ここで手を引っ込めるのはおかしいかなあ。悶々とする私を見て、神官様は優しく仰いました。
「あなたを巻き込んでしまい、申し訳ございません。ですが、あなたほどの適正を示す人はいませんでした。力を貸していただけませんでしょうか」
両手を胸の前に組み、深々と頭を下げる。神官の最上礼だ！　私なんかにもったいないです！
「や、やめてください！　その、私が本当に役に立つかが不安なだけで」
慌てて止める。神官様の愁い顔は晴れない。いまいち私の返事が振るわないせいかもしれない。うん、せっかくパン屋も休み貰った

し、やれることがあれば協力してみよう。ちょっと前向きになりましたよ！

「……で、私は何をすればいいんですか？」

本当は、大層な肩書きはつけたくないけれど、一応、一応だけ！　聞いてみました。

「簡単ですよ」

その単語にだまされないっ。気構えをしっかり持ちます！

「戦わずとも、何もしなくて構いません。ただ、樹の枝を持って一緒に歩くだけで結構です」

……えっと。

それって荷物持ちですか？

町民C、やっと説明を受ける（かもしれない）（後書き）

8／21誤字訂正

町民C、やっとココがどこか分かる

「流石にここの奥に何があるかは、分かるか？」
色々不安になった私に、勇者様が問いかけました。このひとに質問されたら、思わずびくついてしまいますよ。
「ここの奥ですか？」
え、えへ。分かりません……それどころか、ここがどこか分かりません。えーい適当に答えちゃうよ！
「お城ですか？」
私の返答に、神官様も勇者様も沈黙ですよ。
うわあああああああ！
気まずいいいいいいいいい！！！！！！！
今のは絶対かなり外した！！！　私は慌てて言い訳するよ！
「あ、あのですね、ここが星都だっていうことは分かってるんですが、それ以外が実はよく分かって無いって言うかっ」
私は本当のことを喋りました。
追い詰められたら喋ってしまうよ！
多分ちょっと脅されただけでいろいろ情報を洩らしちゃう人間だな！　自覚はあります。
神官様、こめかみをぐりぐりって揉んだ。今、かなり困ってますね？　困ってますね！
「どこまで何をご存知なのかは推測しかねるんですが」
勇者の順番も知らなかったしね！
「とりあえず、創星記はどこまで知っているんだ？」
勇者様が基本を聞いてきた！　どこまで私は無知なんだ！

創星記（そうせいき）、とは。
星神様がこの世界を作ったときの物語です。これは子供の頃からみんな聞いて育つ話ですよ！

「では、復習を兼ねて聞いてください。子供向けに編纂されたのが主流となってしまっていますから」

大人向けは違うんですか？　はう、まさかの子供は見ちゃ駄目というマークが？　……そんなわけない？　ですよねーちょっと言ってみたかっただけです。

ええと、はい、真面目に聞きます。背筋を伸ばしました。

「初めに星神が自己を自覚された。全き存在から神となった。そして星を配置され、命の基盤を整えた。その上で子等を作り、この世の韻律を決定した」

むむ。覚えていたのとちょっと違うような。はい、先生質問です。

「星の配置を決めたあとに韻律を決めて、命の基盤を整え、子等を野に放ったんではないのですか？」

神官様はそれはそれは難しい顔をして考え込んでしまいました。

あっ。失敗した。

「す、すみません。私の記憶違いかもしれないですし」

「いいえ。ちょっと、気になることがあったので。こちらこそ申し訳ない」

かなり深刻な悩みなんだろうか。更に凄く考えこんでしまう。

ちょーっとまって！　置いてけぼりにしないで！

けれどもすぐに神官様は説明を続けられた。やっぱりこの人は気遣いも出来る美人だね！　まだちょっと難しい表情はしているけど。美人ってどんな顔も似合いますね！

「……まあ、その続きとして、世界の中央に樹を植え、神はそこを始まりの場所とした。これが星原樹（セイゲンジュ）がはじめて、歴史物語に出てくる内容ですね。ここまではよろしいですか？」

ほほう。星原樹（セイゲンジュ）ですか。世界一有名な樹ですね！

「その後、星原樹を守るために建造されたのが主神殿エンジェライトです。星原樹の力で、この辺りには星石（せいせき）が豊富に産出されました。それで天上の青い石を使った都としてセレスタイトが有名になりました」

おお、青き麗しのセレスタイト！　とか吟遊詩人が大げさに謳っていたのは聞いたことがあるよ。青い石で屋根を作ってるから、晴れた日とか凄い綺麗らしい。

魔法？　でココに来たから、そんな光景は見て無いんですけどねっ。

ちょっと見たかったなー。

それにしても、星原樹は主神殿（エンジェライト）にあるんですね。

し、知らなかったわけじゃないですよ！

昔習ったから覚えてなかっただけです！

……うむ。

そういや、主神殿って、どっかで聞いたよね！　はっはっは。

エンジェライトっていう名前でしか、覚えてなかったよ。

ここじゃないかあああああ。

と言う事は、この扉の先にはまさか！

まさかー！

「ようやく分かったか」

冷静なツッコミをありがとう、勇者様。

「というわけであなたに持っていただく枝は、星原樹の枝になるわけです」

神官様が話を締めくくった。

それって、折っていい枝なんですか……？

町民C、ちょっと真面目に考える

正直に聞いちゃうことにしたよ！　だって、あとで呪われたり？　したらいやじゃないですかああ！

「そ、それって折っていい枝なんですか？」

そもそも枝を持ち歩くことすら意味が分からない！

私の質問に、神官様はにっこり笑ってこう仰った。

「星神様のお告げですから、大丈夫ですよ。世界の愁いを祓うために必要なのです」

お告げですか……。へーおつげ……って、お告げってあれですか！　大神官様が神様にいただくあれですね！　それは覚えてます。いきなり話が壮大になったなあはっはっはっは。

本当に私がここにいることすら訳分からないしね。

「部屋に入れば簡単に事が済む」

勇者様があっさりと仰います。あなたカンタンに言いますけどおお。

引き返せないことだけは、理解できている。

世界の危機とか、本当のところ、深くは理解できて無いのも分かってる。

どこか私の知らないところで全部起こって、解決されるものだと思ってたんだ。

そう、伝説の勇者様とか、どこかの強い人達がやってくれるんだって、思ってた。私が動かなきゃいけない理由が実感できません！！！！

冷たいっていうのかなあー……シロウトが布の服だけで人食い熊とかと対決するぐらいの勢いといいますか、勇気がいるんですよお

おお！

考え込んだ私を見てか、此処に来て勇者様がそっと手を離しました。

いままで散々引きずってきたのに、本当に今更。

たったそれだけなのに、いきなりぽん、と知らないところに放り出されたような気持ちになる。

掌の温もりが離れて、途端に不安になった。

すっと手に残っていた熱が冷えていくと同時に心も冷える。

私は顔を上げた。

じっと静かに二人とも私の結論を待っている。私が何か能力があるとか実感していたら、飛び込んでいけたのかな。スーパー能力発揮されるとか、いきなり前世に目覚めるとか、性格が変わるとかないかな！　そんなご都合展開はないでしょうけど！

さっきから怪我したらどうしようとか、怖かったらどうしようとか、つらいのはいやだとか、ぐるぐる頭に回って、もう爆発寸前ですよ！　弱虫だと笑ってもらってもいい！　怖いんだよおおお。

なにって、その、色々と。

その、責任とか。

世界を救うって事は、それだけ期待とか凄いと思うんだ。それって私に何とかなるのだろうか？

うわー、なんかまじめなことを考えている！

自分のシリアスっぷりにドキドキしてきたよ！

とりあえず現実逃避だ！　うん、目の前の扉のことを考えてみよう！

この扉どうやって開けるんだろうね！　ごごご、とかいうに違いないよ！　ああ、くだらないことを考えたああ。

ちょ、ちょっとは落ち着いたかな。落ち着け私。

うん、現実逃避完了！　この問題は先送りにしてもいいことが無さそうです。

ええい、頭が悪いなら、考えるだけ無駄だ！

何とかなるだろう。

私は全部棚上げをし、とりあえず質問した。とーっても大事なことを。

「えっと、とりあえず、付いていったら養っていただけますか？で、もし、お役目が終わったら雇用を保証してもらってもいいですかっ」

この人たちのお墨付きがあったら、どこかでは雇ってくれるだろうね！　そして生活保障を忘れない！

私にとっての重要事項を口に出した途端、神官様が目を丸くし、噴出した。笑うさまが上品ですね！

じゃなくて！

えー、これは笑うところじゃないですよ！　必死に考えた結果ですよ！

むう。もうちょっと厳格な言葉で言うべき？　難しいことはできないよー。

僅かにむくれていると、勇者様がぽつりと零した。

「お前は、先のことを考えるんだな」

私はあまり深く考えずに返す。
いままで緊張していた反動で、一気に心の中がダダモレだよ！
ぐっと握りこぶしを作って、力の限りに熱弁を振るった。

「だって、これまで何の仕事やってたんですか？　ッて聞かれた時、神子です！　世界救ってましたがなにか？　とか、いえないじゃないですか。私、平凡まな板娘ですよ！　えー、こいつ嘘ついてるかもーとか思われて終了で、働き口すら満足に無いかもです。勇者様もそうですよ、世界が救われたら勇者廃業になって、腕もたつしちょっとその辺の場所の護衛とかして稼ごうかなーと思ったとき、前職は？　て聞かれて勇者ですって答えるのとおんなじぐらい気まずいでしょう！　勇者なにしてんのとか絶対みんな心の中でつっこんでますよ！」

神官様は流石に大笑いするのが悪いと思ったのか、こちらを背に向けて震えています。どう見ても笑っているよ！　私が言っているのは正論だと思うんですがっ。

この言葉に対して、勇者様の返答は、
「そうか」
だった。

流された?!　流されたのかっ。

神官様はようやく落ち着いたようで、笑いながらこちらを見た。
「まあ、将来のことを考えることはいいことだと思いますよ」
といいながら、幾つか雇用条件を出しました。

ええ、神子とかのスピリチュアルな話より、こっちの方が分かりやすくていいです！

一日のお小遣いとか、町に入った時の行動とか、細やかな条件を詰めたところで、私と神官様はがっつり握手を交わしていた。

「ではよろしくおねがいしますね」

はっ。

あっ、勢いで承諾してしまった！

今気付いたけど、あとの祭りですね！

町民C、ジョブチェンジをする

巨大な扉の開錠は、やっぱり呪文によるものだった。
さっきまでの呪文とは響きが全く違う別の言葉を神官様が謳いあげる。

『Ｓ＊ｋｘｘｘｖｖｖ　Ｎｖｖｖ　Ｍ＊ｒｖｖｖｖｊｖｖｖｒｗｗ／（世界に命じる）

Ｍｖｖｖｖｃｈｖｖｖ　ｗ０　Ｈｖｖｖｒｘｘｘｋ＊／（道を開き）

Ｗｘｘｘｇｘｘｘ　Ｉ　ｗ０　Ｔ０ｗｗｓｈｖｖｖ／（我が意志を通し）

Ｈ０ｋｘｘｘ　ｗ０　Ｋｗｗｄｘｘｘｋ＊．（他を砕け。）』

こっちの言葉は、意味が頭の中に浮かんでくる。
凄いね！
意味は分かるけど、何かは分からないよ！　当たり前だけど。
前の言葉より韻律がまろやかで棘とげしくない。よくわかんないけど！
呪文にはいろいろあるんだね、とポケーと口を開いていたら、勇者様がこっちを見ていました。ひい！　見ないでいいよ！　おおっと、ココは口を閉じるところだった。危ない危ない。

今日はよく口が開く日……。人生、驚きの連続ですね！

ちょっとやそっとではもう驚かない！　ふっふっふ、スーパー町

民ですよ、私は！
生まれ変わるんですよ！　スーパー町民にね！　響き悪いな。他に何かいい言葉あるかな？　超町民とか？　だめっぷりだけが増えてます……。

神官様の呪文の余韻が、光の粉となって空気に溶け込んだ。広いホールに残響が響く。それと同時に大きな扉が音もなくすっと開いた。
えっ、ごごご、とか音は無いんですかっ。神設計かもしれない！
神殿だけに？　はっはー。動揺なんてしてないよっ。スーパー町民だからね！

そんな風に扉について考えていたことは、次の瞬間に吹っ飛びました。
扉の向こうにあった光景に、私は息をすることも忘れてしまった。

なんじゃこりゃあああ！！！

扉の向こうは、とても広い広い場所だった。
室内ではなかった。屋外だ。

光降り注ぐ場所。

深い蒼穹の空と、緑の丘。

風すら息を潜めるぐらいの威容を誇る星なる樹。

その樹が、普通じゃなかった。大きいとか、そういう問題じゃない。いや、確かに大きいよ！　大人が五十人手をつないで、囲えるかどうかも分からないぐらい。視界の殆どが樹に埋め尽くされる。

でも暗くない。樹が光を放っているから。光っているだけで驚いたんじゃない。それ以上に、この樹はとんでもなかった。

天（そら）から生えた樹が、地上に向かって伸びている。

えっ？　とか思いますよね。
私も思いましたあああああ！
なんで空から生えてんの！
どうやって空中に浮いてるの！

端が見えないぐらい広い丘の上に、その樹は空からぶら下がっていたのだ。

半透明なうっすらと白い幹の中には、天から根が吸った光がちらちらと通り、葉にたどり着く。葉は完全な星型をしていて、キラキラと蒼い色に輝いていた。時折、葉から雫のように光が零れ、下にある箱に注ぎ込まれる。
樹の先端は、地上から大人一人分ぐらいの距離を残して宙に浮いている。箱はその下にあるのだ。

これが星原樹。

神様、植えるなら、ちゃんと丘の上に植えてくれてもいいじゃないですかあああああ。
光がはらはらと樹から零れ落ちるさまが、とても綺麗で、胸が詰まる。
言葉が、喉の辺りから出てこない。
上を見上げても、樹の根元が見えない。あの先は神様に繋がっているのかな？
こんなものを見せられたら、流石に星神様がいらっしゃるのを疑

えるはずが無いよ。

「ここがセイヒツの間になります」

声を無くす私に、神官様がそっと教えてくれた。そして、

「セイヒツは、静けさを表す静謐と、星なる櫃を示す星櫃の両方をあらわしています。樹の先に、箱があるでしょう？　あれが神が命の基盤と韻律を納めた星櫃です」

指差された先にあるのは、ただの白い四角いものだった。箱、というには大きいな。棺っていったほうがいいかもしれないぐらいの大きさ。

「あれに触れることが、選定といわれることです。……まあ、何の危険もありませんので来てください」

神官様に促され、恐る恐る扉の中に入る。

澄み切った静寂に私は包まれた。

うわー！　うわー！　静か過ぎる！

息をする音さえ響きそうですよ！　こんなところ来たらくしゃみとかしたくなるじゃないか！　我慢！　我慢しかあるまい！！！

こう、真面目な場面がきたら、笑いに走りたくなる！

そーっと踏み出した足は、芝生で音を立てることなく、歩けるようだった。

静謐って難しい言葉だし、響きも凄く静かにしなきゃいけないイメージがありますね！

神官様に先導され、おどおどと箱の傍に来る。樹の真下だ。この樹、落ちてきませんか！　落ちてきたら一瞬で私の押し花……じゃなくて、押し町民が出来るよ！　そういった意味でもびくびくします。

近くで見たら、箱はふたがなく、小さなバスタブみたいな大きさだった。表現、庶民のたとえでゴメンね！　だって丁度バスタブの大きさなんだもん。

材質は白くつるっとした石っぽい何か。鑑定なんて出来ないから解説できないです。すべらかに輝いていますよ。

石っぽい何かでできた四角い箱。本当にどう見てもバスタブ……。

その中に、さっきから樹から零れ落ちてきた光が溜まっていきます。風呂の湯みたいな感じで、ゆらゆらと、たゆたっています。光って、溜まるものなのか？　これが命の基盤と韻律なんだろうか？

えーっと。

覗きこんで私は首を傾げた。

ちなみに、これをどうすればいいんだろう？　先生！

助けを求めて神官様を見ると、手を、と仕草でうながされた。

この光の中に手をつけるらしい？

い、痛くないかな。びくびくしながら手を出してみる。一度石鹸で洗ってきたほうがいいですか？　さっき凄く汗をかいた気がしますっ。でもそんなことを許してもらえなさそうな気配がビュンビュンします。

えーい。仕方ないっ。

投入！

勢いよく光の中に手をつけました。

すると！

なんと！

何も感じませんでした。

ええええええー。

こう、ちょっとびりっと来たーとか、冷たい、とか、あったかい、とかないんですかあ。

光が私の手を水のようにするするとなでているように見えるけれど、感じません……。

たぶん横から見た私の姿は、お風呂の温度を見るのと同じ格好だよ！　ちょっと回りが壮大すぎる風景だけど！

……この後、どうリアクションをとれば。

ちょっと考えていたら、目の前のバスタブに、いきなり何かがドサッと落ちてきました！！

ひい！

反射的に手を引っ込めました。

怖いよ！　ちょっとずれてたら私に直撃したよ！

よく見たら、私の身長ぐらいある枝が、バスタブに浸かりこんでいます。わー、半透明な枝と、お星様の葉っぱだーきれいだなー。って。んん？

も、もしかして、これを私が持つんですか？　勝手に折れてきたけど、いいのかな。

私の背の高さぐらいあるんですけど！

こ、これ以外落ちてこないよね？　上からブッスリ、串刺しなんかになった日には、悲しすぎるでしょう！

恐る恐る神官様を見ると、凄く真剣な顔をして私を見て頷きました。このアイコンタクトはなんだろう……。あ、枝を持てっていうことですね。分かりました。

じょうだん、いえそうな、ふんいきじゃ、ないっすね。ははは。

私はよいしょ、と星原樹のありがたい枝を持ち上げた。あ、軽い

です。
　櫃に満たされた光が、枝に纏わり付いているため、動かしたらそれがハラハラと落ちる。意外と綺麗だけど、光は私に降り注がれている。こういった照明効果は美人の神官様や隠れ美形の勇者様にしてください！
　なにかが……つらい！　普通過ぎる自分が……つらい！

『選定は成った』

　わぁん、と響く不思議な声。どこかで聞いた声だ。反射的に振り返る。
　後ろから聞こえた気がした。

　しかし、そこには神官さましかいない。
　いまの声、誰だろう？　神官様のなめらかボイスと明らかに違うんですが。
　心霊現象ですかあああ。
　慄く私をよそに、事態は粛々と進んでいたようです。
　ようやく神官様が声を出しました。

「お疲れ様です。勇者一行にようこそ、神子」
　神官様はにっこりと笑い、私に握手を求めてきた。そっと握り返す。前も思ったけど、この人の掌、結構硬い。剣でもしてるんだろうか。
「こちらこそ、よろしくお願いいたします……」
　でも神子呼びは止めてほしいな！　心がすさみます……。
「勇者様も、よろしくお願いします」
　勇者様は、少しだけ何かを滲ませながら、頷いた。実は勇者様も居たんです。私たちからちょっと遠いところに。無表情じゃちょっぴりなくなっていたけど、この人の表情を読むスキルが無いから分

からない！
　握手はしないの？　ちょっとだけ、手の行き場を失う。あっ、まさか！　さっきまで握っていた手が、汗ばんでいたのに気付いていたのかっ。
　ごめんなさいね！　いまも絶賛汗ばんでます！　緊張の連続ですよ！

　こうして、私は町民から、神子（仮）になったのであった……。
　でも、心は町民なんだからねっ。
　神子よばわりは、本気で勘弁していただきたいんですが……。
　泣くよ！

◆魔術師、研究資料を遺す（前書き）

いつもとやや傾向が違います。
世界に関わる話なので、なんとなく読み飛ばしていただいても結構です。

◆魔術師、研究資料を遺す

研究資料

神話における創星物語と現代星術の限界とその汎用性について

著：ラブラドライト・ツワナアゲート

星術とは、なにが出来るものなのだろうか。
単純であるこの問いに、正確に答えられるものは少ないだろう。

大体においてこの質問を投げかければ、「この呪文を唱えればこうなる、だからこれができるのだ」といったことを説明するものが多い。これは星術学において嘆かわしい事態である。この答えは星術を道具として理解しているに留まり、本来の星術という概念を理解したとは到底いいがたいものであるのだ。

星術とは、現象を顕現させるものである。
神が定めたもうた韻律を読み上げることで、有り得ない可能性を引き寄せ、現実化する。

例えば、荒野の真ん中で火を欲している人間が居るとしよう。道具も何も無い。彼が星術を使用できると仮定する。
まず、あらかじめ定められた「火が存在できる」という可能性を引き寄せ、最も実現可能な形で「火が燃えている」状態を現実化するのだ。
この喩えでいうならば、燃焼要素（例えば、乾いた木や燃えやすい草）がある場所で火を呼ぶ行為と、はたまた水中で火を呼ぶもの

は難易度が全く違ってくる。現実化しやすいものであればあるほど、星術はたやすく現象を顕現させる。

韻律とは世界に織り込まれた法則である。火は燃え、水は下にたまり、風は軽やかに吹く。つまりそれらが記された膨大な知識であり法則なのだ。自然現象にも韻律は働いている。それを曲げ、干渉するのが星術である。

このように、星神が定められた韻律は、物質としての現象を変化させることが出来る。人はそれを歌という形で発見し、様式を定めた。それが古代星術の黎明（れいめい）であった。古代星術は、術師の製術過程により編む呪文も謳われる効果も全く変わってくる。

それは時代が進むに従い更に洗練され、新星術として編纂（へんさん）された。

新星術においては様式は簡略化され、目的と効果がはっきりしている呪文となっている。

原初（しろ）の勇者以降編纂された新星術では、世界という単語はＳｋ，と表され、術を詠唱時には裏拍（うらはく）をとりながらＳ４ｋ１ｑと謳いあげる。

これは裏拍を一定の法則で決めてしまうことにより、簡略化された呪文用語である。

古代星術においては、おおむねＳ＊ｋｘｘｖｖと表記されるが、音程、長さによって効果が変動してしまうのだ。

このように、新星術は使用するための法則を決めることにより、生まれる現象の品質を規格化したといえるであろう。

星術の違いによる考察はさておき、ここで創星記に戻ろう。

神は、『星を配置され、命の基盤を整えた。その上で子等を作り、この世の韻律を決定した』とある。

韻律は、星と命の基盤と人間の存在には干渉できないとされているのは、この神話を基にした学説である。

命の基盤は韻律より先に神が創りたもうたものであり、韻律とは別の法則で動いているとされた。命の消失に対して、その命がまだあるという状態（つまりは死からの甦りである）を引き寄せられた例が全く無いのは、この創世記に記された順序が厳然として存在するためであるという。多くの術師は経験則からそういう結論に達している。

とすれば、星術の限界は人間の存在にたいしてどこまで干渉できるかということになるであろう。

しかし、ここで私は一つの疑問を呈する。

星術において、傷を癒す術が確立されている。これは、はたして命の基盤に関わらないものなのであろうか？

生命は命を指すと考えられる。韻律でひとが生命を支配することが出来るのではないだろうか。

もしも命の基盤に関わる韻律が存在するとしたら、現在通用している創星記がひっくり返る可能性がある。つまり、誰が広めたか不明である創星記における信頼性が失われるということである。しかし、代々の『神の声』が創星記に関して、肯定も否定も発表はしていない。神が語らないのは、間違えた創星記を広めたのが星神自身

であ……

（以下、インクと血？　とおぼしきものが滲んでよく読み取れない。
研究資料は瓦礫の石の間に挟まっており、何とか風雨をしのいでいる。
誰も文字を読む人間は居らず、彼の疑問に答える声はもう無い。）

◆魔術師、研究資料を遺す（後書き）

ラブラドライト・ツワナアゲート（Ｓｋ，７８８６～Ｓｋ，７９４１）

ツワナアゲート伯とも呼ばれる。魔術師としての才に秀でた領主であった。教鞭をとり、魔術師の教育に力を入れる。しかし、魔王の呪の流言により、民衆の暴動により死亡。宮廷魔術師として招聘が決定していた矢先の出来事である。享年５４歳。

その後、ツワナアゲート地方は人々に忌避され、廃墟だけが残っている。

元町民C、それでもあくまで一般市民

こんにちは、町民Cです！

神子じゃないかって？

それで呼ぶなよ！

泣くよ！

お仕事のときはそれで諦めてるんだけど、普段は本当にその名前で呼ばれたら涙と鼻水でべちょべちょになってやる！　乙女とかをかなぐり捨てているけどな！

……失礼しました。いささか取り乱しましたオホホオホ。はあ。最近、ノーブルすぎるものと触れ合いすぎた反動で言葉が汚くなっております。高貴アレルギー一歩手前です。

突然ですが、最近とてもある願望がたぎっています！

身の丈に合う生活がしたい！！！！

本当に心の底から庶民だと実感している！

一日は二食でいいです。それにこんなひらっひらな服に金糸で刺繍なんていりませんから！　半透明の布なんて、これは一体なんなの！　どこに引っ掛けて破るか分からない。動きにくい上にびくびくしながら歩いてますよ！

私は遠い目をしながら、窓から見える景色をぼんやり眺めています。

今日もいい天気だ。紅茶が旨い。窓の外には綺麗に剪定（せんてい）された植木が整然と並んでいます。のどかだ……。鳥の声がする。いい朝で

すね！

はい、私、旅立ってなんていません。
まだ絶賛神殿でひきこもり中ですよ。

主神殿で枝を貰ったあと、勇者様達と出てきた私を迎えたのは、歓迎パーティとかでした！

枝はとりあえずとても凄いものとかで、持ち歩きは許可されませんでした。樹のところにとりあえず置いてきた。そんな扱いでいいのか。神官様も勇者様も、枝には触れずに妙に遠巻きにするんで、なんか私には分からない変なにおいが出ているのか気になりました。く、臭くないよ！　とりあえず、星櫃（せいひつ）とやらのバスタブの横に寝かせて置きました。枯れないよね！　大丈夫だよね！　枯れたらこっそり燃やそうか……。証拠隠滅ですよ。

お城でパーティと聞いて、まず、関係ないと思っていました。出席すら想定外。

パーティーかあ、誰の歓迎だろう。美味しいもののおこぼれがあればいいけど、なんて考えていたこともありました。

まさかの主賓ですよ。
えええええ。

姫様お二方と遭遇しただけで、キャパシティーはとっくにオーバーしてました。なのにパーティとか。

無理無理無理！

その時の事をお話できないのは、パーティー中、私の頭が真っ白だったため、ほとんど覚えていないからです！　今でも断片的にし

か思い出せない！

はっ！　ご馳走食べ忘れた！！！　今気付きましたよおお！！

世界の珍味が！

王様やら王妃様やら、セレブマックスレベルの人たちに囲まれ、顔が引きつったまま勇者様や神官様に引きずりまわされたことは微妙に記憶にあります。

覚えがあるのはそれぐらいと、ゴージャスだった、きらきらだった、貴族の名前ってさっぱりおぼえられない、ってぐらいしか思い出に残っていません……。惜しいことをしたなあ。もう一生縁が無い（はず）だしね！

とりあえず覚えているのは、パーティが終わったあと、お風呂に放り込まれ、磨かれ、着替えさせられ、気絶するように寝て、何故かマナー講座を受講させられ、怒られ、星語（せいご）を勉強させられ、怒られ、転寝をして怒られ、ごはん食べて、勉強し怒られていたら一週間たちました！

あれ？　何でいつの間に一週間経ってるのっ？　そして大体怒られている記憶ばかりだ。何故だ。

はい、そこの君！　なんかおかしいよねこれって！　急いでるとか神官様は仰ってたような気がするんだけど、どっかから沸いて出た御付の人たち一団に拉致されて現状に至ります！　私って拉致されやすい人間なんでしょうかっ。

神官様は申し訳無さそうに少し危険な場所に行くから、と私と別行動をするとおっしゃいました。勇者様は相変わらずです。無表情の置物と化していました。

神殿にやってきた時のあの庭から、お二人と陸馬（うま）は旅立って行き

ました。陸馬さん、あなたに会いたかった……。

で、置いていかれた私は、よくわからないまま、客人なのか教育されているのか謎の扱いを受けています。この妙に高級な部屋、そして着替え、食費もろもろおよびマナーとかの講座代は、必要経費ですよね！　私、払えませんよ！

マナー講座とか、凄くぎらりと光った眼鏡をかけた中年の女性が私のことを睨むんですよ。そしてわざとらしくため息をついたりします。

ですよねー、マナーとか、なってませんよねーあっはっは。だって町民だもの！　宮廷作法なんて知ってる方がおかしいよ！　そのあたりは開き直ってる。ストレス感じてもいいこと無いよ！　嫌なこと忘れて開き直ります。これ私の長所。でも、授業の内容も結構忘れちゃう。これは短所。自称鳥頭ですから。

人間順応力は意外と高いよ！　キラキラしている建物に怯えなくなりました。指紋つけないかって銀製品持つたびにびくびくするのは変わりないけれど。

主神殿は馬鹿でかいドーナツ状の建物だそうです。ちょっとバカにされた感じで教えてくれました。お、怒らないぞ……なぜなら、物を知らないのは事実だからだ！　ここ、胸を張るところですよ！

とにかく、神殿の話にもどると、あの樹をぐるっとか込むように広がる建物だから丸を二つ重ねたみたいな形だそうです。あれだけ大きな樹をかこむって、どうやって建造したんだ。そしてやろうと思ったひとって、一体なにを考えていたんだ。人間って、意外とミラクルです。

で、その南に城があるそう。私が住んでいるのは北側の棟だそうだから、城は樹の根っこで見えません！　根っこが見えるんですよー見上げたら。でも、普通の人は、葉が無い枝が広がっていると勘違いしているらしい。ちっちっち。みんなの想像よりも世界は不思

議で一杯でしたよ！
ちょっとお得感があります。

それよりも不思議なのは、毎日来襲する、あれなんです。

それはいつも唐突に訪れる。
次はマナーの時間だったかなーウフフアハハと遠い目になりながら用意をする。といっても身だしなみチェックと教本のおさらいだけれどね！
扉がノックと同時にするっと開いた。その向こうにいるのは、輝くばかりの金の髪と美しい紫の瞳の女性です。後ろに控える人の人数が、彼女の身分をあらわしています。

「おじゃましますわ！」

今日もキタアアアアア。
でもノックと同時に開けるって、どうなんだ！

あー、えっと。華の姫様……、王族って、暇なんですか？
まだ聞けませんが。

元町民C、お姫様とでは会話にならない

華の姫様は、今日も絶賛お元気そうです。
今日は若草色のドレスを纏っていらっしゃいます。織り模様が素敵ですね！　一体何着持ってるんだこのひと。毎日ドレスが違いますよ。毎日一着とか！

ありうる！　王族だし！　偏見じゃないよ。それぐらい財力ありそうですしね！

姫様は事態についていけない私をよそに、とてもご機嫌です。
「神子様、ご機嫌麗しゅう。今日は素敵なお茶菓子をご用意しましたのよ！」
何故か毎日顔を出して、私に一方的に話しかけるのですがどうしたものか。気がついたら私の部屋にわらわらとお姫様の侍女さんたちが入り込んでお茶をセットしていきます。ねえ、どうやってここまでその熱湯を持ってきてるんですか？
姫様は特に私に断りもなく、同じテーブルにつく。この場合のマナーはどうだったっけ？　マナー講座が役に立たないよ！　覚えていないのが原因ですが。
気付けばホカホカの花茶を差し出され、狐色の焼き菓子が並べられてセット完了。侍女さんたちは仕事の素早さが半端じゃないです。何で音もなく動き回れるのこの人たち！　いろいろ置き去りにされた感はあるものの、とりあえずお礼を述べる。
「……ありがとうございます」
どうやら神子？　というのは、キラキラしい名前だというほかに、意外に身分とやらが高いらしい。王女様と普通に同席が可能だそうだ。でも中身は私ですよ。とても残念な仕上がりだと思います。決してロイヤルになりませんよ！

「ウフフ、今日こそは勇者様のお話を聞かせていただきたいのです」
キラキラ、ではなく、ギラギラとした目を輝かせながら、お姫様は私ににじります。テーブルを挟んでいるものの、私は若干引き気味です。

ですが、これは完全に人選を間違えているんでは無いですか！

私と勇者様のふれあいなど、拉致されて、脅されて、荷物持ってもらって、おんぶされたぐらいですよ！　言葉によるコミュニケーションなんて、高度な交流はしていません。あっ、なんだか悲しくなってきた。最近お二人の姿は見てない。

選定とやらのあと、ちょっとここで待っててくださいね、とお二人はどこかへまた出かけられましたしね。その後、連絡もありません。えっ、出かけなくていいの、と困惑したのはたった一週間前なのに、置き去りにされたような寂しさがあるよー無いような。もともとお二人ともそれほど一緒に居なかったのになあ。もしやこれが刷り込み？

というわけで、勇者様情報など私が持っているはずが無いです。そもそも、素性も何もかも知りませんよ！　私は正直に姫様に進言します。

「その……、神官様にお伺いしたほうがいいのでは、ありませんか？」

あのお二人がずっと一緒に居るならば、片割れに聞くほうが確実でしょうよ！

そんな心を込めて、今日も同じセリフを訴えます。

お姫様が飛び込んできた初めの頃は、王族という単語に遠慮して何もいえなかったけど（正直頭がついていかず、口が開いたまま相手していたように思う）、最近はちょっと敬語に気をつけながら喋るようにしているよ！　じゃないとこの姫様押しが強すぎるものですから……あとで予定がずれて痛い目にあうのは私だからっ。

「あの方に？　大体笑顔ではぐらかされて終わりですわ。さあさあ、聞かせていただきますわよ！　勇者様がどなたかをエスコートしてらっしゃったのは、初めて見ましたし」

えすこーと。

ああ、あれか。手を握られたあれですね。姫様の視線を思い出してトリハダたちました。思い出しトリハダですよ。

ええ、あの羞恥プレイのことですね！　覚えがあります……。脳裏に刷り込まれています。

でもあの笑顔装備状態の勇者様ならやってくれそうですよ！　多分ジェントルマンです。多分。いつもの無表情勇者様なら分からないけど。姫様は笑顔しか知らないかもなあ。無表情、本当に怖いです。威圧感しかない。

なので色々推測で物を言ってみる。

「勇者様にお願いすれば、エスコートはしてくださるのでは？」

私の意見はばっさり切り捨てられました。

「いいえ。あの方、滅多にどなたにも触れられませんのよ」

えー。いつの間にそんな設定が？　私、荷物担ぎとか、主に運搬されましたよ。そうだな、運搬のふれあいばかりだな！

「理由がおありらしいんですけれど、なかなかお話してくださらないんですの」

勇者様と楽しいトークって、イコールで結びつかないにも程がある。神官様のスキルを見習わなければいけませんよ姫様！　勇者との会話は、空気を読め！　ですから。

私は、はあと相槌を打ちながら、花茶を飲む。初めの頃、お茶が何で花の味がするのか、甘いのか混乱したけど、今は普通に味わえる。今日の花茶も旨い。言葉遣い訂正します、美味しくってよ、かな。心の中だけでの感想だけどね！

どちらにせよ、毎日姫様はこんな感じで唐突に私の部屋に飛び込

み、小一時間勇者トークをして、満足したらお帰りになる。だから、何でここにくるんだ。話し相手なら他に一杯居るんじゃないですか、侍女さんとか。お付きの人とか、妹様とか。あ、最後は止めた方がいいか……。嫌味の応酬で部下の人の心臓が止まりそうになるからね！

しかし私はここで閃いた！　毎日ここに来る理由！　それは、勇者様はわたくしのもの！　という無言の圧力じゃないですか？　そうでしょう！

恋はガチバトル、まさに乙女の戦ですね、分かります。意外と恋愛小説的な行動をとられているのか。初めて生で見ましたよ！　これが乙女というものか。

感心してしげしげみていたところ、

「神子様、なにを考えていらっしゃるの？」

と、例の笑顔で問いかけられましたあああああああ。考えを読まれては無いと思うけれど不穏な気配を感じたようです。黒いですよ、姫様！

姫様がなおも言い募ろうとした時、ほとほとと、扉がノックされました。姫様は口をつぐみ、妙に笑みを深くされます。怖いって。不穏な気配を感じながら一応返事する。部屋の主は一応、私らしいので……。

「失礼いたします」

扉を開けたのは、めがね女史！　マナーの先生ですよ！　先生は相変わらず無駄の無い格好をしていらっしゃる。きつく束ねられた髪、ぎらりと光るめがね、抑え目の化粧、地味目の服装！　どれをとっても教師の服装です。初めてお会いした時、ここまで教師っぽいひとも人生初体験だと感心したね！

「神子様、マナーの授業時間でございます」

笑顔なのに冷たい！　吹雪の中に居るようですよ！　あえて姫様

に声をかけずに私に声を掛ける。部屋の主が私だしね！　私が姫様においとまを告げれば、この乙女お茶会は終了するのだろう。でも、姫様の眼光が密かに怖いです！　何でこう、睨み合っているの！

「神殿の方々は、神子様の自由を束縛することは出来ないのではなくて？」

姫様は懐から取り出した扇に口元を隠しつつ、さらりという。ひとりごとっぽく。でもそれは確実に私とめがね女史に仰っているですよ。

「姫殿下に直言をお許しいただけますか？」

めがね女史は侍女にわざわざ取り次ぐ。目の前に居るのに。こういう辺りが、王族って不思議！　なところですよ。聞こえるのにね。侍女さんがわざわざ姫様にそれを伝え、姫様が、

「許す」

と仰った。ここで二人の視線が交わったああ！！　どう見ても火花が飛んでますよ！

カーン。

戦闘開始の合図が私の頭の中だけで響いた。先攻、めがね女史！

「私どもは、大神官様より神子様を託された義務がございます。授業の時間は開けていただけますよう、伏してお願い申し上げます」

どうやらめがね女史は神殿の人だったらしい。うん、私語なんてして無いから、一週間もいるのにさっぱりどこの誰だか分かりませんよ！

後攻、姫殿下！

「あら、睨下は神子様をお願いします、と仰ったのでしょう？　それはあなた方の思想を押し付けるような教育の時間ではなく、ゆっ

たりとした休息を指していたのではなくて？」

フフフ、と笑いながら姫様。えーと、私の勉強時間を減らす話ですか？　とりあえず、大神官様が関わっているらしい。凄い大物ですね！　まだ噂でしか聞いたことが無い人です。

「市井より見出された神子様におかれましては、星学を一通り修めることにより、より深い教養と造詣を身につけられるかと」

「それはあなた方の判断です。この件は大神官様直々にお言葉を賜るまで、わたくしは聞き入れませんわ。ねえ、神子様？」

こっちにふるなあああ！！！！！

せっかく置物の振りをしていたのに！　めがね女史も何も無い風を装っていますが、怒りのオーラがビンビン出ていますよ！　こわーいーー。

何で二人とも私をみるのか。

そして二人ともなんで、こいつを追い出せオーラを出すのかな！

とりあえず、私、ひっそりと息でもして時間潰していますから、関わらないでください。

なんだか嫁姑問題に悩む夫の気分がよく分かったっ。

どっちも、出て行ってほしいんだけどな……。

元町民C、おむかえがくる

気まずすぎる空気の中、とりあえず冷えてきたお茶を口に含む。

喉がカラッカラですよ！

この空気で緊張しないとか、そんな気力と根性があったら、私ここに居ないと思います！

いろいろ流されるままに神子就任だもんね……。ちょっと、深く考えるように反省しようと考えています。考えるだけで、実行できて無いけどね！

とりあえず私がノーリアクションなため、お二人はにらみ合いに突入しました。どっちの肩を持っても大変なことになる気がするんだ！

お姫様の肩を持つと、マナーの先生とか、あと神殿の人とかともめそうな気がする。生活は大体神殿の人が面倒を見てくださっています。その人たちとこれ以上関係悪化させたくないんだ。今でもぽっと出の神子だから微妙にみんなよそよそしいしね！

神殿の人の味方をしたらしたで、お城の人たちと話したときにあの毒攻撃が来る気がする。あの毒を受け止めきれる自信はゼロよ！嫌味の応酬なんて出来そうに無いから、受け止めるしかないけど、怖すぎます！

分かってるんですよ。どっちつかずって、正直、かーなーり感じ悪いじゃないですか！　でもそうしなければならない時も在る……やっと理解しました。斜め向かいに住んでいた、鍛冶屋のおっちゃ

んの気持ちが分かるよ！　何で奥さんとお母さんの間で真っ青になってるだけなんだ、止めたらいいのに、なんてちょっと厳しい見方してた。けど、理解したよ！　こういったときどっち止めても自分が大ダメージだってことに！　おっちゃんゴメンね！　嫁姑問題って、ちょっとやそっとで解決できる問題じゃないんだね！　私もちょっと大人になった！

えーえー、事態が硬直しそうになっています。どうにかならないかなー。私も硬直しすぎで体が痛くなってきました。

その時、ぶわっとトリハダがたちました。

何のトリハダだろう！　思い出しトリハダか！　緊張しすぎで鳥肌って……立つんだね！　と思ったら、今度は空気が揺れた気がする。気のせいかな？

あー、風でも吹いたのかなーと思ってきょろきょろしたら、

「どうかなさいましたの？」

思いっきり不審そうな顔をした姫様と目が合いました。そんな、そよ風を探していたなんて、言えないよね！　乙女過ぎるよね！

「いえ、少し」

周囲の人たちが急に動き出した私に視線を集中させています。

やめて！

見られたら減ります！

私の体力とかが磨耗するよ！　まあ、確かにあのにらみ合いの中、置物だった私がいきなり動き出したのにビックリする気持ちは分かります。勇者様が大体そんな感じだし。あのひと、静かなのにいきなり喋りだすから本気で怖い。

注目に身じろぎした瞬間、廊下ではっきりとざわめきが広がるの

が聞こえた。
なんだろう？
扉がノック無しにばたーんと勢いよく開きました。
勇者様だった。いつも通り無表情なんですが、迫力が違った。
蒼い鎧がほこりと血のような汚れでかなりくすんでいる。頬には細かい傷があり、黒い髪も乱れていた。戦地に居ましたね、その、殺気というか何と言うかそういった怖い気配がダダモレですよ！
蒼い瞳が文字通り鋭く私を見つけると、
「すぐに出る」
と端的に状況を説明されました。用意をするんですね、分かりました！
がたがたとマナーそっちのけで私が立ち上がると、お世話係の人が近寄ってきて、御召しかえはいかがなさいますか？　と優雅に聞いてきた。いつも食事の用意とかしてくれるお姉さんです。姫様がいらっしゃったので、部屋の隅で待機していたようです。お気遣い、すみませんね。
ですが、それを勇者様は言葉でばっさりと切り捨てました。
「時間が無い」
勇者様は無表情を崩していません。婉曲（えんきょく）な表現をしてくださいよ！　そして人の話は聞いたほうがいいですよ、勇者様！　お世話係の人が本気で怯えています。震えながら謝罪をしていますよ。勇者様はこう見えても怒ってませんよ！（多分）このお姉さんも私に気を使ってくれたのにな。この場合、どっちが悪いっていうのでも無いけど、申し訳ない気になって、
「大丈夫ですよ」
とその人の肩に触れてみた。ありがとうございます、とお世話係のお姉さんは本気で泣き出してしまいました。そ、その、どうしろと。

とりあえず同僚と思われる人にお願いし、私は準備をすることにした。

勇者様の目がまじこわいからです。

お姉さんは泣いてたりするし勇者様は傷だらけだしで、凄い修羅場な気もするんだけど、とりあえず部屋のすみっこに置いてあった荷物の袋を掴みます。一週間前から荷解きせずに放置していました。食べ物とか、腐るものはちゃんとのけているから大丈夫だよ。

着替える時間が無いといわれたけど、このひらひらゴージャスな服、汚したらどうするんですかあああああああ！　こんな高級布地、弁償できないよ！　私がもだえている時間もないんだろうな。うん、汚して、洗って駄目だったら、神官様や勇者様に弁償してもらえばいいよね！　生活手当てに入っているはず！　外套でとりあえず防げればいい。

よーし外套も羽織って準備完了！

私が荷物を持ち上げていると、姫様が恐る恐る勇者様に声を掛けられました。

「勇者様」

表情を取り繕っていない勇者様に、流石の姫様も引き気味です。ですよねー。このバージョンの勇者様って、正直怖いですよねー。分かります！　勇者様は姫様に向き直って、優雅に一礼した。マナー教師のめがね女史が目指してたのって、ああいう礼だったのだろうね！　私には無理です。

「姫殿下、申し訳ございません。魔物の群れを殲滅（せんめつ）はしたのですが、浄化が不完全で、今は何とか結界で防いでいる状態です。一刻も早く神子による浄化を行わなければ危険ですので、無礼を御寛恕（ごかんじょ）下さい」

礼儀正しく、でもいつもと大違いな無表情で勇者様は口上を述べている。一番に姫様に気付くかと思ったけど、今ご挨拶ということは、実は目に入っていなかったのかも。焦っているのは分かるけど、かなり大変な状況なんじゃありませんかああ！　とりあえず、魔物

がいる場所に行くのでは無いこと分かったけどね！　姫様の疑問がなかったら、説明してくれなかったんでは無いですか。その当たりどうなんですか勇者様。

姫様は、とりあえずは、

「そういう事態なら、仕方ありませんわ」

と仰った。それに礼を述べ、勇者様はくるりと私に向き直る。勇者様に近づくと、勇者様は私の足元を見ながら渋い顔だった。な、なんでございましょうか！

「走れるか？　枝が必要だ。取りに行く」

ああ、あのなんかの匂いが出ている（推測）枝ですね！　分かりました。私は力強く頷いた。

ひらひらの服に華奢な靴だけど、意外と走りやすいし歩きやすいんだよ！　職人様の魂を感じます。これが高級な衣装ってヤツか！

まあ、中身は釣り合っていない残念な私ですが。枝、意外と担ぎ上げるの面倒だなあ。服に引っかからないように気をつけよう。

「枝、……星原樹の枝を？！」

姫様が真っ青になって叫ばれました。ええー、姫様もその反応ですか。あの枝、かなり嫌われているんですね……。私にはさっぱり分からない嫌う要素があるはずなんだ。今日取りに行ったら、もう一度匂ってみよう。あれを持ってるからって、私も一緒に嫌われたくないし。

勇者様は姫様を無視できなかったのか、返答をしました。

「選定の際に神子が樹から譲り受けました。現在はセイヒツの間にあります」

姫様は目を見開いて、震えながら、

「神子様は……枝に触れられても、大丈夫でいらっしゃるの？」

と仰いました。

えー。なんですか！　その化け物を見るような目は！　それは姫

様だけじゃなくて、部屋の人全員からの目線ですよ！　ガン見どころの話じゃないよ！　だから見るなって。減るよ！　私の何かが！

……こう、聞かれたら、他の人にあの枝がどう見えるのかがかなり心配です。

「綺麗だけど、普通の枝ですよ」

私がどん引きしながら言った台詞は、どうやら何かを外したようです。皆さんの目線が強くなたあああああ！　なんだかとっても、溝が開いた雰囲気がするよ！　だって、本当のことじゃないですか！

「時間がありませんので、これで」

勇者様が颯爽と立ち去ります。私も慌てて姫様や御付の人たちに礼をして、

「お茶、ご馳走様でした」

と言って、少し悩んだ。行ってきます、というのもおかしいよね。ここは私の家じゃないし。だから気になっていたことを付け加えた。

「服は汚れたら洗濯して返しますね！」

汚しすぎたらゴメンだけどね！　その時は、神官様、頼りにしています！

私は長いスカートの前を掴み、勇者様の後姿を追って走り出したのだった。

◆姫君、今後のことを考える（前書き）

華の姫様視点です。

◆姫君、今後のことを考える

勇者様と神子が出て行った扉は、閉められることがなく中途半端に開いていた。現状の中途半端さを示すかのようだった。話題の中心人物がいないことには、事態は何の進展もしない。

神子はある意味常識の範囲からはみ出す少女だ。私にとっても触れ合ったことの無いタイプだった。

何故洗濯の心配をするのか、私には理解できない。彼女の服は神殿が彼女のために用意したものであり、それを汚したところで誰も何も言えないであろうに。

恐らく本人の中に於いて、現在置かれた立場に付随する権力と、等身大の自分の一致がなされていないのであろうと推察できる。だからこそ丸め込めるかと判断したわけだが、時期が悪かったようだった。

勇者様が怪我をするほどの戦闘、あの方が浄化できかねるほどの瘴気があるとは。

お二人が危険な地域に行くと仰っていたが、あそこまでとは思わなかった。

勇者様は、彼が神に選定された直後、この都を襲った一万とも二万とも言われている魔物の群れを撃退している。激戦は先頭に勇者様を据えた騎士団と魔物の群れの間で三日間行われ、星都の空は戦の炎で赤く染まった。

幸いにも魔物の群れは統率されていなかった。さらに、魔物の嫌う天上の青い石が都市を囲う高い壁に使用されていたことが勝敗の分け目だった。

大きな被害をこうむることなく、人間たちは生き残り、勝利した。

街道を埋める魔物の群れを殲滅など、本当のことかと他国のもの

はまず疑う。街には殆ど被害が無いではないか、と。

だがこれを誇張した話だと言うものは、星都にはいない。あの日、街道を埋め尽くす黒々とした絶望という名の魔物の群れを、遠目ながら私も見ている。都の民も例外では無い。あの群れを駆逐（くちく）したことは、神と勇者様の威光に恐れと畏敬（いけい）を深く抱くことになった。この都のものは、誰しも勇者様の行く手を遮ることなどせず、協力を惜しまないのだ。深蒼（あお）の勇者様は、まさに生きる伝説でもある。

彼の戦闘能力は、対魔物に特化している。それは魔物に苦しめられている他の国にとっては、喉から手が出るほどほしい力だ。実際、彼らにはどの国からも熱い勧誘や懐柔は止む間がないそうだ。一応は生国であるわが国に属してはいる。しかし、それは彼らが決めることであって、私たちに関与できることではないのだ。できれば、婚約や婚姻といった手段でより強固に勇者様を繋ぎ止めたいとは考えているものの、全く手応えは感じられない。いつも勇者様は微笑んでいるものの、その奥の感情を揺るがせる事はない。先程の雰囲気には流石に驚き呑まれかけたが、先程の様子に神子は驚いてはいなかった。あれも勇者様の一面なのだろう。

どちらにせよ、神子様も勇者様も旅立ち、この部屋には用はなくなった。

私はこの後の予定を考える。

もともとここに居るのは歴史学の授業を抜け出したからだ。あの教師は隣国の息が掛かっており、わが国の歴史に批判的なのがいただけない。それほど馴れ合うべき人物ではないと判断している。授業を抜け出したことに関しては姫のわがままだと思うだけであろう。そう思われるように、軽率に振舞ってもいるのだから。

花茶はぬるくなっていた。
カップを持ち上げると、侍女の一人が意図を察し、新しいそれと取り替える。
結局神子の言質は貰えず、彼女の扱いに関しては宙に浮いたままである。神殿に与(くみ)するのか、はたまた我らの利となってくれるのか。
「時間は……ありますわね」
喉を花茶で潤し、神殿の女神官をちらりと見やる。
マナー講師を任されている女は、神殿のものに多い思い上がりが鼻に付く。
この国はもともと神殿と王室の対立が、歴史上でもしばしば起こっている。考えてみれば当たり前のことだ。大きな人間の集団がある、それの頂点に立つのはどちらだ、と言う話であるのだから。一応、手を携(たずさ)えると言う形をとっているものの、神殿はこの国自体を神殿のものとしたがり、王室は神殿に対して神を祭るのであればそれで満足して政(まつりごと)に手を出すなと考えている。永遠に平行線でしかない。
これ以上、あの女にも話をすることも無い。私はカップを置いて言葉を発する。
「神子様もお出かけになられましたし。わたくしも帰りますわ」
自分の考えを声に出すことで、周りの人間が動く。意志を示すのも王族の仕事である。下々のものが動くためのきっかけを与えなければならない。私の言葉で周囲の人間が動く。茶器を片付け、私の椅子の背を引き、護衛と先導をする。
そのあたり、あの神子は圧倒的に言葉が足りないのだ。いつものんびりと笑っており、周囲のものに軽んじられても気付かないのか、気付いて無視をしているのか分からないが気にしていないようだった。
与えられたものに戦々恐々とする姿は、哀れさを通り越して好感を覚えた。貴族の中には責務を果たさず、豪華な生活を享受(きょうじゅ)することを当然と思っているものもいる。

それらより、自分がしたことに対して得た対価で無い生活に慣れようとしない神子は、まだよいほうであろう。彼女は恐らく気付いているのだろう。責務と対価はつりあうべきであることに。彼女の実績は全く無いのだ。本来ならば歓待されるいわれはない。あの歓待は、期待が形をかえただけなのだから。神子の態度は私にとって好ましい。権力闘争を目の当たりにし、明らかに関わりたくないという態度をとっていることも簡単に見て取れて、それはそれでほほえましいのだ。権力を握ったと勘違いし傲慢（ごうまん）な態度をとるよりはるかに可愛らしい。

廊下に出たところで、再び私は口を開く。

「部屋には帰りません。中庭の花が咲いておりましたわね。そちらへ向かいます」

部屋に帰ったところで、歴史学者がまだ居たならば面倒な事態が発生するはずだ。あえてその選択を取らず、中庭に向かう。星原樹を囲む壁は、天高くそびえ、視界を常に片側から遮る。

この国は星原樹を囲む神殿の外側に広がっている。

星原樹を守るためだと言うが、王族や神殿の上層部はそうではないことを身に染みて知っている。

星原樹を守るのではない。

人を、星原樹から守るための壁であるのだ。

あの壮大な神授（しんじゅ）の樹は有史以来七千年間、あの場所に佇んでいる。

神気を纏うあの樹木は、それゆえに神の力にそぐわないものを一切近づけない。

近づけるという事実、それはすなわち既に星神により特殊な選定を行われたものだという証左となる。

あの強大な力と象徴を、我が物としようとした王や権力者は歴史

上存在したらしい。分かりやすい権力が形をとったものだと勘違いしたのか。

しかし、そういったものにはかならず神罰が下る。彼らは樹に近づこうにも近づけない。それを押して樹に触れようにも、触れるだけでことごとく狂ったのだと言う。

睨下（だいしんかん）の口を通して星神が仰ることには、人間の手に余る力を秘めた樹木であるから、だそうだ。触れるだけで大きな力が流れ込んでくるらしい。自分の精神より広く広大なものを、どうして受け入れられようか。小さなスプーンで、海を掬うようなものだ。

歴史から人は学ばないものだ。最近発生したことも、結局は神の威光を自らの権力としようとした例でもある。彼も違わず、破滅の道を辿った。

星神官と名乗り、勇者様達の旅に同行しようとした従兄弟殿は、平たく言っても俗物であった。

王位継承権六位という中途半端な立場が、彼を野心に駆り立てたのだろう。そしてそんな彼に、王族につなぎを持ちたい神殿の一派が、星神官、というよくわからない役職をつけ、権力を持たせ、勇者一行にねじ込んだ。

彼は浄化のためにと持たされた星原樹の葉の欠片を持ち歩くだけの役目だった。旅の間は食事や休憩場所に盛大に文句をつけていたそうだ。その我侭ぶりは私も身近で見たことがある。聞いただけでも目に浮かぶようであった。同行させられた近衛騎士団からの評判はすこぶる悪く、勇者様たちの心がわが国から離れないことだけが本当に心配されていた。

報告が様子を変えたのは二週間後だった。星神官が気力をなくし常にぼんやりとしている、と。

お二人が一旦星都へ戻ってきた時には、何もかも洗い流されてぼんやりするだけの生きた人形がそこに居た。もともと同行を申し出たのは彼だ。勇者様たちは何度も止めようとした。しかし、結果はこれだった。

星原樹の葉にしても、直接身につけていたのではない。結界の韻律を幾重にも刻み込んだ天上の青い石で作られた護符に包み込み、首から提げていただけだ。

しかも、小指の爪ほどの葉の欠片だけなのに。

神とは無慈悲なものだ、と私は思った。神はもしかすると、役に立たないものは容赦なく切り捨てられるのだろうか、とも。従兄弟殿は哀れな姿になったが、それは本人の欲望による結果である。それが分かっているにも拘らず、畏れのあまり救国の主である勇者様たちを忌避する動きがあったのは、人間の弱さだろう。

長い回廊を抜け、整備された庭に出る。護衛騎士たちの先導に従い、今が盛りの花を眺める。麗しい幾重にも花弁が重なっている花が、日の光の下で咲き誇っている。この花は美しさと裏腹に、鋭い棘を葉や茎に持つ。手を伸ばし折り取ろうとする人間の愚かさに気付いているかのようだ。

勇者様は人に滅多にふれる事はない。

私の勝手な推測でしかないが、彼はこの花や星原樹と似たような存在なのでは無いだろうか。

触れるだけで力を流し込んでしまうのではないか。これは憶測でしかない。

しかし、あの神子に関してはためらいが無いということは、その

推測を裏付ける。
神子はあの枝に普通に触れれると言う。触れるだけで破滅をする星原樹の枝を持てるとは、想像を絶する。ただの綺麗な枝、と言い切る神子の感性もいかがなものか。
勇者様に触れることが出来ないならば、このまま婚姻により勇者様を国につなぎとめることが出来ないかもしれない。そうなれば別の手を考えなければ。どちらにせよ、今は一介の神官として付き添っているあの方は、ここに戻ってこなくてはならない。まだまだ接触の機会はあるはずだ。
策謀は、王族に生まれたものとしてのたしなみである。
正直、心が躍って仕方が無い。

口元を扇で隠しながら、私は楽しみで口元が緩むのを抑え切れなかった。

◆姫君、今後のことを考える（後書き）

誤字、文章を整えました。

元町民C、枝を持っていく

こんにちは！　臨時雇い神子をやってる町民Cです！　このあたりで妥協しました。職業欄は、一応神子と書くことに、自分で折り合いをつけました。

今は、死にかけています。

ぜ、全力ダッシュというものが、こんなに苦しかったのって、覚えてなかった！

神殿の廊下を疾走とか。廊下は、走ってはいけません……！　マナーの授業で学んだけど、早速破ってますよ！　やわらか絨毯のおかげで走りやすいよ！　やったね！　絨毯痛みそうだけどさ！

だんだん廊下が見覚えのある場所に差し掛かる。

天井の絵が、始原（しろ）の勇者様のあたりになった。息をするのも苦しいです！

そういえば一緒に走っている人が基礎体力セレブ（私命名）だったのを忘れてましたあああ！　ちょっと休憩とかありえませんよね、そうですよね！

ぜーはーと荒い息をしながら、何とかついていっています。はぐれたら、しゃれになりません。　こんな荒い息だと、不審者だと言われても仕方ないぜーはー。汗だらだらの口開けて死に掛けている表情、誰にも見られないのが不幸中の幸いですね！　こんな顔見られたら、お嫁にいけません。だから勇者様は振り返ってはいけないよ！　乙女の尊厳守ってね！　目の前の背中に念じておく。

徐々に天井の絵が移り変わり、だんだんあの馬鹿でかい扉が見えてきました。

あれ、そういえば神官様いらっしゃらないのに、あの扉を開くのはどうするんだろう？

あの重そうな石っぽいものでできた扉を押して入るとか、それとも合言葉とかあるんだろうか。大事な部屋っぽいし、鍵も掛かってるよね。

そのとき、勇者様が一言だけ呟きました。

「Ｈｘｘｔｘｘｎ　ｓ＊ｙ０／（破綻（はたん）せよ）」

わあん、と空気が震えた。

小さな声だけれども、確実に耳に届いた。

凄いトリハダがたったあああああ！

走ってて暑いのにトリハダとか！　自分で自分が気持ち悪い！

そして目の前の光景を見て、トリハダどころじゃないことに気付きました。おもわずあんぐりと口が開きますよ。

扉が、さらさらと崩れていきます。

実は光の粒で出来ていたんだよ、と言われたら納得できるような崩れっぷりです！！！　端っこから空気に溶けて崩れていきます。

扉の向こうには星原樹がそびえ、青空が広がっています。

え、ちょっと、扉、無くなったんですけど。

しかもなにをしたとかではなく、ただ勇者様が呟いただけで、巨大な石っぽい扉が消えたんですが。勇者様、実は武器要らずなのか！！

それはそうと、扉、壊していいんですか勇者様！

これ、絶対高いというか、補修簡単じゃないでしょう！！

「大丈夫だ」

心の声を読まれたのか、勇者様は走りながら普通に喋ります。聞こえるのも不思議だけど、この人の息が乱れてない方が不思議ですよ！　分けて！　その体力分けて！

「この扉は自己修復の韻律が組み込まれている。そのうち勝手に直る」

へー便利なんですね。

というか！　ヤッパリ壊したってさらっと認めましたね勇者様！　なにをどうしたのか分からないけど、公共のもの（なのかなあ？）は壊しちゃまずいですよ！　ツッコミたい！　そして常識を説きたい！

しかしそんなツッコミをしている体力など、私には無い！

肩で息をするのが精一杯、バスタブ、もとい星櫃（せいひつ）にたどり着いたときなんて、もう瀕死状態でした……。

そうだ、この一週間、ろくに運動もしていなかったんだよなあ。食べては授業、食べては授業でうたた寝……はっ。ちょっと前に頑張ったダイエット、あれのお肉の量、私取り戻しているかもしれない！　この、ゆったりドレスもどきが悪いんだ！　どれだけ太ったかが分からないっ。でもいいんだ、今走ったことで、ちょっとでも痩せれるような気がするから……。お肉との戦いは、乙女の永遠の課題ですよ。

私はそんなことを考えながら、星櫃の横においていた枝を手に取りました。

相変わらず軽い。

そしてみずみずしい。枯れちゃってたら証拠隠滅で燃やそうかと思ってたけど、必要は無いようだ。うむ。肩に担ぐしかないけれど、正直間抜けな格好です。本当に荷物運びだね！　これに荷物の袋を

吊ったらどうだろう？　持ちやすいかなあ？　ちょっと旅人っぽくないですか？　枝に荷物ぶら下げるのって。でも葉が落ちちゃうかな。結構わさわさ茂っている枝だし。

枝を揺らしたら、薄い硝子か鱗がすれるような、シャラシャラという音がする。お、意外といい音です。癒しアイテムになりそう。見た目綺麗だし。

しげしげと枝を眺めて、ふと思い出した。

そういや、勇者様も神官様もこれを遠巻きにしていたけど、結局原因はなんだったんだろう？　やっぱりニオイ？

むむ。これ、臭いんだろうか？

ぼふ、と葉っぱが密集しているところに顔を埋めると、ふんわりと優しい香りがした。お日様の匂いだあ。ほんわりする。私には匂わず、他の人にだけ臭い匂いなんだろうか。臭い枝なんて、誰も持ちたくないよね。分かります。ですが、生活のためです！　どんな臭い枝でも持ちましょうとも！

「持ったか？」

勇者様は、私の奇行をじっと見詰めていらっしゃったようです。え、声を掛けて。もっと早く、声を掛けて！　恥ずかしいです！思いっきり匂っていたのがばれた！　恥ずかしさに身もだえする！

私は勇気を出して、どうしても気になって仕方が無いことを聞くことにした。聞くは一時の恥ですよ！

「この枝って、臭いんですか？」

「なにを言っているんだ？」

会話が通じないようです。

元町民C、やっと荷物担ぎをやめてもらう

とりあえず、枝は臭くない。それは分かった！　歩く公害ではないんですね。ちょっとほっとしました。臭いって、本当に我慢できませんからね！

「少し急ぐ」

勇者様の声が少しだけ、固い気がします。お急ぎなんですね！　了解しました。声音だけで分かるって、もしかして無表情マスターに私もなってきたのか！　もっと極めたら勇者様の感情が分かるようになれるかも？

でもちょっと待て、今の言葉に嫌な予感がする。私は勇者様を見上げて先手を打ちました。

「荷物担ぎはいやですよ！　あれ、地味に肩がみぞおちに食い込んで痛いんです」

急ぐということは私に走らせないことで、つまり私を担ぎ上げて持っていくことなんじゃないかと！　名推理ですよ！　そしてこの予測は当たっているはずだ！　乙女の勘がそう囁いています！

私は渾身の力を目線に込めて、勇者様に訴えました。

本当にあれは辛いから止めてくださいよ！

むむむ。

にらめっこはそこまで長く続きませんでした。勇者様は、

「すまなかった」

と謝罪してくださいました！　勝利！　私の勝ちです！！　言えば分かってくれるんですねっ。言葉が通じるんですね！　やったあ！

私が天に拳を突き出して達成感を噛締めていると、そのままひょいと持ち上げられました。

持ち上げられたっ？！

勇者様の左腕に座らされる格好です。正確には、左の肘の辺りに座らせて、手でぐっと腿と膝を押さえて固定しています。え、なにが起こった。

確かに、荷物担ぎは嫌だといいました。

それは汲んでくれたんですねっ！　でも、幾ら小さいほうだといえ、片手で抱きかかえるとは、尋常では無いと思うんですよ！　これって、チビッコにお父さんがよくしている抱っこですよねっ。私と荷物と枝を軽々と持ち上げた状態なのに揺るぎない勇者様。基礎体力セレブのみならず、力持ちだったのか！　さては筋力セレブですね！　脱いだら凄いとか！　どう凄いかは、乙女のたしなみとして口には出せませんがっ。

私が固まっているうちに、勇者様はさっさと踵を返します。思わず揺れに身を硬くして、勇者様の肩に手を置きます。すると、

「落とさない。信じろ」

と言われました。信じますよ！　との心を込めて、首を振ります。信じるも信じないも、私を支えているのは勇者様の腕一本ですからね！　私の命が掛かってますよっ。落とさないでくださいね。

「あと、その枝には俺は触れない。できれば、少し遠ざけて持っていてほしい」

あ、そうなんですね。分かりました。
勇者様に枝が触れないように慎重に肩に担ぎ直す。
揺らした拍子に葉がしゃらりと音を立てます。薄く青み掛かった透明な葉っぱが、複雑に日の光を透かして、ゆらゆらと水面みたいに光を揺らす。癒される。和むなあ。皆さん、何でこの枝嫌うんでしょうね。
この枝を持つだけの楽な仕事で、なんと！　三食おやつ衣料しかも宿屋つきですよ！　ぼろい商売だと思いませんかっ。うまい話には裏がある……裏のおばあちゃんの言葉を胸に刻みながら、一応警戒はしていますが。今のところ、拉致されたのと、恥ずかしい職業名を押し付けられた以外は特に不満はありません。

勇者様は私を抱えたまま、早足から、徐々に疾走に移行していきます。
びゅんびゅんと景色が後ろに流れる流れる。わー速い。私が走ったより速い……。私って鈍足？
凄いな、勇者様まだ息が切れていないよ！　私は大人しくしておいた方がいいだろうと、身動きしないように枝と荷物をぎゅっと抱えて小さくなっています。
だんだん勇者様に抱えられるのに慣れてきた自分がいる。
羞恥心は人並みにありますが、どうも勇者様の抱え方って、動物とか荷物とかに対する抱え方なんですね。だから恥ずかしく感じないんです。実際、あのエスコートもどきのほうが恥ずかしかった！
多分、人間扱いされたから？
ここで、きゃッ！　勇者様に抱えられちゃったッ！　とか、姫様だったらラブモード展開とか、あるんじゃないかな！　あ、姫様と言えば、勇者様が人に触れ合わないとか仰ってたけど、あれは一体なんだったんでしょう。今実際、勇者様の腕の上に座らされていますす……。恋する乙女の罠的な何かですか！！　勇者様は私のものよ

！　といった牽制的な何かですか！

つくづく、勇者様は本当に謎の人だよね。

結局この人たちのことは、漠然とした業績しか知らない。どんな道を歩いて、こうなったのかは分からないし。人に歴史有りってね！　誰しも、歩んだ道のりの先に今がある。向かいのじいちゃんが言ってました。たまにいい事言うじいちゃんです。

抱え上げられているから、勇者様の顔が私より下にある。見下ろすって新鮮ですね！　いつも頭一つ分高いせいで、見上げてますから……。

改めて勇者様の顔を見下ろすと、痛々しい頬の傷が見えました。治療していないんだろうか。

もしかして、勇者様見えないところに怪我しているとかないのかな？　さっき私と一緒に走ってた、っておかしくない？　その気になれば荷物担ぎで攫うはずなのに、私の横をわざわざ走っているとかありえない。相当急いでいる雰囲気が伝わってくるのに。

「怪我、されてませんか！」

私を抱えて走っているくせに、結構な速度がでています。なので舌を噛まないように一生懸命口を開いたら叫び声になってしまった。うるさくてごめんなさい！

勇者様は前から目を逸らさずに、

「もう治った」

とだけ返答。そうですか、治りましたか……？　うん、謎ですね。怪我ってそんな早く治るものですか？　よく見たら、頬の傷も生々しい傷跡じゃなくなっています。

「じゃあ、もう怪我は無いんですか？　痛くないんですか？」

状況が分からない私はしつこく聞きますよ！　最近しつこさも重要と気付いた！　しつこくきかないと、絶対この人自分から口を開かないよ！

勇者様は私を一瞥（いちべつ）しました。

「……痛くない」

その間はなんですか！　怪我人を無理させちゃいけないと思うんですけど！　私はにわかに焦りだした。血とか出たらどうするんですかあああ！　急な運動危ないですって！　いや、危ないどころじゃないのか？　私は疲れているけど元気ですよ。まだ走れるッ。ダイエットも必要だしね！

「まだ痛いなら、下ろしてくださいね！　自分で走りますよ！」

私のしつこさに、勇者様は根負けしたのか、

「全く痛みは無い。このままでいい」

と言い換えました。全然痛く無いならいいんだ。うん。私はようやく追及の手を緩めました。この人はたぶん嘘をつかない人だと思います。大人しく口をつぐみました。

しばらくすると、前方に見慣れない広場が見えてきました。

ここも見事に人気（ひとけ）がありません。

神殿って、人口密度凄く低いんですか？　セイヒツの間からこっち、全然人を見ません。

この広場も初めて神殿に来た時に良く似た、芝生と壁だけの場所です。何でこんな場所が一杯あるんだろう？　無駄設計じゃないんですか？　庶民は無駄という言葉が嫌いですよ！　無駄遣いとかにあこがれますがっ！　無駄遣いするほどお金はありませんから！　無駄にお菓子とか買いまくって、ごろごろだらだらしてみたい……そんな夢を抱いたことは確かにあるけど！

勇者様は広場に出ましたが、私を下ろす気配がありません。そのまま芝生広場の中央に歩み出ます。青空には、太陽と白い第一の月がぽっかり出てます。いい天気だ。

ここから一体どうするんだろう？

すると、扉のところで謳っていたあの言語が勇者様から流れてきました。

「Ｚｘｘｘｈｙ０ｗｗ－４５８７５２０－　Ｋｘｘｘｒｘｘｘ
Ｚｘｘｘｈｙ０ｗｗ－２４６４５１２－／
（座標４５８７５２１から座標２４６４５１２）」

世界が、息を呑んだような静寂が広がった。

空気が歪み、軋むさまが、見える。ごくりと思わず息を呑みました。超常現象ですよ！　なにが起こるの！

勇者様は今度はなにを壊そうとしているんでしょうね！

芝生広場は自己修復しないと思いますよ！　庭師の人、泣かせるのよくないです。

不思議な韻律のせいでか、トリハダがまた立ちました。

ホント、今日これを立ててばっかりですよ！　何回目のトリハダですか！　これ以上何かあると、私、鳥になります！　ばっさばっさとか飛んでいくよ！　飛ぶのは意識と記憶だけど！　つまり失神です。

とにかく、視界が歪む気持ち悪さもあり、私の緊張は高まる。ぎゅっと枝を握りなおした。

「つかまっていろ」

勇者様が普通の言葉で私に注意します。

その言葉通り、勇者様の肩に手を回し、マントをとりあえず握ります。掌（てのひら）には汗が滲（にじ）んでた。慎重に枝を勇者様から離して準備完了です！

凄くいやな予感がするんだ！

だって、空気がおかしい！

空が歪んで、空気が軋んでるなんて。

勇者様が続きの韻律を謳いあげる。

「Ｋｙ０ｒｖｖｖ　ｗ０　Ａｓｓｙｗｗｋｗｗ／（距離を圧縮）」

耳鳴りがするほどの静寂が広がる。圧倒的な何かの気配がひたひたと押し寄せて、頂点に来た時、勇者様が最後の韻律を口に出す。

「Ｉｄ０ｗｗ．／（移動）」

勇者様の宣言の後に、特大のめまいが来ました！

ぎゃあああ！

神官様の術の感覚に近いけれど、こちらの方は穏やかさじゃない！

凄く無理やりねじ込んだって感じがあります！　もしかして、凄い力技なんじゃないですか！　そこのところどうなんですか勇者様！

とりあえず、意識が遠くなりかけても、枝を離さなかった私を誉めてほしいです！

元町民C、出番が来る？

――ぱちん。

ぴったりと正しい枠に納まったような、世界が元に戻ったような、そんな圧倒的な安堵感とともに私は目を覚ました。

気がついて、まず枝の確認をした。

とりあえず、ぎゅっと握り締めていますよ！　勇者様に触れさせても無いし、落としてもいませんでした！

こわかったよおおおおお！　はい、意識飛びましたとも！

勇者様の力技って半端無い。もしかして、あなた、基本力技の人ですね！　身に染みて理解しました！　うすうす感じていたんですけどね！　今更って言わないでください！

世界の歪みが正常に戻り、大きく深呼吸しようとしたところで、私は思いっきり息を吸うのを躊躇（ためら）いました！　んぐ、と喉で息を止めましたとも！

だって、空気が、ピンクでした！

いや、喩えではなく、ピンクの霧がもやもや漂って視界を遮っています。気持ち悪いです。

それもふわっとしたピンクじゃなくて、どぎつい目に痛いピンクですよ。なんですかこれ。

ピンクの霧がそこかしこに溜まって見通しが悪すぎます。

この空気はどう考えても吸うと体に異常をきたしそうな感じですよ！　吸いすぎて頭の中がピンクに染まる……なんだか卑猥（ひわい）ですね！　乙女の口からはこれ以上何もいえません。

はっとして口と鼻を手で塞ぎます。吸い込んだら危険な気がしますから！

勇者様はそっと私を下ろしました。ありがとうございます。鼻と口を塞ぎながら、ふごふご礼を述べ、きょろきょろと辺りを見回します。

濃いピンクの霧に阻まれて、景色が薄ぼんやりとしか見えません。さっきまでぴかぴかの晴れ空だったよね？　太陽も月も見えません。私、そんな長時間気絶してないよねっ。勇者様にさすがに起こされると思うし。

周囲は昼間のはずなのに、薄曇ぐらいのどんよりした暗さに加え、さらにピンクの霧ですよ。怪しさ爆発です。勇者様、私をどこに連れてきたんですかっ。

「こちらだ」

勇者様は迷うことなく私を先導して歩き出しました。勇者様は口を抑えていない。大丈夫なのかな。深蒼（あお）の勇者様がピンクと混じって、紫の勇者様になったら、目も当てられませんよ！

それにしても、ここ、歩きにくい。勇者様は身軽に歩きますが、足元にはごろごろ石が転がっていて歩くのが難しいです。む。……石じゃないな。これは、瓦礫（がれき）ですね！　レンガとか混じってます。ちょっとこの華奢な靴では、ヒールがはまり込みそうで怖いんですが！　なんとか勇者様についていきます。ピンクの霧って、暖かそうなイメージがあるんですが、この霧はとても冷たいです。背筋がぞくぞくしてきた。

ふと前方から、風が吹いた気がしました。しゃらん、と葉が音を立てます。

小さいながら、神官様の声が聞こえますよ！

勇者様の足が少し速まります。えーと、待ってください！　結構

必死で追いかけるために、この纏わり付く長いスカートの裾がかなり邪魔です。大きくドレスの裾を持ち上げます。膝が見えるけど、いいよね！　非常事態です。一気に走りやすくなりましたよ！

何とか勇者様に追いつくと、神官様が目を閉じて一心不乱に呪文を唱えられていました。神官様の周りには、ピンク色が薄い気がします。と言っても、少しだけだけど。それよりも神官様が大変な状況でした！

「Ｔｊｙ，Ｔｊｙ，Ｔｊｙ，Ｈｓｓｙ，．」

ただでさえ白いお顔が真っ白です！　額には玉のような汗が吹き出て、今にも倒れそうな雰囲気。でも、声を掛けられません。とても鬼気迫る表情で何かを押さえ込もうとしているのが分かる。

「Ｔｊｙ，Ｔｊｙ，Ｔｊｙ，Ｈｓｓｙ，．　Ｋｋ　Ｙｒ　〟Ｈｎｋ　２４５８５〟　Ｎ　Ｈｎｎ　Ｏｔ，Ｔｊｋｍｙ．Ｔｊｙ，Ｔｊｙ，Ｔｊｙ，Ｈｓｓｙ，．……」

同じフレーズが何度も繰り返されると言うことは、ずっと謳ってなければ継続できないほどの星術なんだと思う。

私が息をのんでいると、勇者様がこちらに振り返り、一瞬動きを止めた。私の足元に視線が突き刺さります。

足？

あ、すみません、ひざこぞうまで丸出しでした。走りやすさ優先の結果ですよ！

「足はしまいなさい」

ぎこちなく視線を逸らしながら勇者様が仰いました。何で丁寧語

なんですか。お父さんみたいですよ。すみませんね！　乙女失格ですね！　お見苦しいものを見せました！　裾をばさばさとさばき、足の収納が完了です！　収納が完了したところで、改めて勇者様がこちらを向きました。

「枝で瘴気（しょうき）を浄化してもらう」

この枝ですか？　確かに癒しオーラが出ていると思うんですが、それだけじゃ足りませんよね。どうしたらいいんでしょう？　でも早くしないと神官様の状態が悪化するのがよく分かります。

私も微力ながら考えますよ！　確かに枝はこの不審な霧を寄せ付けていません。うーん、枝を振り回してみるとか？　地面を葉っぱで掃除してみるとか！　うん、ろくなことが思いつきませんね！

「俺と同じ言葉を繰り返して言うこと」

はい！　了解いたしました！

「Ａｒｗｗｂ＊ｋｖｖｖ　Ｍ０ｎ０　ｗ０／（あるべきものを）」

うっ、いきなり難易度高いですよ！

「ア、」

舌を噛みそうになったので、仕切り直しです。ええと、リズムはたん、たん、たたん、ぐらいだから、

「Ａｒｗｗｂ＊ｋｖｖｖ　Ｍ０ｎ０　ｗ０／」

ですね！　うん、言えた！

するともう一文勇者様が口を開きます。

「Ａｒｗｗｂ＊ｋｖｖｖ　Ｓｗｗｇｘｘｘｔｘｘｘ　ｎｖｖｖ．／（あるべき姿に。）」

私もまねをして、

「Ａｒｗｗｂ＊ｋｖｖｖ　Ｓｗｗｇｘｘｘｔｘｘｘ　ｎｖｖｖ．／」

と謳う。

う、な、何も起こりません……よ？　びくびくしながら周囲を見回したその時。

りん、と風が無いのに葉が鈴のような音で鳴った。

ん？　おかしいな、とさすがの私でも気付きます。目の前の枝に目を戻すと、ふわりと葉が光りだしました。えええ、木の葉っぱって、発光するんですか！

その状態の葉に触れたピンク色の怪しい靄（もや）は、青い光の粒子となって空気に溶けました。

目に見える空気洗浄ですよ……！　即効ですね！

ゆったりと靄が意思を持つように渦を巻き、枝を取り囲みます。ええええ、これちょっと大丈夫ですか？

私は思わず枝を地面に突き刺して手を離した。よし絶妙なバランスで立ってますね！

それを確認して、じりじりと後ずさる。だって、濃厚なピンクの変な霧が寄ってくるんですよ！　触りたくないし、正直、怖過ぎるじゃないですか！

一歩離れて立つ勇者様の横にちゃっかりと退避します。ここだったら安心な気がする！

徐々に枝を取り巻く霧の量は多くなり、濃いピンクは渦を巻いて枝を取り囲みます。……違う、枝が靄を吸い込んでるの？　恐るべき吸引力ですよ！　私の横を霧がどんどん流れていきます。風が無いのに渦を巻いた霧が、竜巻のように枝を包み込んだ瞬間！

シャァアアン！

万の鈴が一斉鳴ったような音が響き渡りました。枝から押されるようにして光が弾け、光の波が波紋のように広がっていきます。優しい圧力を持った光が、そよ風のように私たちを撫でて、そのまま空へ還っていく。

そして光に触れた霧が、溶けるように空気に消えていきました。

神官様が同時に、

「Ｊｍｎｗ　Ｓｈｒｙ　Ｓｈｍｓ！」

高らかに呪文の終了を宣言しました。

一気に場を包み込んでいた何かが、泡のようにはじけて消えます。世界が、正常に戻りました。

呆然と見上げた空には、神殿で見たのと同じ、のどかな青空と、太陽、そして第一の月がぽっかりと浮かんでいました。

目の前にはもう光っていない枝が、地面に刺さったまま風に葉を揺らしています。今の不気味な光景は、夢か幻だったような気さえしてきます。

凄い枝だったんですね。枯れたら燃やすとか言ってごめんなさい！

元町民C、おるすばんをする

青空を眺めていて、また開いていた口をぱくんと閉じました。
砂ボコリとかはいりそうだしね！
不意に背後で音がしたから思わずビクッとなる。慌てて振り返ると、神官様が真っ白な顔色のまま座り込んでいました。

「なんとか、なりましたね」

気力が尽きた表情で神官様が仰います。肩で息をしながらですが、晴れやかな表情です。さっきのピンクの霧に包まれてるって、凄い重圧でしたしね！　おつかれさまです。
勇者様がふと何かに気付いたようです。

「陸馬（うま）を連れてくる」

ど、どこに？　勇者様が見ている方向を私も見てみたけど、何も見えない。どれだけ目がいいんですか。

「恐らく危険はないが、念のため枝はそのままにしておいたほうがいい」
「はーい」

私の気の抜けた返事の後、勇者様は軽く土を蹴って、瓦礫の上をひょいひょいと走ります。
あっという間に見えなくなりました。こう、客観的に見たら凄い速度だね！　ホント、さっき落とされなくてよかったです……。それにしても鎧を着て厚着して重装備なのにあれだけの身のこなしとか。筋力セレブ半端ないです。

私はいきなり手持ち無沙汰になりましたよ。何かできること、できること。とりあえず荷物から綺麗な布を出して、神官様に差し出しました。

「ありがとうございます」

ものすごく疲れているだろうに、律儀な人だな。やっぱりこの人は律儀大将だよ……今名前をつけました。

しかし、神官様の気力はそこまでだったようです。

汗を拭きながら、神官様はぐらりと上体を揺らしました。危ない！　とっさに手を伸ばして支えます。私ナイスキャッチ！　意識を飛ばした神官様、意外と重いよ！　着やせですか！　うらやましいですね！

神官様の様子を素人ながら観察します。

顔色は悪いものの、息は……普通です。疲労のあまり意識が飛んだのかな。心配ですけど、私はこれ以上どうも出来ない。分厚いはずの旅装にまで汗が染みています。どれだけの間、ああしていたんだろう。とんでもない精神力だということは、私にでもわかります。

汗だくだけど、このままにしていいのかな。着替えもないから、いきなり脱がしちゃうわけにはいかないなあ。せめて脱がすなら勇者様にお願いします。神子もいやな称号だけど、チカンならぬチジョという称号は痛すぎますしね！

そういえば荷物に水を入れてくるのを忘れました。これは痛い。神官様に飲んでもらうことも額を冷やすとかも出来ません。次は気をつけよう。

他に出来ることはないかな……あっ。

閃きました！　これしかない！

とりあえず簡単に小さな瓦礫をのけて、神官様を横たえました。そのままぺたんと座り込んで頭をふとももに乗せます。私に出来

ることって、人間枕ぐらいですよ！

つまりひざまくらです。

思ったより人間の頭って重いんですね。足がしびれるかも。

でも忍耐！　庶民の雑草力をなめてはいけません。神官様の綺麗な髪の毛が土についたら悲惨なことになりそうなので、スカートの上にまとめてあげておく。よし。あと、神官様が握ったままだった布をそっと取り上げて、額の汗を拭いたあと、畳んで目の上におきました。こうしたら、眩しくないよね！　ゆっくり休んでください。

のどかだなあ……。

もう危険がないと仰った勇者様の言葉を丸呑みにして、油断しまくりですよ！

ぼんやりと空を眺めます。

空には太陽と第一の月がぽっかり浮かんでいます。

樹の枝一つで空気が綺麗に掃除できるなんて、神様って超越してるんだなあ。創星記って、やっぱり本当のことなんだろうな。

星神様っていう呼び方は、まず何よりも星の配置を整えたと言う創星記の伝説によるのだそうです。

空には太陽が一つ、月が三つ、世界にとって主要な星はなんと八千百四十六あるそうですよ。はっせんって！　神殿で受けた星学の授業でどん引きしました。だって、神官様とかこれの周期を全部覚えた上で星術を使われているとかいうんですよ！　同じ人間とは思えません！

以前神官様が転移術を使うために、ガリガリと地面に書いていたものはこの星々の周期表だったそうです。それを利用することによって術を使うときの負担とかが軽くなるとのこと。まあ、全部覚えられない凡人用に『これでカンタン！　絵でおぼえるみんなの星術』と言う教本まであったわけですが。もちろん、お世話になりました

とも！　そう、町民ですが、ちょっと賢くなっているのだ！　一週間の勉強付けのお陰だけどね！　一週間だから、本当にちょっと、なんだけどね……。だんだん自信がなくなってきた。

静かだなあ。枝がたまに風に揺れてさやさやと音を立ててるぐらい。鳥の声とか、何にも聞こえません。

この周りに広がる瓦礫はなんでしょう？

だんだん気になってきた。

街だったっぽい場所みたい。建物の土台かなーと思うものとか、レンガの欠片とかが転がってる。

壊れたばかりな生々しさがないのは、風化が始まっているっぽいから。レンガとかも白くなりかけてるし。凄く昔に壊れた建物みたい。

あと、普通の生活に必要な小物とか、食べ物とかが見当たらないから、壊れたばかりの街ではないことが分かる。じゃないと落ち着いて座ってないよ！　思い出したように雑草も生えてるしね！

それにしても雑草以外の生物の気配がないな。

虫とかいないかな、ときょろきょろ周囲を観察する。ひざまくらと、それぐらいしかすることないんだもん。

む？　横の瓦礫の間に、何か紙の束が挟まれています。

神官様を落とさないように、揺らさないように慎重に手を限界まで伸ばし……むむ、と、届くかな！

よし！　取った！

うわーなんかぼろぼろのノートっぽい紙束でした。めくるだけで崩壊しそう。中身は……昔の文字だ。これ名前かな？　つ……つぁなぁげ？

た、達筆すぎて、私には読めません！　誰かの落し物かも。拾ってよかったのかも謎です。結構汚かった……。

とりあえず、あとで埋め戻しておこう。横に紙の束を置き、ぼんやりと空を眺めます。本格的にすることなくなってきた。勇者様は戻ってこないし、神官様は眠ったままです。

日差しがぽかぽかと、丁度よい感じです。後ろの瓦礫に背中をもたせかけてみる。うん、倒れそうにない。

そうやって脱力していたら、だんだん私も眠くなってきた。欠伸をかみ殺しますよ～。

あー、だんだん瞼（まぶた）が、重くな……。

ちょっとだけ、目を閉じてもいいかなあ。ねむ……。

◆　【５／Ａ０】、【１／Ｓｈｒ】と接触する（前書き）

勇者視点です。

◆【5／A0】、【1／Shr】と接触する

星術単位にして二千は離れた場所に到達しつつある。遠見の術を逆算して割り出した位置は間もなくだろう。

この戦いの最初から最後、そして今もなお、こちらを観察する何かがいる。

知能が発達した魔物と言うものは、未だに発見されていない。しかし、皆無であるとも限らない。発見されていないだけかもしれないのだ。相手の正体が分からない以上、瘴気（しょうき）を抑えるのに全てを使い果たした神官や、戦闘に全く慣れていない神子は連れてくるべきではない。そう判断して、あの場を単独離脱してきた。

対象との遭遇まで、あと三呼吸ほど。

走り続けながら戦闘体制を構築する。

左に佩いた剣の柄に手を添える。この距離に迫っても、相手が何かが視認出来ない。恐らく障壁によるかく乱が仕掛けられているのだろう。

背後に残してきた二人の周囲には、能動的に動くものの気配はまだ感じられない。星原樹の枝による簡易神域が展開したままであるので、生物は本能的に忌避（きひ）するはずだ。

二。

思考でのカウント。右手で抜刀体勢を整え、息を絞る。左手では簡易星術を展開、効果は振動を選択。星語Ｓｖｖｖｎｄ０ｗｗは省略、唱えた場合は術の解放規模が大きすぎ、相手に悟られる可能性がある。

一。

かく乱障壁突破。物理的障壁、なし。
目標視認。ここに至り、フードつきのマントを纏い、ゆったりと立ち尽くしている人影を認識する。フードの陰から見える口元はゆるく笑みを浮かべていた。

接触。
飛び込みと同時に抜刀、銀線と化した剣先が相手の喉元を狙う。だが、それは想定済みだったらしい。展開済みの星術結界に阻まる。剣と術が食い合い、火花が散った。相手の表情に焦りはない。全力の打ち込みと、それに対する結界の斥力により、剣が金属の悲鳴を上げた。右手の力をそのままに、左手で展開していた星術を剣の下に潜り込ませる形で打ち込む。これも結界で阻めると構えていたらしい。
しかし、選択していたのは振動の術だ。結界に直接叩き込めば、恐らく相殺されと判断して、振動を与える対象を変更、結界の手前の空気を振動させ衝撃波と化す。結界ごと相手を吹き飛ばした。数歩吹き飛んだその人物は、そのまま体勢を崩さずこちらへ相対する。

「勇者にしては、結構な挨拶だね」

声音からすると若い男だろう。
笑いを含んだ声音は、あくまでも楽しそうだ。あれだけの衝撃にも拘らず、服装に乱れはない。振動の術も、相手の体勢を僅かに崩しただけだった。もともと距離をとるために仕込んでいた術だ。効果が薄くても仕方がない。
剣を構えなおす。状況によっては、右の剣を使わなければならない。

「こちらを終始観察していた相手には、十分な挨拶だろう」

こちらが気がついていたことを公開し、相手の出方を窺う。

「深蒼（あお）の勇者は気が短いのかな」

芝居がかった仕草で会話が流される。見ていたという事実は認めるのだろうか。

「それにしても、面白いものを見つけたね。星原樹の影響を受けないものは、本当に珍しい」

腕を広げながら言う。会話の影での星術の展開は見受けられない。男の全身を眺め、『ほころび』を探す。あまり目立ったそれはない。苦戦しそうだと分析する。どのような生物にも、必ずある『ほころび』、それはあえて神が創った多様性と可能性の裏返しでもある。おおよその場合、それが弱点に共通する。勇者となってからは、より明確に『ほころび』が見えるようになった。魔物は最も『ほころび』の視認が容易である。魔物ではないのか。人間だった場合、更に厄介なことになる。

勇者は人間の敵ではあってはならないのだから。

目の前の男は、こちらの様子に気を払うことなく自由に話し続ける。楽しそうと言うよりも、皮肉な響きが多く含まれている。

「あそこまで侵食度が高いなら、存在率の九割五分以上は恣意（しい）的に作成されたものだろうね」

あきらかに誰を指しているか分かる言葉であったが、彼女をもの扱いしていることに、疑念が先に立つ。この男はなにでどこまでを知っているのか。

「あの子は人間だ」
「君がそういうのかい？」
こちらの言葉に被せるようにして男が言い放った。
「どうせ『声』も一緒に居るんだから神に聞いているだろう？　その上でもそう言い切れるのかい？」
「俺よりは人らしい」
抱え上げた体は確かにあたたかだった。感情をくるくると顔に出し、動くさまはなんら他と変わりがない。この答えに、男は一瞬押し黙り、笑みが消えた。
「……なあ、深蒼（あお）の。お前は人間が好きか？」
「守るべき対象だ」
「好悪の感情を聞いているんだよ」
「感情論で語るべきではない。義務だ」
この男はなにを聞きたいのだろう。事実そう考えている上に、のがれることの出来ない星神によって与えられた責務である。それを全うする以外に道も、選択肢もない。だが、それに関して感情を持っているかといわれれば、特にないと答えるしかない。
男はこちらをじっと見た上で、次の問いを発する。
「その右腰の剣は何度抜いた？」
「答える義務はない。それよりお前は何者だ」
「僕はただの遺物だよ。これは親切心からの忠告。右の剣はもう抜かない方がいい。君がもっと削り取られることになる」
「そんなことを何故言う」

問いには倍の問いが返ってくる。
これ以上は話さないほうがいいのか。会話で情報を与えかねない。しかし、それよりも知りうるはずがない情報を持っていることに対しての疑念が強い。未抜刀の右の剣の重みが増した気がする。これについて知っているのならば、これは切り札にはならない。密かに抜いたままの剣に対して星術をかける。効果は術の対消滅。星術を構成している韻律に働きかけ、術の効果を崩壊させるもの。男は気付いているのか気付いていないのか、言葉をなおも続ける。
「深蒼（あお）、世界の悲嘆（ひたん）と慟哭（どうこく）を祓（はら）う者。この世は悲鳴と涙で溢れかえり、星原樹も蒼く染まってしまった。それを払拭（ふっしょく）したとして、君の願いと悲しみはどこに往くんだろうね」
「俺の事は関係ない」
「関係あるさ。個の願いと多数の願いと、どちらが上位かなんて決められることじゃない」
この男は一体なにを言いたいのか。
「君はわざと自己から切り離しているようだね。いずれまた会うと思うけれども、その時にまで答えを考えてほしい」
「問いには今、答えたはずだ」
「君が人間が好きかどうか、についてだよ。では、失礼する」
フードの中でまた唇が弧を描き、歪んだ笑いを浮かべる。
揺らいだ術の気配に、男の気配が風に滲んだ。
逃がしてはならない。
判断を下し、男の『ほころび』へ向けて星術を乗せた剣を振り下ろす。予想していたのだろうに、男は避けなかった。剣がたやすく男の体に吸い込まれ、そこが霧となり崩壊した。

男は唇だけで一言、呟いた。
肌にチリッとした感覚が走る。思考より先に剣をそのまま振りぬくことを止め、踏み込んだ足で地を蹴りバックステップで距離をとった。
業火が先程まで男が立っていた場所に湧き上る。炎の星術だった。肌と鎧の表面を、熱と光の余波がなでていく。距離を取っていなければ、炎に巻かれるところであっただろう。炎が消え去った時には、もう何の痕跡もない。恐らく、本体ではなかった。
男が最後に呟いた言葉を思い出す。

哀れだな。

何に対しての言葉かは、漠然としたものであった。
その言葉を認識した瞬間、胸の奥で久しぶりに苛立ちを覚えた。そして、右手に力が入っていたことに気づき、大きく溜息をついた。剣の柄が、握りつぶされていた。どうせ刃が欠けてしまったのだ。打ち直しか、買い替えかをしなければならなかった。だが柄がつぶれたとなれば買い替えが妥当だろう。
思わぬ自分の感情に、力のいれどころを間違う。制御できていると思っていたが、まだ未熟だった。あの程度で揺らぐとは。これだから感情は厄介なのだ。
大きく息を吐き、思考を明瞭にする。
また人里に足を運ばなければならないのか。そう考えるだけで、僅かに気が重くなる。

――人間が好きかい？

男の問いを頭の中で反芻する。
答えは、決まっているじゃないか。
なのに、どうして口に出すことが出来なかったのか。その理由も

分かっているからこそ、あの問いは性質が悪い。

もはや使い物にならなくなった剣を鞘に収め、今度こそ本当に陸馬を連れ戻す為、行き先を変更した。二人の元に戻るまでには、いつも通りに戻らねばならないと考えながら。

元町民C、目が覚める

「寝てたあああああ！」

がばっと起き上がると、勇者様と神官様がびくっとこちらを見ました。

「あ、おはようございます」

うん？　自分で言って、違和感を覚える。

周囲の光が黄昏時だね！　遠くの森に太陽が沈んでいきそうな時刻です。

まさか私あれから爆睡ですか。ちょっとの昼寝がとんでもないことに！

お、お留守番さえ出来ない私！　荷物係、頑張りますね……それしかとりえがないのかっ！

それにしても健やかに眠りましたよ。頭すっきりです！　でも背中痛い。そうか、土の上で寝ていたからね！　ごろ寝だよ。よだれ垂れてなかったか心配になってきた……。

あまりの事態に、呆然とする私に、

「大丈夫か？」

と勇者様が問いかけられます。

大丈夫ですよ！　もしかして、頭の中身を心配していますか？

そっちも、大丈夫ですよ！　全くもって、問題ありません！

もぞもぞ動き出すと、私の体の上から何かが落ちます。あ、マント。このなめらかな手触りは勇者様のですね！　前、拉致された時に感嘆したなめらかマントですよ！　なんというジェントルマン。

足を隠してくれたのかも。しまいなさいって言ってたし。汚れを叩いて、綺麗に畳んでからちょっとはなれたところに座る勇者様に渡しに行く。

「ありがとうございました」

勇者様は軽く頷いただけでマントを受け取りました。
あ、横にお陸馬さんがいらっしゃいます。やっと再会だね陸馬さん！　喜びのままに陸馬さんに抱きついたら、「ポー」と鳴きました。え、これ嫌がっているの？　でも気にせずこの暖かさを味わってやる！　再会記念で許してね。思ったよりふわふわもふもふで、ちょっと幸せです。
そういえば、私より大丈夫じゃない人がいたはずだと言うことを思い出した。
「神官様は、もう大丈夫ですか？」
神官様は、真面目な顔でなんか汚い紙を見ていた。あ、あれは私がさっき瓦礫の間からほじくりかえしたヤツですね！
それ、あまりおすすめできませんよ！
私の言葉に、神官様は紙から顔を上げました。
座る神官様、顔色は見た目は戻ってきているように見えます。でも夕日のせいでちょっと色まで分かりません。みんな顔が赤らんで見えるよ。もともと私よりも白い顔されてますし。う、うらやましくなんか、ないもん。もうちょっとお化粧頑張ればどうにかなりますかね？　一度、華の姫様にいじられましたが。あれも一種の恐怖体験でした。ちょっと思い出しただけで遠い目になりますよ。
神官様は穏やかに笑います。そのお顔を見たら、大丈夫かなって思う。
「おかげさまで。こちらこそありがとうございました。お陰で何とか浄化が間に合いました」
「いいえ。そもそも枝の運搬のために養っていただいていますし」
わたしがお礼を言われるところじゃないと思うんだ。
だって扶養されているんですよ！　いうなれば雇用主！　つまり私は雇われの身の上ですよ！　生活保障までしていただいているのに、ちゃんと働かないなんて、庶民ポリシーに反します。それに、私がした事は本当に枝の運搬だけですから……。む、お枝様というべき？　あんな秘密兵器な枝だとは思いませんでした。これからは

丁重に扱いますよ！

「これ、どこにあったかご存知ですか？」

枝のことに思いをはせていると、神官様がさっきの紙を私に見せます。

「あ、それ、さっきそこの岩とレンガの間に挟まってました。何かなーって思って、ちょっと引っ張ってみたんです。神官様は、その文字、読めるんですか？」

「読めなかったんですか？」

町民の能力を高く評価しすぎですよ！

「そんな達筆すぎる文字は、ちょっと無理です」

「そうですか」

神官様は納得してくださったようです。勇者様が立ち上がって、陸馬さんの近くで何かを取り出しましたよ。薪（まき）ですか。キャンプの醍醐味（だいごみ）、焚き火ですね！　テンションが上がりますよ！

だって街中ではあまりこう、ごーっと火を焚く機会なんてないし。人生初めて尽くしですよ。

「今日はここに野宿になります」

私があまりに見ているからか、ちょっと申し訳無さそうに仰る神官様。一応、女だから気を使ってもらったのかな。あ、野宿がいやなんじゃないですよ！

私は力強く宣言しました！

「どこででも寝る自信はあります！」

現にこの人たちと逢ってから、いろんなところでの睡眠を披露していますよ！　旅立つ時意識なくしたでしょ、気がついたらおんぶだし、神殿に行く転移の時も気絶しかけたし、勇者様がさっきつれてきたときも気絶したし、そして今、私は地面でも寝てました。…

…想定以上に、色々、脳裏をよぎりましたあああああ。

しまった！　これは恥ずかしい。今更恥ずかしい……！　どれだ

け寝てるの。そりゃ、どこででも寝る自信がつくよ！　心の中で悶絶するよ！

「そうだな、寝つきはいいようだな」

勇者様、ここは流しておくべきです。いつもなら、そうか、でスルーなのに。何でちゃんと同意を示すんですか、あなた。こんな時に限って。

「まあ、……健康的でよいのでは？」

神官様、相変わらずフォローが滑っています。

元町民C、街は遠慮したい

それから陸馬（うま）に載せていた簡易鍋ややかんで湯を沸かし、簡単な携帯食とスープを三人でもそもそと食べ、寝ることになりました。ゆっくりと広い大地に沈んでいく真っ赤な夕焼け空が凄かった！

建物のない広い場所なので、ゆらゆらと揺れる地平線と太陽をじっと見ていました。

まだまだ世の中知らないことばかりだよね。というより、私が知っていることの方が極端に少ないわけですが！

日が沈んでから、星原樹の枝がキラキラ光っているのを眺めます。問題が無さそうなので、地面に刺したままです。光の雫が葉っぱの先からぽとぽとと地面に落ちるのが凄く綺麗。ためしに光を手にとって見たんだけど、すぐに淡く消えてしまった。これってなんなんだろうね。これが光源になるので、焚き火は消しました。薪（まき）の節約ですよ！　薪の節約にもなるなんて、ますますありがたいお枝様です。

「明日は一番近い街に向かう」

勇者様が焚き火の始末をしながら仰います。了解しました。街、と聞いて、自分の街に勇者様達が来たときの事を思い出しました。

「勇者一行パレードとか、もしかしてありますか？」

お二人とも黙り込むところを見ると、あれには閉口気味のようです。嫌な沈黙だな。無言の肯定って、こういうやつのことを言うの

か。学習しました。

「これも役目だと割り切ってはいるのですが、あの歓迎は困りますね。ですが、救世の旅が行われていると言うことを広めるのも役目なんです」

と言うわけで、嫌でも歓迎されちゃうんですね！

「私だけこっそり裏から入っては駄目ですか！」

「女の一人旅の方が危ないだろう」

一撃で切って捨てられました。そうですよねー……武芸も術も身につけていない一町民です。強盗とかが起こっても対処できません。

「それに、その枝が目立ちすぎる」

私は枝運搬員ですからね！　何で皆さん触りたがらないのか、漠然としたことしか分かりませんし。

「一応、布を掛けて簡易結界としましょう。認識阻害と、封印ぐらいで」

それでもあまり持たない、と神官様は少し苦い顔で笑います。

「私の力不足ですから」

「お前に出来なければ、他に出来るものはいないだろう」

勇者様が普通にフォローしています！　私も神殿で、神官様は天才だと聞きました。知らない新星術はないんじゃないかというレベルらしいです。美人な上に天才とか！　無欠ですね！　逆にこの神

官様が出来ないことは、他の人は本当に出来ないのだろうな、と素直に信じられます。

「枝での浄化が本当に必要なのは、もう少し行ったところの谷です。そこに行ってからあなたを連れてくる予定だったのですが、ここの瘴気（しょうき）があまりにも強すぎて、来ていただくことになりました」

しょうきかー。耳慣れない言葉です。実は皆がしょうきしょうきって言ってたけど、正体を知らないのでした！

はい、先生！

「質問です！　しょうきって何ですか！」

分からない事は聞く！　これが学習の基本！　まず聞くところが分からない場合は最悪だけどね。

そうですね、と前置きをしながら神官様は説明してくださいました。

簡単に言うと、魔物の残りカスみたいなものらしい。

魔物を倒すと、死骸は残らず、消えてなくなるそうです。

でも、それはすぐに消えちゃったんじゃなくて、薄く空気の中にしばらく漂っているとか。吸い込んだら吸い込んだで、体にも精神にも悪いんだって。普通はそこまで深刻に考えるものでなく、弱い魔物とかだったらすぐに日の光で消えちゃう程度らしい。星術で浄化することも出来るとのこと。

けど、ここに居たのは上級に分類される魔物の、しかも群れだったそうです。で、それらを倒したはいいが、瘴気が溢れて浄化が間に合わなかった。倒した、とさらっと言いますが、群れって半端な

いことないですか。そういえば飛び込んできたときの勇者様の様子が戦場真っ只中っぽかったのが頷けます。あ、結局怪我の話題が浮いたままのような気がしてきた。

ともかく、瘴気が消えない上、濃度の濃いまま広がってしまうと魔物以外の生物には大変毒になるんだって。風で流れていって街とかに行ったら更に大変なことになるため、神官様がここで結界を張って抑えていたそうです。

勇者様が姫様に簡単に報告していたことは、こういうことだったのですね！　やっと納得しました。

「じゃあ、あのピンクの霧が瘴気だったんですか？」

「ピンク？」

なんかまた町民が変なこと言ってるよ！　って視線が突き刺さります。

「瘴気が見えるのですか？」

神官様が真剣に問いかけます。

え、あの妙に卑猥な空間は私しか見えてなかったってことですか！

「はい、とってもどぎついピンクの空間でした」

表現が微妙だった。

慌てて自分をフォローするよ！

「ピンク色の、かなり体に悪そうな靄が充満して、前が見えないぐらいでした」

じっと神官様が私の目を見ます。なんですか！　私もじっと見詰め返します。睨めっこなら……負けない！　神官様の金色の目をじっと見詰めますよ。むむむ。

「あなたの目にはどんな世界が映ってるんでしょうね」

ふ、と息を吐き出しながら目線を逸らしたのは神官様。

勝った！　僅かな達成感を握り締めます。でもなんでちょっと空しいんでしょうね。そうか、私だけが勝負だと思っていたからですね！　真面目な話の途中なので、あたりまえですが。

それにしても。

私の目には、どんだけ奇妙な世界が広がっていると思われてるんですか！

「人それぞれだろう」

勇者様が淡々と述べます。なんと。そう、このフォローを待っていた！　ナイスです勇者様。珍しくまともなフォローですね！

そうだよね！　私が変なんじゃないですよ！

それにしても、なんでピンクだったのか。もうちょっと、おどろおどろしい色でもいいんじゃないかなあ。

本当に浄化が必要な谷って、ピンクの谷なんですね……。しかもそう見えるのは私だけ。笑ってはいけない拷問のような気がする！

でも、これでようやく私の旅が始まったぽい？

色々先は不安ですがね！　はっはっは。まずは街についてからですね。はあ。

問題はそれからだ。

神子（仮）、人ごみは拒否したい

こんにちは、町民Cです。雇われ神子やってます。

えー、荒野を旅立って早三日。

今日は生まれて初めてよその街にやってきました。そこで人の壁に囲まれています。人が集まるだけで、こんなに暑苦しいものなんですね。

人ごみで、呼吸をするだけでも苦しいです。ちょっと距離はあるものの、この熱気とムードはぐらぐらします。

た、たすけて……。

人の声って、凶器になるんですねっ。初めて知ったよ。

野太いおっちゃんたちの万歳の声、キャー勇者様ー！　というお嬢さん方の黄色い声援、その他もろもろ、誰だよ鍋持ち出してガンガン叩いてるの！　それは太鼓じゃないよ！　耳に痛いだけですよ！

私は半分死んだ目をしながら、陸馬（うま）さんの背中に揺られています。ぽくぽくと歩くリズムで私は揺れます。このまま、意識を失いたい勢いです。

私の前を歩く勇者様と神官様は、あの素敵スマイルを惜しみなく振りまいています。

無理！　私は無理！

唯一の救いは、顔を分厚いベールで隠しているから、町民の皆さ

んと顔を合わさずにすむことですね！　これは妥協の結果です。どうしても勇者様ご一行として混じることに不安を覚えた私は、ベールを被った神秘の神子として登場することになりました。

しんぴ……しんぴ。

ここ、笑うところだからね！

頼む！　笑い飛ばしてええええ！

街に入る前に神官様に術をかけてもらったので、お枝様はそれほど危険物じゃなくなったとか。

危険物？　これは危険物だったんですか？　初耳ですよ！　臭いんじゃないんですね！

確かに光ったりしたり、勇者様が触れないとか言ってたりしたなあ。怯えながら聞いてみれば、私には害がないそうです。えー。

といっても、その封印術とやらも三日位しか持たないとのお話。効力の期限に申し訳無さそうな神官様へ、私は正直に、三日あったら十分ではないですか？　私の街にも勇者様達三日いたっけ？三日目には私を拉致して帰還してましたよ。と告げた。すると神官様がうなだれて、その節は申し訳ございませんでしたとか言い出したので、私のほうが慌てました。謝るべきは勇者様だと思うんだけど……。何故か神官様が保護者をしているような気がする。この二人の力関係も謎です。とりあえず、正直すぎるのもたまには駄目なことだと学びました。

とにかく、勇者様の剣が壊れたそうで、その修理も必要だとか。そういえば、二本持っていますよね？　と不思議だったんですが、右に吊ってる方は普段使わないそうです。オシャレアイテムですね！　分かります。使わないものでも、持ち歩いちゃうんですよね！

そして荷物が増えていくんですよ、私のように……。

まあ、今回はそれが珍しく役に立ったんですが。荷物の中に色々布を突っ込んでいたので、有り合わせでベールっぽい何かを作れたのだ！　裁縫は得意だよ！　大体の生活力はある。サバイバル力の

ない町民ですがね！　このベールと言うバリアーがないと、私は人前に出れない。本気で。

街に入るだけなら、どうにでもなると思ってたんだけど、街では既に勇者様を待ち構える体制が整っていたらしい。やめてええええ！

以下、パレード（ここも笑うところ）が始まる前のちょっとした時間で神官様が要約してくださった、街での出来事ダイジェスト！

それにしてもいつの間に聞き取り調査を……神官様恐るべし。

昔からあった、とんでもなく呪われている廃墟から、凄い光がして魔物の気配が消えた。行商人も急に魔物が減ったことを実感した。これは何かいいことがあったに違いない。つまり勇者様！

門番もがっつり見張るよ！　たまたま他の町で勇者様見たことある行商人も目を皿にする！　つまり商売のチャンスだから！

あ、道に人影が！　我らの街に、勇者様来たあああああ！

……という流れとか。

それにしてもうすうす感じていたんだけど、この人たちの知名度半端ないですね！　顔バレとか。だが、私は決してそこに溶け込まない！　顔なんて出さない、出せない！

地味に生きたい私には正直不要です。こうしてベール越しでも街のお嬢さんたちの「なにあの子」視線が突き刺さる突き刺さる。痛いって！　だから視線だけでハリトカゲみたいになるよ！　針町民（元）が出来上がります。カンベンしてください。もはや癒しはお陸馬（うま）さんだけ。あいかわらず微妙に避けられてますが。

紙ふぶきをしようとしたのか、紙が飛んだり、花が飛んだり、どんどん現場がカオスになってきているようです！　ちょーっと身の危険を感じる。そろそろ皆さんクールダウンしませんか？

うう、陸馬（うま）の上でひとり揺られているのが凄く罪悪感が沸いてき

ました。だって、働かざるもの食うべからずですよ！　ここまで、正直私は何も働いていないと言える。自分の力でなんかしたこともないし。本当に枝運搬員だけでいいのかな？　言葉に甘えて大きな穴にどぼんはいやですよ！

ぼーっとしているのも芸がないので、手を振るとかしてみてみたほうがいいのか？

それとも何もしなくて人形を間違われた方がいいのか？

貧乏暇なしが身に染み付いているのでね！　逆に何もしなくて言いといわれたら困ります。仕事ー仕事ー何か仕事がほしいですよー。手がわきわきします。最近、裁縫も洗濯も料理も力仕事もしていません！　なんか文字書いたりティーカップ持ったり、枝持ったりぐらいしかしてない。この、仕事へのパッションをどこにぶつければ！　できることかー。考えながら周りを観察します。といっても、あからさまに出来ない。なんたって神秘の神子（笑うところ）ですから！　お上品に、ゆったりと。できれば姫様レベルで優雅に。

うーん。今の私のスキルでできることは、街並みの観察ぐらいです。あとで買出しとかいるかもしれないし。

大通りの先に広場があって、領主様や役所があったり、星神さまを祀（まつ）る場所があるのは大体の街で同じだと思う。

今通っているのがメインストリートかな？　人ばかりで狭いですが！　そのうち領主様の館かお役所に着くかも。

ここに面してあまり出入り口がある家はない。

私の住んでいたところもそうだけど、魔物が侵入した時、真っ直ぐに広場に向かわせるように一本道にあえてしている面があるんだって。一歩裏通りに入ったらくねくねとした道で分断させて迷走させて各個撃破するのじゃ！　って向かいのじいちゃんが言ってました。本当かな？

魔物は知能が低いそうです。私より賢くないらしいよ！　比較対象が私という自虐（じぎゃく）が辛いですがっ。

実際、まだ魔物を見たことがないんだよね。正直今からびびって

ます……。幾ら勇者様と一緒としても、怖いものは怖い！
まだ見ぬ魔物はともかく、ちらちらと周りを見て、なんとなく商店街とかの方向が分かった。よし！　お使いもいける！　役立たず町民から脱却ですよ！

周囲を観察していると、ふと、視線を感じました。
む。気のせいじゃないな。最近視線に凄く敏感です。こんな職業についているからでしょうかっ。
人ごみの向こうで、マントのフードを被った人がじっとこちらを見ています。
何故か凄く気になったんですが。だってフードだし。フードって、めちゃくちゃ怪しいんですけど！　犯罪のにおいがしますよ！　これは私が目撃者になるのかっ。まだこっち見てるな……。じっと観察しかえしてやる。茶色のフードつきマント以外、性別も年齢も分かりません。お嬢さんたちの棘のような視線とはまたちょっと違った嫌な感じです。
ふとその横のお姉さんに気を取られた隙に、その人は人ごみに消えました。気を抜くなって言わないで！　だってお姉さん、胸の谷間がぼーんと露出して、私の視線を釘付けにするんですよ！　けしからんお胸様です。いいなあ。お胸様……分けてください。
フードの人、犯罪を起こしちゃだめですよ！　なんとなく心の中で呼びかけてみる。まあ、不審者をみたら犯罪者と思っている私がひどいんですがね！

パレードは一応、前進していたようです。程なく広場に着いた。町民は熱狂して、炒られた豆のようにぽんぽんはじけています。私、あの中にも混じれないかもしれない。そういえば、自分の街の勇者パレードも人ごみが嫌で見に行きませんでした！　今思い出した。
パレードが行き着いた先には、鎧を着た一団が立っています。

「おお、勇者様！」

手を広げて待っていたのは、とても丸い物体でした。

もとい、太りすぎた丸いおじさんでした……。ギラギラしてるよ！　服の金糸の縫い取りもさることながら、その、……脂（あぶら）で。

まさか、領主様ですか……？

思ったより、丸いですね。

神子（仮）、長話は聞きたくない

丸い領主様に連れられて、やってきました屋敷！

私の住んでいたところには、領主様がおらず、領主様に任命された町長さんが治めていたから珍しさと好奇心がうずきます。領主様だって！　初めて見る……のに、感動が薄いのはなんでなんだろう。喋るたびにたぷたぷ揺れる、領主様の豊満なおなかとほっぺたを眺めます。大変、恰幅のよい方ですね。大人の言い方をしてみた。

とりあえず、気を取り直します。中流セレブの生活を覗く絶好の機会ですし！　上流セレブの生活はもうおなか一杯だけど！　お城やお姫様はもういいです……。いつ不敬罪で連行されるか、いつ壷割るかとか、終始びくびくしますから！

広場のど真ん中に高い塀があり、その中が領主様の屋敷のようです。街の中なのに、妙に高い塀だなー。なんかね、街の人たちから屋敷を守るみたいな印象。領主さまなのに変なの。

それ以外は変なところはなし。当たり前だけど周囲に比べてとりわけ立派な建物なだけです。石造りの四階建てぐらいで、大雑把に形を言えば立方体のお屋敷です。四角か……ご本人と違い、屋敷は丸くないんですね。え、偏見ですか？

石造りの壁にも彫刻があるので、さりげなくお金が掛かっているのを見て取れます。お金の気配は見逃さないよ！

勇者一行は領主様に先導されて、当たり前のように屋敷に入っていきます。

え、ここに泊まるの？　いつの間にか勝手に領主様の中で決定し

ているようです。まあ、領主様の屋敷断って、わざわざ普通の宿に泊まるって言うのは、よほどの理由がない限り、宿屋の人も気まずさ最高潮でしょうけど。

私は中庭のあたりで、お陸馬さんから降りて歩きになりました。屋敷の使用人さんにお陸馬さんを預かってもらうしかないですし。しばしの別れですね、お陸馬さん……しんみりしかけた私をよそに、もりもりお陸馬さんは餌を食べていました。ああ、そういやさっきポーって鳴いてた。餌の時間だよ。そりゃ私より優先ですね！

鎧さんその一が、私の枝を持とうとしてくれたけど、丁重に断った。

ただし身振りで。

だって、長い間緊張していたせいか、声が震えて上手く出ない！思わぬところで乙女ッぷりを発揮ですよ。本当にいらないところでの発揮だな！　身振りで意思を伝える怪しい女です。神子と言うふれこみがないと、追い出されること間違いないよ！

代わりに荷物を持ってもらうことになりました。申し訳ないです。

領主様に先導され、大きな扉の中に入ります。

うわ、ここも蝋燭ガンガンに焚いてる。室内なのに明るいです。絨毯も気合を入れているのか、凄くふかふか。

絨毯に関する感想は、一瞬で吹き飛びました。

凄い空間だった。

所々に飾られている、金ぴかの美女像（ただし裸）や、あっはんうっふんにスレスレな絵画とか、ちょっときわどい形の壷（乙女の

口からはいえない）とか、ご趣味はよくないと思われます！

一つや二つじゃないよ！

大体そんな美術品です。どこから探してきたんだよ！　逆に凄いよ！　うわあああああ！　今度は裸の男性像ですよ！　肉体美はいいから隠して！　大事なところ隠してええええ！　そこまで精巧に作らなくていいから！　どこなんて私の口からは言わせるな！　察してというやつです。

ちょっと青少年には目に毒ですよ！　趣味悪！　ある意味潔さ過ぎます。こんなインテリアをする人が世界にいるなんて……想像を超えまくりですよ！！　オープンスケベの恐ろしさに私は慄きました！　見よ、この久しぶりのトリハダを！　実に三日ぶりです。

目のやり場に困るところだけど、ベール越しだから私の顔は見えないはず！　この際だから美女像のお胸様でも心の中で拝んでおこう。あやかれますように、あんな胸になりますように……わりと切実です。

あ、今気付いた。ここで私、「きゃあ」とか言うべきなんでしょうか？

妙にニヤニヤして領主様が私のほうを見るんですが！

「神子様には刺激が強すぎましたか？」

ニヤァ、と笑う領主様。

セクハラですか？　セクハラですねッ。なんか悔しいんですが。刺激と言うより、品格の問題な気もするけどね！

ボール……いや、領主様はちょこちょこと勇者様の横に並んで歩きながら、ずっとお話していらっしゃいます。

この街の成り立ちや、自分の業績、困っていること、そしてまた自分の資産情報、名物に美女情報、そして今度は屋敷の自慢やらを熱心に、それはそれはなめらかに語ります。綺麗なお姉さんのいる夜の街の話のあたりで、私のほうを見てなんかニヤリとされたんで

すが。私は性別女ですが、このお二人とはそういった意味では無関係ですよ。なんかこのニヤニヤ笑いがイラッときますね！

笑顔が振りまかれるたびに、お顔の脂がてらてらと輝きます。多分、あの顔をうっかり手で触ったら、その手は洗わない限りいろんなところに指紋をつけちゃうんじゃないだろうか。そんなブラックなことを考えてしまうのは、本当にお話が取りとめがないからです。

正直、もう遠慮したい！

お口塞ぎますよ！　でも触りたくない！

領主様のお口には脂が塗ってあるに違いない！

だからあんなに喋るんだよおおお！　あ、一族の美女情報になった。美女で勇者様を釣る気満々ですね！　分かりやすすぎるッ！美女か～。見てみたいなあ。だって、このボール（失礼）領主様のご親族での、美女ですよ……！　でもうっかり勇者様が気に入ったら大変です。まさかのカップル成立！

でもそうなったらそうなったで、姫様の猛攻撃が始まるんでしょうね……あんな女に取られてたまるか！　見たいな。ひい！　女の戦い勃発ですよ。私は退避します。でもちょっと怖いもの見たさで観察したい。とりあえず勇者様とどこかの女性とでカップルが成立したら見てみたい気がするんですが。特にデート。どんな会話しているかが気になりすぎる。会話が無いほうにいい笑顔で金貨をかけますがね！

それにしても勇者様の笑顔仮面半端ない！　この会話によく応対できますね。

聞いているのか聞いていないのか、重要な問いは笑顔でスルー、あとは適当に相槌を打っている様子。す、凄い！　ちょっと尊敬し

ますよ！

いつも話すはずの神官様は、そんな二人のあと、つまり私の横を歩いています。

神官様の笑顔ですらちょっと剥がれかけてる……というより、神官様は話聞いてませんね。

この人は知識欲が旺盛なようで、建物とかを眺めて、「この建築年代は……」とかひとりでぶつぶつ呟いてる。マニアですか……？

まあ、人の趣味はそれぞれですし、それに、そんな風に歴史に思いをはせる方が、領主様のお話聞いているより実りがある気がしないでもない。周囲のエロ美術は、神官様は華麗に無視されているようですが。この方も流石ですね。年季の違いを感じます！

はあ。

さっきから私の口が悪いのは、正直、疲れているせいもあると思う。

自分でも気づかなかった疲労っていうやつかなあ？　慣れない旅だし。お二人に、色々フォローしていただいているのが分かるから、疲れたとか辛いとかなんて、言い出せないけど。

それに加えてさっきのパレード！　そしてこのオープンスケベ屋敷！

どんどん町民の心の余裕を削っていきますよ！

今ならあらゆることに毒を吐ける気がするっ。

ただし心の中限定で。相変わらず小心者です。

何でこんなに心がささくれ立ってるんでしょうね！　そんな自分にイライラしますよ！　きー！

なんとなくイライラしながら周囲を見回してみると、ベール越しの景色に違和感がありました。

何かおかしい気がします。

んん？

ベール越しだから、よく分からないな。

何か凄いいやな予感がするんだけど。ベールを取る勇気は正直ない。

なんかね、こう、空気を吸ったらいけないような気がするんですよ。

この間の、遺跡の時みたいに。

神子（仮）、ここに居たくない（前書き）

ちょっと下ネタ気味です。ごめんなさい。

神子（仮）、ここに居たくない

じっとりと汗が滲んでくる。一度、ここにいたくないと思ったら、だんだん我慢が出来なくなってきましたあああ！

ううう、これ以上先に進みたくない。何でだろう？　分からない衝動にもじもじしてしまいますよ。

神官様が、

「大丈夫ですか？」

と気にかけてくださったけど、どう伝えればいいか分からない。

それよりも、気持ち悪すぎて口を開いたら大変なことになりそう。確かに調子悪いっちゃ悪いんですが！

ここは、一時脱出ですね！　この場所から、何とか離脱するしかない！

でも、あの手しか思いつきません。

悩む……私は今、ギリギリの瀬戸際に立っています。

どうするか！

ここであの手を使えば、いろいろささやかながら持っていた尊厳的な何かが削られそうです。

しかし！

背に腹は変えられません！　私は心に強い決意を秘めて、きっと顔を上げた。女は度胸だ！

私は勢いよく手を上げて、こう言いました！

「すみません、お手洗いに行きたいんですが」

ぎょっとして振り向く皆様。

その勢いに私もびくっとなりました。

一斉に見ないで！　ただでさえ見られることに慣れていないのにこ

の仕打ち。
しかもこんな発言をするときに見られたら、恥ずかしくて悶絶しますよ！　実際、ベールの向こうで死に掛けていますが！
自然と全員の足が止まりました……。
居たたまれない一瞬の沈黙が、この場に満ちました……やめてー
誰か、発言してえええ！
ですよねー。乙女としてトイレ行きたい、はどうかと思います！
神秘の神子設定もどっかに行きそうですよ。でもね、それ以上にこれより先に進みたくない気持ちが勝った。お枝様を握り締める手に、びっしょり汗をかいている。うー、こんなに汗っかきじゃなかったのに。
初めに口を開いたのは、領主様だった。
「そうですか、神子様もそんなときがあるんですねえ。おい、案内して差し上げろ」
領主様が妙に嬉しそうです。えー、ちょっと引きますよ！　なんか良くない発想と繋がっている気がする。だけど、このさい気にしている場合じゃない。
鎧さんその三が、こちらへどうぞ、とぎこちなく先導されます。よし！　横道！　これから先はさっきみたいな圧迫感がありません。ついでに横道のせいか、エロ美術もありませんでした。
思わずほっとする私。
で、冷静になって、今更気づきました。
これ以上進みたくない私の動きは、まさにトイレを我慢する動きであったのではないかと！

……気分良くなっても、戻りたくなくなってきた。
っうわあああああん！　顔が真っ赤になる！　ベールで隠れているけれどね！

横道は先程までとは違って蝋燭はまばらに燈されている。あまり、

使っていない道なのかもしれない。私は先導する鎧さんその三に問いかける。

「あ、あの……」

鎧さんが、あからさまにびくっとなる。そんなに怯えられる理由はないよ！　ちょっとショックです。私は喋らない方が、円滑にすすむのかっ。うーん、と悩んでいたら、

「神子様をご案内にするに足る場所ではないかもしれませんが……」

しきりに恐縮されながら言われました。どんだけ私はセレブですか。一般庶民なんで、とんでもないぐらい汚いトイレじゃないかったら大丈夫ですよ！

くねくねと幾つか角を曲がり、そしてようやく目的の場所に到着した様子。こちらです、と控えめに案内してくれた姿が好感度高かったです。それにしても広くて道順が分かりにくい屋敷だな。

とりあえず、羞恥心やら気持ち悪いやら限界だったので、転がり込むようにトイレに入ります。

なんと！　トイレは地味だった。

一般家庭と大して変わったつくりじゃなかったです。この木の模様が落ち着きますね。ここまでもギンギラエロワールドが広がっていたらどうしようかと、真剣に考えていました。

トイレでひとりになったところで、ようやく大きく溜息をつけた。やっと地味なストレスから解放されましたよ！

でもさっきの気持ち悪さ、一体なんだったんだろう？

廊下とは違って、ここは薄くですが窓が開いています。

窓の外は相変わらずの青空。とっても鳥の声がのどかです。屋敷の中が異空間過ぎて、頭がぐらぐらしていたのが、外の風景を見るとすっきりしました。

そういや、廊下には窓が一切なかった。空気がよどんでいたのか

なあ。

私は気分転換に、ベールを上げて一息を付く。こうしたら、ちょっと冷たい空気が顔を撫でて気持ちがいい。

あー、やっと落ち着いてきた。そろそろ帰ったほうがいいのかな……。か、帰りたくないけど。

そんなことを言ってられないね！

頬をパン！　と両手で挟むように叩き、気合を入れる。

けれども、よし！　と顔を上げた瞬間、固まった。

だって、廊下に繋がるドア、周辺の空気がピンクに見える。例のどぎついピンクが、当たり前のように空気に混ざっています。

はっ、と振り返って、窓のほうを見ました。窓の外は、普通に青空が広がっています。オーケー、自然な色合いが心に優しい。

もう一度、ドアを見ると、特に下の方に、ピンクの靄が溜まっている。

あのお枝様が大活躍だった、ピンクの靄で前が見えなかった廃墟ほどではないけれど、漂う薄っすらとしたピンクムード。

い、幾らエロ美術品があるところだって言っても、空気までピンクに彩る必要はないだろう！！！　そんな効果は誰も期待していないよ！

いやいやいや。冷静になれ。

あれはえっちなムードじゃなくて、瘴気かもしれない。

かも知れないっていうのは、いまいち無臭だし、ピンクだし、あの領主様なら空気までおピンク路線に染めるとかもやってしまうかも知れない、と一気に考えたせいです。偏見ですか？

神官様に説明してもらったにせよ、世界の不思議に関しては、まだまだ私はシロウトに毛も生えていない程度です。つまりシロウト。丸ごとシロウトですよ。

ここまでの道、廊下は蝋燭の明りだけだったし、ベールで視界が殆ど遮られていたせいで、詳しい色が分からなかった。それでさっき気付かなかったのか。もしかして、先に進みたくなかったのはこのせい？　これが乙女の勘なんでしょうかっ！　トイレトイレ言ってるから、乙女発言をいつもより多めにしていますよ！

この瘴気、神官様は気付かれていないのかな？　それにしても、私はどう伝えればいいのでしょう？　領主様もいらっしゃるよね。だとすれば、領主様に報告差し上げた方がいいのかな。

――領主様！　空気がピンクに汚染されています！

そうでしょうとも。エロ彫刻の館ですから。あえてピンクに染め上げているオープンスケベだもんね。

――領主様！　空気がよどんでいます！　入れ替えましょうよ！

これはメイドさんたちに挑戦状を叩きつけることにならないでしょうか？　ちゃんと換気をしていないのか、という。で、ピンクが瘴気だとしたら、街に広がっていいのかって話だね。

――領主様！　気分が悪いので帰っていいですか！

これが私的には真実だしベストなんですが、ダメだろうなあ。帰りたいです。

それにしても、勇者様や神官様は気付いていないのかな？　瘴気が見えるんですか、って驚いてらっしゃったぐらいだから見えない？　あの時、ちゃんと聞いておけばよかった！　どちらにせよ、あのまま先に進んでいったら、さらに瘴気が濃いほうに行ってしまい

そうな予感がします。

でも、なんで建物の中に瘴気が溜まってるんでしょう？　瘴気って、溜まるものなのかな？　まだまだ分かりません。どこかに教科書でもないかなあ。『はじめて学ぶ、よくあるしょうき』とか！　誰か書いてほしいな。私、ちゃんと図書館で借りますから！　え、買わないのかって？　本なんて高級品、庶民の給料じゃ、手が届きません。

お枝様におすがりするとか？　勇者様に教えていただいた呪文は、微妙に覚えてる。

けれど、お枝様はわざわざ封印するほどの危険物だから、安易に開封しちゃったらダメっぽいし。

私単体じゃ、ただの役立たずの町民だな！

つくづく実感しました。身に、染み渡ります。

どうにか、ここに勇者様か神官様を呼ばなきゃならない。瘴気の件だったら神官様になるのかな？

ここ……女子トイレに。

汗がぶわっと吹き出た。

なんという難問ですか！！！

女子トイレに呼び出しって。

私の尊厳って、今、試されているんですか！　なんという……私、だんだん涙目になって来ましたよ。もうやだー、うわーん。

頭を抱えてうずくまる私。

そこに、控えめなノックの音が響き渡る。鎧さんその三だ。

「神子様……、お加減はいかがですか？」

私があまりにもトイレにこもっていたのを、気にしてくださった

ようです。
　これだ！　私は目の前に現われた、素晴らしい突破口にすがりつきました。
「あ、あの、あまり調子がよくないので……勇者様か、神官様をお呼びいただけますか？」
羞恥のあまり、声が震えました。鎧さんその三は、あわてた様子で、
「すぐ、お呼びしますね！」
とばたばたと走り去った。ちょっとだけ良心が痛む。嘘はついてないよ！　事実を婉曲（えんきょく）に言っただけだよ！

　少し冷静になって考えた。もしかして、あんな呼び出ししたら。
私、おなか壊して動けませんよレベルに勘違いされてしまう……？

　それに思い至り、トイレの床に膝をつきそうになった。なんてこったい。

　もう、乙女の尊厳はぼろぼろよ！　元々あったかどうかは、別として！

神子（仮）、つっこまれたくない

女子トイレに呼び出しとか！

やってしまった感が半端ないんですが、私にはどうしようもなく。とんでもない後悔がこみあげてきてなんだかとっても落ち着かないいいい！　もういやだあああ！

このほとばしる何かを押さえつけるために私は壁に張り付いた。恥ずかしさというか失敗したというか、なんだろうこの気持ち！

あ、ちなみにトイレから出て、廊下で待ってます。

でもベール完備。恥ずかしすぎるしね！

それにしてもこの広いお屋敷、人の気配がありません。エロ彫刻で、使用人に逃げられた？　有り得ますね！

廊下もかなり薄暗いです。トイレも使ってないぐらいのレベルで綺麗だった。

だから安心してこんな恥ずかしい格好でいろいろ堪えることができるんですよ！　ああ、壁のひんやり感に癒される……。このまま、壁になりたい。白塗りの壁と同化したい。

なんか、こう、いたたまれないよね……！

その衝動のままに、壁にごんと額を打ち付ける。ううう、落ち着け、他の人が来る前に。

がりがりと壁を掻いていると、恐る恐る声を掛けられました。

「み、神子様……？」

……あっ。

しばし、沈黙が流れる。私も動きを止めて、ごくりと喉を鳴らしました。

この静寂が痛い。

「ありがとうございます！」

あえて爽やかにくるりと振り向く。ベールで顔は見えないけど、明るい声と仕草で元気さをアピールした。私の勢いに飲まれたのか、鎧さんその三は、混乱のまま、突っ立っています。よーしよし、そのままでいいぞ。

動くなよ……じゃなくて、私の行動にツッコミをいれるなよ……。頼むから。しかし、その願いは意外な方向から砕かれました。

「壁がお好きなんですか？」

神官様、この状況はスルーしていただけるとありがたかったです。なんでここでツッコミですか。スルーすべきところでしょう！

居たたまれない雰囲気の中、神官様は診察を始めました。

「体調が悪いことに気付かなくて申し訳ありません。手、失礼しますね」

丁寧に謝る神官様は、私の手を取る。脈や熱を見ていらっしゃる様子。あ、大丈夫です、平熱です。

「本当に、大丈夫ですか……？」

このセリフが心に突き刺さる！！　大丈夫です、心も頭も。精神状態は……ぼろぼろだけど！　今しがたの出来事のせいでね！

でもそれよりも、伝えたいことがあってここに呼び出したんだ。当初の目的を思い出し、私は意を決して口を開いた。

「神官様、ここの空気、ピンクに見えるんですけど……」

神官様は真剣な顔をして考え込んだ。

「確かに彫刻は卑猥ですが……刺激が強すぎましたか？」
いや、違うって。通じてるの？　本当に通じてるのッ！
私の心のツッコミは、神官様に届いたのかどうなのか。神官様は私の持つぐるぐる巻きに布を巻かれたお枝様を指し、
「不安でしょうから、少しお守りを作りましょうか」
と仰った。枝を出せという仕草に、私は素直に差し出す。神官様は布の間から何かを引っ張り出した。小さな葉だ。あ、この程度では封印は弱まらないのか。ふーん、と眺めていたところ、それを勢い良くプチッて千切りました。え、それいいんですか！　お枝様から引っこ抜いていいんですか？

「手の甲を出してください」

大人しく手を出すと、ぼんやりしていたせいで左手の掌を出していた。
「甲です」
珍しく焦った口調の神官様が言いながら、私の手を取りくるりと手をひっくり返す。あ、すみませんね、とっさのうっかりが多いんです。
私の手の甲に、神官様は葉を置いた。そして新星語を呟く。
「Ｊｍｎｗ　Ｋｓｈ　Ｓｈｍｓ，
Ｈｎｓｈｔｓ，　Ｂｓｓｔｋ－ｄ　Ｓ２５８　ｗ　Ｈｓｈｎ　Ｓｙｇ　ｈ，
　Ｂｔｓｒｋｇｋ　Ｈｋ　，　Ｔ　Ｓｈｋ　，　Ｊｄｊｙｋ，
Ｊｍｎｗ　Ｓｈｒｙ　Ｓｈｍｓ．」
すると、やわらかい光を放ちながら葉っぱが溶け、私の手の甲に葉っぱの刺青がうっすらと記されました。
ちょ、い、刺青反対ですよ！！　まだ裏家業の人間にはなっていませんよ！
私の焦りに神官様は気付いているのか、

「効力がなくなると消えますので、その時はまた仰ってくださいね」
とにっこり微笑まれた。あ、消えるんですね。良かった。ふーん、
と手の甲を眺めていると、ふと神官様の仕草が気になりました。指
先を擦り合わせている様子。
「指、どうかされましたか？」
神官様は苦笑して、
「いえ、やはり私もそれに触れるのはきついですね」
と仰る。え、先程、葉をつまんでいた指ですよね？　薄暗い明りで
も、赤くなっていることに気付く。元が白いからかなり目立ちます。
か、かぶれるんですか、この枝……？　危険物扱いなのを、ちょっ
と納得しましたよ。
　それにしても、左手の刺青っぽい模様がとても不思議です。思わ
ず擦ってみました。すると、手の皮が赤くなっただけだった！　へ
ー不思議。ふと顔を上げると、ピンクが薄まったような気がします。
　とりあえず、私が言ったことは通じていたのかな？
　それを聞こうと思ったのだけれど、神官様が口の前に指を当てて、
しずかに、と目線だけで訴えられました。了解です！　私空気読む
子！　そうですね、私たちの後ろには鎧さんその三がいたんだった。
なんとなく、お屋敷の人の前で、建物の悪口を言うのは気が引けま
す。
　このお屋敷、凄くピンクですね！　とか、彫刻、卑猥ですね！
とか。あ、でも神官様口に出してたよーな。ま、いっか。基本、私
も適当です。
「これで落ち着きましたか？」
神官様が私の手を取り、甲を撫でて確かめる。ふと、それに強烈な
視線を感じた。
　廊下の角で、鎧さんその三の向こうに光る目線を感じた。な、な
んですか！
　ちらちら見えるのはメイドさん……？　そのとき、私の地獄耳へ、
メイドさんたちの会話が飛び込んできた。

「ほら、神子様はやっぱり本命は神官様よ！」
「でも分からないわ！　勇者様との三つ巴の可能性も……」
「いや、もしかしたら、あえての大穴で、勇者様と神官様が」
「でもダークホースで領主様とか」
「ちょっと……それは」
「それは……ないでしょ」
「そうよねえ……きついわあ」
きーこーえーまーすーよーーー！
一部不穏な発言が聞こえた！　メイドさんは自重すべきですよ！
勝手にカップルにしないでください！
手を振り払いたいッ。勘違いは姫様だけでおなか一杯！　相変わらず私は勘違いラブファンタジーの渦中にいるようです。ただし、噂話の中だけでは。そんな華麗な生活は、今までの生涯においてあったことなどありません。
それ、ありえないから！　私の胸と同じぐらいないから……。ぐすん。
どう考えても神官様の仕草は医者の動きです。診察が終わり、あっさり手は離れました。
夢を見ないでください。あと、領主様という線は絶対にないから！　脂は……カンベンです！
こう、自分以外の噂はへー、と聞き流せるけれど、なまじ関わっているものだからげっそりします。神官様はあまり聞いていないのか、スルーされています。華麗ですね。
「……私もきちんと男に見られてたんですね」
スルーじゃなかった……聞こえてたようです。でも、食いつくとこがそこですか。よりにもよって、そのポイントですか。やっぱりずれているんだろうか。でも若干、嬉しそう？　この人も苦労してるんだな。ちょっとだけ親近感が沸きました。

それはそうと……いつからメイドさんたち、見てたんですか！

さ、さっきの私の壁に張り付いてたのは、見てないよね？　見てないといってくださいいい！

こ、怖くて聞けないッ！

「少し、おうかがいしたいことがあるのですが」

にっこりと話し始めたのは神官様。鎧さんの向こうにいるメイドさんたちに呼びかける。

「え、ええっ」

「どうしよう」

メイドさんは思いっきり動揺している。

ですよねー、私が同じ立場でも動揺するよ。だって、覗き見していた相手からの呼び出しだよ。

覗き見するメイドさんたちの姿に、貸本屋で読んだ『メイドは見た！』シリーズの小説を思い出した。あの主人公もこんな感じで覗き見していたんだろうか。それにしてもあの小説のメイドさん事件にあいすぎだと思う。

鎧さんもどうするか困惑しているみたい。鎧さんの顔は鎧で見えないんですけどね！　あ、今更ですが、この人たち全身鎧なんです。重くないのかな。

メイドさんたちはおずおずと出てきた。三人いる。

おだんごさん、みつあみさん、ポニーテールさんでした。髪の色は薄暗いせいでよくわからない。多分明るめの色じゃないのかな。

そして特筆すべきは三人とも、目がくりっとした可愛らしいタイプだったこと！　この屋敷ではアレですか、容姿ももしかして採用基

準ですか？　でもあの領主様だったらありうる。

「この最近、お屋敷で変わった事はありませんでしたか？」
神官様はにこやかに問いかける。直球勝負ですね。こんなこと聞いていいの？
　メイドさんは顔を見合わせて、話していいか悩んでいる。
「どうしてそのようなことを？」
逆に鎧さんが聞いてきた。
「こちらの領主様は、領民に慕われた気さくな方とお伺いしていました。この屋敷は、前からこうでしたか？」
　へー、丸いおじさんはいい領主様だったんだ。でも、エロ屋敷の領主様だよ！　慕われるの？　メイドさんたちはちらちら同僚を見ながらどうしよう、と小声で相談始めました。

「去年ぐらいから、領主様のご趣味が変わられたぐらいかな」
「えー、そうだったっけ？　もともとやらしー感じはしてたんじゃない？」
「でも、彫刻はさすがにアウトだと思うよ」
「いや、私はあの壁の絵のほうがやばいと思う」
「あの裸の彫刻、ほこり払うの本当に恥ずかしいし」
「え、あんた楽しんでたじゃないの」
「ちょ、ちょっと今言わないでよ！　そっちこそ、熱心に磨いてたじゃん」

　メイドさんたちは内緒話をはじめました。内緒話にしては音量が大きすぎる。まるっと聞こえてますよ！　あれ、そうするとエロ屋敷になったのは最近ですか？
　それにしてもメイドさんたちは自由だなあ。お城で働いている人たちだったら、答えてくれない感じの雰囲気を纏ってたのを思い出す。領主様が気さくな方だったというのも関係あるのかな。

それにしてもメイドさんたちの相談がドンドンずれていきます。
そんな女の子の話のとりとめのなさに、神官様は苦笑している。

「では、最近あの彫刻が増えたんですね」
ちょっと神官様がまとめに入りました！　メイドさんたちは真っ赤になりながら、ようやくおしゃべりを止めて、神官様に向き直る。
「お掃除大変なんです」
「埃すぐ溜まりますし」

それは思った。あんなにごちゃごちゃしてたら、掃除大変だよね。いっそ何もないほうがいいと思う。お城や神殿は『初めの状態を維持する星術』が掛かっているそうで、なかなか汚れないらしい。庶民にとって夢のような術じゃないか！　すごく便利そうだなあと思って、この間気軽に神官様にこの術のことを聞いたら、凄い長い説明がはじまった。一時間ぐらい説明してもらったのに断片的にしか覚えていない。ごめんなさい！　つまり、術を維持するにはお金が凄く掛かるそうだ。一般庶民には無理ですね。

「あと、お屋敷も色々改装されてたみたいですよ」
ぽろっとメイドさんが違う話題に移ろうとした。更に長くなりそう。私はお枝様を杖代わりにして、ちょっと体重をかけた。直立しているのも、足が疲れるんですよ！
　すると鎧さんが、
「そろそろ仕事に戻りなさい」
と言い出した。この人のほうが立場が上なのかな。
「えー、横暴ー」
「ひどーい」
メイドさんが口々に鎧さんに文句を言いますが、神官様はあっさりと話題を打ち切った。
「そうですね、ありがとうございました」

と、微笑を向ける。うお！　輝く笑みですよ！　私が以前、目がつぶれそうになったあれです！

メイドさんたちは思わず、きゃあ、と歓声を上げて真っ赤になりました。

「コラ！　お客様の前だぞ」

鎧さんがすかさず注意をすると、さすがにばつが悪かったのか、メイドさんたちは顔を見合わせた。でも、色々いまさらだと思うよ！

「失礼します」

メイドさんたちが綺麗な揃ったお辞儀をしてくれた。私は内心拍手を送りました。それぐらい綺麗に揃った礼でしたよ！　メイドさんたちはお仕事の続きに散っていった。素早い。メイドさんとか、御付の人とか、この人たちは素早くなければつとまならないんじゃないだろうか。

「ご迷惑をおかけしました」

生真面目に鎧さんが頭を下げられますが、そこまで気にしていません。

「大丈夫ですよ」

私が口を開く前に、神官様が仰った。

私を促して、鎧さんを先頭に歩き始める。

ううっ、ピンクの空気の中に戻っていくのか。ちょっと気が重いです。吸いたくない、けれど息は止められないしね！

「これは使えませんか？」

お枝様を少しだけ持ち上げて神官様にお伺いします。

「それは強すぎます」

神官様は首を振りながら却下。ですよねー。先程の神官様の指を見たら、私は何も言えなくなりました。そういえば耐性がどうとかっていってたしね。

「物事には、原因があり、結果があります」

唐突に話し始められた神官様を、思わず見上げます。隣に立つと、私よりこぶし二つぐらい神官様のほうが背が高い。

「起こっている事象そのものを解決したとしても、原因を断たねば意味がないのです」

主語がないと、とても小さな声なのは、たぶん鎧さんを気にしているせい。瘴気の話をするわけにはいけないのは私でも分かるよ！

瘴気は魔物の残骸。

街には瘴気は発生していなかった。

じゃあ、この屋敷はどうして瘴気が発生しているのか。

つまり、ここには魔物がいる可能性があるわけで。

「でもピンクは身体に悪いんじゃないんですか？」

あえて瘴気をピンクと呼ぶ！　通じるかな。

「私たちにはアレは見えません。もちろん、他の方々にも」

通じたらしい。

「ですが、術を使うわけにはいけません。あなたの仰るとおりならば、かなり大規模な術が必要です」

すぐには浄化は無理だということですね！　了解しました。でも、目に見えないけれど体に悪いものが漂ってる、それってとんでもなく怖くないですか？　あ、だからですね。いたずらに、瘴気がありますよーといっても駄目なのか。自分で見たもの以外信じないタイプの人もいるし。難しいなあ。

神子（仮）、会話に加わりたくない

結局、廊下で勇者様と領主様に合流しました。私を待ってくださっていた様子。

相変わらずのエロ彫刻の林ですよ。領主様、集めすぎです。そして、いい笑顔で美女像の太ももをなでないでください。

思わず大注目ですよ！　メイドさんたちはあの像を日々磨いているのか。

近づくと、お二人の話が聞こえました。

「私は断然巨乳派ですなあ」

私は領主様を敵認定いたしました。この丸め！！　そうだね確かにここにある像は巨乳ばかりだね！　でも、人間の度量って乳だけでは、量れないと思うのですよ。ふっ。私が言っても何もかも空しい。

ここの屋敷はコンプレックスをびしばし刺激しまくりやがります！　そこに正座しろおおおお！　そして謝れえええ！　全世界のお姉さんに謝れえええ！　思わず力いっぱいお枝様を握り締めました。手が力が入りすぎて真っ白になる。私の厳しい視線に、神官様が引き気味です。

「で、勇者様はどこに注目されますか？」

ニタリと笑った領主様の質問に、

「……どの女性も、別々に魅力をお持ちですよ」

勇者様は無難に返しました。勇者様はひとまず、敵ではないようです。神官様、なぜ私から距離を取るの。

「はっはっは、色男は違いますなあ。こりゃあかなわん」
なんて……なんて実のないトーク！　しかも落ちもない！　ツッコミどころも分からない！　勇者様はずっとあのトークに付き合っていたのか！　なのに疲労の色がないとは……！　やはり伊達に勇者を名乗っていないのですね！　この人、できるッ！　勇者様の社交スキルに改めて戦慄していたところ、神官様が私の体調が優れないということを伝えてくださいました。
体調よりも、心がすり減っていますけどね！　領主様のせいで。

とにかく、晩餐までの間、部屋で休めることになりました。ありがたいことです。地べたで寝ることに抵抗はないけれど、部屋の中で寝れるのは素直に嬉しい。湯浴みはいかがですか、と問われ、思わず頷きました。お風呂！　私のテンションは急上昇ですよ！　わーい久しぶりのお風呂！

といっても、私たちが臭いわけではありません。星原樹の選定のせいで、実は三大欲求がある程度制限され、身体から老廃物が出にくいのだとか。いつの間に人体改造されたんですか！　全然そんな感じなかったんだけど。お、おそろしい。
しかも、衣服も例の作られた当時の状態を維持する術がしこまれているらしい。一体一着幾らなの！　そのおかげで私たち臭くないですが。旅で臭くなるかと恐れていたけど、この点は嬉しい誤算です。神子になってよかった。いやまて！　おかしい！　神子になったから旅に引きずり出されているんじゃないのっ。危ない！　神子万歳とかいいそうになりましたよ！　領主様が神子になったら欲求が制限されていいんじゃないかな？　これは嫌味ですが。

通されたお部屋には、なんと個別にお風呂が付いているそうです。セレブめ！　風呂場にぐらい歩いていきなさい！
案内役の方に導かれたのは、三階の部屋だった。お隣同士で三部

屋。同じ部屋じゃないんですね。三部屋も凄いな。

おそるおそる踏み込んだ部屋の中には幸いというか、彫刻も絵画もなかった。安心する。思いのほか落ち着いた家具と色合いだった。私の借りていた家よりはるかに大きいですよ。私は溜息を付きながら、ソファーに座りふかふか具合を確かめる。お尻を適度な弾力が包み、跳ね返します。やわらかすぎず、硬すぎず、いい感じです！

これはいいソファーだ。撫でて確かめたけど、これは皮のソファーだった。居心地がいいため、ポーッとしてしまう。元々、この屋敷ってこんな感じだったとか。いやいやいや、それはないか。今の印象がきつすぎて、他の状態を思い浮かべれないのもあるけど。

案内役の方はさっさと持ち場に帰りました。私も知らない人といると緊張するから、かなりほっとした。

さて、動こう。

私がした事は、荷物整理よりもまず窓を開けること。やわらかいまどろむような午後の光が部屋に差し込みます。家具が日焼けするかもしれないけど、ちょっとの間だったら許容範囲だよね！　カーテンを風がそよそよと揺らします。あーやっと落ち着いた。

そしてやっとベールに手をかける。

髪の乱れを直しながら周囲を見ると、やっぱり端っこにピンクがちらちら見える。それがふわりと日光に当たると消えていく。なんでこんなにもピンクムードがあるんだろう？　お屋敷が魔物にのっとられている？　それにしては街の人には変わり無さそうだし。魔物って、そんなに賢い生き物だったっけ。魔物は動物に近い、って授業で習ったし。魔物と動物の違いは、屍骸にあるそうだ。動物は屍を残すのにたいし、魔物は瘴気となり星へ溶けていく。何か死んだら溶けるって、変だよね。まるでイキモノじゃないみたいだ。

神子（仮）、会話に加わりたくない（後書き）

最後付近修正しました。

神子（仮）、世間の裏は知りたくない

窓を開けて深呼吸。

胸いっぱいに新鮮な風を満喫する。すがすがしい空気を吸うだけで気持ちがすっきりする！　窓の外に花が咲いているのか、いい匂いがふんわり漂ってきます。ベールも地味に呼吸が圧迫されるから、あまり好んではつけたくはない。けれど背に腹は変えられません。切実です。

控えめなノックが響き、私はばさりとベールを被りなおしてから「はい」と答えた。ベール被るだけで神秘の神子へ変身完了です！　そういえば晩御飯どうしよう。部屋でいただけるのかな。顔は、かなり、出したく、ない！！！　でもご馳走は別ですよ。きちんといただく！　食べ逃したくないです。

私の返答にドアを開けたのは神官様と勇者様だった。メイドさんは付いてきていない。思わず壁や柱の影を見てしまいました。あの人たち、隠れるのが凄く上手そうだし。むむ、ベール越しだとあまり分かりません。廊下にピンクが見えるのはあえて気にしない！

神官様はいつも通り、勇者様は相変わらず無表情へ戻っている。さっきまでの笑顔はどこへ行った。笑顔を探す旅に出たくなるぐらい、見事に無表情です。たまには私たちにも笑顔の無料配布はありませんか？　笑顔が惜しいのか……？　いや、違う！　さっきまでで表情筋を使いすぎて、顔がお疲れなのかもしれませんね。顔面マッサージ、いたしましょうか？　華の姫様秘伝の、顔マッサージです。美容と健康にいいらしい。

同情的な目線でしみじみしながら勇者様を見ると、微妙に怪訝そうな顔をされた。視線、ベール越しでも気付くんですね！　見ていただけです、別に用ではありませんよ。

「先程の件で、失礼してもいいですか？」

どうぞどうぞ。私はお二人を招いてドアを閉めました。ソファーに誘導したその足で、窓をさらに全開！　カーテンも限界まで開きます。お二人が入ってきた時に纏わり付いていたピンクを日光消毒ですよ！　見事な溶けっぷりです。ああ気持ちいい。

そして、再びベールを取って確認する。うん、部屋の中は綺麗に消毒できたみたい。ベールは手近に畳んで置いておこう。いつメイドさんがくるか分からないしね！

私は部屋に設置されていたティーセットを取り、紅茶を入れ始める。さっきメイドさんにお湯を貰ったのだ。丁度喉も乾いていたし。

窓を開けまくっていた私の一連の行動を、不思議そうに見ていた勇者様が、

「あれの対策か？」

と仰る。伏字、了解しました！　瘴気とは口に出さない方がいいんですね！

「はい、さっき日光消毒しました！　この部屋でようやく安心して息が吸えます。どんどん吸っちゃって下さい！」

私は元気よく答えました。

すると神官様は、

「確かにこの部屋の空気は軽いですね」

と周囲を見回しながら納得した風に呟かれた。

どの部屋も日光消毒したらいいのに。

ついでにエロ彫刻もエロ絵画も、日光にさらして退色や磨耗させてしまえ！　そのほうが世界にとって平和です。特に私にとって平和になります。

紅茶の水色（すいしょく）が明るい紅に染まった。うむ、淹れ時である。カップに注ぐと、ふんわりと香気が部屋に広がった。

まず、私の隣の勇者様の目の前に紅茶を置く。

「どれぐらいの濃度で見えた？」

蒼い瞳が厳しい色を浮かべている。

確かに大問題だよね。神官様の前にもお茶を置き、自分のカップも持って座りました。光景を思い出してみる。

「あの廃墟の半分以下です」

その答えにお二人とも首を捻った。どうも、いまいちピンと来ない様子。

「あそこが濃すぎたのは、分かるんですがね」

私の喩えが悪いんですね！　分かりました。

何かないかなと部屋を見渡した私は、丁度いいものを発見する。

私は横に置いたベールを手に取った。

「あの廃墟は、これの四枚重ねぐらいでした」

私はベールを折りたたんでお二人に見せる。

向こう側が本当にわずかに見えるぐらい。腕ぐらいの距離だと大体のかたちしか判らない。本当にあの時はひどかった。ほとんど前が見えなかった。

「で、ここはこれぐらいです。二枚ぐらい」

ちなみに私の普段被っているのは二枚です。

うっすら向こうの色が分かる程度。視界は良好とはいえない。でも、先が見えないほどじゃない。

「……ここの街の景色はどれぐらいですか？」

神官様は深刻な声で質問を重ねる。

「ベール無しです。ピンクはこのエロ屋敷の中だけです」

私の即答に、勇者様が口を開いた。

「女の子がエロとか言わない」

内容とは全く関係がなかった。本当にたまにお父さんみたいですね！　私は頭をフル稼働させて言い換えました。

「……じゃあ、わいせつ屋敷」
勇者様が沈黙した。その反応はオッケー？　それともアウト？
「淫猥、わいせつ、卑猥、いやらしい、性愛表現が露骨。まあ、まだまだ様々な表現はあると思いますが、もうエロでいいんじゃないですか？」
神官様は時折ざっくばらん過ぎる。この人もどうなの。
「まあ、この屋敷の装飾に関してはさておき、濃度が問題ですね」
あ、話題を放棄した。ともかく、濃度が高いのが屋敷の中だけということは伝わったらしい。
私が思っていた以上に、かなり濃度が高く事態は深刻らしい。
神官様は顎に手を当てながら、
「領主殿は、良くも悪くも底の浅い方です。何か深い策謀があって魔物を使っているというタイプではない」
と、実も蓋もない分析をされました。この容赦ない言い方には、勇者様はつっこまないんですか？
「魔物に関しても、恐らく先代の置き土産か、もしくは誰かに利用されたか、それか知らずに魔物を屋敷に入れているかですね。先代は深い謀略に長けていた方らしかったと聞いてますし」
と苦く洩らされました。
「色々、調べていらっしゃるんですね」
私が感嘆しながら言うと、神官様は、
「本来身分が低い私が王侯貴族と渡り合うには、知識だけが身を守る武器ですから」
と苦笑された。
そうご自分を低めて仰ることでもないと思うな。知識だけでも凄いと思うし。でも、一体どこからそんな情報を得るんだか。私の頭では何も覚えられなかったよ！　どんな脳みそをしているんですか！　その記憶力を分けていただきたい！
私が微妙な表情をしていたのを、説明が飲み込めていないと思われたみたい。詳細説明が始まりました。

「先代については……たとえば、そうですね。この屋敷の周りに、とても高い壁があったでしょう？」

そうですね、かなり高い壁がありました！　お金掛かってるなあ、と見上げましたとも！

「先代は増税を重ね、それで得た資金で星都で暗躍したようです。その際、領民が反乱を起こし領主館を襲わないように堅牢な建物を作ったとか。噂かもしれないと思っていたんですが、実際に建物を見ると信憑性が出ました。この館は外からは攻めにくい構造になっています」

そ、そんなところから色々読み取られるのか。純粋に凄い！

「先代はかなりの守銭奴で、女は財産を食いつぶすと仰って結婚もしませんでした。貯めた財産を分与したくないのか後継者も決めてなかった」

心のメモ帳に書き記しますが、多分半分以上忘れそうです。

「先代はそのまま突然死しました。病死だったそうです。遺言も家族ものないため、所領は一度、星都預かりになったんです。その後領主不在も困るので星都側で血族より後継者を選出した。つまり、今の方がその選出された領主様になられるんですよ」

私の敵、あの丸い人ですね！　ただの贅肉、もとい、ゼイタク丸いおじさんじゃなかったのか。

選ばれたぐらいなので、一応人品に問題はなかったらしい。趣味には問題があると思うんだ！

「つまり、一応星都も調べて彼を領主にしているのです。そこまで問題はないと思うのですが……人も、変わりますからね」

神官様は溜息をつく。

「ともかく、情報が足りません」

勇者様も同意した。

「俺の剣も修理が先だな」

そういえば壊れたって仰ってた。廃墟から街までの道のりは、大掛かりな浄化をしたせいか魔物が全く出なかった。なので、勇者様

の剣は壊れたと聞いたがどんな風になっているか知らない。
「剣って、壊れるものなんですか？」
「良く壊れる」
私の疑いの眼差しに気付いたのか、勇者様は左に下げていた剣を鞘ごと抜き取り、ごとりと机の上に置いた。私は一度ちらりと見て、思わず二度見した。

えっと。
……剣って、柄が握りつぶされるような柔らかいものなんですか？

神子（仮）、見えないものは見えない

「見事につぶれていますね」

神官様、それは私でも見たら分かりますよ！

持ち手にあたる柄の部分が、ぎゅっと握りつぶされたパンみたいなことになっている。パンは握りつぶしたらいけないよ！　食べ物で遊んではいけません。

私はぐにゃぐにゃのそれを、恐る恐る指で突付いてみました。

冷たい！

硬い！

さてはこれは金属ですね。パンじゃない！

まあ、見たら分かるけど。……金属って、つぶれるものなんだあ。へー……って、さすがにお馬鹿の私でも分かりますよ、ちょっと普通じゃないって。

さては犯人は勇者様ですね！　勇者様の剣だから、あたりまえだけど。

「潰しちゃったんですか？」

私の問いかけに、勇者様は溜息と一緒にああ、と返事をくださいました。浮かない様子に見える。何でかな。

「力持ちですね」

凄いなあ。しげしげと剣を眺めながら、私はしみじみ呟きました。そりゃあ私を片手で持って走れるよ。体力ばかりか筋力も凄いんですね！

そして重要なことを思いつく。

「そうだ！　今度、ビンの蓋が開かないときは勇者様にお願いするので開けてくださいね！」

私のお願いに、何故か凄い微妙な空気が流れました。

え、何か間違えましたか？

おお、勇者様にビンを開けさせるとは何事かってやつですか？
でも、ビンの蓋は開かないと困りますよ。そのかつての困窮を私は訴えてみた。
「あれが開かないせいで、朝ごはんに何度ジャムが使えなかったことか……そしてその日一日が、どんなに憂鬱だったかっ。朝ぐらい、美味しいもの食べたいじゃないですか、なのに、ビンが開かないせいで一日憂鬱なんですよ！」
私はずっと一人暮らしで、食事もよく作っていた。パン屋のおばちゃんがまかないでパンをくれるんだけど、大体は味がなくて噛み応えがありすぎる黒パンなんだ。それにあうジャムを自作してちょっとした楽しみにしていた、だけど密閉するためにビンに入れたら、蓋がよく開かなくなってジャムを食べられない事態が何度も発生。そのたびに涙を呑んだね！　お湯であったためたらいいとかいうけれど、正直燃料もお湯も、もったいない！
私の力説に勇者様は幾分ぽかんとしている様子。
あ、珍しい表情ですね。ジャムの重要性はそこまでビックリすることだったかな。それとも私の食べ物への執着に引いちゃっていますか？　すみません、唯一の楽しみなんです。
勇者様の反応に困惑する私に、神官様が笑いながら、
「まあ、あなたらしいですね」
と仰いました。
最近大体のことが、これで片付けられている気がしないでもない！
私が首を捻ると、少しだけ笑いを引っ込めた神官様が、
「怖くないですか？」
と仰る。
主語を言って下さい主語を！　推理力がないのは自分が一番よく分かってるからっ。
「剣ですか？　確かに斬られたら痛いと思いますけど」
あ、言わないけど勇者様が無表情に変わる瞬間も怖いです。私的に

ホラーだと思いますよ！
神官様を見ると、呆れと笑いが混じった表情です。呆れないで！
解説して！
「こんな風に剣を潰す俺の異常さが怖くないか？」
勇者様が長い言葉を喋った！　それにビックリして動きを止めてしまいました。

沈黙が流れる。
えーと、いや、問いが想定外だったことにも驚いていますよ！

これは真面目な問いだ。
緊張感に喉が渇く。
私は頭を絞りつつ考える。どうせ言葉を飾ることも出来ないから、そのまま言うしかない。

「怖くないです」

これはちゃんと言わなければいけないことだって思う。
だからちゃんと目を見て真っ直ぐ言いました！　正面から見た勇者様の威圧感は、相変わらず半端ないけどっ。
「私を抱え上げる時はちゃんと痛くないようにしてくださってましたし、なによりも、この力で私が叩かれたこともないですし」
部屋の隅に立てかけたお枝様を見る。
あの枝も危険だ危険だと皆さん仰るけど、全く私には実感が沸かない。
多分それと似たようなものかもしれない。傷つけられたことがないから、実感がない。うがった考えをすると、自分に危険がないから、怖くないのかな。そこまでいったら、ちょっとひねくれすぎな思考かも。

たとえば、目の前に凄く怖い猛獣がいる。今は大人しくしているけれども、いつ不意を付かれてがぶりと食べられちゃうかもしれない。猛獣がなにを考えているか全く分からないし、理解できないから。

もし勇者様に恐怖を感じるとしたら、そんな怖さだろう。想像はつきます。乙女の想像力をなめてはいけませんよ！

でも実際、勇者様はそこまで怖くない。たまに突拍子もない行動をとりますけどね！

この人は人を傷つける理不尽な事はしないだろうって、そのあたりは信頼している。拉致されたばかりの頃は意味が分からなかったけれど、最近は対応がやわらかくなってきた気がするし。でもなんで初めいきなり拉致されたんだ。今更不思議に思ってきた。それの疑問は取り合えず横においておいて。

私は考えながら、言葉を継ぎ足した。

「それよりも、街を出てからずっと見るもの全部が新しいから、なにがおかしくてなにが普通なのかさっぱり分かりませんよ！　それに関しても、あー、力持ちなんだー、ぐらいの感想しか浮かびません」

答えながら、変な問いだなって思う。何で勇者様が自分が怖いか、とかなんて話になるの？　なにかにひっかかる。すっきりしない！

上手くいえないもどかしさとは別の違和感。それを探して、勇者様の青い瞳を正面から見詰めた。睨めっこ勝負ですよ！

「……そうか」

いつもと同じような言葉だけど、少しだけやわらかい響きが混じっていたと思う。勇者様は私から目を逸らして横を向いた。

目を逸らしたな！

む、この睨めっこは私の勝ちですね。戦いはいつも空しい。

ふと気がつけば、神官様はマイペースにお茶を飲んでいる。いつ

の間に話題を振るだけふって離脱してたの！
　真剣な話をしたら確かに喉が渇きますよね！　丁度よい温度になったお茶をぐいっとあおる。いいお茶だ！　鼻に抜けていく甘い香気が、舌に広がり果実のみずみずしい味をかもし出している。お茶独特のちょっとした渋みがアクセントをそえて、大人の味を演出していますね！　さすが領主様の館！
「いい飲みっぷりですね」
私の空っぽになったカップに、神官様がポットに残っていたお茶を注いでくださる。
　ここは酒場ですか！　美人のお酌はいいねぇとか、親父っぽく言うべき？　もう一杯、ぐいっといっとく？
　ポットを置きながら神官様は真剣な表情になる。
「こんな話をしたのは、今後戦闘が行われる可能性が強いためです」
おっと、まさかの真面目な話の続きですよ！　背筋を伸ばしました。
「今までうすうす感じていらっしゃると思いますが、勇者の能力は尋常ではありません。あの力は、あなたに向けられることはありません。それを知っていただきたかった」

　私はその瞬間閃いた。

　わかった！　さっき引っかかっていた違和感。
　勇者様はいつも人を助けているのに、どうして自分が怖いかなんていうのか。
　まるで、今までひとに怖がられたことがあるみたい。
　私が怯えることが当然みたいな話の流れに、違和感があったんだ。
　……変なの。もやもやをごまかすために、私はもう一杯お茶をあおった。
「神官様、おかわり！」
「のみすぎですよ」
　神官様は苦笑をしながらお茶を注いでくださいました。お茶は美

味しいけれど、もやもやっとした気持ちは、なかなか消えなかった。
お、お茶の飲みすぎじゃ、ないんだからね！

神子（仮）、それは剣とは認めない

美味しいお茶といっても、飲むのには限界がありますよね！
そんな基本的なことをすっかり忘れていた、私を指差して笑えばいいよ！　今、喉までお茶が一杯です。やり過ぎた。明らかにやり過ぎた！

私がお茶のせいでいささかグロッキーになっていると、神官様が「さて、」と呟きながらポットを置き、剣を手に取った。すらりと引き抜けば、ぼろぼろになった刃が見える。柄がぐちゃぐちゃなだけじゃないんですね！　刃にひびが入り、所々欠けているのが分かる。ぴかぴかの剣じゃなくて、うっすらとした曇りが使い込まれた雰囲気をかもし出してる。こんなにぼろぼろだったら、鍛冶屋のおじさん泣いちゃいますよ！

その刀身をひとしきり眺めて、神官様はテーブルに剣を戻しました。

そしてとてもイイ笑顔で勇者様に問いかけた。

「で。どうしてこの剣はここまでつぶれたんですか？」

にっこりと笑いかける神官様の笑顔に、一部の隙もありません。目が獲物を狙う肉食獣みたいに鋭いですよ！　つまり怖い。

私は椅子ごと思わずドン引きました。床にイスが磨れて音がしたけど、お二人ともこちらを見ません。睨めっこの最中です。私に構っている場合じゃないんですね。分かりました、大人しくしています！

神官様はさらに質問を重ねます。柔らかい口調が、逆に恐怖をあおります。

「戦闘の時はつぶれていませんでしたよね？　なにがあったか私は聞いていないのですが」

爽やかなのに、黒い。

相反する二つが入り混じった時、こんなに怖いものとは思いませんでしたあああああ！　正直パン屋のおかみさんが怒ったのより怖い！　逃げられない！

あ、勇者様が目を逸らした。なんだかこういうところを見ると、このひとも怖いものがあるんだなって思います。ちょっぴり親近感沸いて和んだ。こんな状況ですがね！

戦闘の時っていったら、ピンク発生前ですよね。じゃあ、私を迎えに行って、帰ってくる間に何かあったのか、それともこの街に来るまでの間になにかあったのか。実際に勇者様の戦闘を見た覚えが全くないので、けんがどうなっていたか分かりませんでした。

神官様が拳でテーブルを叩きました。

さほど強くなかったようで、それほど食器は揺れません。さすが気遣い王です。こんなところにも自制が効いてるんですね！　でも、テーブルを叩くのは私もビクッとするよ！

「情報の共有の重要性はいつも話してたと思うが、相変わらずその黙り込む癖を止めろと言ってるんだ。幾ら繰り返しても忘れるなら、手にでも書いとけ！」

えっ、……誰？

私の目が点になったのも、仕方ないことだと思いませんか！

神官様の言葉遣いがかなり乱れていらっしゃいます。あわわわわ。丁寧語がすっ飛ばされてますよ！　初めて聞いたけど、それだけにお怒りが分かりますねっ。つっこみたいけどつっこめないこの空気

よ。
　この、誰かが怒られているという空気がなんとも苦手。がたがた震えそうになります。しばらく沈黙が降りてくる。
　勇者様は僅かに沈黙した後に、ようやく、
「悪かった」
と一言だけ零しました。
　神官様は怒りを抑えるためか、ぐりぐりとこめかみをもんでいます。
　私は口を挟んでいいんでしょうかっ。
　そもそもここにいていいんでしょうかっ。出来ることなら部屋のすみっこにいますよ！
　神官様の仕草を見ながら勇者様は、
「……あとで話す」
とだけ付け加えられました。神官様はひとまずそれで納得することにしたようです。
「わかりました」
と溜息混じりに仰います。そして、まだ苦い表情のまま、私に向かい、
「取り乱して申し訳ありません」
と仰った。
　忘れられてはなかったんですね私！　私は硬直したままぶんぶん頭を振ります。いいえいいえ、ダジョウブデスヨ。この人も怒らせてはならないと、私も手に書いておきます！
「そもそも勇者は勝手に何でも抱え込む性質がありますので、何かがあってもこちらから問いただされない限り口を開きません。注意してくださいね」
私が感心して頷いていると、勇者様はまた目線をずらしました。気まずさですね！　だんだん私も分かってきました。やっと緩んだ空気に、私は話題を強引にさらいました。

「お二人は、いつから一緒に旅をされているんですか？」
二人とも不思議そうに私を見ます。
「あれ、お話してませんでしたか？」
と神官様。言葉遣いがいつも通りに戻っています。話題を変える作戦は成功したようです！

神子（仮）、聖剣は空想の中にしかない

少し落ち着いた神官様は、苦笑いしながらお話してくださいました。

「勇者と私は、同じ村で育った幼馴染です。私が勉強のために星都へ行くまでは大体一緒に行動していました」

それで無言の勇者様相手に意思疎通ができているんですね！　納得しました。

「先程は……今まで数年にわたって言い続けていたことをまた忘れられて、つい頭に血が昇ってしまいました」

ああ、唐突にお怒りになったんじゃなくて、今までの地味な蓄積だったのか。納得。怒りっぽなしも体に悪いけど、たまには抜かなきゃですよね。少しずつ蓄積していくストレスの方が爆発した時の威力は強いし！　これは勇者様が悪いな、と勝手に知らないのに決め付けてみる。

勇者様は聞いてないフリをしてお茶を飲んでいます。

まあ、自分の話で盛り上がられたら、強引に入るか知らんフリをするしかないと私も思いましたけどね。お城でよくその気持ちを味わいましたッ！　私を話題にしても何もでないよ！

神官様のお話に納得しつつ、勇者様をしげしげと見て、今まで気にしなかったあることに気付いた。多分、さっき驚いて後ろに下がったせいで、イスがずれたから見えるようになったのだと思う。

勇者様はテーブルに上げている物のほかに、もう一本剣を下げている。ああそういえばそうだった。

「あれ？　勇者様は、剣を二本お持ちなんですよね？」

修理しなくちゃ大変だな、と思っていたけれど、そういやもう一本あるならいいんじゃないかな！　安易ですか？

私が何の話をしているか、すぐに分かったらしい。勇者様は腰からそっちの剣を鞘ごと抜き、私に差し出してきました。また重かっ

たらいやだなあと構えながら受け取れば、思った以上に軽くて驚いた。

飾り気のない、けれど壮麗な紋章と不思議な文字が刻み込まれた柄、無骨な鞘。もちろんこっちの柄は無事ですよ。

「それは普通に抜けませんよ」

神官様が仰います。これだけ軽いんだったら、私でも剣が使えそうな気がしてくる！　気の迷いだと思うけどね！

へー、コツがあるのかな？　と何気なく鞘を握り、柄を持って引っ張ってみた。

きゅぽん。

とんでもない軽い音をさせて、剣は抜けました。

っえええええええ！！！

剣、抜けましたよ！　抜けましたが！！　ジャムの蓋より軽かった！　なんですと！

しかも、刃が……無いです。鞘のほうを思わずさかさまにして振ってみました。出てきません。これ、柄だけだよ！　不良品だよ！

何で勇者様これ持ち歩いているの？　物持ちがいいだけ？　それとも……まさか、私が壊したんじゃないよねっ。

「さすが神子ですね。抜くことは出来ましたか」

動揺のあまり、がくがく震えながら目線を上げました。

「こ、こ、こ、こ、」

私の動揺っぷりに、神官様が落ち着いてとまたお茶を入れてくださる。ガッ！　とカップを雄雄しく掴み、ぐいっと一気飲みした！

さっき喉までお茶で一杯だったけどね！

「壊れましたああ！」

頭を抱えながら叫ぶ私に、勇者様は若干引きながら、
「元々、刃は無い」
と仰いました。なんですと？
「折れない剣の話を聞いたことがありますか？」
「えっと、始原（しろ）の勇者様が作られた聖剣の話ですよね？」
心と魂が折れない限り、その剣は折れる事はない。
星神殿の奥で神代からひっそりと立ち尽くす、神の一振り。色々華麗な伝説がある代物らしいけれど、噂と伝説でしかないものです。というか、鋼がそんな昔から保存できるのか、っていう謎もあるけどね！
あ、このパターン、読めてきた！　フフフ、超町民を体得した私は、もう驚かないよ！
「これがその聖剣です」
ですよねー。この話の流れからいうと、そうですよねー。あっ、私聖剣に指紋つけた！　いい記念です。
でも、何でわざわざこの剣と別に、普通の剣を持ってるんだろう？　幾ら体力セレブだといっても、邪魔じゃないかな？　折れない剣があるなら、使えばいいのに。
「これも万能ではないということらしいですよ」
神官様が仕草で剣を戻してと仰るので、ぎゅっと柄を鞘に押し込んでみた。これでちゃんとしまえたよねっ。引っ張って確かめる。
よーしよしよし、ちゃんと締まって……きゅぽん。あっ。思ったより簡単に抜けました。それを三度ぐらい繰り返した私。ちょっと二人の視線が生温くなりました！　そんな目で見ないでください。
見かねた勇者様が手を伸ばしてひょいと剣を取り上げた。かちり

ときちんと鞘にしまった様子。初めからお願いすればよかったね！

はっはっは。はう。どれだけ不器用なの。

「これは……使うと体力やら色々奪うからな。鞘から抜けても、発動するためには剣と契約が必要になる」

まあ、私には関係の無い話ですけれどね！

◆兵士E、狂気への融解（前書き）

※　シリアス、残酷表現、ドロドロ、ホラーがあります。
動物っぽいものに対する、残酷な表現があります！
苦手なかたは即退避してください。

◆兵士E、狂気への融解

オレは正直イラついていた。手に提げた桶の重みすらオレの神経を逆なでる。乱暴に歩けば歩くほど桶の中の水が跳ね上がり、さらにオレの感情を針で刺すようにちくちくと刺激しまくる。

クソ、何で俺がこんな仕事を。あいつの仕事だろ！

朝から先輩には怒鳴られる上、今日も面倒な仕事を押し付けられた。水汲みなんてやってられるか！　桶の中身を樽に移し、苛立ちのままに桶を投げた。

けたたましい音を立て、それは壁に跳ねかえり、檻に当たる。

檻の中にいる気持ち悪いひよこのようなイキモノが、ギャアギャア騒ぎ立てやがる。全身がウロコに覆われた鳥のようなイキモノだ。ひよこの興奮は納まらない。それがまた俺の怒りをあおった。それらが入っている檻を苛立ち紛れに蹴飛ばす。鋼が鈍い音を立てるが、それ以上に自分の足も痛い。檻にまで笑われているようで、全くいい気がしなかった。

この屋敷で働き始めて四年になる。

もともと商家の次男坊だったオレは、正直言ってやっかいものだった。

優秀な長男が跡を継ぐからお前は自由にしろ、時期が来たら出て行け。常々率直に言い渡されていたのは、優しさだったのだろうか。オレには未だに分からない。すがりつくような気持ちで星神殿の神官による才能検査を受けたが、見事に空振りだった。神殿に納めた

お布施が途端にもったいなく思えたのは仕方がないだろう。何も持たないオレはなりふり構っていられなかった。あらゆるところに頼みこみ、実家の伝手を使い、何とかこの屋敷にもぐりこんだのだ。

毎日ぼろぼろになりながら訓練をこなし、一年経った頃、鎧を与えられた。重いそれは責任が鋼の形をしたものだった。この時点から、正式に領主様の私兵と認められるのだ。だが、鎧を貰ったといっても取り立てて変わる事は無い。訓練と仕事の繰り返し。同僚と仲良くなるつもりは無い。オレは淡々と予定を消化していた。

そんな日々に、少しだけ変化が訪れた。

鎧の兵士さんって、誰が誰だか分からないわ。

とあるメイドにいつも言われる。彼女はオレによく話しかけてくれた。取り立てて美人ではないが、笑った顔が可愛らしかった。彼女は俺を見るたびに笑って挨拶してくれる。まさかオレに気があるのかと思っていたが、ある日先輩と街で腕を組んでいる光景を見てしまった。つまり、恋人の後輩を気にかけていただけだったわけだ。オレがうぬぼれて勝手に舞い上がっただけだった。

オレはそれで彼女のことを諦めたつもりだったが、だが、言い知れぬ怒りのような感情が常に胸の中にくすぶっている。彼女への感情を、先輩は察していたらしい。手を出すなと釘を刺され、地味に嫌がらせをされる日々が続いている。

もういやだ。ここを出て行きたい。でも、オレが悪いわけじゃないだろ！　何でオレが出て行かなければいけない？　罰を受けるならあいつらだろう。何かを壊したい。めちゃくちゃにしてしまって、高笑いをしてみたい。ああそうだ、先輩の顔をボコボコにして、彼

女をオレのものにするんだ。いうことを聞かなければ、力づくでも従わせればいい。オレをバカにした罰だ。それぐらい、神も許す！
正当な報復なのだから。

オレの背後で、まだけたたましくひよこどもが喚いてやがる。

「絞め殺すぞおまえら！」

ひよこに吠えてみたが、一向に静まらない。
クソ、ひよこまでもバカにしやがって！
ガンガン檻を蹴ると、怯えたのかひよこどもが奥に固まった。それを見て、俺の心がざわめいた。いいことを思いついた。

どうせこいつらは餌なのだ。その餌やりを今したところで文句は出ないだろう。俺は自分の口元が歪むのを感じた。横においてある網でひよこもどきを一羽救い上げる。今からの運命を気付いていないのか、ひよこはいまだにオレを馬鹿にしたように騒ぎ立てやがる。がたがたと網が揺れるが、オレは離す気は無い。そのまま、隣のさらに大きな檻の中に投げ入れた。

低い唸り声を上げ、その中の獣がのっそりと立ち上がる。鋭く黄色い歯は、大人の男の指よりも太く強い。どんな肉でも引き裂くだろう。灰色の剛毛は僅かに青みがかっている。狼型の珍しいイキモノだそうだ。ただし、でかい。陸馬なみの体格をし、それでいて動きは俊敏である。先代の領主がペットとして手に入れたとかとにかく珍しい種類だそうだ。俺は正直こいつは好きではない。すぐに歯を剥き、世話をしてやっているのに懐かない恩知らずだからだ。

だが、今、この瞬間だけはこいつが好きになれそうだった。
さあ、餌だ。食っちまえ。

長い黄色の舌をだらりと出しながら、のっそりと立ち上がる。ひよこは一羽、けたたましく騒ぎながら檻の端に逃げた。しかし、檻の隙間は開いているようで開いていない。星術が掛かった檻だとか。

ひよこは死に物狂いで暴れるが、あいつはゆっくりと獲物を観察するのだ。そして、唾液まみれの長い舌で巻き取り……。

ひよこの断末魔が響いた。

オレはその光景を笑いながら見ていた。実にいい。気分がすっきりする。一瞬、獣の口から何かが溢れたような気がしたが、見間違いだと思う。こんな暗いところ、しかも使用人しかいないところに置く蝋燭はないのだ。

「ほらよ、まだまだこいつらはいるぜ」

俺は笑いながらひよこを獣の檻に入れる。獣は噛み付いたり、引っかいたり、押しつぶしたりとひよこをいたぶるメニューをバラエティに富ませようとご執心のようだ。それにしても、獣の癖にうまいことをやる。一羽もこいつは逃さなかった。餌といっても、食い散らかすのではない。あくまでいたぶり、愉しむのだ。

初めの頃は残酷すぎて受け付けなかったこの光景も、今は好ましいものだ。なぜ、昔こいつのことを嫌っていたのか、思い出せない。

「フヘヘッヘ、お前は最高だ」

獣の檻を撫でる。こいつは偏食がひどい。

様々な動物や獣の肉を与えたが、特に食することが無かった。商人どもがどこからか見つけてきたこの気味の悪いひよこを与えるようになってから、いたぶってから食べているようだ。ひよこをあれだけいたぶるなら、血が流れそうなものだが、いつも綺麗になくなっている。食っているんだろう。こいつがすみずみまでねぶるほど

ひよこが好物に違いない。食べかすも排泄物も散らかさない、いい獣だ。まさにペットとして理想的ではないだろうか。

「そうだ、お前の世話をしているのはオレだ。オレが飼い主だろう」

オレは素晴らしい思い付きをする。こいつを連れて行けば、先輩など一ひねりだ。面倒な上司、オレを馬鹿にしたメイドも、ひよこのようになるに違いない。俺はその妄想を浮かべ、うっとりとする。素晴らしい光景ではないだろうか。それは、この檻をあければ実現するのだ。手軽に実現する妄想に、オレは興奮した。

「ここから出してやる、そして、オレに楽しいものを見せてくれ！」

オレは腹の底からわいてきた笑いの衝動そのままに笑い転げながら、腰の鍵束に手を伸ばし、躊躇いなくこいつの檻を開けた。オレが檻をあけるのをじっとあいつは見ていた。よしよし、分かってるじゃねえか。

オレは表情を緩めながら扉を全開にする。あいつは、嬉しさにはじけるように、オレに甘えて飛び掛ってきた――。

◆【1／Ｓｈｒ】、結果の観察（前書き）

※流血、残酷な表現があります。

◆【1／Shr】、結果の観察

血が散る室内に、フードの人物は立っていた。

獣の牙、爪の跡は石の壁、人間の体を問わず刻み込まれている。先程立ち去った狼型の魔物の力を示していた。異様な室内である。

しかし、そんな異様な場所にもうろたえることなく、怒りも悲哀も無くただ観察者の眼差しだけを持ちながら、彼は立っている。

彼の足元には、獣に引き裂かれた哀れな男が唸い続けていた。この屋敷の兵士である。鎧は彼の命を守るのには役に立たなかった。明らかに命の炎は消えかかっている。その流れる血をとめることも治療もフードの男はしない。ただ、観察するだけだ。

「瘴気に狂ったか」

足元の男は、明らかに瘴気に犯されていた。

瘴気酔いの症状は、以下の通りに上げられる。

判断力の欠如。痛覚の麻痺。そしてもっとも恐ろしいのは人の心において外してはいけないたがを溶解してしまう作用。人が獣になる。――むしろ、魔物になる、というべきか。

身体をずたずたにされながら、うつろに唸う男を見下ろしながら彼はひとりごちる。

「思ったよりも、侵食が深いな」

考えを廻らせる。

ふと彼が気がつけば、いつの間にか部屋は静寂に満ちていた。

既に男は沈黙していた、永遠に。見開いたままであった瞳を指で閉じてやる。狭量ではない、それぐらいは彼とて行う。男はどちら

にせよ、間に合わなかった。瘴気による魂の融解が進みすぎていた。既に男の命は無く、魂は循環の旅に消えていった。あのまま生きるより、そのほうが幸いであるだろう。死という神の祝福に抱かれるほうが。

ギャア、と一羽だけ残っていたひよこが騒いだ。その方向へ振り向かぬままに術を投擲する。

「Ｈｒ（はり）」

白く輝く針に貫かれ、ひよこは沈黙し、靄（もや）となって消え去った。

「魔物の餌に魔物を与えていたか」

異様なひよこもどきは、正しく魔物であった。魔物は死ねば瘴気になるのみだ。肉は残らない。

恐らく誰も気付かなかったに違いない。狼型のあれは、殺すのに愉悦を覚えていても食うことに喜びをえていたのではなかったということに。

魔物の主食は人間だ。それ以外にはない。そう決められているのだから。

これだけ瘴気が蓄積すればたやすく人は狂う。先程の魔物は瘴気を取り込み人を食い、普通とは違う変化を遂げているのだろう。

「さて、どうするのかな深蒼（あお）は」

死の沈黙が包み込む室内に寂寥を伴い響く。彼はマントを翻すと、空気に溶けるように消えた。

勇者様達は色々調べてみるとのことで、私の部屋から帰っていきました。

結局のところ、お二人は変な感じは受けていないそうです。でも、私が主張するピンクについてはあっさり信じてくれた。出所をまず探らなければ、との神官様の言葉を思い出します。どっから出てるんだろう。あんなピンクが噴出しているところがあったら、近寄りたくないです。いかがわしいお店とかだったら演出でありそうですけど！　ピンクの霧で効果的な演出です。怪しいムード大盛り上がり！　そういったえっちなお店は領主様が詳しそうですがね！　偏見じゃないよ！　さっきなんか勇者様に一生懸命お話していた！　耳に入ってきたから仕方ないよねっ！　勇者様も神官様もスルーしていたけど、興味はあるんだろうか。今度聞いてみよう。

部屋を出るとしたら、ピンクの中を突っ切ることになるんだよね。左手に貰ったお守りはまだうっすらと形を残しています。さっき試しにピンクの霧の近くに行ってみたら、霧が私を避けた。お守りの効力凄すぎです！　さすが神官様！　しばらく楽しいので霧に手を伸ばして避けられるを繰り返してた。ちょっと楽しかった。で、我に返って頭を抱えました。なにしてるの私。

お風呂どうしようかなあとか考えながら、ベッドに寝転んでみる。お風呂はいってないけど、ベッドカバーの上だったらいいかなと思って、普通に寝る方向じゃなくて横から仰向けにごろごろ。金糸とかの刺繍がごわごわしているけど、それを差し引いても素晴らしいベッドですよ！

なんだこのベッド！　広すぎるじゃないか！　私が三人寝ても大

丈夫だよ！

一般庶民用のより縦も横も二倍あります。ふかふかだしね！　丁度いいマットレスの具合だ。

ふかふかに包まれたまま、先程の話を思い出してみる。

幼馴染かあ、いいですよね！　なんか、こう気心知れてる感じが！　お怒り神官様は丁寧語じゃなかった。神官様が何で丁寧な言葉を話してるのか聞いてみたら、都会ではいろいろあるんですよって笑顔で言ってた。色々ってなに！　濁された部分が怖いです。

どんな村でお二人が生活していたのか気になります。あんなキラキラした感じの人がいる村ってどんなんだ。どう見ても職業村人にはなりそうにありません！　町民みたいに地味に生きていくには、キラキラは不要だからね！

それにしても幼馴染かあ。どんな感じなんだろう？　私には幼馴染っていないから分からない。

私って小さい頃なにして遊んだっけ。

友達いたっけ？

つらつら考えても思い出せない。えっ、そろそろボケがはじまったのかあああ！　友達とかいたっけ？　あれ……、本格的に記憶喪失な気がしてきましたよ！　そのうち思い出すかなあ。忘れっぽさには自信があります！　友達いない人だったっけ！　うわ！　寂しい人生です……。

あー……眠い。

このまま寝ちゃって大丈夫なんだろうか。またなにか用事があるかな。領主様と一緒にごはんとか言われたら、生ぬるい笑顔で断りそうだ。ストレス的な問題で！

ピンクに気が張っていたのか、今は反動でぼんやりしている。たぶん瞼を閉じたらそのままウトウトしちゃうはず。

あー……お茶でおなかがだっぷだっぷですよ！　まだ治まりません。

絶対、腹回りの大きさが増えているに違いない……。後でトイレ行きたくなったりして。さっきはとっさにあの場所を離れたい一心でトイレの話題を出したけど、本当は行かなかったし。またトイレ行きたいですと言い出したら、私どれだけ我慢できない子だと思われるのか！！　今更思い出したけど、勇者様は私がトイレに行ったと思い込んでいるのかな！　いやあああ！

ひとしきりもだえながらゴロゴロとベッドを転がりまくります。

いやあ、ベッドが広いって、いいですよね！

転がりすぎて息が上がった！

全力投球ですよ！

窓からいい風が吹き込んできます。

ほんとに眠い……。

うと、と瞼が落ちかけた瞬間、遠いところで人の声が聞こえた。

……なんだろう？　悲鳴に聞こえたけど。

そちらに意識を向けた瞬間、ぞわっとトリハダが立ちました。

駆け抜けた感覚に、反射的に跳ね起きた。

振り返った先にある扉、その隙間から大量のピンクの霧が漏れだしてきている！　うわあああ！　増えてる！　どう見ても増えてる！

私はそのまま扉に駆け寄り、開きました。

前が、見えない。廊下はピンクの霧で埋まっていた。

うわあああ！　何があったんですか！　トリハダが治まりません！

あの廃墟で見たぐらい濃いピンクになっちゃってるんですけど！！

そして、私にとって見えない霧の先から、明らかに悲鳴と思われる声が届いた。

な、なにが起こってるの？

いただいたお守りのおかげで私から腕一本分ぐらいはピンクの霧は近寄ってこない。でもそれだけ。充満しているせいで、廊下の視界はさっぱりだよ！

ばたばたと人が走り回る気配、悲鳴、怒号。

明らかに何か異常なことが起こっているのに、私には分からない。

立ち尽くす私に、知った声が掛けられた。

「部屋に入ってろ。危険だ」

勇者様だ。

「何があったんですか！」

私の声は震えていた。だって、これは明らかにおかしい。

「魔物が出た」

勇者様の答えは簡潔だ。簡潔すぎて、私の理解が一瞬遅れる。え、ここ屋敷の中ですよ！

否定する言葉を発したものの、自分の中から答えが返ってくる。

瘴気は魔物の残りかすだとしたら、魔物がいるのは当たり前。それが原因なのだから。

部屋に入ろう、と足を返した瞬間、

「動くな！」

という勇者様の鋭い声が私に突き刺さった。その声に縫いとめられるように、私は思わず立ち止まる。相変わらず廊下も、姿も見えない。生臭い風が前から流れてくる。

鉄さびの臭いがする。

ピンク色の霧の向こうで、獣の唸り声と激しい戦闘音がした。私には見えないから動くことが出来ない。動くな、という指示に従うしかない。

「グルルルル」

怒った犬のような声がする。ただし、その大きさは犬とは大違いに音量が凄い。ガン！　と鋭い音の後、勇者様の息を飲む音が聞こえた。

私が開けた扉の方へ、ピンクの霧が僅かに流れている。そのおかげで、少しだけ霧が薄まり、見える部分が広がった。

けど、それはいいことじゃなかった。

「ギャウウウウウ！」

血走った目、異常な黄色い舌、鋭い歯を持つ人間よりも巨大な狼が、私の目の前に踊りだしてきた。

み、見えないなら最後まで見えなかったほうがよかったんじゃないですかああ！！

食べられる！

鋭い犬歯をむき出しにしながら私に飛び掛ってきた魔物は、何故か私をスルーして後ろに着地しました。

魔物の動きのせいか扉の方に空気が流れた。二十歩ぐらいの距離はうっすら見える程度にピンクの靄が薄れました。

視界が良好になったのはいいけれど、魔物が目の前にいるのはいただけない！

魔物は私を眼中に入れていない様子。

え、なんで？　助かったのか、なんなのか、分からない！

喉が引きつって声も出ない。

じわじわと背中に死を感じる。

背筋が強張って動けない。

汗が背中を垂れるのが分かるけど、どうしようもできない。

魔物はまるで私がいないように、もう一度後ろ足のばねで再び飛び上がろうとする。

このままじゃ、私に直撃だよ！

背後での動きのはずなのに私は何故かそれが分かり、反射的に座り込んだ。膝の力が入らなかったから、簡単にそれは出来る。

その瞬間、私の前に人が立ち塞がった。勇者様だ。

勇者様の手に剣はない。徒手だ。魔物は明らかに彼を狙って飛び掛っている。

危ない！

その声は喉に引っかかったまま音にならなかった。勇者様は無造作に左手で拳をつくり、振りかぶる。

そのまま手は魔物の口に吸い込まれる。魔物なのに魔物が哂ったように見える。魔物が顎に力を入れてしまえば、勇者様の腕も無事ではいられない、最悪、噛み千切られる。

流血の予感に、私の喉を引きつった息が通り、かすかな悲鳴になる。

しかし、私の予想は大きく覆されることになった。

勇者様はそのまま腕を振りぬいた。まるで魔物などその腕に噛み付いていないかのように。金属と牙が磨れる不快な音が響く。

「ギャン！」

壁に魔物が叩きつけられ、悲鳴が上がる。ずるりと壁から落ちるけれど、すぐに魔物は体勢を整えなおした。舌が異様に長いです。黄色って気持ち悪いって！

勇者様を危険とみなしたか、ひらりと距離を取り、体勢を低くして唸りを上げた。じっと隙を窺っています。じりじりと左右に動きながら、距離や間合いを測っている様子。剥きだしの犬歯は、数本折れている。先程の一撃の効果だろう。

勇者様も腰を落として臨戦態勢をとる。

けれど相変わらず手には剣はない。右に吊り下げられたそれは、今が抜く時じゃないんですか！

それにしても、私を挟んで対峙されるととても生きた心地がしないんですがあああああ！　怖すぎるよおおおお！　魔物の眼中に無さそうなのだけが不幸中の幸いっぽいけれど！

でも動いたら襲われそうな気がする。

私は置物、私は置物と繰り返しながら腰を抜かしたままだらだらと汗を流すしかない。

にらみ合いはしばらく続いた。濃密な緊張感と殺気に、私も呼吸が上手くできません。木の葉が一枚落ちただけでもギリギリまで高められた張り詰めた均衡は、なだれのように一気に崩壊すると思う。

忍耐が切れたのは魔物だった。

鋭い歯を剥きながら、勇者様に飛びかかる。

常人ならば避けようのない速度の跳躍だけど、勇者様は慌てた様子も無く迎え撃つ。

勇者様は再び左手で魔物の眉間を狙って殴りつける、が、これは魔物も予想していたのか空中で体を無理に捻って避けた。しかし、その一撃はフェイントだった。僅かに腰を落とし、用意していた右で魔物の顎を下から一気に突き上げる。とても鈍い音がする。顎の骨が砕けたのかも。魔物の悲鳴がまた響いた。フェイントは、魔物がなまじ賢そうだからひっかかったんだろう。

魔物はふらつきながらも着地する。先程の一撃も決定打ではなかった。まだ魔物は瘴気とならない。やはり殴るだけでは足りなかったみたい。やっぱり剣がないせいなんだろうか？

顎を砕かれながらも魔物の殺気は変わらない。

勇者様は魔物が距離をとったのを見計らい、星術を展開する。

「Ｋｘｘｘｚ＊　ｗ０　Ａｓｓｙｗｗｋｗｗ（風を圧縮）」

右の掌を上にする。そこに、揺らめく何かが現われる。空気を固めたものなんだろうか。向こうの景色がゆらゆらと揺らめいて見える。あれです、暑い日の道が熱気でゆらゆらしてるやつみたいな感じ！

魔物は再び姿勢を低くし、今度は体当たりを仕掛ける。単純な攻撃だけれども、それだけにまともに当たったらとても凄い衝撃になるのが私でも分かる。勇者様はさすがに正面からその攻撃を受けなかった。左足を軸に、右足を引き、

「Ｓ＊ｔｓｗｗｄｘｘｘｎｎ（切断）」
紙一重で避けながら右手を、魔物の首の近くに叩き込んだ！　術の威力を直接叩き込まれた魔物は口から唾液を散らした。ゴリッと鈍い音がしたものの、魔物の勢いを止めるまではいかない。着地しすぐさま目を血走らせながら勇者様に飛び掛る。今度は近距離過ぎたせいか、勇者様の回避が遅かった。胸元の鎧が魔物の前足の爪に当たり、大きな跡をつけられた。勇者様は衝撃を緩和するためか、敢えてそのまま後方にさがったけど、すぐに体勢を立て直した。
魔物はその隙を襲うかと思いきや、そのまま突っ切って走り去る。
逃げた！
魔物が消えたのは、魔物が来た方向のピンクの霧の向こう。私にはもう見えない。
私はこの一瞬の攻防に、どっと汗が噴出しました！　体感時間は凄く長かったけど、本当は時間はさほどたっていないと思う。
横で置物になっているだけでも、相当怖いよ！
私は震えながら勇者様を見上げます。変だ、震えが止まらない。
勇者様の左手は、先程魔物の口に突っ込むなんて無茶をしたせいか、血が出ています。丈夫そうな手袋が裂けてる。
「勇者様、怪我……」
私がようやく出した声は情けなく揺れたままだった。
勇者様は駆け出そうとしたが、数歩で振り返りこちらに軽く視線を投げてくれる。蒼い眸はまだ剣呑なままだけれども、私に向けたそれに殺気は無かった。
けどこっちを向いてくれたのは一瞬だった。すぐに前を向き、
「……もう治った」
と言葉を落として、私に背中を向けた。

「部屋に入ってろ」
とだけ言い残し、また勇者様も魔物を追ってピンクの霧の中に消えて行ってしまった。

な、治ったって？　そういえば前も似たような会話をしたような気がする。でも、今怪我をしたよね？　何で治ってるんですか？

逸らした視線が質問を拒絶しているような気がして、私は呆然と座り込んだまま魔物と勇者様が消えたピンクの霧を眺めた。

神子（仮）、働かずにはいられない

ピンクの霧の向こう側がどうなっているかなんて、私には見えない。

霧が濃すぎて視界が全くありません！　とりあえず扉のほうから風が流れてくるから、どっちが部屋かはよく分かる。

普通に行けば、部屋に入っているのがベストな対応なんだろう。でも、何か私に出来ることがないかを探したい。怪我をしてまで庇ってくれた人に、恩を返さないのは女が廃りますよ！

でも、本当はまだ怖い。

さっきの魔物の牙を思い出す。あれで噛まれていたなら、私はやわらかいパンよりもたやすく引き裂かれていただろう。これが、勇者様達が旅する世界なんだ。姫様が言っていたことは真実も含んでいた。小娘には厳しい世界だろうというアレ。

まだ怖くて、膝ががくがく笑う。でも、ここで立てなかったら自分の中の何かをなくしそうで、ちょっと歯を食いしばりながら立ち上がった。壁に背をあずけて何とか立ち上がる。それだけで息が弾んでしまった。どれだけ情けないの私！

先程去っていった勇者様の背中を思い出す。そして、最後の会話を思い出して、イラッとした。痛いなら、痛いって言えばいいのに。なんで言わないのか。治ったにしても、痛かったのは絶対痛かっただろうし、私だったら泣き喚くレベルだと思う！　なのに大したことがないって振舞うのが勇者様の普通になっている。

この気持ちは、多分神官様が怒っていたのと近いものなんだろう

なあ。ひとりで抱え込むなと神官様は言い続けてきたにも拘らず、勇者様は相変わらず抱え込んでるみたいだし。うん、次に顔を見たらデコピンしてやる！　ちょっと驚いて、将来禿げ上がるがいい！

あ、ちょっとだけでいいです。男のひとにとって髪の毛が無くなるのは重大事だって分かってるから、ちょっとで！　何で減って欲しい毛が減らずに、減らないでいい毛が増えるんでしょうね。どことは言わないけど！

よし！

私は立ち上がって、お腹に力を入れた。

怖がっている場合じゃない、動くんだ！　パン！　と頬を両手で叩き、行動を開始しました。

瘴気は日光が嫌いだから部屋の中に瘴気を呼び寄せて、少しでも日光消毒するべきだよね。

消毒したら消えて私の視界も広くなって一石二鳥！

屋敷の中の人、どれぐらいの濃さで体に悪影響が出るんだろう？

でも、これは明らかに悪影響が出てそうな濃さだけれどね。

お枝様に頼るのも考えたけど、神官様の手が赤くなったことを思い出した。お枝様の封印を解けば瘴気が消えても人が体を悪くしたらいけないよね。うーん……もうちょっと、真面目に星術の勉強をしておくんでしたああ！　適正ないって、侮ってたよ！

神官様もどこかで瘴気と格闘していると思う。あの人が逃げたとかは全く思い描けない。そう考えたら、あの幼馴染二人は結構根っこのところは似てるんじゃないかな。真面目で抱え込みがち。うわー、秘密主義ばかりですよ！　私には秘密にするほどの事はないがな！　ただの町民です。資産もささやか過ぎるから、脱税もしてません。

神官様の事を考えていたら、ふと左手に貰ったお守りの事を思い

出した。そうだ、これは最初よりちょっと薄くなってる。本物の葉より、やんわりとした効果になっているんじゃないだろうか？　メイドさんや鎧さんとか平気そうだったし。

でもこれを使うとしたら、どうしたらいいんだろう？

首を捻ると、頭の中で韻律が流れた。さらさらと水が流れるように、音と力ある言葉の意味とその旋律が。

――　Ａｒｗｗｂ＊ｋｖｖｖ　Ｍ０ｎ０　ｗ０／（あるべきものを）

ああ、この音の連なりだ。覚えがある。初めてお枝様の力を使ったとき、勇者様に復唱しろと言われた言葉。世界の根幹を成す連なりの音、すなわち韻律と人が呼ぶもの。

――　Ａｒｗｗｂ＊ｋｖｖｖ　Ｓｗｗｇｘｘｘｔｘｘｘ　ｎｖｖｖ．／（あるべき姿に。）

そして私は理解をする。

これは呪文じゃなくて、ただの祈りであり、お願いだと言うことに。ただ、世界にお願いをしているだけ。ひとにとって異質なものを排除して欲しいと言う依頼であると。

これをお願いすればいい。左手にある世界の欠片に。

私は、ピンク色を吸い込むことを気にせず、大きな声で韻律を唱えて祈った。

「Ａｒｗｗｂ＊ｋｖｖｖ　Ｍ０ｎ０　ｗ０／（あるべきものを）Ａｒｗｗｂ＊ｋｖｖｖ　Ｓｗｗｇｘｘｘｔｘｘｘ　ｎｖｖｖ．／

（あるべき姿に。）」

左手から、はらはらと光がこぼれる。弱弱しい小さな光が生まれ、やがてそれは爆発かと思うぐらいの光芒となった。光なのに圧力があるように感じ、私はよろめいたけど何とか踏みとどまる。

やがて光は消えうせ、瞼の裏に隠したにも関わらず、目がチカチカした。

爆発と同じように、唐突に光は収束した。

反射的に閉じた瞳を開けば、廊下は普通の様相を取り戻していた。ピンクの霧など、どこにもなかったかのように普通の景色だ。

静かで、ちょっと暗いだけの廊下。壁にあるひび割れって、もしかしてさっき勇者様が魔物を殴り飛ばした時のアレですか?!　馬鹿力だなあ……。

日常の風景と引き換えに、左手にはもう葉の模様はなくなっていた。

せ、成功ですか！　よかったあああ！

私は緊張が緩んだ脱力感のために、ずるずると床に座り込んだ。壁へ背中を預ける。冷たい壁が心地よい。ああ、部屋に帰らなきゃ。でも手足が重い。頭がくらくらする。これは眠気だ。ただの眠気、大丈夫。

それにしても、私は旧星語なんて知らないのに何でちゃんと星術を思い出せたんだろ……？　さっきまで身近にあると思っていた記憶や知識の源が、すうっと遠ざかっていく感覚がした。待って、一つだけ教えて。その何かに私は頭の中で呼びかけた。それは何故か留まり、こちらを振り返った気がする。

教えて、勇者様や神官様や、他の人は無事なの？

返答が、文字情報となって頭の中を流れる。

星別者（せいべつしゃ）検索。

返答三件。現在情報更新。

【５／Ａ０】、損傷率八割、あと五秒後回復。交戦続行中。

【５／Ｄｓｎｋｎｎ】、損傷なし。人間に対する治療中。対象回復率四割。失血率二割のため危険。

【０／Ｍｖｖｖｋ０】、損傷なし、存在力低下、平常に比べ六割。自動的に休眠に入ります。要因星術の反動。カウントダウン、五、四……。

ああ、そうか。と全部の情報を読み取り、私は納得した。何故か全部の指し示す内容を理解した上で、私は納得したんだ。

そしてその何かは私の中からすうっと消えていく。知識があったはずの場所はぽっかりと穴が開き、そこに何があったか分からない。ただ、失ったことだけを自覚した。

緩やかなカウントダウンが頭の中で再開される。

一、そして〇を刻み、頭の中での情報が【０／Ｍｖｖｖｋ０】休眠、と更新された。

その瞬間、日が落ちるより速やかに、私の意識は闇に落ちた。

せめて部屋に入ったらよかった。誰かをビックリさせるかな、とそれだけを後悔しながら。

◆【Ｓｋ】、記憶の混線と流出

瞼の裏の暗闇では、私は私であり、でも私じゃない何かになる。
先程は強引に知識を開いたから、余計に不純物が混じっている。

まだ「目覚め」の時ではない。

分析。
結果……体内の韻律が乱れている。世界へ存在を固定する部分が狂っているらしい。修復が必要。混線した記憶を整理するために、幾つかの記憶の欠片を拾い上げる。

本来の私が持つべきものと、そうじゃないものを選別する。
たまに混線が起こる。どこまでが自分が持っているべき知識か分からないことになるのだ。

さて、この記憶はなんだろう？　古い本を開けるように、私はその記憶を覗き込む。

これは私の記憶か、それとも【Ｓｋ（せかい）】の記憶か……。

――　砂礫を含んだ風が吹いている。風には、血の匂いが混じっている。魔物を呼び寄せるに違いない。

荒涼とした砂漠だ。空の色と、砂漠の色、それだけが視界にある全てだ。

木々は枯れ果て、水の気配は無い。時折舞う風が、砂礫をダンスに誘うように巻き込み、砂漠への侵入者を排除しようとする。

ここは、厳正なる死が平等に降りそそぐ場所だった。

「仕方ない」

そんな場所で、彼女は高らかに笑う。

彼女の笑顔は力強く、淑女からは遥かに遠いものの、ひとを惹きつけてやまない。

黄昏の残照が彼女の黄金の頭髪を輝かせ、炎のように燃え上がらせた。瞳の色は濃い紫。強い意思を宿す眸。正面からその視線を受け、相対する青年はたじろぎながら声を発している。

「本当にいいのか？」

「上等だ、私の命でそれが贖えるなら、幾らでも持っていくがいい」

「国はどうするんだ」

「ふん、弟がうまくやるさ。あやつは私ほどがさつではない。皆に支えられ、よい王になるだろう」

唇をほころばせ、笑う。それだけで華麗な印象へと変わる。例えその装束が血にまみれていたとしても、彼女は正しく王族であった。

「なあ大神官、お前こそ私に付き合ってもいいのか？　帰ってするべき仕事が山積みだろうに」

青年は茫々に伸びた頭髪をかき回しながら、憮然とした表情で、

「今ここに居るより重要な仕事は無い」

と言う。その口調に彼女は笑った。青年は照れ隠しでよくこういった口調になる。

「それより、あいつの言うことが正しいと思うのか？」

「アレは人の言葉だ。お前が気まぐれに預かる星神様の託宣とは違

う。だからかな、信じてみようと思ったのは」
彼女は聖剣の柄を握りなおす。そこから光が伸び、長い紐状になる。それが彼女の選んだ武器の形、鞭だった。黄金の光を放つそれを軽く振る。
ひび割れた甲冑を気にせず、彼女は背筋を伸ばし地平線の向こうを睥睨する。
「それだけで信じるってのか？」
「なんでもそうだ。こちらから信じることが肝要だと思うが。お前こそ星職者のくせに何を言っている」
凛と言い放つ彼女に、青年は、
「お前はいつもそうだ。信じて裏切られて何度も泣いただろう。まだ懲りないのか？」
と面倒くさそうに言い返す。二人の間では、これはいつものやり取りだ。彼女も笑いながら言い返した。
「また泣いたら、慰めてくれ」
「わがまま王女様のおもりはいやだね」
即座に返ってきた言葉に、彼女はふんと鼻息を荒くし腕組みをする。
「慰める程度してくれないとは！　ケツの穴の小さい男め！」
青年は本格的に頭が痛くなったようだ。両手で抱えて座り込んでしまう。うめきながらぼそぼそと言葉を洩らす。
「どっからそんな言葉覚えてくるんだ」
「私は博識なんだ」
「違うだろ」
頭を抱えたままの青年に、彼女は拗ねる。
「たまには願いを聞いてくれてもいいじゃないか」
「オレの願いを聞かないうえに、帰る気の無いやつのいうことなんて聞くもんか」
あくまで投げやりな青年の言葉に対し、
「じゃあ、帰ったら」

彼女は珍しく言いよどむ。けれども、すぐに顔を上げていつもの尊大な調子で宣言する。

「帰ったら、一つだけ何でも聞いてくれ」

彼女は青年のほうを見なかった。視線は地平線に止められたままだ。その顔を見上げ、青年は押し黙った。しばらくのち、大仰に溜息をつきながら苦笑をする。

「仕方ないな。わがままめ、俺に何の得も無いじゃないか」

青年の譲歩は引き出せたものの、その言葉は彼女は気に入らなかったらしい。

「相変わらずの計算男め。たまには無償奉仕をしろ」

「生きるには金が要るんだよ」

「私にたかるな」

「たかってねえし」

青年は遠い目をしながら頭をかき回した。この癖のせいで、彼の頭は大体ぐしゃぐしゃになるのだ。彼女はその仕草を眺めながら、胸を張って言い放つ。

「誰かさんが言うわがまま王女だからな、わがままなんだ」

「威張るな」

二人は同時に地平線を睨みつける。

「……そろそろ、時間だな」

青年が立ち上がり、武器を構える。神官と言う肩書きのわりに凶悪な武器だった。大きな斧である。ただの斧よりも殺傷能力に秀でるよう、先端にも鋭い針がつけられている。青年は星術を保持することが出来る宝玉に、改めて術を込めた。戦いに備える。

二人が見たその方向は、彼女がずっと立ち尽くしながら見ていたそれだった。

二人が見詰める先に、徐々に黒い帯が地平線から広がっていく。砂煙が舞い上がり、その黒い群れを揺らめかせる。

魔物の群れだ。

地平線を埋める、圧倒的な数の暴力。何万、何千万いるか分からないそれに、彼女たちは二人で相対しようとしている。正しくは無謀な行い。しかし、この戦いは彼らが選択した最後の戦いであった。

彼女は笑いながら宣言した。

「黄金（きん）の勇者として、強すぎる光を押さえ込んで見せる！」

ああ、と私は溜息を吐いた。

……これは、世界の記録。私のじゃない。

幻視を終え、私はその欠片をぽいと投げる。

今の私が見るはずも無い記憶だ。

私は選別のために、別の欠片を覗き込む。

時系列が狂っているせいだ。星のめぐりの影響をもう少し受けれることが出来たら、こんな風に時間が狂うことが無かったはずなのに。

私は溜息をつきながら、欠片の選別を始めた。

神子、起きたくない

「それ、違あぁぁぁあう！」

私は焦りながら跳ね起きた。あっ、ちょっとめまいが！　いきなり起きたからだね！　そうだね！

ん？　なんか色々夢を見ていた気がするけど、いまいち思い出せない。

あー、なんだったっけ！　思い出せず気持ち悪いです。

「神子様、お加減はいかがですか……？」

メイドさんがびくびくしながら話しかけてくれる。私が叫びながら起きたのをバッチリ目撃しちゃったらしい。大丈夫ですよ、噛み付きません！　だからそんなに微妙に距離をとらないでっ。

それにしても寝言が多いんでしょうか！　最近目が醒めるとこのパターンが増えてきてるね。そうですね。

いつか凄く恥ずかしいことを叫びながら起きそうで、本気でびくびくするんですが！　夢の中って何が起こるかわからないから、とってもデンジャラスですよね。

「お着替えをお持ちします」

メイドさんがにっこり笑って部屋を出て行く。あ、はい、着替えます。

さっきから落ち着かない。例えるならば、こう……、あと一口コアが残っていたのにそのカップを下げられてしまったようなもったいない感がもやもやと渦巻いている。何か大事なことを忘れている気がするんですが、……うむ。どうせ思い出せませんよね！　気にしない！

そういえば、私は廊下に行き倒れていたはず。

誰かが拾ってくれたんでしょうか？　全く記憶にございません。寝つきだけはいいみたいだね！　ホント……どこででも寝れるようです。眠気はもう少し自重を覚えるべき。

勇者様の怪我はちゃんと治ったのか、神官様が治療していた人は大丈夫だったのか気になります。

そのうち教えてもらえるよね！

誰かが着替えさせてくれたみたいで、ちゃんと寝る格好でした。すとんとした飾り気の無いネグリジェでした。メイドさんかな？後でお礼を言おう。これも大変肌触りがよろしゅうございます。お金持ちは違うね！　神殿のネグリジェは、触るのが怖いぐらいでした。何の素材か分からないけど、艶がある布地でした。皺が付くのが怖くって、寝返りが打てなかったのはいい思い出。思い出にしたい。もうあそこに滞在はしたくないですマジで。

そしてふっと思い出しました。

ベールがないね！　力いっぱい素顔ですよ。

ああ、もういいよ……多分、大の字になって廊下に倒れてただろうし、今更取り繕うものももうないっ。トイレにも行く女です。

シーツの中でゴロゴロしてみた。うふふ、きもちいい。転がりがいがあります。

意外とメイドさんが戻ってくる時間が長い。その間にお布団を堪能するよ。

枕はふかふかだし、あと三日ぐらいは眠れそうです。幾らでも、寝れるよ！

うん、体の調子は全く問題が無い。お腹が減ってる気がするけど、そのうち何か貰えるんじゃないかな！　期待しています！　結局、御飯もお風呂も入りそびれましたが！　今からお風呂はいってもいいのかな、さっぱりしたいなー。

だらだらと欲望を脳内で垂れ流しにしていたら、メイドさんが帰ってきた。自分の欲望まみれさに、ちょっと反省します。

「お着替えをお手伝いしますね」
「大丈夫です！」
力いっぱい拒絶してみました。貧相な体は世間様に見せたくないですよ！　と言うか、人前で服を脱ぐと言う経験が圧倒的に足りないので、単純にご遠慮申し上げたく存じます。神殿でイヤだったのがまさにこれ。
お着替えも、お風呂も、おトイレも、一人で出来ますから！
その時ノックの音がしました。メイドさんが会話の途中で失礼します、と応対に出る。神官様でした。
「お加減はいかがですか？」
それほど疲れた様子が無い神官様、この人もまさか体力が有り余っているタイプなのか？　人を治療する呪文って、凄く疲れるって聞いたことがある。なのにピンピンしているのは凄い。
「神官様は大丈夫ですか？」
私からの質問に、首を傾げる。
ん？　私も首を傾げる。
「私は元気ですよ。ちょっと失礼します」
と、神官様は額に指を押し当てて、小さく星術を唱えられました。診察って、こうするんだね！　医者要らずといわれた雑草庶民の私には、いろいろ初体験ですよ！
「はい、問題は無さそうですね。色々寝言は仰っていましたが」
「え、何をですか」
「いろいろと」
そのぼかしが……ぼかしが、気になるんだよおお！　だから睡眠中の私！　何をしてたの！
「このままでは私はお嫁にいけませんね」
寝ながらぶつぶつ言う嫁など、欲しくもあるまい。私は布団の中でどんよりといじけた。
「いえ、夢の中でも掃除をしていらっしゃったようですので問題はないのでは？」

いや、問題の焦点がずれた！　今日のフォローもすべり気味ですね神官様。ゆるぎない。私はあえて話題を変えた。
「それにしても、神官様はお疲れにならないんですか？」
「十分休息はとりましたよ」
私は窓の外を見る。明るい。のどかだ。
あれからそれほど経っていないんじゃないかなあ？　まだ明るいしね！
「あれからって、一時間ぐらいですか？」
神官様はとてもイイ笑顔で、
「二日です」
と仰いました。
ん？
まさか。
「私、……二日寝てました？」
私はぱかーんと口をあけた。寝すぎですよねー。

ふ、二日ですか。
繰り返して思う程度にはビックリしていますよ！　何が驚くって、

「つまり六回ごはんを逃している計算ですね……！！」

私が思わず声を上げたのは、仕方がないことだと思う！
ごはんぐらいしか楽しみがないです最近。
何かメイドさんが、えーって顔をしてみています。恥ずかしいから見ないでくださいほんとにお願いします。心がガリガリ削られるよ！　だから見ちゃ駄目。
神殿に行ってから、ごはんを一日三度と言う生活に慣れてしまって、燃費が悪い人間になりました。食べても、おなかが減る。うーん、そこまで動いてもないんだけど。……はっ！　これは、食欲でストレスを紛らわせる作戦？　人間の体の防衛反応ですかっ！
「ご飯の心配が出来るほどでしたら、大丈夫ですね」
神官様はゆるぎなくにっこり。この人の動じると動じないポイントの違いが分からない。謎だ。そして私はもう一つ重大なことを忘れていました。
「二日間ごはんを食べていないということはつまり、その間トイレもいっていないわけですね！」
あんだけたっぷんたっぷんに飲んだ紅茶はどこに消えたんでしょうね！　まさに人体の神秘！
神官様はこの話には動じることなく、
「以前お話した、生理現象が押さえられるように変化しているせいもあると思いますよ。長く戦える体になっているはずです」
と仰る。そうですか、凄いですね！　ぐらいしか言えません。

そもそも、元々ただの町民です。そんなに戦いませんし戦えませんよ！　私はお枝様運搬要員ですからそこんところヨロシクです。

どんどん会話を重ねるにつけ、メイドさんのガッカリ具合がちょっとずつ増しているのがとても気になります。神秘の神子（笑）としての登場だけど、ご飯やらトイレやらの話ですからね！

庶民というか乙女どころじゃない、生活臭漂う話ですよね。ゴメンねー。だがこの話題は譲れない！　人間として譲れぬ……！

多分私以外のお二人はドリーム・ザ・アイドルぐらいの勢いでトイレ行かないかもしれないですから、夢は破れてないと思うよ！

私に期待するなと言うことだ。メイドさん頑張れ。心の中で応援するよ！

そうこうしているうちに、そういや、と思い出した事がある。

「神官様が治療されていた方は大丈夫でしたか？　結構大怪我だったと思いますけど」

倒れる前に、私はそのことを気にしていたハズ。

神官様は、じっと私を見る。目が笑ってませんよおお！　美人さんの威圧は怖いって！

「どうして、そのようなことをお尋ねになるのですか？」

笑顔なのに笑顔じゃない顔に、私は何かを間違えたのかとビクッとする。

「ちょっと気になっただけなんで！　ちょっとですよ！」

両手をぶんぶんと振ると、それだけで疲れました。寝たきりの筋力の落ち具合半端ないです。運動嫌いなのに、更に鍛えるとか考えられません。

「……私が怪我人を治療していたことを、なぜご存じなのですか？　あの状況で勇者が伝えるとは思えませんが」

え？　そうだっけ？

私は首を傾げて神官様を見た。どこで知ったか、覚えがない。何でそんなことを知ってるんだろう？　我ながら謎かもです。

「あの怪我人は、私の力だけではなく何かの力によって癒されました」

何かってなんだ。よくわかんないけど、とりあえず、

「よかったですね」

と言っておく。誰かが助かった、って言うことだけでも凄いと思うんだ。神官様はまたじっと私を見ます。

見ても何もでないよ！　油汗ぐらいだよ！！

「あの時、あなたは何かをしましたか？」

神官様が小首を傾げながらさらっと仰るので、私は、

「あ、はい。しました」

あっさりと容疑を認めました。町民Cから容疑者Cですよ！　やったね！　いや、格下げですが。

「具体的に何をしましたか？」

にわかに取調室の様子になってきました。この犯人席は中途半端なく辛い感じです。なんでも自白しちゃうよ！　やってないこととか。

「左手に貰ったお守りにお願いしました」

あれはお願いだったよなあ、と考えながら手の甲を見る。もちろん、もう何もない。神官様はとても不思議そうだった。

「お願いですか？」

「そうです。ピンクまみれだったので、祓えないかな、と思ったんです」

だって先も見えないピンクでしたから！　とんでもムードでした！　先は見えないし魔物は出るしまさに最悪。

「先日瘴気を祓ったのと同じ呪文で、あるべきものをあるべき姿に戻してくださいと左手の葉っぱ様にお願いしました！」

「……そうですか」

神官様はとうとう考え込んでしまいました。

「何かあったんですか？」

さすがに気になって聞いてみるよ！　私の術で何か悪いことが起こったんですか！　誰かがうっかり召されちゃったとか、恐ろしい話

題じゃないだろうな。笑えません。
神官様は苦笑しながら、
「恐らく推測ですが、その星術がかなりの効果を示したようです」
と前置きをしてからお話してくださいました。

どうやら私が使った葉っぱ様の効果はかなり広かったらしく、瘴気を吹き飛ばしただけではなく魔物にはダメージを、怪我人には治療の後押しをしたらしい。
つまり魔物を元の瘴気に戻す効果と瘴気を消す効果、あと人体をあるべき形に戻す効果があらわれたとか。人体どころか、しおれていた花まで生き生きとなったそうな。それはぶっちゃけ言いすぎと思いますが！　全くそんなことを考えて使ったとかの覚えはありません。

で、そんな星術を使った犯人（なのか？）が、どう考えても廊下で行き倒れていた私しかいなかったわけで。現在、お屋敷や街の方で神子様万歳ムードが広がっているらしい。今までのあらすじだそうです。

あいた口が塞がりませんでした。まさに超展開。

待って、ちょっと待って！　そこは勇者様万歳だろう！　私じゃないよ！　というか神子（笑）万歳とか！
……いやだあああ！！！！！！
外に、外に出たくない！！！
絶対何か勘違いしているッ！　私はピンクがいやだったから使っただけで、実際何かをしたのはお枝様だと思うよおお！

本気で泣きが入った私に、神官様は、
「元気を出してください。ご飯持ってきますから」

と慰めてくださった。
どうやら私の操縦法を覚えられたようです。
ご飯は食べるけどね！

神子、観察されたくない

満を持して、ご飯の時間です！　テンション駄々上がりですよ！
私に食事を与えて、神官様は診察にお出かけになりました。
食べ物を与えていればいいと思われているんですね。くっ……心外な！　でもおおむね正解です。
ご飯は病人食っぽかったけど、大変おいしゅうございました。ミルクで炊いたおかゆだって！　高級品のミルクをこんなに贅沢に使うとは……セレブめ！　上にちょっと掛けられたチーズの風味とあいまって、絶品でございました。これはただのおかゆではない！　おかゆ様ですね！　崇め奉れるレベル。口に含んだ時にふんわりと広がる甘みと、一緒に炊いたほっくりした豆の風味が広がって、顔が崩れましたとも。
こんなご飯を六食……六食……飛ばしたなんて……。本気で泣いていいですか？　多分領主様の恰幅のよさはこのご飯のせいだろうね。美味しいから食べ過ぎるんですよ。
危うくメイドさんによる「あーん」が実行されようとしましたが、これも笑顔で流すことが出来ました！　こ、これは拒否してもいいんだよね？　だって、おかゆをフーフーされて、更にあーんって恥ずかしすぎると思うよ。まさにウフフアハハな状態じゃないですか。何の拷問ですか。食事時間が一瞬にして拷問に変わると言う恐ろしさを味わいましたとも。一口一口を味わう私を見るメイドさんの視線がなんだかとっても暖かい眼差しなのはなんでかは分からないけど。
あと、お風呂の希望も通りました！　思ったとおりお手伝いします発言が来ました。だが……断固拒否するッ！　手伝いは大丈夫ですよとお断りしたところ、何でそんなに残念そうなんですかメイド

さん。私はそんな変な趣味は無いよ！　今準備中とのことで、待っています。あ、そうですよね、昼間っから、お風呂用意なんてしませんよね。ごめんなさい。

　メイドさんはやたら明るい人だった。ぽってりした唇が特徴的な人だ。やっと私に慣れたのか、それとも私が慣れたのか話してくれる。もうさっきの神官様との会話を聞かれているので、私にとって恐れる事は何もないッ。

「神子様のお好みの料理などありますか？」

「何でもいけます」

食べられるものだったら、だいたい美味しくいただける、優秀な味覚と鋼鉄のお腹を持っています。

「では、アメなどいかがですか」

　何故アメ。棒に刺さったアメを貰いました。本当になんでだ。賄賂じゃないよ！　貰ったものはすぐにいただく。あめをぺろぺろ舐めながらメイドさんと色々話します。

「お客様がいらっしゃるのが久しぶりですので、張り切ってしまって」

　どこまで接客するかというラインが微妙らしい。それを言うなら、私はいたって残念な客だと思われます。

「基本、放置でいいですよ」

　大体の事は出来るし。そういってみたものの、逆にプロ根性に火をつけてしまったらしい。適当で、いいですよ！

　喉が渇いたなって思ったら差し出されるお茶……こんな生活に慣れたら大変です。私の資産じゃメイドさん一時間も雇えないよ！

「こんなに可愛らしい神子様のお世話が出来て、幸せです」

ウフフと笑うメイドさん。そんなリップサービスまではいいですよ。平凡顔なのは自覚してます。私の微妙な反応に気付いたのか、メイドさんが言葉を付け加えました。

「ご飯をほおばって、もごもごされているのがとてもかわいらしゅ

うございます」
　そこ?!　そこに注目なんですかッ！　まさかの愛玩動物的な扱いでした。ならまあいいか。だからアメをくれたんですね。さっきから舐めながら会話をしています。これはこれで美味しい。最後のあたりを噛み砕くか、それが問題だ。棒にへばりついた残りを見ながら熟考していると、ノックが聞こえました。メイドさんが応対します。声が聞こえる。あ、勇者様だ。

　そういえばもう一つ、どうしても気になっていたことがある。幸い、部屋履きはベッドの横で発見する。私は寝台から下り、ドアのほうへ向かった。ちょっと広い部屋なのでベッドはドアの死角にある。病人扱いだけど、怪我も病気もしてないので普通に歩ける。メイドさんはまだ私の調子が戻っていないので、後にして欲しいと伝えている様子。別にいいですよ、と主張しようと思って、ひょっこり顔を出し、
「勇者様、お怪我はなかったですか?」
と聞いた。
　メイドさんと勇者様が一瞬固まった。えっ、別に何の衝撃映像もありませんよ?　沈黙は二秒ぐらいでした。勇者様が、
「そんな格好で出てはいけません」
と言った。メイドさんもそうだそうだとばかりに頷く。えー、ただの寝巻きなのに。私の無言の抗議は取り合われませんでした。残念な胸元も、足も出てないんですが……あ、足はふくらはぎぐらいからは出てた。メイドさんと勇者様は目線で結託したのか、
「また後ほど」
とドアを閉められてしまいました。あっ、聞きたいことがあるんですが。追いかけようとした私の肩を、メイドさんがガッと掴む。
「着替えましょうね、神子様」
　メイドさんの迫力に、すばやく頷きました。目が怖いです。
　今思い出した。マナー講座のメガネ女史が寝巻きで出るのは恥ず

かしいことだとチラッと言ってた。失敗ですね！　概ねひとり暮らしだったし、訪問してくる人なんていないのであんまり自分の格好に気を使ったことはない。部屋を出るときに着替える、ぐらいの気持ちだったんだよね。正直、面倒です……でもメイドさんが怖いので口に出せやしないよ！　あ、でもちょっと待って、あめを食べてしまいますから！

着替えて、ようやくドアを開けることを許されました。
大人しく待っててくださった様子。お待たせして申し訳ないです。文句を言わない勇者様。やはりできるッ！　紳士だ！　神官様は、診察をかねていたようだったから余り気にしていなかったのかも。
メイドさんがお茶を用意してくれる。また、この間のようにテーブルに着いて話します。二人なので向かい合わせですよ。今度は紅茶を飲み過ぎないからねっ！　今更ですが、あのときは人払いをしていたんだろう。
少し外して欲しい、と言う勇者様に従い、メイドさんは席を外した。
「この二日間のことについて、聞いたか？」
聞きたくない神子万歳については聞きましたよ！　現実逃避したくなるね！
私のぬるい笑顔に勇者様は訝しげな様子をしながら、別方面の話をしてくださいました。

この魔物発生事件の顛末でした。
あの魔物は、前領主様のペットだったとか。普通の動物だと思って飼われていたものが脱走したらしいです。
あんなに凶暴な動物を飼おうと言う気分が分からない！
瘴気が広がっていたのは、おそらく餌として与えていたのも魔物だったのではないだろうかと。魔物だと知らないまま商人たちも捕まえてきていたみたい。魔物が魔物を殺して、その瘴気が溜まりま

くったらしい。どれだけ気付かないんですか！　死体が残らないの、おかしいと思わないのか。それもそのはず、徐々に屋敷の人の精神を瘴気が侵食していたみたい。魔物の部屋が一番瘴気が濃かったのか、いるだけでだんだん頭がぼんやりしてきたと証言があったとか。人の欲望を抑えれなくする瘴気の効果、エロ屋敷はその表れらしいですよ。あ、ただの趣味じゃなかったんだ。

私の術のおかげ（？）で、そのあたりの歪みも修正されたとか。全く自覚はないけどね！　現在はエロ屋敷の家具を撤去しているらしい。へー、でも撤去してあれをどこにしまうんだ。蔵とかに押し込めても、あんな裸の像ばかりある蔵とか行きたくないですよ！想像しただけで怖いです。薄暗がりの中、林立するエロ彫像とか。今は屋敷の工事中だそうです。私が目覚めて体調を見て今後の予定を決める、という話だった。

話がひと段落ついたところで、私はどうしても気になっていたことを思い出しました。

「で、勇者様の怪我はどうなったんですか？」

あっ、目を逸らした。

今日は問い詰めるよ。時間はありますしね！

神子、怪我について話す

大体この話題を出すのは、抜き差しならない状況の時ばかりだった。

実際に勇者様が怪我しているな、と思って聞いたらはぐらかされた、みたいな。

今まで色々スルーしていたけど、聞きたいことを一つずつ潰していこうかと決心しました。たった今、決心したところだけど！　そういえばデコピンするのを忘れていました。イラっとしたときにしようと思ってたんだよね。今はさすがに出来ません。

恐らく相手が神官様だったら、こうった話題はうやむやなままに話題をずらされてごまかされるんだろうな。短い付き合いで身に染みました。うすうす思っていたけれど、神官様はボケとボケ殺しの素質があると思うのです。そのせいで、会話が迷走してどこまでが意図的なごまかしなのか分からなくなる！　恐ろしい人！

その点、勇者様は言葉数少ないと言うか、あまりごまかしはしない。元々交渉役を神官様に丸投げしているし、大体聞き役に徹してるよね。領主様相手の聞き役っぷりはプロの領域でした。見習うべき。多分お二人は昔からこうやって役割分担をしてきたんだろう。二人が幼馴染だと聞いて、更に確信を得たよ。

勇者様は、基本姿勢聞き役、用事がない限り話を自分から展開しない。無表情のせいで、いまいちこの人の距離感が掴めません。でも、言いたくないことは言わない人だと思うので、聞ける限りは聞いていこうと思います！

質問タイムスタートッ。

「で、怪我はどうなったんですか？」
私はニコニコしながらもう一度言いました。重要事項ですよ。私が倒れる前、勇者様が凄い怪我を負っていた記憶がある。でも神官様が治療していたのを知っているのと同じぐらい確証はあるのに、それを見た記憶はないんだ。だからこのあたりは伏せて質問しました。ちょっと知的じゃないですかっ。ごめんなさい、調子に乗りました。
「治った」
勇者様、ぶつ切りの返答です。
これは質問に対してはある程度は答えてくれるってことですね！分かりました。ポジティブに捉えますよ！　前を向いて進むよ！
足元の石につまずいてこけるのがオチだろうとしても！

「いつも怪我はすぐに治るんですか？」
「……ああ」

「怪我をしたときは痛いですか？」
「……ああ」

会話の神様、助けて……！　これは先程の神官様の取調べ状態になってきました！　尋問じゃないんだから！　勇者様は手元のカップをじっと見ています。何か考えている様子。
ああ、空気が暗い。私はぐいっと紅茶を飲み干しました。ぬるくなって丁度いい感じです。カップを置きながら、
「つまり、すぐ治るけど、怪我をしたときは痛いんですよね？」
と再確認。
このときようやく勇者様が顔を上げました。私が一体何を意図して質問をしてるのか、不思議そうな表情です。ちょっとだけ表情が読み取れました。私を誉めてっ。
「そうだな」

とりあえず、私が聞きたいところはそこだった。だから、ちゃんと自分の意見を伝えてみた。

「痛いなら、あまり無理をしないでくださいね。心配しますから！」

私なら痛いことは耐えられない。針で指を指しただけでも涙目ですよ！　足の上に本を落としたとかも地味にくる。紙で指を切ったときとか、寒い日に唇が切れたときとか。小さい怪我だけど、痛いって！

つまり、痛みに全く耐性がない私にとって、血をだらだら流しているのにすぐ治るから大丈夫だという勇者様が信じられない。

治るのと、痛いのは、別だと思うんですよ！　つまり、ご飯がなくてお腹が空くのと、ご飯がまずいのは別問題なのだ！　喩えがよく分からない？　失礼しました。

「すぐ治るのに？」

心の底から不思議そうな勇者様に、私は大きく首を振りました。

「すぐ治るのと、痛いのと、私が心配するのは別です！　怪我をするから心配する、そこが重要なのです！」

どーん。

言い切った！　勇者様はしばらく目線を彷徨わせた。どう見ても、私の言葉をいまいち飲み込めていない様子ですよ。この無表情を見ていたら、ほっぺを両側からつまんでぐいぐい引っ張りたくなりました。

「なら、避けきれない以外、怪我をしないようにすればいいのか？」

出てきた結論は、思った以上に斜め上でしたよ！

「普通怪我を避けることを第一にしますよねっ」
「面倒だ」
つまり、避ける怪我も避けずに突進していたのですか！
ずれている……！　この人想像以上にずれている……！！　神官様ー！　神官様ー！　幼馴染が変なこといってますよー！　タスケテー！
私もどっからつっこんだらいいか分からなくなってきた！
「怪我をしたほうが動きが鈍るでしょう」
「すぐに治る。それよりも戦闘を速く終わらせた方が効率的だろう」
話が何か違うー。
私は頭を抱えてテーブルに突っ伏した。どういえば伝わるのか。
頭を抱えながらうめくように言いました。
「えーと、つまり、うーん、怪我しないでください。見てるほうが痛いんで」
私も大概うまいこと言えません。
「……血が苦手だと言っていたな」
勇者様は何かを思い出したようです。そんなこと言ったっけ？
言ってたんだろうな！　自分では忘れているけど。過去の自分グッジョブ。
「そうです！　だから流血沙汰はカンベンしてください。なるべく怪我は避けて！」
勇者様の中で何かが納得できた様子。頷きながら、
「それなら仕方ない」
と仰いました。

避けるのが面倒なことより、私に血を見せないことが優先されるって、何か変。
自分より他人をあっさり優先させすぎじゃないかな。勇者様って、自分のことには基本無頓着だけど、人の意見は簡単に受け入れるみたい。

あー。さっきからずっと覚えていた違和感の正体が分かりました！
勇者様は「自分」が痛いとかはどうでもよいといった雰囲気なんですね。でも、生物としては痛みって重要じゃないのかな！　怪我をしてるよ！　っていう体の悲鳴が痛みなんであって、それに慣れるって辛いことじゃないのかな。
勝手に私が感傷的に思っているだけなのかも。実はありがた迷惑かも？　顎をテーブルに載せた状態でうめいた。実はまだ突っ伏したままです。

べちょっとなった感じの私の頭に、何を思ったか勇者様の手が載せられる。

「……」

両者、無言です。
え、何で手を載せたんですか。しかも、ちょっと重いです。撫でるなら撫でる、叩くなら叩く！　どっちかにしてください！　受けて立ちます……！　私と勇者様はまた睨めっこタイムに突入しました。私……負けないっ！

その時、ノック無しにドアが開きました。む、一応、乙女の部屋ですよ！

「……何をしているんですか」

呆れた風の突っ込みに、勇者様は普通に、私は目線だけで振り向いた。神官様のお帰りです。お帰りなさーい。

神子、頭は痛くない

この状況に、神官様が動いたッ！

何故か勇者様にツカツカ歩みより、おもむろにその頭をぐしゃぐしゃに撫でました。小さい子にお父さんがよーしよーしと撫でるぐらいの勢いです。

な、何でだ！

勇者様も私も目を丸くして神官様を見上げます。何が起こったのか飲み込めません！

神官様は思う存分勇者様の髪をかき回したあと、満足そうに頷かれました。

「これぐらいの力具合でしょう」

な、なにがですか！

勇者様、思い切り髪が乱れてますよ。触り心地がよさそうな髪だなあ。今度私もかき回して見たいものです。ちょっとうらやましいです。身長差がありすぎて、無謀な戦いですがね！

撫でられまくった勇者様はというと、棒を飲み込んだような表情になりました。髪を直すということを忘れ果てている。

私も固まったけど、勇者様の衝撃も凄かったんだろうね！　そりゃあなあ。うん、同情します。勇者様頑張れ！　無責任な声援を心の中で送ってみた。

神官様は、彫像と化した勇者様を放置し、私に笑顔を向けられました。

「恐らく頭を撫でようとしたところ、力の入れ具合が分からなくなって固まったと思われます。またの機会がありましたら、大人しく撫でられてやってくださいね」

すらすらと仰る神官様。勇者様の行動について、解説ありがとうございます！

はあ、そうですか。ん？　……いや、そうですかではすまないよ！　頭を撫でようとしたかどうかは分からないじゃないですか！

問題の勇者様の反応はっ、と目を上げて見てみたところ、遠い目をなさっていました。当たったのか、当たっていないのかどっちですか！　この問題はぜひ白黒つけていただきたいッ。

とりあえず、頭から手を退けていただけませんか？　重いです。さてはごつい手袋のせい？　脱いでくれたらちょっとはましかも。ささやかな重量ですが。

「お茶がありませんね。お代わりはいかがですか？」

神官様のゆるぎなさは筋金入りだと思います。この混沌とした状態で、私のカップが空なのに気付いたみたい。妙に迫力がある問いかけに、私は頷くしかない。といっても頭の上の手が邪魔で、言葉だけですが。

「いただきます！」

お腹たぷたぷフラグが立ちました！　さっき飲み過ぎないと誓ったのにね！　神官様のお酌上手！

私のカップにたっぷりと紅茶が注ぎ込まれます。はっ、謹んで飲ませて戴きますっ。

ポットの中のお茶を注ぎきった神官様は、それを勇者様に普通に渡しました。

ようやく私の頭の上から手が退けられます。勇者様はまだ頭が戻ってきていないようです。両手でポットを抱え込みました。

「ちょっとひとっ走り、お湯をとってきていただけませんか？」

まさかのパシリ！

有無を言わさないってのは、こういうことか！　学習いたしました。

勇者様はよろよろしながら席を立ち、ポットを丁寧に持ったまま退室しました。多分、メイドさんにお願いするとか、そのあたりは全く頭から抜け落ちているんだと思う。背中が妙に哀愁が漂っていました。

扉がきっちり閉まったのを見届け、神官様は私に向き直りました。

「さて。お話をしましょうか」

何の話ですか！　うろたえますよ！

「先程、勇者に怪我の話をされていませんでしたか？」

「どこから聞いていたんですか？」

そんなに大声で話をしていませんよ！　テーブルでつぶれていたのが思わず跳ね起きてしまうほどのショックだよ。顎の当たり赤くなってないか心配です。

「入れない雰囲気でしたので、機を窺っていました」

苦笑をしながら神官様は続けた。

「私も常々、あの戦い方はどうかと思っていたところですので、助かりました」

付き合いの長い神官様だったら、もっとひどい怪我も見ているはずだ。だからこそ私は不思議だった。

「神官様は、勇者様に何も言わなかったんですか？」

神官様の眸にふっと蔭のようなものが過ぎった。

「彼を勇者にしてしまった原因の一つを私が担っているので、私が言ったところで白々しい話になるのです。この道に引きずり込んだ私が、怪我をするなと主張する。とんだお笑い種じゃないですか」

蔭の名前は罪悪感だ。それはさすがに分かった。なんだか踏み込んではいけない部分なのかもしれない。空気がどんよりしてきましたよ！

「ともかく」
神官様は翳りを消していつもの笑顔に戻られました。
「ありがとうございます」
神官様にお礼を言われたけれど、それは筋違いですよ。
「私は好き勝手言っただけですし」
しかも、結局勇者様が納得した理由が私が前に言ったはずの「血を見たくない」っていう言葉だし。本人忘れていました。罪悪感がちくちくと来ます。
「お礼ぐらい言わせてください。……まあ、ともかく、勇者は元々人を避けがちな所があるので、貴女と触れ合うことで少しでもましになればとは思います」
そうですよね頭を撫でようとして固まる人だ。
どんな生活を送ってきたんだ勇者様。

神子、過去の事は振り返らない

昔の話をしましょう、と神官様。

「……勇者として選定を受ける前の話です。彼が戻ってくるまで、簡単にお話しますね」

お二人は山奥の小さな村で育ったそうです。これはちょっと聞きました。で、その中でも二人とも浮いた存在だったらしい。容姿的な意味でかと思いきや、性格や行動的な意味でだった。

勇者様は無口で人の輪から外れていたそう。唯一の家族のお母さんとも余り触れ合わない。

神官様は知りたがりのひ弱な子供で、一日中不思議に思ったことを大人たちに質問しまくるから、だんだん面倒な子供だと放置されるようになった。あんまりあの頃は私は気にしていませんでしたが、と神官様は軽く笑う。

この話は、ちゃんと聞かなければいけない話だ。私は背筋を伸ばして、神官様の言葉を逃さないように聞く。

毎日無言で狩をする勇者様の後について、神官様は一緒に罠を作ったりいろんなことを喋っていたそうです。

選定を受ける前から、実は勇者様の回復力、運動神経や力は突出していた。けど、狭い村社会で異質なものは弾かれてしまうので、それをひた隠しにしてたとのこと。まあ二人とも放置されていたから逆に気付かれなかったんでしょうね、と神官様は苦笑していました。

そして、後から知ったことですがと前に置き、勇者は母親から怯

えられていたようです、と神官様は告げた。……お母さんに？　私の掌がじわりと汗を浮かべます。これは、本当に聞いていい話なの？

「思い返せば、彼女（ははおや）も必死だったのでしょう」

と淡々と話す神官様。その声には何の感情もない。

狭い村で小さな子供を抱えてひとり暮らす辛さ。そこそこ豊かな街の中で、のんびり自分だけで生活するのとはまた全然違う苦しさなんだろうな。でも、それは想像でしかない。私はその辛さを想像したけれど、実感としては分からなかった。

苦しい暮らしは人の心を容易に折る。

「私も欠片しか聞いた事がないのですが」

勇者様のお母さんは、つねづね勇者様に言い聞かせていたらしい。

――力を隠すこと。そしてみんなの役に立つこと。みんなの役に立つなら、あんたは人間として生きていける。

小さかった勇者様は、それにすがって生きるしかなかった。役に立たないなら、人間じゃなくなってしまうと信じていたふしがあるそうだ。さすがにそれは神官様が違うと主張して、一応は受け入れたらしいけれども。

その後も勇者様は村のみんなの手伝いをしながら、おこぼれに預かりながら生きていった。ある程度体が育つと、狩や耕作の範囲が広がり、生活が少しだけ楽になった。けれども、既にそのときはお母さんは病で亡くなっていたそうだ。

「その頃、私は勉強のために星都にいたので、詳しい事情は分かりませんが。もし先程の怪我の話に違和感があったなら、それは彼が昔から擦り込まれた考え方にあるんだと思いますよ。自分のことを、まず人間の数に入れていない」

それが勇者の選定を受け、力と治癒力が増し、更に顕著になった。神官様は溜息をついて話を締めくくった。室内に暗い雰囲気が満ちる。

理由は分かった。

あと、本人が何も言わない理由もなんとなく分かった。

私はこの話を聞いたからといって、実際勇者様の考えを変えてしまうことが出来るなんて思わない。小さい頃の癖が大人になっても抜けないように、よっぽどのことがないとそんなことは起こらないと思う。

だから、この話を聞いても、そうかあ、と思うけど、それ以外は考えない。

勇者様に同情するなんて、そんなことを私が考えるだけでも失礼だと思う。だって、その頃の勇者様の苦労は私には分からない。甘い考えしかない、ぬるい世間しか知らないただの町民、小娘です。

その上で、できることを考えてみた。

「はい、神官様！　発言よろしいですか！」

「どうぞ、神子殿。発言を許します」

ノリに乗ってくださいました。

私は胸を張って主張する。握りこぶしを振り回しながら。

「あれですね、ぜひ勇者様はもう少しわがままになっていただいた上で、生きている実感と幸せを味わうべきだと思うんですが！」

エキサイトする私。いい考えだと思うんだ！　これまでの事は変えられません。そんな考えを持っていることも仕方ない。なら、幸せになるしかない。ハッピーになれば人生薔薇色ですよ！

椅子からがたっと立ち上がり、

「これから勇者様を幸せにするために、色々作戦を練りたいんですが！」

と熱く畳み掛けました。神官様はそれはいいですね、と笑顔を見せてくださいました。

と、またノック無しでドアがこのタイミングで開きました。

気まずそうな勇者様が立っています。何故かその手にはポットのほかにお菓子っぽいものが載った皿がありますよ。

私は立ち上がったまま、握りこぶしを振り回していた途中です。

どう考えても、さっきの主張は聞かれていると思います。

うん、気まずい。

神子、しあわせについて考える

最初に動いたのは勇者様だった。手に持ったものを私に見せてくれる。

「メイドたちから神子に、だそうだ」

むっ……！　焼きたての焼き菓子ですね！　なんと！　バターの匂いがなんとも香ばしいです。この甘い香りにうっとりしてしまいますよ。ガン見してしまいます。熱い視線の先はお皿。これまた高級そうなお皿ですね！　金縁とか。割ったら怖そうだよ。

無意識に焼き菓子の数を数え始める。十二個か。つまり一人当たり四個食べられますね！　こういった計算力はあります。超素早いです。

勇者様が私の前にお皿をコトリと置きました。

え、いいの？　私が先に食べていいの？

じっと皿を眺めて、勇者様を見上げました。これほど真剣にアイコンタクトをとったのは初めてです。

勇者様が頷く。

やったああ！　私は思わず笑みを浮かべました。

手にとって焼き菓子を観察します。

できたてです！　ほっくりと割ると黄金の断面からふんわりと湯気がっ。あつあつですね。更にこの美しい黄金の輝きは、卵たっぷり！　鼻をくすぐる上質な香り付けのお酒の匂いがします。これもまたアクセントですね。エクセレントですね……！

私は一口食べながら幸せの旅に行きました。
お菓子って、ほんっと！　癒されますよね。あー、癒された。

とりあえず一つ食べきって目線を上げると、机に突っ伏して震えて笑う神官様と、何もなかったように座る勇者様がいらっしゃいました。
何で笑ってるんですか？
なんだか予想がつくけど敢えてそこはつっこまないよ！　ツッコミどころを心得ている町民です。えーわかんなーいってカマトトぶらないのがポリシーです。カマトトってなにって？　可憐な乙女っぷりを装う何かですよ。つまり私に近いけど遠い何か。私はむき出しの町民で人生にチャレンジしています。あくまで自然体をコンセプトに生きています。
……何の話だって？　失礼しました。だってまだ神官様笑ってるんだもん、横でもじもじするのも限界があります。思考が爆走しても仕方ないよね。

ひとしきり笑った後、あー、と神官様は満足そうなため息をつきながら、
「貴女の思考は、何に気を取られているかかなり分かりやすいんですが、飛びすぎですね」
と言う。んん、そういえば何の話をしていたっけ。と思い出して、私は固まる。
ああ、そうだ、色々気まずい状況ではなかったですかっ！
思いっきり、忘れてました。お菓子様は偉大すぎる！
でも今更気まずいなんて言えない。それこそ気まずすぎる……！
どうしようもない状態ですよっ。
私はさらっと流そうとしました。
が、ここでフォローをしてくださらないのが神官様だ。どんな事態でもおもねらない。さすがです。半端ない。

「で、何か遠大な計画でも？」
にっこり笑って問いかけるその姿はまさに星職者でございますね！　神々しいばかりです。でもその話は本人がいたら気まずいこと限りなし、だよ！　ちょっと横において熟成させることが必要です。後でこっそりと話すべきです。
「とりあえず、お菓子でもどうぞ。とても美味しかったですよ！」
敢えてスルーをしてぐぐっとお菓子のお皿を渡す。
ついでにもう一個取り、はむっと口に含む。ふわっと広がる幸せの味に、ああ、幸せってこんな香りをしていたんだなあとしみじみ笑みがこぼれる。
「貴女は幸せそうに食べますよね」
神官様は微妙な笑みを浮かべながらそう仰る。何かのツボだったのか、笑いを堪えている様子。わ、忘れてるわけじゃないですよ！食べるところに集中する、それが食事の作法だよ。

「神官様、それは違いますよ！」
私はあえての否定を口にした。否定って、ぐっと注意をひきつけられるよね。ちょっと知的な会話術ですよ！

「食べ物が美味しいのがいけないのです！　そう、私を幸せにする食べ物が罪作りなんですよ……！」

心からの主張です！　食べ物恐るべし。怖いよねっ。
神官様はとうとう耐え切れなくなったのか、吹いた。乙女の主張で笑うなんて、失礼ですよ！　美人台無しです。

言い切ったあとに私はじっとりと勇者様を見詰める。我関せずと言った感じで、ぼんやり窓の外を見ている様子。私の注意をお菓子に向けさせて、その隙に空気になる……おそろしい策ですね！　まんまと嵌められました。

幸せかあ。

このひとにとっての幸せってなんだろう。

私の幸せの形はとても単純だ。お菓子だったり、ちょっとあったかい日だったり、こんな他愛もない会話だったり。かなり安上がりで庶民的に出来ていると思う。別に浴びるほどお金がなくても、世界征服しなくても、幸せ。

じゃあ逆に勇者様の幸せってなんだろな？

ひとにとって、それはいろんな形をしていると思う。十人いたら全部返事が違うんじゃないかな？

平穏、財力、権力、それとも恋愛？　幸せを感じるきっかけもいっぱいある。

でもこのひとに正面から聞いてもまともに返事がありそうな気がしない。

そもそも、笑ったのを見たことがない。困惑や驚きはたまに見るから、完全に感情がないというわけでもないと思う。色々あって心を殺しがちなのかもしれないけど、観察していたら分かるようになってきたし！

そのうち、好きな食べ物でも地味に探っていこう。

恐らく長い付き合いになりそうですしね。つまり、考えることを明日以降に丸無げしました！　だって思いつかないんだもん。そのうち何とかなればいいなあ！

それにしても、この旅の終着点は一体どこなんだろう？

◆赤の大神官、本を書く

（その冊子につづられているのは、幼い子供が手習いで書いたような文字だ。

簡単に言えば字が汚い。

よいところを上げて言うなら、一文字一文字丁寧に書こうとしている努力は分かる。

インクの付け過ぎでにじみが酷い。

紙がそれほど高級なものではなく、繊維が荒いため、ペンをよく引っ掛けてしまったのだろう。

ところどころ、インクの飛沫を散らせている。

その冊子と言うよりは紙束に近いそれは、星櫃の横に隠しておいてある。

星原樹の能力か、紙が劣化する事は無い。

これが置かれてのち、筆者の願い通り三人の大神官が手に取った）

未来の、大しんかんさまへ

はじめまして、わたしは、あかの勇者様をせんべつした、大しんかんです。

わたしは、初めてのにんげんの大しんかんでした。

わたしが始めてだから、いろいろよく分からないことがあって、わたしもこまったので、次のあなたのために、書いておきます。はじめのひとは、次のあなたも、にんげんだろうっていってました。だから書きます。

星語なら、ふつうに書けるのですが、共通げんごはむずかしいです。五ばいは、むずかしいです。

ほかのひとに、見せたらいけないので、教えてもらえないから、ぶんしょうがおかしかったら、ごめんなさい。

ちゅうい！　大しんかんのあなた以外にみせたら、まおうの呪がはつどうするかも、だから、大しんかん以外には、みせないでください。とっても、大事な、おねがいです。ぜったいです。

あと、文字が汚かったら、ごめんなさい。

わたしは、星別者（せいべつしゃ）名では、【２／Ｄｓｎｋｎｎ】、といいます。

この名前が、わたしの名前です。勇者様は色がつくそうです。いいなあとおもいました。

あなたは、どんな名前でしたか？

でも、このノートをよむまえに、あなたもたぶん、わたしとおんなじに名前をなくしてしまっていると思います。わたしは、ちょっぴりさびしいきもちになりました。

あなたはどうですか？

いちど、星の中に書き込まれてしまった韻律なので、わたしたちの名前は、もうもどってこないです。星語がわたしたちの名前にな

ってしまっています。
知らなかったなら、ごめんなさい。
わたしは、知らなかったから、勇者様に教えてもらっていっぱい泣いてしまいました。
こどもがきらいと言っていた勇者様がちょっぴりやさしかったです。あかの勇者様は、あなたのころは、どんなふうに話されていますか？　わるいひょうばんが、いっぱい山もりあるひとですが、いいひとですよ。信じてくださいね。

ええっと、初めに大しんかんのやくわりについて、かきます。していたら、ごめんなさい。

大しんかんは、星神様のことばをつたえることができます。
でも、星神様は、全部は、おしえてくださいません。
にんげんが、きちんと、学ばなければいけないことは、言わないそうです。
わたしたちは、星神様とおはなしはできません。
大しんかんは、いっぽうてきにいただいたおことばを、ただ伝えるだけです。
でも、どうしても、星神様に聞きたいことがあったら、うらわざがあります。
星原樹のあるところだったら、大しんかんとして、星神様におうかがいを立てることが出来ます。でも、だいしょうが大きいです。星神様のことばをつたえるときの、二十倍はかくごしなくては、いけません。
それでも、大しんかんのことばは、ふつうのひとより、ちょっぴり星神様に届きやすいぐらいで、あまり効果はありません。
星神様は、世界を全部みてくださっていますから、大しんかんの祈りは小さすぎて、届かないのだそうです。わたしのしんちょうが、

小さいのとはかんけいないですよ。

わたしたち、大しんかんは、星神様の「声」をあずかります。星語を正確によみあげられる力と、韻律がきちんと実行できます。あと、神様のことばをあずかることができます。でも、あくまで一時的です。

いっぱい、神様がおしゃべりしたら、わたしたちのからだがもちません。たましいの、大きさがちがうから、神様にあっぱくされて、わたしたちのたましいが、けずられてしまうそうです。わたしは、勇者様の力になりたくて、いっぱい神様とお話してもらいました。でも、そのせいで、わたしはうすっぺらになっちゃったので、おなじぐらい、いっぱいおこられました。あなたも、気をつけてください。わたしたちのたましいは、とっても、ちっぽけです。あっというまに、なくなってしまいますよ。

次に、星別者のしゅるいについてかきます。

勇者様は、星神様の「手足」です。きょういの再生のうりょくと、戦う力をあたえられた、神様の兵士です。ひとと、神様のまんなかで、生きる苦しみにあえぎながら、たたかう兵士です。

聖剣は、気をつけてくださいね。星神様が、作ったものでは、ないのです。だから、聖剣といいます。星剣は、なくなってしまったときました。聖剣は、とてもとても大きな力ですが、大きなだいしょうがいります。あまり、つかわないほうが、いいです。勇者様の、存在値をうばいとる剣です。あぶないです。

勇者様は、しょうきが発生したら、出ます。しょうきが発生したら、まものが増えます。だから、星神様が、勇者様をせんていしします。そのため、大しんかんが出てから、勇者様がせんていされます。これは、きまりのようなものだそうです。

勇者様がせんていされたら、ささえてください。勇者様は大きな力をもっているひとですが、にんげんです。

神様のしれんは、勇者様に与えられます。ひとの子の苦しみを、勇者様が受けるそうです。でも、ひとりのひとが、苦しいのはふしぎだなとわたしは思います。だから、あなたも勇者様をささえてあげてください。ひとりきりに、しないでくださいね。わたしは、さいごまで、

（ここからしばらくは水のあとでにじんで読み取れない）

ので、おねがいします。ほんとうに、おねがいします。

ほんとうに、星神様とつながっているひとは、神子というそうです。尊という、とうといひとだそうです。つねに星神様とつながっていることが出来るので、わたしたちとはちがう手段で、星神様へ意思をつたえる事ができるそうですよ。

でも、めったなことではいらっしゃらないそうです。星神様がわざとつくらないと、ないそうです。はじめのひとがおしえてくれました。

まんがいち、あなたの時代に、神子がでたら、ちゅういしてください。星神様がにんげんをためしているということです。神子の目をとおして、星神様がみていらっしゃいます。

神子はよくみたら、わかるそうです？　どんなのか、そうぞうができません。これもはじめのひとがおしえてくれました。はじめのひとも、まだみたことが、ないそうです。なのにしっているのは、とっても、ふしぎです。神子は神様にいつもつながっているひとだけど、神様とお話しすることはできないだろうっていっていました。

おはなしするのと、みるのを、そこまでいっしょくたにしたら、

いきもののはんいをこえるそうです。ちょっとむずかしい話で、わかりませんでした。

ここから、わたしの話です。ちょっぴり、書かせてください。

大しんかんとして、わたしはいっぱいべんきょうしました。みじかい旅だったけれど、わたしはせいいっぱい生きることが出来ました。神様といっぱいおはなししすぎて、わたしのたましいはぺしゃんこに近いそうです。だから、このノートを書いておきます。未来の大しんかんさん、あなたも、あまり、お話しすぎたら、だめですよ。

わたしはなんでもないと思っていたのですが、おねえさんが、いっぱい泣いてしまいました。いつもはこわい、せんしのおにいさんも泣いていました。わたしはもうすぐ星にかえります。だから、せめてノートをかいておきます。

わたしはこうかいをしていないのですが、いろんなひとを泣かしてしまいました。未来の大しんかんは、しんぱいしてくれるひとを、泣かさないでくださいね。勇者様をいっぱい支えてくださいね。

わたしのおてがみに近い、ノートをよんでくれて、ありがとう。

わたしが未来の大しんかんのやくにたつために、この後にはいっぱい星語の韻律構成をかいておきます。神様の声をつたえるいがいに、あなたが勇者様のやくにたてますように。

わたし、ほんとうに、星語はとくいなんですよ。

あなたの、しあわせを、祈っています。

（この後百ページ余りにわたり旧星術および新星術の構成が記入されているが、解説までも旧星語のため、解読は困難と思われる）

神子、戦闘には参加できない

頭の上を変な馬っぽいのが飛んでいくのを、しゃがみながら見ました。ひー！　飛んでる！　あ、ちなみにあれはさっき勇者様に殴られた魔物です。何であんなのが吹っ飛ぶの。

私の背後に落ちて、魔物は消えた。相変わらずお見事です。

こんにちは、神子をやってる町民Cです！

職業は……無職よりはいいだろうって泣く泣く受け入れたよ！

無職はつらい……まあ、今も働いているかって言えば、微妙だけどね。

でもまだまだ他の人への自己紹介は、自分で出来ません。それどんな羞恥プレイですか。実態と本人のギャップがありますよねっ。

今日は荒野の真ん中で座り込んでます。

ちなみに皆さん戦闘中。

私は足手まとい以外の何者でもないので、離れてじっとしてる。

私は置物ですよ、私は置物ですよ！　どうぞお構いなく。

お枝様を持ったまま足を抱えて座る私は、一見優雅に観戦しているみたいにみえるけど、違うよ！　結構必死に観戦してます。万が一吹っ飛ばされてきた魔物を避けなきゃいけないしね！　素早さが鍛えられます。あ、石が飛んできた。座ったまま横にずれます。私の横を、石がカツン、と飛んでいきました。

こんなところで座っていて大丈夫かって思うよね！

何故かわかんないけど、大丈夫なんだ。魔物の皆さんは、何故か私を岩かなんかだと思っているみたい。基本攻撃されません。これ

もお枝様効果？　勇者様たちは普通に襲い掛かられてます。
　初めの頃は魔物を見ただけで怖くて固まってたけど、魔物は全部私をスルーしてお二人に襲い掛かっていくんだよね。私に来ても、硬直するぐらいしか出来ないから全く問題はないけど！　その状況を見た神官様が、大人しく観戦していてください、と笑顔で仰いました。私の動きが鈍いのは明らかですからね！　ありがたく観戦だけしています。あ、荷物もちゃんと見てるよ！　それぐらいは働きます。

　神官様が手に持った杖で変なドロドロをふっ飛ばしました。どろどろの核っぽいものを潰したみたいで、一撃でかたがつきました。魔物が瘴気に変わり、霧散する。今は太陽が出てるから、一瞬で消えるから瘴気は溜まりません。
　神官様、意外と肉弾戦に強いですね。服の下は筋肉なのか？　まさか着やせタイプ？　うらやましい……。私は胴回りは着やせせず、胸は着やせします。残念なことにね！
　そうこうしている間に、神官様は次は犬っぽいなにかを鋭い突きで倒しました。簡単そうに動いているけど、絶対私は無理。歩くだけで筋肉痛なひ弱町民です！　てっきり私は神官様は星術で敵を倒していくんだと思ってました。でも本人に言わせると、
「魔物が多いときは術がいいんですが、少ない時は殴った方が速いですから」
だそうです。意外と武闘派ですか、神官様。

　勇者様はさっきまで相手していた植物っぽい動く何かを片付けたみたい。
　剣がなかったら殴り飛ばしてたけど、やっぱり剣があるほうが効率的なんだって。確かに見ていると、剣で傷を与えたときのほうが消滅まで早いみたい。街を出るときに、予備で五本買ってた。陸馬さんに積んでいます。どれだけ潰すんですか勇者様。ちなみにまだ

一本目です。神官様が無駄遣いはしないでくださいねって笑顔で釘刺してた。目が笑ってなかった。あれ、怖かったです。勇者様の返事もちょっと間が開いてたから、そこはかとない圧力を感じ取ったのだと思われます！

ちなみに怪我もしないように気を使ってるみたい。理由はまあ、あれだけど、とりあえずはこれでよし！

戦闘が終了したみたいなので、私はスカートの土を払ってお二人のほうへ向かいます。怪我がないみたいでよかった。意外と見ているだけも疲れるんですよ。声を出したら魔物が気づきそうな気がして、口を押さえてじっとしてるし。ハラハラするしっ。

戦闘に参加するほうが無謀だからこれでいいんですけどね！

ともかく、やっとお仕事の時間です。本当に軽作業なんだけどね。

私は戦闘をしたあたりでお枝様を振って、

「Ｓｈ０ｗｗｋｖｖｖ　ｈｘｘｘ　Ｆｗｗｙ０ｗｗ（瘴気は不要です）」

と呟いた。これだけでなんと！　薄い瘴気だったら、お枝様効果でなくなっちゃうのだ！　すごい！　私でも出来るぐらい簡単です！

小さな瘴気でもコツコツと消していけばいつか世界のためになるかもね！　という程度のことだけど。とりあえずただ飯は食べられません。働くよ！

なんとなく役割分担が出てきた今日この頃です。

あの初めて勇者一行になった街を出て、既に二週間が経過しましたよ！　時間の流れって速い！

結局あれから自分の評判がどうなってるか怖すぎて、ひきこもっ

てましたよ。あ、領主様の館はさっぱりしてた。エロ彫刻は撤去されたり、売りに出されたり、譲られたりしたらしい。だ、誰が引き取ったんですか！　地味に気になります……。すっきりしたお屋敷、そのメイドさん評判は上々だった。掃除をしやすいんだって！　ですよねー。彫刻があれば、肩とか、胸とか、いろいろなところとかに、ホコリ溜まりますからね！　私の彫刻があるとすれば、胸は掃除しなくていいけどね。……自分で言って辛くなりました。いや、それ以前にそんな彫刻があれば私は泣きながら壊してくれと勇者様に頼みます。私の力じゃ壊せないのが分かっているからこその勇者様頼み！　一生懸命お願いしたら聞いてくれるよね。基本、融通が利きます。

お屋敷では、落ちた体力を戻すために部屋で飛び跳ねてたら、勇者様に見つかって心配されたり（頭の中的な意味じゃないですよね？）、メイドさんに謎の笑顔で見守られたりしましたが、おおむねのんびりと過ごすことが出来ました。ごはんが美味しかったから、去りがたかったけどね！

数人だけで見送られて旅立って二週間、選定による体質変化のためか、服は本当に臭くない。凄いな！　逆にホコリで汚れちゃう方が問題のようです。後、ご飯もちょっとだけで満足するようになっているのが実感できました。実感は出来たけど！　出来たけど！　私は食べます。量は減らしてるけどねっ。やっぱり、人間食が基本だと思いますよ！

陸馬さんがポー、と鳴きました。あ、ご飯の時間ですね。私じゃなくて陸馬さんのだよ！　幾ら食べるのが大好きだって、そんなに頻繁に食べてはいない！

餌を、陸馬さんの背中に置いた荷物からごそごそ出します。お世話は私が係ですよ！

それを見たのか、

「休憩しましょうか」
爽やかに神官様が仰います。勇者様もこちらへやってきました。
たまに、神官様、戦闘後にすっきりした顔をされているのにつっこんでいいんだろうか。ストレス溜まってるんだろうなあ！
こんな風に、のんびりと荒野の旅が続いています。

神子、忠告される

草をもごもご食べる陸馬さんの横で私も座り、パンの欠片を口に入れる。

硬く焼いた日持ちするパンはとんでもなく硬い。日持ちさせるために、水分をわざと飛ばして焼いている。これはこれで独特なちょっとすっぱいパンなんだ。水をちびちび一緒に飲みながら、ようやく噛めるぐらいの硬さに戻る。このちょっとじゅわっとしたところが好きです。これはこれでいける。

座り込んでくつろぎ姿勢の私と、先程の戦闘で使った剣を簡単に手入れしている勇者様と、地図を広げだした神官様。無言だけれど、ようやく気詰まりじゃなくなってきました。単に慣れたともいえるんですがっ。

神官様が地図を見ながら、

「……次の街は、あまり貴女を連れて行きたくはないんですが」

と仰いました。何でですか？　私はパンを噛みながら見上げます。

神官様は苦笑しながら地図を指して、大陸の中央付近を私に見せる。

「この辺りが、つい先日までもっとも栄えていた部分です」

一番大きな大陸の、丁度真ん中ぐらい。星都の上当たりだった。

「ここがまず魔物の被害にあい、壊滅的なダメージを受けました」

指でぐるりと描かれた範囲は、意外と大きな部分でした。

「壊滅的って……」

そういえば、パン屋を休む話をしたとき、おかみさんの娘さんが隣の大陸から逃げ帰ってきたな、と思い出した。……まだ一月たっていないのに、ものすごく昔みたいな気分になるけど。ともかく、私が住んでいた街の隣の大陸は、まさに星都のある一番大きなそれ

だった。

「魔物の群れに巻き込まれ、街が幾つか消滅しました」

私の頭の中に、火と血と魔の踊る風景が染みのように浮かびあがる。かつて家だった焼け焦げた残骸はまだ火の気を孕みくすぶっている。崩れた石垣、壊された生活用具。散らばる食料に目もくれず、人々を襲う魔物たち――まさに悪夢でしかない、風景。幻のように立ち上ったそれは、はじまった時と同じように唐突にそして一瞬で、あわい湯気のように消えてしまった。

瞬きよりも短い間に見えた光景に、私の体は硬直する。

「……どうしました？」

神官様が訝しげに私の顔を見る。私は何のことか分からず、首を傾げた。

「顔が真っ白ですよ」

私は何とか噛み切ったパンをごくりと飲み込んで、

「大丈夫です！」

と告げた。ちょっと食欲が落ちましたけどね！

生々しい幻だったな。想像力が豊かって言うレベルじゃないね！

今のはなんだったんだろう？

もしかして昨日見た悪夢とか？

まるで私の記憶のように、見覚えの無い光景が立ち上るとか！

ふだんの物忘れが激しい私への自分からの挑戦状かもしれないっ。

負けないっ。自分に負けないっ。

「……体調が、悪くなったらすぐに言ってくださいね」

まだ心配そうな神官様に、首を勢いよく振って了解を示す。心配をおかけしましたっ。大丈夫ですよ！

「ともかく、これから回る地域は、比較的被害があった部分になる

という説明は、先日しましたよね」
「多分聞いた気がします！」
私はイイ笑顔で答えました。神官様はにこりと笑って言葉の語尾を疑問系から念押しに変えてきました。
「説明しましたよ」
「……もう一度お願いします先生！」
二度手間、申し訳ないです。

神官様は根気強くもう一度教えてくださった。
あの時は地図がなかったから、なんとなく「へー」と聞き流してしまったんだよね。とりあえず一緒に地図を眺めながら説明を貰います。
どうやら勇者様稼業というのもむずかしいらしいです。片方の地域を回りすぎても、「こちらへは何故来てくれないのか」と言う声が上がったり、「ひいきだ」といわれたりするそうです。

とりあえず、大陸中央部に走っている動脈のような重要な街道を安心して使えるようにするのが優先なんだって。これが開通しない限りは、物流も人の流れも滞って、復興が遠のくそう。今いるのもその関係の場所らしい。そういえば、多少歩きやすい道でしたね。
各方面にバランスよく回りながら、みんなの安全を確保する。
わあ、聞くだけで胃が痛くなるじゃないですか！

「旅の途中の私たちに直接依頼があるわけではないのですが、星都や主神殿に高貴な方々から突き上げが来るそうです」
で、順繰りに回っているそうです。大変ですね、有名人も！　無名でよかった私！
「最近は、あなただけよこして欲しいとか言うこともあるそうです。もし、そんなことを言われても行かないようにしてくださいね」
「え？　私ですか？」

逆にビックリですよ。ただの枝持ちですから！　役には立ちませんよ。

「貴女も微妙に噂が一人歩きしていますからね。美味しいご飯に釣られたりしたら、ぱくりとやられてしまいますよ」

ぱくりってなんですか。可愛らしく言っても、黒い何かしか伝わりませんよ！　それにしても酷い。私、どんなにご飯に釣られると思われているんですか！

「そんなに子供じゃないですよ」

さすがに反論する。

　すると意外なところからツッコミが入りました。

「合計六回」

勇者様がぽつりと呟きを落としました。

「六回？」

何のカウントですか？　私は神官様のほうに乗り出しかけていた体を引き、勇者様にジト目を向ける。勇者様は剣の手入れを行いつつ、続きを口にした。

「先日の領主屋敷で、メイドから菓子を貰って食べていた回数だ」

「知ってる人だし、ついていかなかったですよ！」

ちゃんと確かな人からしか貰ってないよ！　心外な。でも実際は六回以上いただいた言う真実は、私の胸に仕舞っておく。

　私の反論に勇者様が続けて、

「知らない人から貰わないのは基本だ。あと、すぐに警戒心を解いてろくに知らない相手を部屋に入れない」

む？　私が常にそんなことをしてるとでも？　記憶にございません。だけど、私の不満げな顔を見た勇者様が、

「旅についてくる前に、あっさり信用して部屋に入れようとしたのはどこの誰だ」

えー……？　しばらく記憶を探します。探します……。

「そんなことありましたっけ？」

ぶっちゃけ覚えてません。勇者様は無言になった。呆れているのか

どうなのか、なんだか辛い反応ですよ！　なじるなら、なじってください！　生焼けの魚ぐらい辛いっ！

神官様が、

「とにかく、着いていかない、物を貰わない、さあ、復唱してください」

「着いていかない！　物を貰わない！」

わたしはやけくそになりながら復唱した。ちゃ、ちゃんと覚えますよ！　何でそんなに懐疑的なんですか。

「神官様、私は幼児ですか！」

「幼児ぐらい物覚えがイイ事を星神様に祈りましょうか」

うっ。心をえぐる言葉でした。

「ともかく、名前を利用しようとしているもの、実際にこまっているひと、様々なひとびとがこれからも関わってくると思います。次の街は、特に治安が悪化しているらしいです。近づいてくる人物は、ある程度の見極めは私でしますから、貴女は自分の身を守ることを考えてくださいね」

真剣な忠告に、私は頷くしかありません。

それにしてもどこから噂を仕入れてきているんですか！　謎です。

とりあえず、知らない人に食べ物を貰わない。

心に刻みました……。

微妙に……ツライ！

神子、観察してみる

私は歩くのが遅いので、大体陸馬さんに乗って移動している。あれから二回ぐらい戦闘はあったけど、私は相変わらず空気としてひっそりすごしました。

今のところ、時々ヒヤッとするけれど、戦闘で恐怖を味わった事はない。半端ない安心感です。さすが勇者一行！　凄いね！　私はカウントに入れなくていいけど。

それにしても魔物って、見た目がグロテスクだったり変な汁とか飛ばしていたりするけど、何故か余り臭くはないんだよね。

でもなんで岩とかがじゅわっていいながら溶けかかる汁を飛ばすんですか！　危ないじゃないですか！

戦闘が終わったら、不思議と汁や血っぽい何かまで、綺麗さっぱり瘴気になって消えるんだよね。瘴気はピンク過ぎて出来る限り吸い込みたくないからないからくんくんしてみたことはない。けど、お二人が言うには特に匂いがないらしい。私は見えるから避けまくっています。ごめんね！　どちらかと言うと魔物より陸馬さんのほうが獣臭いぐらい。

神官様によると、魔物が生物かどうかは、専門家の間でも意見が分かれているんだって。何の専門家ですか！　それも聞いてみたらどうやら魔物研究のひとがいるとか。どの分野でもマニアックな人がいるんですよ、と笑顔で言われました。今度、機会があれば本を見せてくれるそうだ。『たのしくがくしゅうシリーズ！　ふしぎないきもの、きょういのまものじてん』とかが私にお勧めだとか。地域ごとの魔物の特色がでているので、魔物も気候に影響されるのか何とか。詳細な説明はともかく、……なんだかまた子供向けな気が

する題名なんですが。そこはツッコミ待ちですか？　神官様の読書の範囲が分かりません。そういえば、前に廃墟で拾ったものまで目を通していたよね。ある意味突き抜けすぎてます。

それはともかく。魔物自体は怖い。でも比較的私がけろっとしているのは、戦闘が終わった後に魔物が綺麗に消えてしまのがかなり大きいです。

生々しさがかなり薄まっていると思う。それじゃなかったら、切り裂かれた魔物の死体が転がる光景にびびってた。トラウマものです。戦闘のたびに勇者様が魔物の血まみれ肉まみれだよ！　斬ったり殴ったり裂いたりしているから。血まみれ勇者様……そんなホラーはお断りだ！　あ、神官様は杖で殴っているから返り血はないみたいです。さすが星職者。違うか。

結局、神官様が話していた街には、半日ぐらいで到着しました。

城門の上に、ブロンザイトって書いてる。分かりやすい表示ですね！　これで地図のどこか悩むことはない！

神官様が言っていた、魔物の襲撃は、たびたびあるみたい。城壁や周りの地面に跡が残っている。魔物は消えるけど、それにあたえられた損害は消えない。

街を囲む城壁は焼け焦げがあったり、崩れているところを無理やり補修したりしてるのが分かる。周りの木や草も焼け焦げがあるところを見ると、火をはく魔物か、火の星術を使う人がいたんだろうな。あまり、街の近くで放火はしないでくださいね！　よその街のことながら心配になってきた。

そういえば、神官様はそんな星術は余り使ってるのを見たことがないなあ。星術の系統は、神殿で勉強したよ！　火を出したり氷を

出したりして攻撃する人もいるらしい。神官と魔術師の違いもいろいろ書いていたけど、私は半分しか覚えてないです！　サボっていたんじゃなくて、半分で勇者様がお迎えにきたんだよと主張します。居眠りはしそうになったけどねっ。興味ない事を聞くのって、何であんなに辛いんだ……。

それはともかく、街に入るには手続きが要るのですよ。

門は昼間なのに狭くしていて、門番さんが検問をしている様子。隊商の人たちが列を作って待っていた。その後ろに私たちも並ぶ。

私は物珍しさからきょろきょろ周りを見ていた。商人さんと目が合って微妙な顔をされたけど気にしない！　田舎もので申し訳ないです！　まだまだよその街は珍しいんだ。

街の大きさは、ここから見るぶんには前の街と変わらないかな？　ビックリするほど大きな街じゃない。周りに農地見えないから、多分交易が主体な街なのか、逆側に農地があるかだと思う。美味しい名物とかありますかっ。前、貸し本屋さんで旅行記を読んだことがある。旅行と言いながら、グルメ探訪を主にした本だった。その表現が秀逸で、また挿絵が美味しそうなんだ！　あの本のせいで私はご当地グルメって言うやつに並々ならぬ興味があります。でも街の外に出ると思っていなかった頃だから、どこの街が何が美味しいかさっぱり覚えてないですけどね！　もっとチェックしておくんだった。

手続きに思わぬ時間が掛かっているみたいで、かなり暇です。太陽が少しだけ傾いた頃ようやく順番が回ってきた。それから神官様と門番さんがお話しています。場所によっては税金が必要なんだって。

この街では特に勇者一行と名乗らずに入る予定だと説明を受けました。何でかは分からないけれど、神官様がそういうならそっちの

方がいいんだろうな。
神官様が護符を出して話をしている様子。星神殿の人を疑うことは余りないから、身分証明にいいんだって。確かに初めにお二人と話したとき、私も護符を見て安心した気がする。門の詰め所の兵士さんたちは、みんな疲れているみたいだった。空気がぴりぴりしているのが分かる。魔物のせいだろう。
私はなんとなく不安になって勇者様を見たら、この人はいつも通りだった。それに安心をする。今回はよそいきモードではないみたいで、普通に無表情のままです。これに慣れてきたのはいいことなのか悪いことなのか、どっちかは分からないけど。これもある意味進化！　私も日々、グレードアップしています。
青い鎧は分厚いマントでほぼ見えないから、勇者様も普通の旅人っぽく見えるはず。真っ赤な鎧とか金ぴかのマントとか売っているって武器屋のおっちゃんに聞いたことがあるから、派手な色の鎧は思ったよりも普及してるのかも。でもそんな派手な格好をしたら、魔物の標的にならないのかな？　普通に不思議です。

長い交渉が終わり、神官様が戻ってきた。笑顔に少しだけ疲れが見える。お疲れ様です。
うながされてやっとくぐった門の中の風景、それに私はもやっとしたものを感じた。
なんだろう、この街の空気。
何か、変だ。

神子、知らない街に警戒する

何に引っかかりを感じたか分からないまま、私はぐるりと周囲を見回した。

往来にはそこそこの人の数。でも女の人は少ない気がする。余り外出していないのかな？

空気はいがらっぽい。みんなが歩くたびに砂埃が巻き起こって、黄色っぽく風が染まる。肌とかに砂がつきそうでイヤだなあ。

建物は、前に見た町と大して変わりがない。距離的に離れてないから、地形がほぼ同じだ。そういった場所では街のつくりは変わらないそうです。海辺とか、山間とかだったらさすがに変わってくるらしいよ。凄いね！　このあたりの知識は、お察しの通り神官様の受け売りです。絶対、雑学王だと思う。歩く辞書だと考えそうになります。

まだメインストリートを抜けていない。私は陸馬さんの上でまだキョロキョロする。

がたがたと荷馬車を引いて陸馬が通り過ぎる。隊商の商人たちだ。あの陸馬さんは派手なオレンジでした。本当にこの種族は一体保護色をなんと考えているんだろうね！　可愛いからいいけどっ。

違和感の正体をつかめず、私は首を捻った。

「ちゃんと前を見てくださいね」

横を歩く神官様に注意を受けました。

「了解しました！」

背中を伸ばして前を見ます。前を見ながら、

「何かこの街、変じゃないですか？」

神官様に質問です。先生、教えてくださいっ。でも返ってきた答えは、

「何が変だと思いますか？」

まさかの質問返しだった。うむ。

そういわれてもう一度考える。建物の前に溜まる人々を見る。中を恐る恐る窺っている様子。中から酷い罵声や破壊音が続いている。喧嘩だろう。

「……昼間っから、酒場で喧嘩してますね」

これが深夜なら、住んでいた街にでもたまにあった光景だ。でもこんな時間から飲んだくれが徘徊してるってどうなんだ。太陽はまだ頭上に輝いて、真昼間ですよ！　酔っ払いっぽい人がうろうろしているのも、一人や二人なら分かるんだけどこんなに大人数なんて初体験です。皆お酒を飲んでご機嫌じゃなくて、暗い目をしている。目が、何かどんよりしているんだよ。楽しいお酒じゃないのがよく分かる。

それに気付いて、私は改めて周囲をぐるりと見回した。

ああ、そうか。

笑っている人がいない。

なんだかみんな俯くか、暗い顔をして歩いている。立ち話をしている人たちも、深刻そうな顔をしている。まあ、ニコニコして歩く人も少ないとは思うけど、この陰気率は異常だ。たぶん空気に色をつけたら薄ぼんやりした灰色になるかも。暗い！　この街暗い！

「あと、なんだか全体に暗いというか」

一つに気がつくと、だんだん、他のことも気になってきた。

あと、路上生活者の人が多い。裏の路地だけではなく、メインストリートでも俯いた人々が道のすみっこに座り込んでいる。大体は町長さんや領主様が保護するハズの人たち。

私の視線を追っていったんだろう、神官様が、
「壊滅した街の人々が、難民となって周囲の街に流入したんです。しかし、着の身着のまま逃げ出した人たちにお金があるわけがなく」
こうなってしまったのだ、と。路上生活をする人を指しているのが分かる。
視線の先にはやせ細った子供がいる。明らかにボロを纏った、難民と分かる子供だった。あ、子供が人にぶつかった。案の定怒られて突き飛ばされる。子供は幸い怪我がなかったのか、すぐに立ち上がって走り去った。
その小さな背中をぼんやりと見送っていると、先程子供がぶつかった男が怒りの声をあげた。スリだ！　チクショウ！　私は思わずもう一度子供が去っていた方向を見たが、もうその背中を見ることは出来なかった。怒り狂う男に対して、周囲は冷淡だ。掏られるほうが悪いと、歪んだ笑いを向ける人すらいる。
この光景がこの街でのいつもなんだろう。
私は今まで比較的治安のよい場所で住んでいたから、こんな風に日常の中に犯罪が溶け込んでいることにビックリした。
「ないときは、あるところから奪い取れ、だそうですよ」
神官様が疲れた雰囲気で零した。星職者としては複雑な心境なんだと思う。星神様の戒律になんかあった気がするし。
「だから気をつけろ」
不意に勇者様が口を開いた。滑らかな声は喧騒の合間を縫ってきちんと届きます。勇者様は実は陸馬さんの手綱を持ってくれている。私のほうをちらりと見て、勇者様は続けた。
「お前はこの街において弱者だ。狙われる」
そうだよね！　明らかに私は弱いのがよく分かります！
私は頷いて、
「気をつけます」
とお返事しました。

覚えていますよ、食べ物を貰わない！　知らない人についていかない！

あれだけ心配されたのも判る気がしてきた。

「国の方針として、廃墟となった街を復興させるためには元の町民達を送り返したいらしいのです。しかし、安全が確約できない上に、恐ろしい思いをした故郷へ帰りたがる者たちはいません。結果、何もかもが宙ぶらりんになったままなんでしょう」

神官様が悲しそうに仰った。

実際、彼らはどこにも受け入れられることがなく、難民となってしまうことが多いそうです。たまに良心的な領主様がある程度食糧を配給したとしても、それだけでは難民達には足りません。難民達は生活苦のために犯罪に手を染める。結果、難民を受け入れた街の治安が悪化し、難民達が更にうとまれる。悪いことが悪いことを呼び、どんどん悪くなっていくそうです。

「それだけに、主要街道周辺を安全区域に戻したいのですが」

なかなかです、と神官様の声が空気に溶けるぐらい弱弱しかった。

相当参っているらしい。

「街道の安全って、どうやって守るんですか？」

私の質問に、神官様は答えてくれようとしたけど、先に宿についてしまったようです。

「またあとで、ですね」

いつもより高級な宿みたいなんですがっ。陸馬さんを預けるお金もかなりの金額だった。きちんとした宿じゃないと危ないんだそうだ。

なんだか、違う世界に来てしまったみたいだ。

私は漠然とした不安を抱えながら街の風景を見回した。見慣れているはずの、普通の街に似た場所なのに得体の知れない何かがありそうで怖い。

そのとき、軽く背中を掌で押された。いつの間にか横に立っていた人を見上げる。勇者様だ。

「疲れたか？」
「大丈夫です！」
気を使わせてしまったかな、と思って、反射的に元気に答える。ならいい、と再度軽く宿に入るように促された。

街の雰囲気に飲まれている場合じゃないよね！
よし！　気合を入れていくぞっ。
握りこぶしを作って気合を入れてたら、勇者様に不思議そうに見られた。
そんな目で見ないでくださいっ。

神子、宿を観察する

宿で取れたお部屋は一つでした。

いつもは一応、男女別とかにしているんだけど、空いてないものは仕方ない。

みんな安全を求めてある程度の宿に泊まろうとするらしい。私でもお金があればそうすると思う。

別のところを探すかとお二人が話していたので、私が「一緒でも全く気にしない」と主張しました。逆に「気にしなさい」と神官様にツッコミを受けたけど。えー、経済的だと思いませんか、三人一部屋！　一人一部屋の時より、一人頭三割引ですよ！　つまり、ご飯一回分以上なのだ！　それを主張したら、神官様に計算は、速いんですねと誉められた。計算「は」のところが強調されたように聞こえたっ。誉められたけど、釈然としないです。

チェックインの時、宿の人に勇者様が変なことを言われてました。ちょっと離れていたけど、私は恐怖の地獄耳を持っています。聞き逃さないよ！

従業員はかわいい子連れてお楽しみですね、両手に花状態だとか言ってました。言う度にこっちを微妙な目線で見るんですよ！　そんなんじゃないですって。微妙に誉められたような気もするが、これも嬉しくない。なんかさっきから嬉しくない誉められパターンばっかりですね！　あ、勇者様がイヤなんじゃないよ！　なんだかあの従業員のひとの目線がねっとりとこう……品定めをするみたいでイヤだったんだ。鼻が大きい従業員の男の人だった。鼻を引っ張ってぐりぐりしたくなります。しないけど。

そういえば、こういった下ネタ話題を言われるのは勇者様が担当ですよね。領主様も一生懸命勇者様にナイトフィーバースポットを説明してたなあ……結局、あの情報は役に立ったのだろうか。聞い

たら聞いたで、また注意されそうだから言わないけど。逆に神官様はああいったことを言われない様子。雰囲気とか？

んん？　今何かに引っかかった。

さっき勇者様は両手に花といわれてました。

両手に花ということはっ。……神官様、また女のひとだと思われてるみたいですね。普通に喋ってるのに！　美人とは、悲しいものよ……。ご本人は気付いているのかいないのか、はたまたいつものことなのか、スルーしていましたが。

とりあえず部屋の中に入る。

すぐに勇者様が窓やドアを確かめはじめた。鍵の辺りを念入りに見たり、蝶番を触ったり。

なんだろうとジッと見ていたら、気付いて説明してくれました。どうやら変な仕掛けがないか調べてたらしい。なんですかそれ！　どうやら治安の悪いところだと、外から開くように仕掛けがされているときがあるそうだ。怖いなあ、という反面、勇者様は何故調べられるのかとまた疑問がわきましたよ！　このひとも出来ることの範囲広すぎます。

神官様が星術を使い始めた。しかもちゃんと消せる白墨で、床に何か書いてまで術を使っていました。この部屋に結界を作ったらしい。簡単に侵入できないように、とのこと。持続するように書いてるんだって。奥が深いですね。

それにしても、荒野を旅していたときよりかなり警戒が凄いんですが……。まあ、荒野ならお枝様を地面に刺しておけば魔物避けになるらしいから、わざわざ結界を張る必要がないのもあるけど。お枝様はいつも通り布でぐるぐる巻きの封印状態だよ。

それにしても、お二人のこの警戒。そこまで街って怖いところなんだろうか。

犯罪のとか、雰囲気とか、変だなあって思うぐらいなんだけれど。
私は思わず、
「厳重ですね」
って率直な意見を言ったら、神官様が、
「魔物相手の方がまだ気楽でいいかもしれませんね」
とぽろりと零されました。その気持ちがちょっと分かってしまう。
だって、襲い掛かってくる魔物は単に撃退すればいいだけだけど、
泥棒さんは捕まえるにしても怪我させていいかどうかも悩むしね！
「……いえ、すみません、さっき言ったことは忘れてください」
神官様が落ち込んだ様子で付け加えた。
「大丈夫ですっ。忘れるのは得意ですから！」
胸を張れることじゃないんですがっ。落ち込まないでくださいね。

私も部屋を調べてみた！　といっても、家具とかを眺めるぐらいだけど。床は石、壁は木で出来ています。丈夫そうだね！
小説でよく読んだ、床には実は穴が開いて隠し扉がっとかはなさそうです。床を叩く私を、勇者様が微妙な表情で眺めていました。
私は想像力が豊かなんですよ！　ここに落とし穴があったらどうするんですか！
「床には何もない」
「穴とかないんですか？」
「見れば分かる」
えー。私はちょっとガッカリしながら立ち上がりました。でも見れば分かるってどういうことなんだろう？　トラップを見抜く技術を持っているんですか？　あっても驚かないけどね！

ベッドは二つ、大き目のソファーが一つ。申し訳程度の小さなテーブルが一つ。椅子はソファーがそれをかねてるんだろうな。一応、ソファーでも寝れるように、毛布が一枚付いていた。
これで三人部屋と主張するとは！　宿の人は変な笑いを浮かべて、

ベッドは少なくてもいいですよねとか言ってたな。こんな狭いベッドで一緒に寝れないよっ。簡素な寝台は、思ったよりは汚くなかった。一応掃除はしているみたい。でも、あんな料金を払ったらもっといい宿かと思いました！　私の住んでいた街の平均より、四割増は高かった。

寝る場所について、「ソファーでいいです！」と私は主張しました。だって、どう考えても体格的に私だったらちょうどなんだもん。勇者様だったら絶対足がはみ出る。まして戦闘ではお二人しか働いていません。私はゆっくり陸馬さんの旅を満喫していただけなのだ！　動いてもないよ！　だからソファーで問題なしと思った。

でもこの意見に、お二人と言うか意外なことに勇者様が首を縦に振らなかった。

「体調を崩すかもしれないだろう。ベッドで寝ればいい」

「私はさっきまでずっと陸馬さんに乗ってました！　それほど疲れてませんから、ソファーで大丈夫です」

こんな感じで、ベッドに寝ろ、ソファーでいいのエンドレスな会話に、神官様が笑顔でざっくり終止符を打つほうが速かった！　いつも通り言葉にナイフの切れ味がありますよね！

「入口近くのソファーには私が寝ます。真ん中の寝台に貴女が寝なさい。勇者は窓際の方で。そのほうが賊の侵入に対応しやすいでしょうし」

そして笑顔も安定の迫力を備えています。

私はその内容に、私は思わず声を上げた。

「賊前提ですか！」

「ええ、賊前提です。警戒心は持って置いてくださいね。この街は……」

神官様は言いよどんだけど、続きを付け加えた。

「……人の心が、堕ちつつありますから」

神子、伝言を受け取る

神官様と勇者様は、それから程なくして外出しました。

私はお留守番です！

いろいろ調べたいことがあるんだって。二人が出て行った後はきちんと戸締りするように、と言いつけられました！　……やっぱりものすごい子ども扱いですか？　一度お二人の中の私への認識を聞いてみるべきかも。

窓を開けて、外を見てみる。王宮や神殿は綺麗なガラスがはまっていたけれど、そんな高級なものは宿にはない。木の扉が付いてるだけだ。ぜったい蝶番に油差してないな！　ギギギって耳に痛い音をしながら窓がやっと開く。

重い窓を開けてみた街並みは、たたずまいこそ本当に前の街とそれほど変わらない。なのに、この灰色の雰囲気はなんなんだろう？

これだけでなんだか息苦しいな。

路上で座り込んで、うつろのままに空を見上げる人たちを見たら、胸が痛む。何とかならないかな、と思うけれど、私が何とかできるわけない。

私はなにか凄いものを持っているわけじゃない。財力があるわけでもないし、知恵があるわけでもない。勇者様達みたいに、戦闘力があるわけでもないし、術を使えるわけでもない。出来ないことの方が多い。所詮町民です。才能なしの判定も受けてるしね！

だからこそ持っていないものを数えるより、できることを数える方がいいなって思って考え方を変えてる。強制ポジティブだ。

空を仰いでその高さを嘆くより、何か一つでも出来ることを探して地面を睨む方がいいと思う。裏のおばあちゃんも言ってました。おばあちゃん元気かな。あれからずいぶん遠くへ来たものです。

どっちにしても考えていても駄目だよね！　お腹が空くだけだよね！　と思考を切り替えて、とりあえず荷物整理に励むことにした。無駄に腕まくりとかしてみる。やる気を体現するよ。

いくら体から老廃物が出ないからといっても、砂埃とかで服がドロドロだから洗濯場を借りなきゃいけないし。さっき、宿に泊まる時に洗濯場のこととか、体を洗えるかを聞いておいてよかったね！

とりあえず出来ることがあったほうがいいかも。いろいろグルグル考えるのは正直苦手です。気分が落ち込んで、駄目になっちゃうから。

自分の荷物を整理してから、そういえば、お二人の服とかも洗ったほうがいいんだろうか？　と思い至る。出かける前に先に了解を貰ったらよかった！

昔、パン屋で同僚の子が「お父さんに勝手に下着を洗われて恥ずかしかった！」って言ってたから、家族と言えど恥ずかしいものみたいだし。でも何でお父さんが下着を洗う状況に至ったの。

今更凄く気になります。手紙で聞きたいぐらい気になるな！

でも手紙って意外と高級品だね。丈夫な紙もお金が掛かるし、送るのもお金が掛かる上に今の状況だったら本当に付くかどうか分からないみたい。ちょっとだけ郷愁が顔を覗かせる。手紙っていいなあ。あこがれるよねっ、遠くに旅立った友達からの手紙が来るとか！　この場合は残念ながら私が書くほうだけど。書いてみようか……と頭の中で文章を考えてみた。

けれど、現状を説明できない！　何を間違えたか勇者一行ですよとか、絶対嘘だと思われる！　当初言っておいた場所と違う街にいるし！　手紙も出せないのかなあ。

そんなことをつらつら考えながら荷物整理をしていると、ドアがノックされた。

「……はい」

今までの言いつけとかで、私は警戒をしながら返事をした。
「この宿の従業員です」
確かに聞き覚えのある声だった。
ドアをチェーンをつけたままでちょっとだけ開けてみたら、さっきのいやな笑いをする男のひとだった。そのお鼻でよく分かりますよ。
狭い隙間から、小さく折りたたんだ紙切れを差し出してくる。
「お連れ様から手紙です」
え？　手紙？　こんな狭い街の中で？　しかも、わざわざ紙に書いて？　いくら私が手紙をほしいと思ってても、こんなに身近にいる人たちから貰ったら戸惑いが先に立つ。
私が不思議に思ったのが伝わったんだろう。慌てたように宿の人は付け加えた。
「伝言でさあ。ちゃんと渡しましたからね！」
「はあ……」
でも伝言するぐらいだったら、部屋に帰ってきてくれたらいいのに。神官様とか、無駄が嫌いだからこんなにまどろっこしいのしさそう。
私は首を捻りながらとりあえず手紙を開く。
『急用が出来たので、こちらに至急来て欲しい』
簡素な文章は共通語の殴り書きだった。その下には簡単な地図が付いている。うーむ。ぶっちゃけ、方向音痴なんですがっ。よくよく読んでみると、それほど離れた場所ではないことがわかった。これなら行けそうかな？
私は最低限の荷物を手に取り、先ほどまで拡げていたものを簡単に片付けた。窓を施錠して、部屋も戸締りをする。お枝様は邪魔だし、街中では使わないだろうから置いていく。ここに置いていたほうが結界もあるし安全だよね！　わたしの背の高さと同じぐらいあるお枝様、普段持って歩くのって実は邪魔です。でも仕事だしねっ。
部屋の鍵は一応預かっていた。内側からもチェーンとか付いているから、中で閉めるときはそっちを使うんだ。

本当に用事ってなんだろうと首を捻りながら、私は街に出かけていった。

神子、さすがに危険を悟る

纏わりつく視線が、大変うっとおしいです！

私は敢えて周りを見ずに歩きますよ。

だって凄い視線を感じる！　前に勇者様達といた時にあった、お姉さんたちの厳しい視線とは別のイヤラシさがある視線。全身トリハダたちまくりだよ。どう見てもいいカモが歩いているぜヘッヘッヘな目線ですね！　怖いって！

柄が悪いっていうんですか、なんか通り自体がすさんだ雰囲気です。気力をなくしたように座り込む人たちがちらほら見えて、道にゴミが沢山溜まっている。それがなんともいえない嫌な匂いを発していています。道も、建物も汚れている。でもそれを掃除しようと言う人がいない。皆何かに必死だった。でもそれは決して幸福な方向に進んでいる人たちの表情じゃなかった。

――　人の心が堕ちかけています。

神官様の苦しそうな言葉が、頭の中に甦った。何とかしたい現状なのに、なんとも出来ないのを知っているもどかしさ。それが詰まった言葉だった。

この雰囲気のことですね。瘴気とはまた別の重い空気が街の中を包み込んでいる。当たり前のことが当たり前じゃなくなっている世界に、私はここに出てきたことを後悔しました。どうしようかな、帰ろうかな！　でもね、なんだか後ろに気配を感じるんですよっ。小動物並みに最近気配に敏感です。何かが研ぎ澄まされてきてるのかも！　うそです、調子に乗りました。

どっちにしても、この街では私が浮いているのが分かる。

ぎゅっと簡単な荷物を入れた小さなカバンを胸に抱え込みました。
手に汗をかいているのが、分かる。
目立つといっても派手な格好しているとかじゃないです。さすがに神子装束じゃないよ！　あんなひらひらは怖くて着てません。
自分の街を出てくるときに買った丈夫な旅装束だ。これなら多少の運動でも大丈夫！　かかとの低めのブーツだしね。だから今みたいに小走りで進めるのだ！　わずかに息が上がっております！　勇者様並に体力セレブになりたいものです。むきむきはカンベンだけど！
普通の格好でも、この街では目立ってしまう。

だって、女性自体が歩いていない！　これが指している事に、さすがの私でも薄々気付くよ！

つまり、出歩くことが危険だと言うこと。

うあー後ろにまだまだ誰かの気配がある。

このまま宿に帰るなら後ろの人たちとすれ違わなきゃいけないんだよね。それもさすがに怖い。
焦りながら地図を見る。
この地図の指しているところ、もうすぐなんだけどな。
進むか、戻るか。私は背後の気配に追い立てられるように道を進んでしまう。焦りと緊張に頭が全く回りません！　ヤバイという単語が、ぐるぐる頭を回るばかり。焦りだけが空回りですよ！
だんだん細くなっていく路地に、これはヤバイと実感が沸いてきたあああ！
勇者様神官様ごめんなさい！
先に謝っておきます！
犯罪にがっつり巻き込まれそうです！

言い聞かせられたの、微妙だと思っていたけれど……認める！
子供より私は始末が悪かったということを！
知らない人の言うことを信じない！　これも重要ですねっ。全部注意事項がないと駄目なひとにはなりたくなかったです……うわああん。

地図が指し示した場所には、廃墟みたいな教会がありました。追いかけっこの終点になりそうだ……。みごとに裏通り、そして人気がない場所だった。
私は速度を緩めて、うっすらとかいた額の汗を拭う。背後の人たち、諦めてくれたらいいのに。
本当にここかな？　地図はあっさりと書いていて、間違うはずが無い道順だ。教会だから、もしかして本当に呼び出しだったのかも、という懸念もある。
それにしても、あまりの建物の荒れっぷりに私は首を捻りました。あれ、星教の建物って大体の街では大事にされてるんじゃないの？
私はその前に立って、建物を観察しました。
建物の中に踏み込むのは、正直悩む。だって草がボーボーに生えてて、建付けとかガッタガタに歪んだ扉が申し訳程度についてるだけ！　これぞヤバメな物件って看板立てれますよ。格安物件間違いなし！
夜、こんなところ絶対怖い。近寄れない。一人じゃトイレに行けなくなります。まさにホラースポット間違いなし！　誰もいないよって言うのが離れてもたたずまいがさりげなく主張してくれます。
普通、こういったところって難民の救護所とかになりそうなものだけど、窓もドアも壊れたまま放置されてる。うーん、予算がなくなったとか？　でも主神殿とかは凄いお金かかってそうだけどね！
……というか、これはやっぱり騙されている雰囲気が満載ですよね！　だれがこんなところに用があるかっ！　怪しさ爆発だよ！
さすがにおかしいなー変だなーって思いながらここまできたけど来

なきゃよかったなあ。ウカツでした。

あの宿のおっちゃん、絶対なんかある。怪しい……乙女の勘が、怪しい匂いがすると囁いております。鼻がでかいのは関係ないけどねっ。

私はくるりと向きを変えて、宿に帰ろうとした。さっきからの視線は変わりない。そろそろつけて来たっぽい人たちがいる方向を突破しなきゃいけないんだよね。あっちの道のほうが大通りだった。微妙に狭い道の先、今の場所に私の背中を汗が流れます。

どうにもいやな予感がするんだよね。首の後ろがちりちりする。落ち着かない。

ちなみに、お枝様は部屋においています。あんなに大きな包みはもてませんから！

あそこだったら、神官様の結界があるから泥棒も入れないから大丈夫だと思ったんだよね。さっさと帰ろう。

ここは危険だ。私はとうとう緊張感に耐え切れず、走り出した。

その時、私の耳にかすかにその音が届いた。

「Ｊｙｍｎｗ　Ｋｓｈ　Ｓｍｓ，Ｓｍｎ，Ｆｋｋ　Ｎｍｒｓｒ，Ｔｓｋ　ｇ　Ｎｂｒｍｄ　Ｎｍｒ　ｈ　Ｓｍｎ，Ｋｋｙ　ｈ　Ｋｋｈ，Ｊｍｎｗ　Ｓｈｒｙ　Ｓｈｍｓ．」

韻律だ、と気付いた瞬間、ものすごい眠気がやってきました！

私は足をもつれさせそうになるけど、根性で踏みとどまりました。

下手糞な韻律だな！　おっさんのだみ声です。神官様の謳うようなあれと随分違う。寝言みたいに唸る声だ。でも、正確に言葉をなぞっているから、効果が出ているんだろう。……ん、なんでそんな韻律マスターみたいな感想を持ってるんだろ？　実際、勉強したことが今更生きてきた？　まさかね。それとも、眠いから、あっちと、混じったのかな……。視界が二重にぶれる。頭がぐらりと揺れた。

意図しないのに意識が飛びかける。体に力が入らない。壁に体を持たせかかる。随分強く打ったはずなのに、私は痛みを感じなかった。

ちょっと！　絶対ここで寝たらやばいよって言う場面ですよ！

それは分かっているけど、体がそれに逆らえない。韻律が耳から意識に体にしみこみ、効果を発揮する。

私の体から力が抜けて崩れ落ちる。頭を打ちませんように！　そんな間抜けなことを私は考えた。

なにか文句を言おうとして、私の意識は途切れた。

神子、誰かに拉致される

目を覚ましたら、薄暗い部屋でした。
人の気配は無い。

「んぐっ」

声を上げようとしたら、凄い圧迫感に口を開けませんでした。これはまさか……聞いたことだけがある、さるぐつわってやつですか！　人生初のさるぐつわですよ。嬉しくないお初です……。

「んうー」

何を喋っても呻き声にしかなりません！　鼻呼吸はできるから、息をするのには支障が無い。

さるぐつわって初めてしたんだけど、こんなに顎が疲れるものだったんですね。口をうっかり開けたら閉めれなくなりそう。むしろその場合、よだれを拭えない悲劇が確実に起こる！　乙女としてこれは死活問題ですよ！

何故よだれを拭えないか。
はーい正解は……縛り上げられているからです！　予想通りですよねっ。

荒縄ですよ。
これも人生初縛り……。特殊人生を歩んでいるな！　もうちょっと平凡に生きたかったけどねっ。
土の上に放置されている状態です。湿った土が、地味に冷たい。髪とか土まみれだろうなあ。洗うのが大変なのに。まあ、洗うどころではない状態ですがね！

もぞもぞと全身を動かしながら状態を調べてみます。首と目は動くし。

んー、血の匂いもないし、多分怪我はないと思う。変な姿勢で寝てたせいで体が痛いのはあるけど。

まず、手は後ろで縛られてる。肩が地味に痛いです。

あとは足首を縛り胴体と腕に縄を回してぐるぐる縛っていますよ！　普通に……っていうのもおかしいけれど、普通に縛られてます。

変な縛り方ではないです！　変な縛り方については、私より前の街の領主様に聞いてください。そのような図説の絵画が混じっていました。私、あそこで変な知識が確実に増えた。微妙に引いているのを察してか、絵の素晴らしさを解説しようとして縄目の美しさについて語ってらっしゃったけど、逆にそのせいで神官様もどん引きしてた。勇者様はいつも通りだったのがある意味恐ろしいです。領主様は悪い人じゃないと思うんだけど、なんていうか、うん、自重して下さいねお願いですから。領主様の思い出はどうでもいいから横に置いておいて。

私が身動きできないってことのほうが問題ですよね！

明らかにさらわれました！

拉致ですか……さすがの能天気な私でも、今のこれはかなりやばいと思います！

前回の拉致よりヤバイ。前回はまさかの勇者様だったけど、今回はあれより犯罪の匂いがぷんぷんするよ！　臭い……臭いぜ！　確実に匂ってやがる！

だからさっさと脱出したい！　勇者一行においてただでさえお荷物なのに拉致されて更にこの状態！　お二人に合わせる顔がありません……。脱出できたら、私田舎に引きこもってどっかの谷あたりにひっそりと住むことにするんだ……。脱出も出来ない今となっては、壮大な夢ですが。

とりあえず、現実問題、縄が私の行く手を阻みます。

この縄、解けないかな、と体を動かしてみる。気合入れて動いてみたんですが、どう考えても陸に上げられた魚程度にしか動きませんよ！　びっちびちです。横で見たら凄い格好なんだろうな、と死んだ魚の目をして考えますよ。動けば動くほど縄が食い込んで痛いです！　手首とかも結構締め上げられてる気が。小休止です。荒い息になっても鼻呼吸しか出来ないので、空気が物足りないです。

うーむ。

今、右頬を地面につけた格好で転がされてるから、何とか仰向けになろうとごろんと転がります。土がついた頬を拭いたいけど、無理だから諦める。どうせ全身土の上に転がされているせいでどろどろだろう。

上手く受身も取れないので、地面にちょっとぶつかって痛かったです。足を伸ばそうとしたら、何かをおもいっきし蹴ってしまいました。逆に足がダメージを受けましたよ！　しまった、この体勢は後ろ手に縛られたところとそれによって反っちゃう背中がじわじわ痛い！

こうでもしないと、部屋の中が見えないのだ。とりあえず、現状把握！

仰向けになったら視界が広いね！

それにしても、ココはどこですか。

思ったより天井は高い。石造りの堅牢な建物だ。

右手の壁のかなり上のほうに、空気孔か、小さな窓が開いている。

そこから射しこんでいる光が唯一の光源になっているおかげで、部屋が完全な闇になっていない。私が暴れた成果、その光の中に白いホコリがもうもうと舞い上がっているのが見えて、くしゃみが出そうになりました！　猿轡でくしゃみって、どうなるんだろ。

私の周りには、いろんな形の木箱が積まれていた。ただ積みまし

た！　っていう乱雑さのせいで、私が転がされているスペースが大変狭くなっている。

こう、整然と積んだらもうちょっとましになるんじゃないかな！

私も足を伸ばせるよ！　さっき上に向いたときに何かにぶつかったと思ったのは、多分この木箱だと思う。これを蹴ったとすれば、足が痛くなるのは分かる。そりゃあ痛いよ。

一時に持つ置き場みたいな感じを受ける。

ここは倉庫かな？

それにしては、人の出入りが少なそう。どちらにしても倉庫だったら、いろいろものがあるかもしれない。それに、脱出の役に立つかも！　何か落ちてないかな？　刃物とか嬉しいです。

部屋の中をもっと見ようとして首を傾けて、私は固まりました。

一瞬で硬直する。

ぎゃあああああ！　私は心の中で盛大に悲鳴をあげる。

本気で驚き、一瞬呼吸が止まった。

どっと汗が噴出して、心臓が凄く速く鼓動を刻む。喉から心臓が出そうなぐらいですよ！　心臓やもろもろ健康に悪い！

今まで私が背を向けていたほうの木箱の山の上に、ひとがいた。

仰向けになったから、やっとその存在に気付いたんだ。

そのひとは木箱を三段積んだ上に腰掛けてこちらをじっと見下ろしている。

フードつきのマントに、すっぽりと全身を覆った怪しいひとだ。

窓からの光の範囲から外れて、闇の中にひっそりと座っている。

気付かなかったあああ！

これが誘拐犯との遭遇ですかあああ！！

誰もいないと思い込んでいたところにひとがいたっていう驚きと、誘拐した犯人（推定）との遭遇の驚きに、私は恐怖と混乱で固まった。

さすがにこの状況はキャパシティ越えまくりだよ！

それにしてもひとだよね？　ひとだよね？　置物じゃないよね？

静か過ぎるんですが！

私はじっとその人物を見詰めた。

木箱の山の上に腰を掛けるそのフードの人物はふいに身じろぎをした。置物説は却下されました。やっぱりひとでした！　残念です！　置物……それはそれで怖いです！

フードのひとは、私が凝視していることに気付いたようだった。

「こんにちは」

その人は、場違いなほど穏やかに挨拶をしてきました。

わたしは真っ白になった頭で、一人つっこんだ。

えーっと……その、……どうリアクションしろと？

神子、不審人物と出会う

不審人物は、答えない私を少しだけ眺めた。
眺められてもリアクションができませんよ！　できるのはジタバタするぐらいだ！　バタ足さばきを見るがいい！　足首も縛られているけどね！　暴れるよ！
リアクションできないのは、結局転がされているせいだけどね！
ハハハハハ……はう。こんな風に笑ってるけど、実際はかなり緊張している。何が始まるかも分からない。先の見えない恐怖に、じっとりと掌に汗が出てきた。ぎゅっと手を握り締めて息を吸う。背中を流れる汗が気持ち悪い。
不審人物は不意に口を開きました。今更気付いたけど、男の人の声だ。それに気付かないって、どれだけ頭が駄目になってたんですか私！

「ｈｘｘｎｖｖｈｘｘｋ０ｎ０ｈ＊ｙｘｘｎ０ｎｘｘｋｘｘｘ．／」
（範囲はこの部屋の中）

何かがふわりとこの部屋を取り巻いた気配がする。
その一言で、世界の流れが変わった気がする。
久しぶりのトリハダですよ！　なんだこれ。私は不自由ながらも周りを見回してキョロキョロします。
私の様子を気にせず、不審人物は星術を続けます。綺麗な声だった。不審人物なのに！
流れるような韻律は、いままで耳にしてきたものとは何かが違う。ひとに分かり易いんじゃなくて、世界に分かり易く謳われている、って言葉が頭に閃きました。私、詩人になったのかな?!　私の様

子など気にせずに、ドンドン星術は編まれていきます。

「ｋｘｘｘｖｖｖｓｈｖｖｖｈｘｘｘｓｗｗｇｗｗ．／」

（開始はすぐ）

世界が韻律に耳を澄ませている、息を潜めて次に何が命じられてもすぐに実行できるように。

まるで楽団の指揮者が演奏を始めるときみたいだ。指揮棒の先端に、全ての意識が集中している。この場合、次の韻律が指揮棒に当たる。緊張した空気が部屋に満ちている。

「ｋ０ｎ０ｂｘｘｓｈ０ｎ０ｋ０ｔ０ｈｘｘｘｄｘｘｘｒ＊ｍ０ｋｖｖｖｚｗｗｋｘｘｎｘｘｘｖｖｖ．／」

（この場所のことは誰も気付かない）

この言葉が広がった途端、倉庫の雰囲気がふっと変わった。世界から少しだけ色が抜けて、周囲の景色が遠くなった気がする。

その光景を見た途端、この部屋は閉鎖されたんだと分かった。

「ｋ０ｋ０ｄ＊ｎ０ｔ０ｈｘｘｘｄ０ｋ０ｎｖｖｖｍ０ｈｖｖｖｂｖｖｖｋｘｘｘｎｘｘｘｖｖｖ．／」

（ここでの音はどこにも響かない）

この言葉のあとに、静寂が深まりました。知らないうちに外から聞こえてた音が全て遮断された。外から実は音が聞こえてたんだ。あっ、もしかしたら叫んでたら助けてくれるひとがいたかも？　それでさるぐつわですね、そうですね、助けを呼べないようにですね……。

「ｓｈｗｗｒｙ０ｈｘｘｘｔｘｘｘｃｈｖｖｖｓｘｘｘｘｒｗｗｍｘ

ｘｘｄ＊・／」
（終了は立ち去るまで）

最後の韻律が空気に溶け、星術が終了しました。私は知らずにつめていた息をゆっくり鼻から吐き出しました。溜息をつきたいけど、さるぐつわが邪魔をする。

どうして神官様が使う星術は意味が分からないのに、こんな風に私に意味が聞こえる星術があるんだろう？　勇者様のも意味が分かるんだよね。新と旧の違いっていうのは聞いたけど、どっちがなんだかよく分かっていません。

不審人物は、世界からこの部屋をあっさり切り離したようです。そう、こんな風に星術の効果がなんとなく分かる！　もしかしてこれが乙女の勘？　違いが分かる女になりました。やったね！

で、何をするんだこのひと。

わざわざ音が聞こえなくするのは、拷問でもする気ですか！　やめてよ、町民の心は弱いので、ばっきばきにおられまくりますよ。すぐに何でも吐いちゃうよ！

固まる私に、フードのひとはこう言い放ちました。

「僕はただの見学だからあまり気にしないでほしい」

え、正直意味が分かりませんよ。私の周りは説明不足の人が本当に多いです。

困ったことに、ちょっとのヒントとかで分かるほど賢くないからちゃんと一から十まで説明を求めますよ！　ひとを拉致して何をするんですかっ。

「んぶー！」

怒っても声が出ないんだけど、とりあえず訴えてみる。怖さを怒りで何とか潰している状態です。手が震えているのを、ぎゅっと握りこんで、その人を見上げる。

「一つ訂正すると、君をさらったのは僕じゃない。僕は君を見に来ただけだから」

え、見に来ただけ？
見に来ただけって、私は珍獣かっ。
確かにこんな風に床でびっちびちしていると珍獣っていわれても仕方がないけど、乙女に向かって何と言う言葉！
ちょっとぐらい助けてもらってもいいでしょう！　不審人物は首を傾げながらさらりと、
「助けないよ」
と言い放ちました。
なんだかとっても酷いこと言われてる気がするんですがっ。気のせいですか！

そして私は、はたとそのことに気付きました。
ん？　私、声を出していないのに会話になってる？

「そうだね。思ったよりよく聞こえるから、もうそのままでいいね」
そう言いながら不審人物は立ち上がって、するりと木箱の上から降ります。そして私の横に膝をつく。まるで影が動いているみたいに音もしないし風が動かない。変だ、と言う事はさすがの素人にも分かる。不自由な身の上ながら、近づいてきた相手からあとずさり距離をとった。
「本来君が警戒すべきなのは、僕じゃない」
上から覗き込まれます。顔は陰になって見えない。ただ、視線が真っ直ぐにこちらを見ているのが分かる。
「君の敵は魔物なんかじゃないんだよ」
どういうこと？　精一杯目元に力を入れてじっとりと睨む。でも相手は私の眼力をスルーしました。酷いっ！
「馬鹿な子ほどかわいいっていうけれど」
不審人物はいったん言葉を切り、しみじみと感じ入るようにこう付加えました。
「馬鹿すぎるのも考えものだね」

ちょ、ちょっと！　いきなりこのひと出てきて私のことをぼろくそに言ってますよ！　自分で言うなら自虐ネタになるけど、人に言われたら腹が立つって事があるの、知ってますかっ！　不当に貶められていますっ酷いです！　訴えますよ！

「訴えるなら誘拐犯の方が先だろう？」

あ、そうですね。そっちの方が先だ。うむ。

私が頷くのを見て、不審人物が溜息をついた。

「……騙され易過ぎる。深蒼や大神官が苦労するのがよく分かる」

思いっきりあきれた口調です！　また馬鹿にされた！　知らないひとにとやかく言われる筋合いはありません！　きー！

……さっきのセリフでなんか引っかかった。それを深く考える前に、額にべしっと手が置かれました。手はひんやりとしていた。あっ、私の額汗だくですよ！　緊張の油汗です。

「ｓＯｓｘｘｘ」（走査）

痛っ！　一瞬びりっと何かが体の中を走ります。見学者は展示物に手を触れたらいけないんですよ！　見学者の心得を何とする！

「もがー！」

暴れる私を全く気にしていない様子で、不審人物は深く深く溜息をついた。

「やっぱり君には【０／Ｍｖｖｋ０】（神子）が振られているみたいだね」

その星語の響きに覚えがあり、私は暴れるのを止めて見上げた。

「……残念だ」

声は深淵から響くように深い闇を孕んでいる気がした。

いやな予感にトリハダが止まりません！

不審人物は急に私を軽々と抱き上げて、木箱の上に座らせる。まさかのお姫様抱っこでした。祝！　初お姫様抱っこ！　本当にいやな初めてが多いですよ！

「またろくでもないことを考えているね」
先ほどの声の響きは全く無かった。でもあの声を私は聞いたことがある気がする。初対面……ですよね？　むむ？　最近記憶力に自信がなくなってきたからね！　私が首を捻るのに、不審人物は、ああ、と声を洩らした。
「自己紹介がまだだったね」
初対面だったようです！　ますます自分の記憶力に自信が無くなった！　ツライ！
「はじめまして、【０／Ｍｖｖｋ０】、神子。僕は【１／Ｓｈｒ】」
二つ目の言葉が意味が聞き取れない。首を傾げると、どうやら分かってくれたようです。そうだったね、となにかに一人で納得して、彼はフードを外した。
真っ白い髪と、周囲が僅かに灰色に沈んだ白い虹彩の眸。闇の中では強烈に浮かび上がるその色が、私の目に飛び込んできた。
「君の耳に届くように言い直すと、【１／Ｓｈｖｖｒ０】（始原（しろ）の勇者）になるかな？」
私の右頬についたままだった土がポロリと落ちたけれども、それに気付かないぐらい私は驚きに硬直してしまった。

神子、会話をしているつもり

怖い、と初めに思いました。自己紹介してくれた自称始原（しろ）の勇者には失礼な話だけど、怖い！

「さりげなく失礼な子だね、君は」

いつもは心の中だけで話しているから失礼な子だって言わないでください。それだったら、さるぐつわを外して、普通の会話をさせてください。

「却下」

絶対言うと思った。いたいけな私を解放してあげてもいいじゃないですか。

「怖いっていう僕に頼むのは本末転倒だろう？」

だって怖いよ！　何がって、綺麗過ぎて怖い！　男のひと相手にこの表現を使うとは思いませんでしたよ実際！

私は目の前の人を凝視する。睨めっこは得意だ！

神官様みたいに、美人だって言うのとまた違う。人の温かさが余り感じられない容貌なのだ。

白い頭髪は老齢のそれとは違い、艶がありながらも霜を集めたみたいに真っ白だ。ゆるいウエーブが掛かっているせいで、淡雪みたいに見える。長さはそんなに長くない。

白い目って初めて見ました！　白い虹彩の周りは、不思議と僅かに角度によって色を変える。そのせいで眼球と虹彩がきっちり分かれ目が分かるんだよね。

肌は少しだけ日に焼けている。それだけがかろうじて生きているものなんだと思わせます。男の人の顔立ちだってちゃんと分かる。弱弱しさよりも冷たさが際立つ目鼻立ちです。

例えて言うなら、覗き込んだ青く透明な湖の底が深すぎて見えないときみたいな、あるいは振り返って見えた夕焼けが世界を燃やす

ほど輝いていたときのような、そんな不安定な怖さと感動をあたえる容貌です！　よし！　頑張って詩人になってみました！　心のガッツポーズです。私の持ってる言葉を駆使しましたよ！　キラキラしい言葉遣いに正直疲れたけど。

とりあえず、あれだ。整いすぎて怖いです！　こんなに美形が存在していたら、私の乙女としての何かがなくなりそうです！　とりあえず、お肌のお手入れはどうしているんですか？

「……肌の手入れはしてないよ」

あ、お返事ありがとうございます。

でもこの説明で分からない人が沢山いると思う。そこで紹介するのは神殿の天井画！　あそこで見た顔です。こんな顔の人間がいると思えないよと思いながら見てたから、実際に動いているのを見たらびびります。

んん？　天井画って事は、この人の年齢は一体幾つだろう？

そんなにぽんぽん勇者様が交代するほど、激しく世界は危機に陥ってたっけ？

私が首を捻っていると、

「君の思考が取り留めなさ過ぎて、頭が痛くなる」

額に手をやりながら呆れ果てて白さんが言います。

どうやら私の心の声はここまで全部ダダモレだったらしい。今更だけど、心の声で会話できるって、なんか凄いよね。乙女の秘密は読み取らないでくださいね。

あと、貴方は白いから白さんで。私命名です。こういった呼び名は早い者勝ちですよ！

遠い目になって溜息をつきながら私の向かいにある木箱に白さんは座りました。

勝手に私の考えを読み取って、何であきれてるんですか！　ツッコミまくりますよ！

「白さん、ね。まあ、君にとっては深蒼（あお）が勇者だからそれが妥当か」

どうやら勝手に納得してくれたみたいです。私は座らされた木箱の

上で足をばたばたさせて、どうして脱出を手伝ってくれないんですか！　ガタガタ多少音をさせたところで、結界のせいで外に音が漏れない。安心して暴れられるよ！　いや、本当は音漏れしたほうがいいのか？

乙女が縛られているのを見て、何も思わないのですか！　自称始原の勇者さん！

私はそのまま白さんに文句を言った。心の中でだけど。

「自称じゃないよ、これは完全に他称」

微妙なニュアンスが含まれている言葉ですね。ちょっと同情しますよ。なんたって私も神子とか呼ばれている珍獣ですから。

「そうだね、縄で縛られて拉致されている神子は前代未聞だね」

前代があったんですか？　なんか、神子はいないみたいに聞いたんですけど。

「いるけどいない」

面倒な会話をする人だ！　また問答集が始まったー！

このひととの会話は、たまに通じない時がある。なんだか全部私が知っているみたいに話すしっ。一人では会話は成立しません！　つまり会話は言葉を受け取る相手がいて成立するものです。相手に伝わらない言葉は駄目ですよ！

それに私は何も知りませんよ！　説明してください！

私は抗議する。

身じろぎをする度に縄が地味に食い込んで痛いんですが。もうちょっとダイエットが必要だったかな？　座っていて太るということは無いよねっ。

白さんはじっと私を見た。

「思考は飛ぶ、記憶をぽろぽろ取りこぼす。今の君に説明をしてもすぐ忘れるだろう？　そんな面倒なことはしない」

何でそんなことを知ってるんですか！　さてはストーカーですか！　怖いっ。

「だんだん遠慮がなくなってきたね」

ツッコミをするけど、白さんは思ったより気長ですか？　失礼な思考をしてると思うけど、意外に怒りません。

うーん。それにしても、本当に貴方は始原（しろ）の勇者様？　やっと私は神官様にお伺いした話を思い出した。勇者の現われる間隔について。

「残念ながら」

……勇者様っていうのは、星が一巡りか二巡りする間に一人、って聞いたんですが。

つまり、百年から二百年に一人選ばれるもの。

「そうだよ。実際僕がそう呼ばれたのはざっと星暦六〇〇〇年代のことだ」

え、二千年前ですか？

とんでも告白ですよ！

まさかの千歳オーバー発言！　年取りすぎ！　若作り過ぎですよ！

「別に若作りしているわけじゃないけど」

でももっと古臭い喋りかたしないんですかっ。現代用語に精通しすぎでしょう！

「そのツッコミはどうだろう」

その返しもどうなんですか？　独特のテンポで話すから、白さんとの会話は難しいです。

「君の思考も酷いものだよ」

おじいさんなら、かわいいひ孫娘ぐらいの気持ちで、温かく見守ってくれてもいいじゃないですか！

「君がひ孫娘だったら微妙だよ」

白さんのとんでも発言も微妙ですよ。いきなり二〇〇〇歳デスヨと言われても普通信じませんよ！　そう、普通は信じない。なのに、私の勘が嘘を言っていないと囁く。どこに信じる要素があるかわからないけど、嘘じゃないと思ってしまうんだ。

私はじっと白さんを見ました。人を見る目があんまり無い庶民だけど、じっくり観察してみる。既婚者と未婚者の見分けがつかない町民です、見る目ないよ！　パン屋のおかみさんにコツを聞いたけど分かりませんでした！　あと悪い人の見分けもつきませんねっ。見分けがついたらここにはいない……うう、辛くなってきた。

目の前で話す白さんはどう見ても若々しい外見。

でも、雰囲気がおかしいんだよね。生活感がありません。白すぎるから？　お肌にしみ一つありませんよ！　敗北感で胸がいっぱいです。更に旅人っぽいのに手ぶらです。荷物やお金とか、どうしてるんだろう？　寸鉄も帯びていないって言うのかな、武器を持って

いる雰囲気はありません。そういえば、始原の勇者の時代に新星術が生まれたとか聞いた覚えがある。星術が使えるから武器は要らないのかな？　神官様は面倒くさいから殴る方向らしいけど。

私が観察をしているのを分かっているのか、白さんは静かにこちらを見ています。全身を覆うフードつきのローブの下の服は見えません。靴は汚れていない。それにしてもこの倉庫にどこから入ってきたんだこのひと。もしかして私が運び込まれる前からいた？　私の寝顔を観察していたんですかっ。あっ、視線が冷たくなった。聞こえてるんですねっ、やっぱりこれも聞こえてるんですね！

じっと見ていて気付いた。生活感の無さは、多分纏う空気のせいだと思う。纏う空気がセイヒツの間に似ているんだ。静か過ぎる穏やかな雰囲気があります。嫌いじゃないけど、澄み過ぎて居たたまれない。

こんな目立つ人がそもそも食事したり、普通の宿とったりするのが想像できない。ひとを外見で差別したらいけませんがっ。で、普段何を食べてるんですか？　肉と魚とどっちが好きですか？

「……ところで、星暦はだいたい二千年区切りだというのは知ってるかな？」

私の思考は読めているはずだけれど、白さんはあっさりスルーしました。酷い。

白さんが話し始めたことを頭の中で繰り返す。このひとは多分喋りたいことだけ喋るタイプですね！　了解しました。勇者様に学ぶ聞き役の態度を踏襲して聞き役にのぞみますよ！

えーっと話題は二千年でしたっけ？

神殿での勉強が役に立ちますよ！　歴史は六千年代までは簡単にさかのぼれる。でも、そこから前が謎なんだって。大災害で全部無くなったとか。

昔から星原樹があった事はよく知られたことだけど、どんな国があったかは実はよく分からないらしい。たまに不思議な遺跡が発見されるけど、全く意味が分からないんだって。

星原樹が出来た頃から、星暦が始まったんだというのはずっと言い伝えられていることらしい。学者の先生達が研究しているそうだ。で、それがなんだって言うんですか？　木箱の上にずっと座っていたら、お尻が痛くなってきた。ちょっと身じろぎしただけでも縄が擦れていやなんですが。土に転がされていたのと縛られているせいで色々痛いんですがっ。おーい縄解いて欲しいですよー。

「二千年毎に、世界は変わるんだ」

私の訴えは聞こえないフリをされるらしい。この乙女の敵め！

……まあいいや、で、世界が変わるってどういうことですか？

この疑問は正確に読み取ってくれたようです。白さんは優しい声で付け加えました。とんでもない内容を。

「文字通りだよ。二千年で世界は滅びて生まれ変わる」

白さんはゆっくり指を折って見せた。一つ目から始まり、

「星暦一九九九年、三九九七年、三回目は少し早かったから五九八七年。今が第四期にあたる」

そう言いながら四本目の指を見せられる。

……は？

そこでようやく私は今年の年号を思い出す。星暦七九九六年。……もしかして、もうすぐ。

「そう、二千年の区切りがくるね」

あっさりとした口調は、天気の話題と同じぐらい軽いものでした。とんでもない内容を語っているようには到底思えない。

もしこれが酔っ払い親父が言ってる内容なら、ハハハ親父も変な夢を見てるんじゃないのかって笑い飛ばせると思う。

でもこのひとはそういった意味では嘘をつかないんだろう。私の中でそんな変な確信がある。

だからこそ怖いんですが！

いきなり世界が滅びる予言ってなんですか！

絶対滅びるんですか……？

私は全身からさーっと血が引くのを感じた。油汗がさっきまでと

別の意味で吹き出る。緊張で息が短く荒くなってしまう。

話が壮大すぎる！

でも、それが本当だとして、私に話したところで流れが変わるとは思えない。何で私に話すんですか？　私は非力ですよ！　それを知っても止められるとも思えない！　勇者様の一行に混じっているといっても、ただの町民です。さっくり剣で刺したら死んでしまうぐらいの戦闘力の無さですよ。……私が出来ることは本当に小さい。さっきも窓からこの街のことを眺めていて、非力さを実感したところだったのに。

白さんは、私に話をして一体何をさせたいんですか！

嘘一つ見逃さないように、私は白さんを正面から見る。

お腹に力を入れて、姿勢を正した。じゃないと何か負けそうな気になる。お肌の艶は負けていますがね！

「それは女の子が男に負けちゃ駄目だろう」

がー！　それはつっこむところじゃないですよ！　白さんは真面目な話をしているんですか！　どっちなんですかっ。

「真面目だよ。絶対に滅びるかというと、それは分からない。今期の神子（きみ）が現われたということは、星神様の裁定が最後の段階に入っている」

ここで星神様の話になるんですか？

神様がいらっしゃるのに、何で世界が滅びるんですか？

世界が危険だからこそ、勇者様達が選定されて戦っているんじゃないの？

疑問が浮かんだけれど、その次にまさか、と考える。

私はそれを思いついたけれど、恐ろしくて思考から消そうとした。

しかし、白さんはそれを正確に読み取った。

「そうだよ。世界は神様が滅ぼすかどうかを決めるんだ」

君は知っていると思うけど。白さんはそう付け加えた。

私は、喉に重いものが詰め込まれたような気がした。

神子、怒る

変でしょう！

私は気を取り直して白さんに噛み付くように考える。

魔物の親玉みたいなのが魔王とかで、それが世界を滅ぼすんじゃないんですか？　神様じゃないでしょう。そんな、酷いこと神様がするんですか？

「魔王などいないよ」

白さんは静かに断定します。

魔王の呪、とか言うのも聞いたことがある。勇者様達の旅は、魔物を倒すことじゃないの？　じゃあなんで戦ってるんだ。勇者様達の旅の目的って、何なんですか。

「目的は本人達に聞けばいい」

聞いたことがあるような、ないような。

でも勇者様は純粋に誰かを助けるために旅をしているみたいですよ。それじゃ駄目なんですか？　何で神子が出たら裁定が始まっちゃうんですかっ！

「落ち着きなさい」

落ち着けません！

私はガン！　と木箱を縛られたままの足で蹴った。

足が痛いけど構うものか！

私は滅多に怒るほうじゃないけれど、カッと頭に血が上るのを感じた。

暴力的な気分になっている。

多分、縛られていなかったら白さんに文字通り噛みついていたに違いない。

それぐらい衝動が強く私を突き動かす。

その根底にあるのは、やるせなさや、悲しさや、理不尽への怒りがぐちゃぐちゃになって、全部入り混じって、凄い色の絵の具みたいに私の気持ちを塗りつぶしていく。

この瞬間も白さんは私の思考の流れを読んでいるはずだ。

なのに、怒っているのを聞いているのに、静かにこちらを見るだけだ。

私は白さんを睨む。

目線に力があれば、串刺しに出来るのに！

どうして人を滅ぼすとか、するんですか！

とんでもないことを言い出したこの人は、絶対何かを知っているはずだ。私は血が上った頭のままで問い詰める。

私に無駄話をしに来ただけじゃないんでしょう！　滅びるとか滅ばせるとか、勝手に決めないでください！

そもそも、人間が魔物で困っているのに、神様は何をされているんですか！

「その、魔物だよ」

ようやく、白さんは口を開きました。

「魔物が現われたから、勇者が選定され、世界の裁定が始まるんだ。それが今回の四期の特徴」

魔物ってなんですか！　あんな生物、何で世界にあるんですか？

そのせいで沢山の人が泣いて、今もこの街みたいに苦しそうなひとが沢山いるのに！　どうして星神様は魔物を放っておくんですかっ！　私は興奮しすぎで鼻息が荒くなります。ぐぎぎぎぎ。さるぐつわが実に邪魔！　はずしてー！　思考だけでも暴れても、この怒りは伝わっていない気がする！

「十分伝わってるよ」
白さんの秀麗な眉の辺りには、確かに不快そうな皺が出来てますね！　ふふんだ！　そこが皺になってしまえ！　そしてちょっぴりストレスで禿げ上がるがいい！
「しょぼいけど恐ろしい呪だね……」
しょぼいっていうな！　思いっきり呪ってやる！　ぎー！
「さっきの答えだけれど、魔物は魔物だよ。人間の敵として定義されているものだ」
何で世界に人間の敵がいるんですか！
その思考をぶつけたあと、私は気付いてしまった。
「……星教でもきちんと言ってるだろう？　世界は星神様が造りたもうた。星神様が神だと知覚した後、星の配置し韻律を定め、命の基盤を整え、子等を野に放った。世界は、全部神様が造られたものなんだよ。僕らも、人間も、魔物も」
……魔物も。
なんで、なんで！
私の頭はぐちゃぐちゃだ。だって、いままで勇者様達凄く頑張ってた！　でも、それも全部神様が仕組んだことで、しかも世界が滅びに向かっているって意味が分からない！　勇者様達の苦しさとか、意味がないってことなんですか！！
私はぼろぼろ涙がこぼれてきた。でも拭えない。白さんがぼんやりとした白い塊にしか見えない。
流れる涙がさるぐつわに吸い込まれて正直不快です！
衣擦れの音とともに、目元に柔らかい布が押し当てられました。
その上から大きな掌が私の目元をやわらかく覆います。
ビックリして涙が引っ込みました。
「そのままで聞きなさい」
白さんの声だけが瞼の裏に響く。
「世界はとんでもなく短い周期で既に三度滅びている。星神様が滅ぼしたくて滅ぼしたんじゃ、無いんだよ」

それは、どういうことですか？
少しだけ、ほんの少しだけ落ち着いた私は、その先をうながした。
押し当てられた布と掌は、ほのかに温かい。
「昔の話をしよう」
白さんは穏やかに話し始めた。韻律を謳うように、なめらかな言葉を操りながら。

神子、昔の話を聞く　一度目の滅び

「一度目。人間は簡単に星語を操った。その頃、共通語はなく星語が人の言葉だったんだよ――」

白さんの話と一緒に、映像が私の頭の中に流れていく。

見慣れない不思議な服を着た人々。ゆったりとした袖のたっぷりとした布を使った服だ。

空は高く澄み渡り、緑は滴る恵みをもたらしている。

優雅な人々が、白亜の宮殿のような建物で謳い、笑う。宮殿に見えたそれは、庶民の住居だ。

星酒と呼ばれる神授の甘露の杯を干し、星神様を讃えて敬う人々。

それは理想郷と呼べるような街並みで、とても美しい世界だった。

みんなの笑顔が穏やかな世界。

いや、穏やかな世界だった。

ただ、とある一を除いては。

泣き叫ぶ女性がいる。

街から外れた山の中で裸足のままで地面に這い蹲(つくば)り、彼女は一身に穴を掘っていた。

彼女は襤褸(ぼろ)を纏い乱れた黒髪を振り乱し、らんらんと輝く瞳で空を見上げる。

三つの月が空に昇る日だった。

彼女は星のめぐりを正確に把握していた。この術をなすには、このときを逃してはならぬと狂気と裏腹な冷酷さで計算する。

美しかったかんばせは汗と怒りにゆがみ、この世ならざるもの、すなわち人の形をした悪意を体現していた。彼女は地面を掘る。爪ははがれ、手は土と血にまみれて黒々としている。

しかし彼女はその奇怪な行動を止める事は無い。

彼女の周囲は、事切れた男女の死体が折り重なっている。

首をねじ切られ死んだ男は、彼女の恋人だった。身体を真紅に染め死んだ女は、彼女の姉だった。

愛していた二人は、彼女を裏切っていた。

狭い世界が全ての女だった。ゆえに、世界が彼女を裏切ったようなものであった。

二人の血を地面に零し、それを持って毒となす術式を彼女は血で書き記す。

彼女は吼える。世界に向けて、神に向けて。

――全てに裏切られた！　私は全てが憎い！　世界が憎い！　全部、滅びてしまえ！

それは命を削りながらの呪詛だった。血を吐きながら彼女は滅びを望む。

彼女はそのまま狂いながら呪詛を呟き続けた。

本来なら、たった一人の呪詛が世界に広がるほどの強度は持たない。

だが、不幸にも彼女は特殊な存在だった。

星原樹の一枝を託された女。彼女を指して人々は巫女と呼ぶ。

巫女が独り狂ったところで、世界を腐り落とせるだろうか。

それは世界に落ちた染みであった。

しかし、その一滴は確実に浸透してしまった。

まず、彼女が持っていた枝が汚染され、それがあろうことか媒介となり、世界に彼女の呪詛がばら撒かれる結果となったのである。

気づいた時にはその染みは大きく広がりすぎていた。星原樹の世界の浄化作用が追いつかぬほどに。

世界の根源たる韻律で呟かれたその呪詛は、世界に対する毒となり、水を腐らせ、大地を殺し、風を死の運び手にした。

星神様は人の世の事は人に任せていたので気付くのが遅くなってしまった。

毒に犯された全ては一度消し、それ以外の部分を生かすしかない。

星神様は心ならずも一度、世界を消すこととなった。

それが星暦一九九九年の話だ。

世界は滅び、僅かな人々とともに新しい大地が生まれたのである。

「そして、これを機会に共通語が生まれることになった」

私は目の前を流れていった映像に絶句していた。彼女の引き裂かれそうな痛みが伝わり、私の胸をかきむしる。

「では、次の話だ」

神子、昔の話を聞く　二度目の滅び

「二度目。世界は新しく生まれ変わり、人々は秩序を重んじるようになった――」

目の前の世界が切り替わる。

先ほどまでのような、光に溢れていた世界ではなく、今の世界に近い森が広がっている。

その中に小さな集落があった。

うっそうとした森は昼間は光を通さず、静寂を伝えるばかり。この景色のどこに滅びが潜むというのだろう。

集落の中に、魂の綺麗な赤子が生まれた。

その赤子は瞬く間にあらゆる知識を習得し、美しい若者になった。

やがて若者は森を飛び出し、世界を巡る。

二度目の世界では、人々は一所に固まるということが無かった。

昔の滅びのことを口伝えにし次代に伝える際、毒の恐ろしさと固まって生活していたゆえの急速な滅びを戒めていたのである。

人々は様々な場所に都市国家を設立し、気まぐれに訪れる旅人を鷹揚（おうよう）に受け入れながら、外界と僅かな交流を持っていた。

若者は旅をする鳥のように、軽々と世界をまたぎ国々を訪れ、知識を習得していった。それは植物が水を吸い上げるように、彼にとって自然なことであり、たやすいことであった。

彼の能力は人々のそれより高かった。

人々は若者を賢者と讃える。若き賢者が現われたと。若者は純粋な好意で々に自分が得た知識を分け与えていった。

無償で差し出していた若者の手は、やがて欲にまみれた黒い手に掴まれる。商人は笑う。

――賢者様、私に提案があるのですが。

人々に知識を渡すにも、一人では限界がある。集団を作ってしま

えばよいのだ。食事などの伝手はこちらにあるから、心配しなくてよい。

商人の思惑は若者には見抜けないものであった。若者は、残念ながら身についた知識を知恵として働かせることが出来ない類の人間であったのだ。

商人は瞬く間に若者を慕う人々の集団を作り上げた。それは徐々に異様な体裁を持ち出す。若者は問われたら答える、誰にとっても最善の答えを。それゆえに誰も思考を放棄した。困ったことがあれば彼に問えばいい、というほどに。

彼は知らぬまに、神の移し身だと崇め奉られることになってしまった。いつしか若者は直接人々と会話することが無くなり、商人が彼の言葉であると人々に様々な指令を下すようになる。

「この頃、神様はその大部分を腐りきった大地の復旧に注がれていらっしゃったんだよ。だから人の世のことには無関心だったんだ。ただそれは神の事情で、人には知ることが出来るはずもない」

若者のところにはあらゆる疑問と財が積み重ねられるようになった。商人は彼の片腕としてあがめられ、いつしかその場所は黄金の都と呼ばれるようになった。若者の知識は人々の生活を楽にした。こんこんと湧き出る泉のごとく、都は潤い、人々は豊かになった。

そのころ、若者の知らぬところで一部の人間が暴走を始めた。星教の排除だ。助けてくれない神などいらぬと教会を取り壊し、神官たちを弾圧した。それに対して周辺都市は静観を決め込んだ。それらは口をはさまなかったのではなく、はさめなかったのだ。若者の樹立した都市は膨張し、最大の国家となっていたのだ。

人々の驕りは思いとどまることを知らない。自分達の正義を掲げ、いつしか星教を弾圧を始める。

そのことは若者は知らなかった。敢えて知らせられてなかったのだ。商人は彼に大人しく従順な美しい姫を与え、高い塀の中で静か

に暮らしを送るように仕向けていた。若者は壁の向こうで何が起こっているかを知らず、穏やかな暮らしを送っていたという。

たまり過ぎた膿みはいつしか更なる病巣と化す。

人々の負の念は、しかも神への負の思いは星原樹を蝕み、その葉の一部が枯れるに至った。あの綺麗な大樹の葉の先が、黒く汚れてはらりと落ちる。落ちた地面に触れる前に、幻のように葉は大気に溶け込んでいく。

「神様は悩まれた。自らが去ることで人々を安寧に導けるのであれば、それは正しいことなのだろうと。でもね、神様と世界は切り離せないんだよ。神が去るときは、全てが崩壊する時なんだ」

民衆がとうとう星原樹を焼き払おうと、万の人数が押し寄せた。それに対するは星教の信徒僅かに数百。合戦というよりは、虐殺が行われると思われた。しかし結果は逆だった。

星原樹の樹より発する神気に当てられ、万の人間が狂い死にした。ますます黄金の都における廃神論が高まり、周囲の都市との関係が悪化する。

そして、大戦の勃発。

世界に闘争が発生しない時が無くなり、世界において瞬きの間に二十人が死ぬ時代となった。世界の現状を知るために、神によって御子(みこ)が遣わされた。だが、「神の目」として人の間に入った御子(みこ)はたった二週で殺された。食料狙いの夜盗だった。命とともに奪われたのは、わずか三つのパンであった。

ここにいたり、神が動くこととなる。世界に死が満ちる前に、心あるものを救い上げようと。

星暦、三九九七年。

星神様は心あるもの達に届くよう、小さな声で呼びかけた。

――　争いを嫌うものたちよ、耳を塞ぎなさい。

幼子達が涙に濡れた瞳で、空を見上げる。母を促し耳を塞ぐ。
路地の隅で震え、隠れていた少女は、不思議な声に怯えながらも耳を塞いだ。
老人は空を仰ぎつつ、地に伏しながら耳を塞いだ。

一方、争いに明け暮れる人々は、剣戟の響きのせいでその声を聞くことが無かった。
彼らの周囲は悲鳴と砂塵で溢れかえっていたためである。

そして神様の声が世界に響き渡った。
その内容は生きているものには分からない。ただ、その言葉を耳にした、言葉を解するものは死に至った。戦場で兵士達が人形のようにパタパタと崩れ落ちていく。その形相は苦しみと程遠く、眠るような表情だったそうだ。そして死体は残る事は無く、光の粒となり消えた。
荒涼とした戦場跡は誰もおらず、砂礫の風が吹き抜けるだけとなった。

血と闘争の時代が、こうして強制的に終了することとなった。闘争の歴史については、苦しみの思い出であり人の恥であるとされ、次代に知らされること無く闇に葬られた。
歴史書が積み重ねられ、火を放たれた。舞い上がる火の粉は夜空に吸い込まれていく時はまるで星の輝きのようだった。

……ふっと、現実に戻る瞬間。夢幻の世界が、ただの瞼の裏の闇に変わった。涙はとっくに止まっているけれど、まだ白さんは手を

離してくれない。話が続いているからだ。
白さんが私の顔を覗き込んだ。空気の動きで、それが分かる。
血の匂いと鉄の匂いそして人が腐る匂いがまだ私の周囲を取り囲んでいるような気がする。
「大丈夫かい？」
続けるかどうかを、私に問いかけた。私は口と目をふさがれたままなので、かすかに頷くことで意思を伝えた。
「じゃあ続けるよ――」

神子、昔の話を聞く　三度目の滅び

「三度目。穏やかな人々とともに、新しい時代が幕を開けた。さすがに人々も懲りているからね、闘争を嫌っていた」

神様は問われれば答える神様へとなられた。前回は沈黙により混乱が広がったからね。ある程度は関わろうとされた。神の主導のもと、世界は穏やかに発展した。

この二千年期は穏やかに乗り越えられると誰しも思っていた頃だった。

現在の世界より文明が発達し、一度目の世界のように穏やかな世界に近づいてきた頃の話だ。

穏やかであるがゆえに、人々は命の長さに注目するようになった。飢えと闘争、そして病を駆逐し、注目したのは幸福の継続である。

人々は神様に問いかける。

寿命を延ばすことは出来ませんか。

神様は答える。

全ては星の巡りで決まっていること、それは変えられない、と。

その時代、一人の少女が現われた。彼女はまだ未熟であったが、たゆまぬ好奇心と才能に溢れていた。

彼女は早くに両親を亡くした。

どん底の日々、考えるのは懐かしい思い出ばかりだった。

どうして人は死ぬのかしら？

彼女は考えた。

神様が決めているからじゃないのか？　何気なく誰かがそう答えた。

彼女は様々な文献を調べた。星神様に直接問いかけるほどの権利を持っていなかったので、当時あったあらゆる文献を調べることしか出来なかった。本と文章の海を漂いながら、彼女は一つ結論を出す。

ひとに組み込まれている韻律を変えることで、人の命も操ることが出来るんじゃないかしら？

星の巡り、すなわち時と運命に触れることが無ければ、それは可能であると思いついたのだ。

早速彼女は医療の星術を操るものに弟子入りをし、研究に打ち込んだ。彼女の研究は実を結ぶことなく評価されなかったが、彼女は打ち込み続けた。これが完成すれば、ひとはもっと幸せになると信じたからだ。

やがて時は流れ、彼女はとうとう術を完成させた。

喜びの声を上げる彼女。彼女が完成させたのは、寿命を延ばす方法ではなく、命を甦らせる星術だった。生体の韻律を組み替え、そこに存在率を変動させる式を組み込む。

大々的に「ひとは死を超えた！」と発表され、一躍彼女は時の人となる。

それは瞬く間に人々の間に浸透した。不治の病に罹患したものも快哉をあげる。死んでもその後甦ればよい。家族を亡くした人々は感激の涙を流す。もう一度会えるとは！　闇に潜むものたちもひっそりと笑う。死を気にせずともよい時代が来た、と。

それは画期的な発明だった。死と生の境界線が無くなった。

星神様はそれも人の進み方の一つとして、静観することにした。

確かにその術は「星の巡り」を変えているものではない。理論と

しては成り立つ術だった。ただし、警告を与えた。

何かを存在させようとすれば、他の存在を削るしかない。多用することは控えなさい。

社会のありようが変動した。

死ぬことが無いということは、傷を負っても病を得ても何とかなるだろうという楽観に繋がった。それは社会全体に薄いまどろみのように広がっていく。

死に恐怖しないが故の、生への軽視である。

漫然と生を引き伸ばされた人々はただ享楽に身を浸し、犯罪が増加した。死を恐れなくなったので、何でも出来たのだ。

死ねばすぐに甦らせる商売も定着し、命が金で買える時代となった。

術の乱用により、人々に見えない部分の世界のゆがみが蓄積した。

あるべきものではないものが、存在しているというゆがみ。

命と存在は本来結ばれているべきもの。しかし、甦った彼らには星の巡りは関係なく、存在するための力は誰かの何かを奪って補われてしまう。

たとえば、一人の少女が甦ったとしよう。彼女の二区画横に住んでいた老人が、吸い取られて死亡する。一見関連性の無い消滅と再生が、世界のあらゆる場所で巻き起こった。関連性が見て取れないため、人は便利だと乱用した。急死が増加したが、すぐに蘇生できるため誰もその増加と分布になど気を払わなかったのである。

星神様も危惧されていたことが、とうとうやってきた。

最後の引き金は、花が枯れたと泣く子に、母親が花へ甦りの術を

使ったこと。
それは、最後の一滴であった。
僅かなその術により、とうとう世界のバランスが崩れた。
歪んだ世界が崩壊する。限界まで歪んだ世界が、正常に戻ろうと跳ね上がった。世界にとっては身震いのようなものだった。今まで散々痛めつけられていたものが、限界を超えたのだ。
それは一瞬だった。

人々は星神様にすがる間もなく、砂のように消えていった。
世界の大多数の人間が既に一度以上死んでいたため、世界が正常に戻った途端、存在を維持できなくなったのだ。都市も、人も、砂と消えた。

五九八七年。人が人の欲望により消えた、三度目の崩壊の話。

とても慎重に、白さんの手が私の目から外された。
あたたかい布によってこもっていた熱が逃げ、肌が涙の水分のせいでひんやりする。
長い長い幻視の旅が終わったけれど、私は現実になかなか戻ってこれない。
「星神様は、四度目を創(はじ)められることにとても悩んでいらっしゃった」
白さんの声は淡々としたものだけれど、表情が僅かに沈んでいる。
それにしても、このひとに今の何か凄いのを見せられたけど、一体あなた幾つなんですか？　なんだか千歳がどうとか言っている場合じゃない気がするんですが！　今の記憶は誰の記憶なんですか！
白さんはあっさりと
「僕のだよ」
と言い放ちます。この人は何時からうろついているんだ。旅が人生

ってやつですか？
「僕がうろついているのは、この第四期からだ。さて、今の世界の話をしようか」
私は緊張しながら待ちます。さっきまでの事は終わった世界の話だ。だから手を出しようが無い事。でも、今からの話は直接私たちに関わってくるんだ。
奥歯を噛締めながら、じっとりと白さんを睨む。
さあ、どんとこい！
「そんなに気合入れなくても」
溜息を洩らしながら、白さんは話し始める。

神子、そして今の話をする

「世界を三度喪った星神様は、泣いていらっしゃった」
遠い目をしながら言う白さんに、私は問いかける。
神様も泣くんですか？
「そうだよ」
現実に引き戻されたように、白さんの目が私に向けられる。
「巫女も御子も人々も失い、深く嘆いていらっしゃった」

その声をひきがねに、私の中からある記憶が立ち上がる。

耳の奥に、悲しい音が聞こえる。
透明な澄み切った悲嘆が、ゆっくりと世界を巡るさまが脳裏に浮かぶ。
余りにも悲しい音だった。
胸を引き絞られ、あらゆるものを悼み、慈しみ、そして絶望を孕みかけた夕闇のような音。
あと一歩で暗闇に転がり落ちるであろう光明の残滓と、夜の深さに人々は慄くしか出来ない。

聞くだけで涙がこぼれそうになる。さっきようやく止まった涙がじわりと湧き上がるほどの静かな哀しみの唄だった。多分、これが神様の嘆きなんだと思う。
うわー沁みる！
悲しい！
ワンワン泣きたい気分になる！
無理やり違う方向に頭を向けようとしても、ずるずるその青く透明な哀惜の念に引きずられそうになる。白さんが私の目をまた布で

抑えた。ちょっと白さん、それよりも縄を解いて私が自分で拭った方が早くないですかっ。

「遠慮しないで」

します。遠慮しまくります。鼻水でますよ！　ほーら、縄を解きたくなったでしょう！

「鼻をかみたいときは遠慮なく言うこと」

それこそ、お断りですよおおおお！　そんな世話を焼かれたら、乙女として立ち行かなくなります！

「今も厳しいと思うけど」

酷すぎる！　相変わらず酷すぎる！！

さらりとひどいことを言いながらも、意外に丁寧な仕草で涙を拭ったあと、小さな溜息をついて白さんは話を続ける。

「どの滅びも、個人にきっかけがあった。けれどもそれは人間社会のひずみが飲み込み、更に酷い結果を生むことになった」

一度目の滅びの女性。またその憎しみの元となった恋人と姉。

二度目の滅びの若者。もしくは彼を神へと仕立てた商人。

三度目の滅びの少女。あるいは最後に術を使った母親。

彼らは決して初めから誰かの不幸を望んでいたわけではなかった。それはさすがに私でも分かる。ちょっと歯車が狂って、世界まで狂ってしまった。

でも、あんなに簡単に世界が滅びるものなんですか？　それを考えたら、何度も今まで世界が滅びてそうなものなのに。

「本当に危険な引き金は、小さなものの場合が多い。大体はそのきっかけで爆発するぐらいの土壌が世界に出来ているんだ」

死体が折り重なる荒野、砂となり消え往く人々。

幻視を思い出して私がぶるりと身震いした。恐ろしい絵が頭の中に浮かび上がりそうになる。慌てて想像を頭から追い出しました。夢に出たら確実にうなされる！　寝れないよ！　私の欲求が不満に

なるよ！
「君はどこでも寝れるじゃないか」
悪夢は別問題ですよ！　白さんは大概私を馬鹿にしているっ。ちょっとは女の子扱いしてくれても！　え、なんですかその微妙な表情。
「……なんでもない」
ぎー！
いきり立つ私をよそに、白さんは淡々と話を続ける。マイペース過ぎるよ。私もマイペースだと思うけど、このひとほどじゃないです。
「この四期は初めから人々に枷をかけた」
枷（かせ）？
私が縛られているみたいにですかっ。
「そうだね。君は縛られているね。もうその話題は食傷気味だよ。僕に解くつもりはない」
いや、そういう問題ではないですよ……？　解くつもりがないって、そんなに力強く言わなくてもっ。
「世界が滅びる前に、何らかの兆候が出るようにした。たとえば、人々の間に争いの気配が立ち上がればそれが原因で魔物となる構造に変えた」
魔物は……生まれるんですか？
「そう、人間達が知らず知らずに生み出した瘴気が溜まり魔物となるんだ。人の殺気、嫉妬、強欲なそれら全てが混ざり合って魔物が生まれる。魔物は自分達が生まれる原因となった人々を殺しやがて自壊する。そういった風に作られたモノだ」
……魔物は、人間が作ってる……？
白さんはゆっくりと頷いた。

魔物は、人間だけを襲う。それは、人間が生み出したから。だから、動物を襲わない？　今まで何回か見て来た勇者様達の戦闘を思い出す。魔物は、私と陸馬（うま）さんを決して襲わなかった。それは一度の例外もない。私は星原樹を持っていたからか、ともかく、確かに魔物が動物を襲うのを見た事はなかった。

でも、今までのことを考えて私は白さんに疑問をぶつけた。

人間が瘴気を生み出すって、変ですよ！　この街の中とか、ピンク色は見えませんでしたよ！　こんなに治安が悪化している街なのに！　あと、瘴気って人間の身体に悪いって言ってませんでした？

「……ここもいずれ、瘴気の底に沈むだろう。兆候は出ている。……人間は自分達が生み出した毒で殺されるんだ」

それは、とても残酷なことじゃないんですか？　関係ないひとも、死んじゃうかもしれないんですよ！

誰も死にたくないに決まってます！

一生懸命言い募る私の顔を、白さんは正面から見詰めた。

「そう、それも解決すべき問題だった」

だった、という過去完了系に、私は微妙に悪い予感がする。

「本来は人々が反省し社会全体で生まれ変わればいい。しかし、それもなかなかむずかしいと思う。だから、二つ逃げ道を造った」

逃げ道、ですか？　そう、と白さんは頷いた。

「もしも人間全体が罪びとでも、一人でも心正しいものがひとの可能性を示すなら、魔物は浄化され、世界は救われる　――　その構造も作られた」

それって。私は漠然とその答えに思い当たり、ぎゅっと歯を食いしばった。

「一番世界で可能性を持っているもの。つまり、勇者という人物がそれに当たる」

神子、深淵を覗き込みかける

確かに、星教で才能を見てもらうときにそんな風なことを聞いた覚えがある。この話を聞くまで、私はすっかり忘れていたんだ。勇者というのは無限の可能性を秘めてるって。でも、それは個人の可能性であって、何か今聞いたのとは別次元な気がしますがっ。

でも、世界の全部を勇者様に背負わせてしまうのって、酷くないですか……？

まだ短い間だけど、いろいろなことが頭を過ぎる。勇者様も、一人の人間だ。驚いたり動揺もする。笑ったところは偽臭い笑顔しか見たことがないけど！　重すぎですよ！　色々と！

いくら勇者様が頑丈でも、いつかはぺしゃんといっちゃいますよ！

「集団としての人間が暴走した結果、何度も滅びが訪れた。では、個人の単位ではどうだったか。個人では、評価すべき人間もいたかもしれない。でもそれは数の前に無力だった」

だから、一人を選ぶんですか？

「そう、一人を選び、力を増加させ、世界のゆがみを突破させる。それが今まで何とか世界が持ちこたえている理由だ」

今までの勇者様達が、そうなんですか？

勇者様みたいな人が沢山いれば、みんなで戦えて、楽に魔物とか追い払えるんじゃないですか？

白さんは私の意見には何も言わなかった。

それに、こんな話は、本当は勇者様達にすべきなんじゃないんですか？　私に話しても何の解決にもなりません！

「君に話すのは、君の内部での情報統合が上手くいっていないから

だよ」

せ、専門用語は使わないでください！

「……知らないことを知っていることがあるだろう？　君が聞いたのか、誰に聞いたのか分からない知識が」

私は最近のことを思い出した。

領主様の屋敷でのこと。知らないはずの勇者様達の行動を知っていた。私が物忘れが酷いから、誰かから聞いたのを忘れていたと勝手に思ってた。

「神子は簡単に神様と繋がってしまうからね。君の存在の九割五分は、神子としてあるために神様の知識も混ざってるんだよ。酷くなると、自分の記憶がどこからどこまでか分からなくなる」

瞼の裏、闇の中で。記憶を拾い上げる私の姿を思い出した。

幾つもの記憶の欠片。知らないはずの知識。

自分の記憶も入り混じり、どこからどこまでが、自分だか分からない。

自分がぐらぐらして、そのまま消えそうになる錯覚。そのまま入り混じってしまえば、私は世界から消えてしまう――。

「コラ」

白さんが私の額を叩きました。その勢いに、私はのけぞりました！　痛いです！　絶対額が赤くなってますよ！　暴力反対！

はちんと不安感が消え、急に現実が戻ってくる。

「君は君。なんだろうとそれは変わらない。覚えておくこと」

先ほどの不安感のせいで、ふわふわとなりながら私は頷きました。

なんだったんだろう、今の。

「あまり、深淵を覗き込んではいけないよ」

白さんの声が少し硬い。余りにも真面目な顔をして言うので、私は素直に頷いた。

「それとは別に、君はもう少し色々考えてみた方がいいね。全部は説明できなさそうだから、この際転がりながらいろいろ考えてみなさい」

まさかの説明放棄ですか！

白さんは懐から金色の時計を出しました。星術を込めているやつですか？　時計って高いんですよね！　白さんはそれを確認してまた懐に仕舞いこんだ。

「そろそろ終わりにしなくてはいけない。時間が来たようだ」

ここに来たのは、まさかの暇つぶしですか！

白さんはそんなに暇なんですかっ、暇なら魔物とかぷちっとやっつけちゃってくださいよ！　勇者の称号があるぐらいだから強いんでしょう！　ちょっとは勇者様達が楽になるんじゃないかなあって思うんですが！

「暇じゃないよ。これでも一応、君を見学に来ただけだからね。話し込んでしまったけれども」

あ、ちょっと待ってください！　マントの裾をさばく白さんへ、私は慌てて問いかける。

一つだけ、聞きたいんです。

私は気になったことを質問しました。

結局、今の話は、勇者様達は知っているんですか……？　世界が滅びるとか、魔物は人が生み出しているとか。

一生懸命人を救おうとしているあの人たちはこのことを知っているんですか。

それに白さんはすぐに答えなかった。

少しだけ考えて、そして少しだけ悲しそうな声で言った。

「さあね。知っているかもしれないし、知らないかもしれない。でも、どちらでもあの子達は変わらないだろう。だからこそ、あの子達が勇者であり、大神官なんだよ」

このひともよく分からない。世界の滅びをあっさり口に出しながら、勇者様達に同情的なのかとも思うし。

でも、白さんが言うとおり、神様のことを知っていても勇者様達は変わらないと思う。

想像する。

勇者様達がもしこの話しを知っていたとすれば。

例え知っていても、いつも通りに戦って傷つきながら人のために頑張るんだろう。もしかしたら、余計に頑張るかもしれない。その姿は簡単に脳裏に浮かぶんだ。

無理やり旅に連れて来られて、諦めて流されて一緒にいたけれど、なんだかんだいって私はあのお二人が好きなんだと思う。なんだか少しだけ気持ちが明るくなった。

不意に白さんが私へ手を伸ばしてきた。

髪をぽんぽんと叩き、こめかみから頬を軽く撫でられる。何故か白さんはほんのり苦い笑いを浮かべている。手の温もりに、ぼんやりとこのひともちゃんと生きてるんだなあって思った。髪の色とか顔が冷たそうに見えるけど、そこまで冷血じゃないんですねっ。

「たまに失礼な子だね」

髪や頬についた土を払ってくれたらしい。どうもありがとうございました。

えーっとその勢いで縄を解いてくれれば嬉しいんですが。

「しつこい」

お爺ちゃん酷いですよ！　これからうら若き私がどんな目にあうかっ。

「子供を鍛えるためにあえて突き落とすのが教育の真の姿だろう」

肩をすくめながら軽く言い放ちます。ムキー！

「どちらにせよ、君はその目で一度世界の姿を見なければならない」

不意に白さんの声が荘厳さを纏う。それは命令にも似た響きだ。

世界の姿？

白さんは、困ったように笑った。

「人間にとって、何が幸せかということを見なければならない」
そういいながら、また私を抱えあげる。予告無しの動作だったから私は思わず硬直する。

そして白さんはあろうことか……私を。

元のように地面に置きましたあああああ！　ちょっと！　何するんですかあああ！　この真っ白シロスケさん！
じたばたもがきながら抗議する。縛られているからそんなに動けない。
「んむううう！」
縄を解いていけええ！！
「本当に君は元気だね。じゃあ、頑張って」
頑張れとかそういった問題じゃなくて、助けてくれたらいいじゃないですかあああ！
「きちんと猶予を作って上げたんだ。少しは感謝して欲しいな」
猶予、ですか？
「君を探している二人が見つけられる程度の時間、話し込んだということだよ」
え、なんか最後に言い捨ててるんですがっ！
「また」
ひらりと手を振って白さんはあっという間に消えました。本当に帰ったあのひと！

神子、被害者Cにジョブチェンジをする

白さんの気配が完全に途絶えた瞬間、世界の空気が変わりました。

まるで全てが息を潜めていたみたいに静かだったのが、音が戻ってきました！　おお、外の気配がする！　音があるって素晴らしいですよね！　さっきまでは私がびっちびちする音か、白さんの身じろぎの衣擦れしかしてなかったから静かで静かでたまりませんでしたとも。

遠くでがやがやとする気配を感じながら、何とか脱出できないものかとズリズリとそのまま移動してみる。んぐーとかうめいても、外までは聞こえなさそうです。近くで人の声が聞こえないからね。ちょっと知的に判断してみた。

うわーん、やっぱり思った以上に縄がきつい！

こう、なんというか……非力なのってたまにつらいですよねっ。

まあ、この状態になっているのは半分以上自業自得ですが！　あとの残りの責任は白さんにありますとも。次にあのひとにあったらシメルと心に決めました。衿もと掴んでガクガクして、服伸ばしてやる！　服を買いなおすがいい！

それにしても私の服が悲しいほどに泥だらけですよ。一応白さんが適当に土を払ってくれたけど、丁寧に横たえられたせいで元の通りです。

あの木箱のすみっこかで縄をがりがり出来ないかな？　そう考えて、手近な箱のところへ行こうと思うんですが、なかなかこれが移動できない！　つまり芋虫みたいに這わなきゃムりってことですね！

しかし、私は閃きました！

転がればいいんじゃないですか！　横になってるんだから、ちょっと後ろ手に縛られた手が邪魔だけどゴロゴロいけば移動は簡単だ！
よし、そうと決まればっ。明るい脱出計画のために、私は気合を入れて横向きに回転した。
と同時に、扉が開きました。

「うおっ！　転がってる！」

うお！　誰ですかこんな時に！
それはこっちのセリフだ！
知らない声だった。
動揺する私。

でも動き始めたローリングは止まらない！　止めることなどできないっ。
勢いよく私は箱の方に転がって行き――。

ゴッ、と鈍い音が倉庫の中に響き渡りました。

頭打った。
うあああああかなり痛いです。
縛られたままもだえる私。
手が自由だったら絶対頭抱えて転がってる。頭を抱えられない分、微妙に丸まっていますがっ。
うーうー唸る私をさっき入ってきた誰かが覗き込んだ。
「怪我するなよ……？」
男の子でした。私よりかなり下。生意気盛りな感じです。きつい目鼻立ちで、日に焼けた肌をしています。服装は余り裕福じゃないようで汚れたシャツとズボンをはいている。手足もがりがりだ。栄養が足りていない様子。

私の心配をしてくれてるんだろうか？　ひとの優しさって、沁みますよね！　少年は立派な大人になる。

「大事な商品なんだから、頼むから傷ものにならないでくれよ」

前言撤回。こいつが犯人一味だったようです。絶対立派な大人になんかならないよ！

私はじっとりと睨みます。さっき白さんで散々練習したので、恨みを込めた目線は得意分野になりました。フフフ、恐れおののくがよい！

「元気そうだろ？　これなら結構いい値がつくんじゃないか？」

少年は背後のおじさんに語りかけます。気弱そうな猫背のおじさんは、おどおどとしながらも頷きます。ちょっとおじさん、何頷いてるんですかあああ！　このおじさんの服装も、つぎはぎだらけで決して綺麗なものではない。

「そうだね、輸送して売却するとしよう。ここで万が一足がついてはいけない」

「でも輸送費の方が掛かるだろ？」

おじさんの声がどこか記憶を刺激する。そうだ！　さっき拉致されるときに聞いた下手糞な星術の声だ！　どう考えても実行犯ですね！

私はもごもご喋りながら暴れるより、この人たちが何をしようとしているのかを聞き取ろうと耳を傾ける。といっても話の内容が私の処遇に関することだから、いやでも聞いちゃうんですけどね！

ハハハ……やーめーてー。人を売るな勝手に！　何でこんな商取引みたいな会話になっているの！　私、商品じゃないですよ！　早く拾ったところに返しなさい。

「すまないね、娘さん。私達も生活が苦しくなってね」

「オヤジ馬鹿言うなよ。騙される方が悪いだろ」

謝るおじさんに、ハッ！　と鼻で笑ってこちらを小馬鹿にする少年。

うわ！　いらっとくる！

騙すほうが悪いんじゃないの？
何で騙される方が悪いって結論になるんだ！

敵意まみれで少年を睨みつける。
「あんまり反抗的だと、縄とかねーぞ。そのままだと血が通わなくなって、腕が駄目になったりするんだぜ」
薄暗い顔で笑う少年に、私はぞっとした。少年の目が暗い。全身から血の気がうせ、変な汗が滲み出します。
白さんのことを疑いながら本当の意味で警戒していなかったのかもしれない。こんな恐怖は感じなかった。
理解できないものを目の前にした怖さがじわじわくる！　あの変なひとのほうが、この人たちより確かにましだったかもしれない！
でも縄といてくれないから私この人たちに逢ってるんだよね……？　うん？　よく考えたら、白さんも酷いやつだと結論に達しましたとも。残念！
「あんたが最初ってわけじゃないから、安心しな。ちょっとはこましな所に売ってやるよ」
抜き身のナイフを私の頬につけます。僅かな光をナイフは反射しない。濁ったような曇りが表面に浮いたままだ。私は硬直した。
マシなところも何も、売るなよ！　ツッコみたい！　でも喋れない！
内心叫んでいない限り、恐怖でおかしくなりそうだよ。
最初じゃない、って言うことは、今までも何人もの人がこうして売られていったということ……？　その事実の方が怖い。なんで、人が人を売るの？　聞いたことがなかった。普通、ほかの人にさらわれて来たって喋ったら、どこかに訴え出ることが出来そうなものだ。でも、今まで売られていった人たちは、多分そんなことが出来なかったんだろう。だって神官様が何も言わなかったし。勝手にあの人の噂収集力は半端ないと思っています。

「あんた色気がないから娼館よりは労働力かもな？」
私の頬をナイフでひたひたと叩きながら、少年は楽しそうに笑います。
「でも健康な女の子なら意外と値がつくかもしれない」
「オレだったらこんな胸がないのはお断りだ」
胸がないって言うなあああああ！！　こんなところでも私の身体的特徴をあげつらうか！　くそういつか巨乳になってやる！　夢だと笑うがいい！　だが、最後に笑うのは私だ！
私は少年を睨みつけようとして、思わず息が止まった。
少年の周りに、薄暗い靄（もや）が見える。
ピンクじゃない、黒い靄だけど、部屋の中の明るさに対して、少年の周りが暗すぎる。思わず背後のおじさんも見てみたけど、おじさんは意外と普通だった。
「どこ見てんだよ」
少年が面白く無さそうに、ナイフの先端を私の鼻の先に向ける。思わず息を止めて、その先端を見詰めた。何もかも、異様な雰囲気だ。
もうすぐここも瘴気に沈む――。
白さんが言っていたことが頭に過ぎる。もしかして、この黒いのがピンクの元……？
掌が汗でべとべと！　無駄に握ったり開いたりしてみる。縛られて痺れてきたのが、少しだけ血の気が戻ったのを感じる。でも、それだけだ。少年が言うように、縛り付けられたせいで調子が悪くなるかもしれない。
私は誘拐犯への恐怖と一緒に、変な靄への緊張感が高まっていくのを感じた。

被害者C、輸送される

やっぱり薄暗い靄（もや）は少年の周りに漂っているようです。

こっち来るな！

ピンクのあれもどうかと思ったけど、黒いこっちも少しでも吸いたくない感じですよ！

暴れたいけど暴れたらナイフの先っぽがぷすっと刺さりそうな気がする。というか刺さる。そんな危険なものは、人に向けたらいけないんだよ！　どういう教育してるのおじさん！　いや、教育は上手くいってないね……いたいけな私を売却しようとしている鬼畜親子です。

暴れたい気持ちは満々なんだけど、

「暴れたら刺すからな」

と脅されたらさすがに暴れるわけにいかなくなった。小心者だからね！　ちゃんと大人しくしておくよ！

ナイフを突きつけられたまま、少年が私の紐を緩める。じわっと血の気が戻ってくる感覚がして、次にかゆくなって、凄く痺れてきた。うわあああ、いま突付かれたら悶絶するよ！　悶絶してナイフでぷすりといっちゃうよ！

確かにあの縛りのままだったら色々大変なことになりそうだ。それにしても、私が拉致されてどれぐらい時間が経ったんだろう？心配されてるかな……どうかな……。白さんが色々ごちゃごちゃ言ってたけど、結局どうなのか分かりません。勝手に懐いているといえば勝手に懐いているとも言えるし。おおっと、気分が落ち込んでまいりました。まあ、この状況で明るくハイテンションは厳しいかなっ。

恐怖で胃の底がでんぐり返ししそうだけど、ささやかに頑張って

いますよ。

おじさんが私の縄を解いて手首を押さえる。そして横の袋から何かを取り出しました。じゃらって重い音がする。

指示通りに手を前に出すと、がっちゃんとさびた鉄の手錠をはめられました！　小指の太さぐらいある鉄の塊で、両手首をはめる穴が開いているタイプのやつです。鍵穴もさびてて、コレ本当に開けれるの？　って言うレベル。物持ちいいんですね……。

それにしても、お、重いですよこれ！　そして動きに邪魔です。私を鍛えさせる気か！　このままだとむきむきになるよ！　いや、二の腕が気にはなっていたけれど、こんな強制トレーニングはいらないです。まことに勝手ながら、謹んで辞退させていただきます、ホント。

紐よりもきつくはないけど、つかまった感が増してきた！　じわじわといやな汗が噴出してきます。脇とか、背中とか。脇汗のしみはとても気になるところなんですが！　幸いなことに、いまは両手を上げられません。脇汗のしみは、ばれないよ！

おじさんが私の足にも足かせをかけて、留める。こっちは両足首に一個ずつで、間を鎖でつないでいるやつ。これもまた足を鍛えるフラグだね！　この重さは、多分走れないようにもしてるんだろうな。

今気付いた。靴を脱がされてる。どこへいった私の靴。足首に直接足輪がかけられて、大変冷たいです。このままだったら動かしすぎたら足の皮が大変なことになるかも！　いつの間に私は生足を晒していたんだ。白さんは何も言わなかったな。でも縛られたままの私と普通に会話するひとです。あのひと基準は間違えているということに、うすうす気付いてます。

手首と足首に鉄の輪が入れられようやく縄は全部外された。あと

はさるぐつわだけだ。でもこれは外してくれる雰囲気はありません。外したら騒ぐし。絶対騒ぐし！

私はようやく起き上がれました。手かせ足かせの鎖がジャラジャラいいます。正直、これだけさびていたら、これで傷が出来た時かなり危ないんじゃないかな。さびた刃物の傷は危険だって聞いた覚えがある。なるべく動かさないようにしたら皮膚がこすれて傷になるのを防げるんだろうか。むむむ。服にさびがつくのがイヤですが仕方ない。服に触らないように頑張るのは諦めました。大人しく膝の上に手首を置いておくか。服よりも自分の心配の方が大事だよね！　そうだよね！

無理な体勢ばっかりしていたから、身体がばっきばきです。ちょっと起き上がるだけで骨が凄い音立ててた。さすがの少年もかなりどん引きしてましたよ。ぐるぐる肩を回したりしたいけど、どうにも少年の様子ではさせてくれそうにありません。残念！

おじさんがごそごそしていたと思ったら、私の頭に麻袋をかけました。ばっさりと。

「もがー！」

いきなり視界が塞がれて、反射的に叫びます。だって麻袋ちくちくして痛いんだもん！

そして……臭い！　何を入れてたんですかこれ！

「静かにしろ」

ナイフでつんつんされて脅される。ハイハイ静かにしますよ。ええ静かにしますからそれを下げてくださいなあああ！　ちょっとぷすっとしたらすぐ穴が開くぐらいやわらか町民ですからカンベンしてください。

「よっこらしょ」

おじさんが気合の声を掛けながら、私を持ち上げる。こ、この体勢

はッ！

荷物担ぎ！！

懐かしいなあ……拉致って、これが基本なんですか？　私が知らないだけ？

まあ、お姫様抱っこをする犯人はいなさそうだけれどね。

勇者様のあれと比較するのもなんだけど、安定感がないです。おじさん、ふらふらしてます。重いなら、持たなくていいよ！　売却も諦めてくれたら嬉しいです！

相変わらず、みぞおちのあたりで身体が折れ曲がるせいか、その部分を肩に乗せられる。お腹を圧迫されてかなり苦しいんだけどっ！　しかも麻袋がちくちくしてもういーたーいー！！！　さすが勇者様、荷物担ぎも軽々こなしてた！　今から考えたら凄いことですね！　こんなところで勇者様の凄さを実感した！　したくはなかったけど……。

「じゃあ、さっさと移動するか。市は何時からだっけ？」

少年がおじさんに言います。おじさんはふらふらしながらなにやら答えていますが、麻袋が顔を擦って痛いのに気を取られて聞き逃した。

それにしても、そんな市場があるんですか。

世間は、私が考える以上に恐ろしいところだったよ！

被害者C、荷馬車に揺られる

結構いい値段がする食材の中で、草牛っていうのがある。

お肉に全く臭みがなくて、脂肪が多い。だから焼くととろけるような食感になる、庶民には手に入りにくいお肉様なんだけど。草牛ミルクも癖がないから飲みやすい。これも高級品ですよ！　これで入れたココアなんか絶品です。前、神官様に奢ってもらって、それで懐柔された覚えがあります。

草牛は、元々森に生息する森牛の小さいのや大人しいのを捕まえてきて、草原で飼育するようになったからそんな名前なんだって。

背の高さが私の二倍ぐらい大きくて、毛は短くてつるつる。頭にねじったツノみたいなのが三本生えている。繁殖期じゃないと暴れないから安全な生物らしい。陸馬さんみたいにもふもふじゃないから、余り好きな外見ではないんだけどね。

何でいきなりそんなことを言い出したのかというと、前に住んでいた街の近くで草牛牧場があったのを思い出したんだ。

で、そこにはお肉用の草牛とミルク用の草牛が飼われてるんだけど、お肉用の草牛は生きたままより都会のほうに出荷されるから荷馬車に積まれていく。時折そんな隊商を見たことがあるんだけど、荷馬車から外を見るなんかくりッとした目が、なんとも言えず哀愁を誘うんだよね……。

あのときの草牛さんたちは、こんな気持ちだったのかな！

つまり同じ立場になったようです。

これから私は売られるようです……？　まだ今ひとつ実感が沸かないんだけど！

おじさんに荷物担ぎされて下ろされた先は荷馬車の荷台だった。
板張りの床の上にごろっと転がされましたよ！　丈夫な芋じゃないんだから！　扱いは丁寧にお願いしますよ！
荷馬車の荷台は他の荷物も積んでいる。ほろが掛かっているせいで、外が見えない。隙間から覗こうとしても、前の御者台から少年がにらみを利かせているから無理っぽい。荷馬車の端っこに、ギャアギャア言うウロコがついたひよこだか鳥だか分からないものが混じってるけど、あれも商品なのかな。怖いのでそっちには近寄りません。

いまも荷馬車の板張りの床の上でゴロゴロしています。
これが一番楽な体勢だよ。怠けてるんじゃないよ！
座ったら、手かせ足かせが食いこんで地味に痛いんだもん。思う存分横になる。体力温存ぐらいしかすることないしね！
中身の軽そうな箱が、がたんと荷馬車が揺れるたびにこっちに来そうになる。ぶつかったら大怪我ですよ！　ちょっと、安全管理ぐらいしてくださいよ。足で必死に押さえていると、更に上の箱がぐらぐらしてくる。足は二本しかない！　しかもかなり上だから、届きようがないです。どれかを切り捨てるしかッ。
ふぬぬ。支えるのも、意外にに重労働だな！　足かせの重さもあって、足の自由が利かないよ！　もともと足の筋肉もそれほどないしね！　……自分で言って、これも物悲しくなりました。

ひときわ大きな音を立てて、荷馬車がガタンと止まりました。
ひー！　とうとうバランスを崩した荷物が私の上に落ちてきたよ！
かなりの痛みを覚悟して、ぎゅっと目をつぶる。
でも覚悟していた痛みは来なかった。恐る恐る目を開けると、丁度、私は荷物の隙間に入っていたようで、隣の荷物に突っかかって私に直撃しなかったみたい。
外で言い争う声がする。

なんだろう？
手かせ足かせが重すぎるからこっそり見に行けない。鎖もジャラジャラ言うし。さるぐつわも健在ですよ！
だんだん騒ぎが大きくなってきた。おじさんの悲鳴のような声も聞こえる。
端っこにいたひよこか謎のトカゲが、ぐあぐあ騒いでる。あれなんかいやな感じがするなあ……ん？　あれ、魔物じゃないんですか！！ちょっとそんなの売らないでくださいよ！
荷物が邪魔で動けない私をよそに、騒ぎは徐々に大きくなっているようです。

被害者C、確保される

馬車の外が慌しくなってきて、ほろを誰かがばっと開きました。外はまだ昼だから眩しい。

急に荷台に光が差し込んだ。暗いところに慣れた目には、光線が刺さるぐらい眩しい！

その光に驚いて、魔物が凄く騒ぎ出しました。当然ほろを開いた人もそれを見たらしい。

「魔物を飼ってるぞ！」

ギャアギャアいうウロコひよこを指して、誰かが野太い声で指摘する。そうですよ、それ魔物ですよ。気持ち悪いですよねっ。ウロコひよこは後ろの端のほうに積んでたから、すぐ発見されたみたいです。ちなみに、私は相変わらず荷物の影で生息しています！

「他にはないもないか！」

外から聞こえる声に、そのお兄さんは、

「荷物ばかりです！」

と答える。あ、さっきのおっちゃんたちとは別口なんだろうか？知らない人の登場に正直びびりまくりだ。知らない人についていかないって言われたしね！　……今更手遅れだとは言わないでください。

というか荷物ばかりで悪かったな！　どうせ荷物だよ！　ああそうさ、最近の役割はお荷物ですよおおお！

ちょうど箱と箱の間にいるうえに、さっきの揺れで上にも箱が載っているものだから、気付きにくいんだろうな。

助けてくれる人なら是非気づいてほしい。でもこの人たちが強盗とかだったら、気付かないでいいよ！　まさに二度目の災害になるね！　そこまでついていないと思いたくないけど、最近のついてなさっぷりを考えたら楽観視は出来ないっ。

「違反物は魔物ぐらいか？」
こっそり荷物の隙間から見たお兄さんは、かなりむきむきの体形でした。光を背にしているから影で体形が分かる程度だ。太い腕だな！　腕に多分ぶら下がれるよ！
抜き身の剣を持ったまま荷台に上がりこむお兄さんに、私は本気でびびる。だって、あれでさくっといかれたら終了ですよ！　人生的な意味で。
気付かれませんよーにとガクガクしながら観察していると、お兄さんが近寄ってきます！
うわ！　来るなっ！
がっしりしているせいか、荷馬車の床がぎしぎし言っている。ぎし……ぎし……って足音が更に恐怖をあおる！
一歩ずつ近づいてくるそれに、私はゴクリと喉を鳴らした。まあ、ずっと飲み食いしていないからカラカラだけどね。
そしてお兄さんが、私が隠れている箱の山の前に来ました。
「ふむ」
色々チェックしながら歩いているようです。
やっぱり盗賊ですかっ？　でも身なりは小奇麗だな。盗賊のイメージの、臭い！　風呂嫌い！　っていう雰囲気ではないみたい。それは勝手な思い込みだろうか。このお兄さんは飾り気のない鎧を着ている様子。
お兄さんは箱を眺めつつ、おもむろに剣を振り上げた。ギラリと刀身が光を弾く。
勢いよく振り下ろされるそれに、私は硬直した。ぎゃー！
重い音がして、剣が深く突き刺さる。
剣が深く刺さったのは、私の目の前にあった箱です。汗がだらだら出るよ！　でもそんなナタ代わりに剣は使わないほうがいいと思うよ！　この人もあれですか、勇者様と同類で剣は消耗品ってやつですか！
お兄さんは、箱を開けたかったらしい。

「中身は……砂か？　何でこんなもん運んでんだ」
剣をぐりぐりして木箱の中身を見ている。私は箱の陰からお兄さんを見上げました。身動きしたら、手かせとかが音を出しそうで硬直したままだ。
「ん……？」
お兄さんがふと何かに気づき、顔を上げる。
ばっちり目が合いました。
「ぎゃあああああああ！」
いやあああ！　心の中で絶叫する私と同じく、お兄さんも絶叫しました。
「どうした！」
外から鋭い声が飛び、何人か荷台に飛び込んできます。
お兄さんはしりもちをついて、私のほうを指差す。指先が震えています。失礼な！　人を指差すなっ。
「お化け！」
「はあ？」
後ろから来た人は女の人が混じってました。でも今の声は明らかにお兄さんを馬鹿にしています。鼻で笑ってるよ！　実際お兄さんは私と目が合った瞬間、腰が抜けたようで座り込んでいる。ガクガクしているのは私とおそろいですね！　ちょっと親近感が出た。
「なんだ、女の子じゃないか」
お姉さんはひょいと箱の陰にいる私を覗き込んで、普通にお兄さんに告げた。が、すぐに凄い形相で私を振り返りました。

「女の子ぉ！！」
そんなに見られたら……穴が開く！
さるぐつわをしていなかったら、恐らく絶叫を上げていたと思うよ！
こわいいいい！　確かに私の性別は女ですが！
それがなにか！　だからこれ以上は転売しないでくださいよ！
「何で女の子がこんなところに……まさか」
それは私のほうが聞きたいです。攫われて売られそうだというのは分かってるんですが。
と、お姉さんは箱をガタガタ動かし始めました。
お兄さんを軽く蹴り飛ばし、「どけ」と言った後、私をひょいとお姫様抱っこしました。お兄さんが跳ね上がるように横に退く。力関係がよく分かるね！
それにしても……人生二度目のお姫様抱っこです。
ここ数時間は濃い人生を送っている気がするよ！　お姉さん、私手かせ足かせが地味に重いんですが……これが私の体重じゃないですよ？
女の人のふんわりと優しい匂いに、警戒心が解けていく。もともと、砂糖粒より小さな警戒心なのは自覚していますよ！　一応主張はしてみる。
お姉さんだけど、抱き上げ方の安定感が半端ない。軽々と私を運搬します。さっきのおじさんの方がやばかった。荷物担ぎなのにふらふらしてたもん。そのうち、私運搬される評論家になれるかもね！　誰も求めていない情報だと思うけど。
そしてお姉さんに抱っこされたまま荷馬車のほろの外に出る。少し目を瞬かせたけれど、外の眩しさに目がすぐ慣れた。
お姉さんの髪は赤いワインみたいな深い紅で、目は優しい茶色だった。化粧をしていないけど、精悍な美人さんですよ！　でも、こんなに近くに誰か他人の顔があるのは、尋常じゃなく緊張する。
「薄茶の髪の毛、小さめの体形にこの目の色……」

お姉さんはじっとりと私を観察します。
ぎゃー！　至近距離は止めてください……鼻の頭とかが気になる年頃なんです……。
「お探ししていました、神子様」
へ？

被害者C、ようやく神子にもどる？

私は驚いて返事できなかった。けど、お姉さんは何故か私を神子だと確信したようです。目がどうとか言ってたけど、私の目は普通だよ！　ツッコミはさるぐつわに阻まれ出来なかったけどね。

「大変申し訳ございませんが、少しお待ちくださいね」

丁寧にお姉さんは言いながら、私をとりあえず横の箱に座らせた。木箱に足かせが当たって、ガツンと音を立てる。

周囲を見たら、お姉さんと同じような鎧を着た人たちが手際よく荷物を荷馬車から降ろしていた。おじさんたちの馬車だけじゃない。数台停止させられている。おじさんたちは、と探したけれど、私は見つけることは出来なかった。何気なく目をやった他の馬車からは、ホコリで黒くなった人たちが数人出てきた。……私と同じような手かせをつけている。もしかして、商品仲間ですか？　全く嬉しくない仲間宣言です。その人たちの目はうつろで、暗い穴を覗き込むようだった。

私が周囲の光景に気を取られている間、お姉さんはさるぐつわと奮闘してくれていた。

解こうとして結局解けず、小さなナイフで切り落としました。圧迫されていた場所に血が通うむずがゆさを感じる。

ようやくさるぐつわが除けて貰えた！　開放感が心の中に広がり、ふわふわする。

大きく口で息を吸い込む。何故か喉が震えて上手く息が吸い込めない。なによりもお姉さんにお礼を言わなければ。

ありがとうございます！

そう言おうとして、「あ、」と口を開いたけれど、小さな震える声しか出なかった。声を出そうにも喉が言うことを聞いてくれない。お姉さんが気の毒そうに私を見る。私は喉を押さえて呆然としていた。

手が震えている。

やっとそのことに気がついた。

手だけじゃない、全身が震える。だから声も上手く出なかったんだね！　よく分かりました！　頭の中心がぼうっと痺れて、冷静な部分ともうひとつ何かが心の中にせりあがってくる。

このガタガタって震えるのが、どうにも止まらないんですが。

多分なんだけど、今更ながら恐怖がやってきたみたい。

自覚した途端、今の状況も恐ろしくなった。すうっと身体が冷える。

安心していいの？　まだ、警戒しなくちゃいけないの？

この人たちは誰なのか、これから私はどうなるのか、本当に助かったのか、それとも実は倉庫の中で見ている夢だったり！　とか。

ろくでもないことが頭に泡のように沸いて出ること出ること、止まりません！

ネガティブ思考に走りかけていると分かっている。だけど実際手足が冷え切っていて、震えが止まりません。ぎゅっと自分の指を指で握る。こうしても、手の暖かさが戻らない。

本当に怖かった。

ナイフの輝きも、わけのわからない悪意も、簡単に死にそうな世界も、全部知らないものだった。

知らないからといって、容赦はされないんだ。それが恐怖と共に身に沁みて理解できました！

これからは知らない人と口を利かないようにします！

心の中で誓いました！

私が震えているのを察したのか、お姉さんがあったかいマントをぐるぐるに巻きつけてくれました。お姉さんがつけていたやつだ。まだ温もりが残っている。ビックリして顔を上げると、

「もう大丈夫ですから」

とにっこりと笑いかけてくれました。少しだけ、指の先がじんわりと温まる。マントの暖かさに、ゆっくりと詰めていた息を吐く。

あ！　知らない人と話さない誓いを立てたけど、お姉さんとは話すべき？　お姉さんは確信を持って私を神子だという。この人は、私のことを知らない人じゃなくて知ってる人なのかな？　これは難問だ。実際答えを間違えたら後がかなり怖い気がするよ。

お姉さんは、懐から何かの紙切れを出し、木炭の欠片でそれにしるしを書きました。

「Ｋｈ」

合言葉のような星語を唱えると、それがふわりと浮き上がりました！

伝書の紙だ！　はじめてみた！　私は目を丸くしてそれを眺める。すると、それはあっという間に風を切って空に吸い込まれていきました。伝書っていうのは、防水防火加工をした特殊な紙に星語をあらかじめセットしておいて、目的地まで簡単な伝言を届けることのできる凄い紙なのです！　さっきの欠片一枚で私の月収が飛ぶ。確実に飛ぶか、足りないぐらいだ。その代わり、速さと正確さは半端ないそうだ。

「あねさーん！」

さっきの筋肉お兄さんがのっそりと荷台から降りてきました。私は反射的にびくりとふるえる。さっきの白刃の輝きが頭に甦ったせいだ。

お兄さんを改めて観察する。

丸太のような筋肉が付いた手足、がっしりとした身体、浅黒い肌に黒い髪、そして男らしいごつごつとした輪郭の顔立ち。こうあげていったら、怖い要素で固まっている。のに、日の下で見たお兄さ

んは、怖さが一気になくなりました。
　目が……つぶらすぎる！　なんだあのつぶらな瞳！
　ペットでもあんなにつぶらでイノセントな目は滅多にないよ！
私以上にこの人も詐欺にあいそう！　つまりちょっとお馬鹿っぽいです。私に言われたらおしまいだよね！　ツッコミを受ける前に自爆してみた。
「箱をあらかた潰して調べたんですけどー」
ニコニコしながら報告するお兄さん。お姉さんはギラリと目を光らせ、振り返った！　瞬間、空気を切り裂くように大音量がお姉さんから発せられた。
「この大ボケ小僧が！」
声に殴られたようにお兄さんが首をすくめる。怒られた本人以外も頭を叩かれたようにびくりと首をすくめる。私も反射的にビクッと跳ね上がった。声に圧力ってあるんですね、実感しました！　さっきと別の意味で震えそうだよ！
　お兄さんは心なしか青ざめている。お姉さん、こちらに背中を向けて立ってるけど、怒りのオーラがとんでもないです。どばどば溢れてますよ！　隣の馬車を調べていた人たちも、あーあと言った顔で怒るお姉さんを眺めています。
「馬鹿が！　誰が壊せといった！　無実の市民の荷物だったらどうするんだ！　捜査は慎重に行えと厳命しただろう！　そんなだから捜査依頼のあった神子様がいても見落としをするんだ！　指示を聞いて、疑問点があればすぐ聞けといっているだろう！」
ガツンというお姉さん。そして、実際に拳でガツンと制裁を加えてました。おお、見事なパンチです。風切り音が鋭い。頑丈そうなお兄さんの筋肉にめり込んでいます。
　ナイスパンチ！　ナイスパンチです、あねさん！　私もあねさんと呼んでいいですかっ。心の中でこっそり呼ばせていただきます。
「ヘリオドール隊長」
別のお兄さんがあねさんに近づいて、敬礼をしました。そしてなに

やら報告しています。
どこかの軍隊なのかな？　おそろいの鎧と服だ。ちなみにお兄さんは悶絶していますが、周りの皆さんはいつもの光景なのか手を貸さずにあたたかく見守っているようです。こうしてお兄さんが成長していくのか。時には体罰も必要なのか……神官様が、私への説教に体罰を選択されませんようにっ。でもあの人の場合はそういった直接攻撃より、心をえぐる一言を連発しそうですよね！　……その方が、精神力の限界がすぐに来るけどね！
神官様のことを考えて、勇者様のことを考えた。
……お二人は、どこに行ったんだろう。
今、ここにいないのは分かる。
マントの中で服を握り締める。ようやく、手の震えは止まった。
でも、あねさん達が探してくれてたってことは、お二人が探してくれてたってことだと思ってもいいんだよね？　そもそもなんの役に立つか分からない庶民です。本当はその辺においていっても仕方がないと思う。探してくれたけど、これでお別れとかじゃないよね？
じわじわ不安になってきたあああ！
多分、知らない人の中にぽつんと取り残されている不安も上乗せされて思考が暗くなっていく。

その時あねさんが、マントの上から、私の手の辺りにそっと手を添えた。
ビックリして目を上げる。あねさんは、真っ直ぐに私を見て、力づけるように、
「すぐにお迎えが参りますよ。ご心配することはもうありませんから」
と、軽く言い添えてくれました。

あ、あねさん……！　確かにこれはあねさんだ……！
あねさんと呼びたいのをぐっと堪え、私は頷いたのだった。

◆神官、戦闘する（前）（前書き）

神官視点です。

◆神官、戦闘する　（前）

吹きすさぶ風が耳元で暴れ、全ての音を掻き消していく。
今から使う星術に影響があるか、冷静に考える。
本来、星術の効果は騒音や声量に左右されない。世界に謳った虚実を現実として引き寄せられるかに掛かっている。世界を塗り替える術、それが星術なのだ。
一般神官や魔術師は韻律を大声で謳い、それに没頭することで意識を集中させる手法を取っている。
それは不便で驚愕すべき方法だ。術のみに集中してしまえば、戦闘時に注意が散漫になる。実際の戦闘で、術者が狙われないということはありえない。
これから使う術は、本来は忘れ去られるべきものだった。口に出して使用し、謳うべきものではない術。大声では使用できないものだ。それが残っているという皮肉が、人間が人間たる業を持っているのだと思い知らせる。禁じられた知識までも手を伸ばしてしまう業だ。

私は腕を振り、遠くにいる勇者に合図を送る。勇者は剣の角度を変えたのだろう、光で返事が来る。
準備は完了だ。

息を吸い込み、初めの一行を音に乗せる。

「Ｗｘｘｘｔｘｘｘｓｈｖｖｖ　ｈｘｘｘ　Ｓｗｗｂ＊ｔ＊　ｗ０
Ｎｖｖｖｋｗｗｎｄ＊ｖｖｖｒｗｗ」
（私は全てを憎んでいる）

不穏な響きの旧星術は、この一行だけで周囲の雰囲気をがらりと変える。

世界を否定し、憎み、嫌う、世界を腐らせる星術。

これは確実に瘴気を発生させ、引き寄せる。

ツワナアゲート地区に御伽噺にまぎれて伝承されている「楽園の終焉と世界を憎んだ女」の話、その女が叫んだ韻律だという言い伝えがある。全文を星唱すれば、世界に腐敗を撒き散らすという禁術だ。

ここでは前半のごく一部だけを使い、瘴気を発生させ魔物を引き寄せるために使用する。わざと世界を汚損し、歪ませることにより魔物を呼び込む。魔物は瘴気を好む。瘴気があるところに魔物がいるのではなく、逆に瘴気があるからこそ魔物がやってくるのだ。だからこそ魔物との戦闘の後の浄化が重要になってくる。戦闘に勝利したとしても、残る瘴気が次により強力な魔物への呼び水になることが多いのだ。

神官となり、今までは浄化の術ばかりを謳ってきた。知識として知ってはいたものの、この韻律を謳うこと自体、本来はありえないことだった。世界から除去すべき瘴気を増やすのだ。

これが露見すれば恐ろしい騒動になるに違いない。魔物を集めることが出来るのを証明してしまう。魔物を「有効利用」しだすものたちが出るかもしれない。更には勇者と私に関しても不審を招くだろう。かなりの危険を持っている賭けだ。

しかし、今私たちには時間がなかった。

私たちの現在地はブロンザイトより大陸中央を抜ける荒野だ。

ここならば、他に誰も通らないとサニディン騎士団は確約した場所。

本来、サニディン騎士団が魔物を駆除しようとしていた地点である。数時間前起こり、私たちでは解決できないことへ騎士団の協力を求めた。その対価として、私たちはこの地域の魔物を完全駆除する契約を交わしたのだ。双方合意の上であり、私たちに不利なものでもない。もともと勝算がないものは引き受けることはしない。

ただし、こちらの勝算があるとしても、あちらが頼んだ依頼を完遂できるかは別問題だ。

続きの星術を編み上げる。

世界を憎んだ女の悪意が、空気をたやすく汚染する。神子がいれば、何色だといい始めるだろうかと考え、苦笑する。彼女が消えて数時間、いつの間にか神子がいることが日常に変わっていたことに今更ながらふとした瞬間に思い知る。

「Ｋｗｗｙｘｘｘｓｈｖｖｖ、Ｎ＊ｔｘｘｘｍｘｘｘｓｈｖｖｖ、Ｋｗｗｃｈｖｖｖ０ｓｈｖｖｖ、Ｎｘｘｘｎｖｖｖｍ０ｋｘｘｘｍ０　ｇｘｘｘ　Ｋｖｖｖｎｖｖｖｒｘｘｘｎｘｘｘｖｖｖ（悔しい、妬ましい、口惜しい、何もかもが気に入らない）Ｗｘｘｘｔｘｘｘｓｈｖｖｖ　ｈｘｘｘ　Ｓｗｗｂ＊ｔ＊　ｗ０Ｎｖｖｖｋｗｗｎｄ＊ｖｖｖｒｗｗ」（私は全てを憎んでいる）

遠くに黒い雲が現れた。だが恐るべき速度で湧き上がりこちらへ向かってくる。

一見、鳥の群れのように見えるそれは、魔物の群れだった。

意識を並列思考に切り替え、状況分析と旧星術の維持に力を注ぐ。

「Ｓ＊ｋｘｘｘｖｖｖ　ｈｘｘｘ　Ｓｗｗｂ＊ｔ＊　Ｎ０ｒ０ｗｘｘｒ＊ｒｗｗｇｘｘｘｖｖｖ！（世界は全て呪われるがいい！）

Ｙｘｘｘｍｖｖｖ、
Ｋｖｖｖｚｗｗｔｓｗｗｋｖｖｖ、
Ｓｈｖｖｖｎｖｖｖｔｘｘｘ＊、
Ｋｗｗｒｗｗｓｈｖｖｖｍｗｗ　ｇｘｘｘｖｖｖｖｖｖ！」
（病み、傷つき、死に絶え、苦しむがいい！）

私の存在も汚染されるような黒い力が沸きあがってくる。
あと二構文、それに引きずられないように謳いあげた。

「Ｗｘｘｘｔｘｘｘｓｈｖｖｖ　ｈｘｘｘ　Ｓｗｗｂ＊ｔ＊　ｗ０
Ｎｖｖｖｋｗｗｎｄ＊ｖｖｖｒｗｗ
（私は全てを憎んでいる）
Ｙｘｘｘｍｖｖｖ　ｎｖｖｖ　Ｏｃｈｖｖｖｖｒ０、Ｚ＊ｔｓｗｗｂ
０ｓ＊ｙ０、Ｈｖｖｖｎｘｘｘｄ０　Ｎｖｖｖｄ０ｔ０　Ｎ０ｂ０
ｒｘｘｘｎｘｘｘｖｖｖ！」
（闇に落ちろ、絶望せよ、陽など二度と昇らない！）

星術が完成し、一瞬黒い光が弾ける。
それに呼応し遠くで魔物の遠吠えが聞こえ出した。
地平線に黒い群れが次々と沸きあがってくる。憎しみの唄に惹かれた魔物たちが現われる。
その群れが膨れ上がるさまをながめ、分析の術を軽く使用する。
「Ｋ０ｗｗｖｖｋｖｖｖＢｗｗｎｓ＊ｋｖｖｖ　Ｍｘｘｘｍ０ｎ０　ｎ０　ｂｗｗｎｐｗｗ」
（広域分析　魔物の分布）
脳裏にさっと周辺地図が描かれる。そこに魔物の分布状況が重なり合う。私たちの周囲以外には魔物の分布はゼロだ。この周囲だけが密集している。
狙い通り過ぎて、笑いがこみあげそうになる。

私は傍らの地面に刺した、星原樹の封印を解いた。
私は直接に星原樹の枝に触れることは出来ない。
封印し巻きつけた布地越しに触れここまで持ってきたものの、既に掌は強すぎる星原樹の力により赤くただれ腫れあがっている。痛みはあるものの、指が動かせないほどではないのが幸いだった。火傷に似た症状だ。しかし、星原樹によって得た傷は星術では癒せない。しばらく痛みを堪えるしかなかった。

枝の封印が解けたのを確認し、術を新星術へと切り替える。
先ほどとは打って変わって、新星術は硬質な韻律の響きをもつ。速度を上げて編み上げた。

「Ｊｍｎｗ　Ｋｓｈ　Ｓｈｍｓ，（呪文開始）
Ｆｎ，（封印）
Ｂｓｓｈｔｓｋ－ｄ　Ｓ２５８　ｗ　ｃｈｓｈｎ　ｈｎｃｈｋ　ｆｓ，（物質コードＳ２５８「星原樹」を中心に半径地域を封鎖）
Ｂｓｓｈｔｓｋ－ｄ　Ｓ８２７７　ｗ　ｔｄｍｒ，（物質コードＳ８２７７「瘴気」を留める）
Ｒｇ　ｎｓｈ，（例外無し）
Ｂｓｓｈｔｓｋ－ｄ　Ｓ２５８　ｓｈｙ　Ｊｋ　ｋｚｋ，（物質コードＳ２５８「星原樹」使用　浄化は継続）
Ｋｚｋ，Ｋｚｋ，Ｋｚｋ，……」（継続）

半ば意識を別方向に向けたまま新星語を謳い続けた。旧星語の方が柔軟な効果を生み出せるのだが、今の状況にはどのような効果が出るかが正確に試算できる新星語の方が適している。
半意識を現実に置き、残りで周囲の星術効果を観察する。現時点での綻びはない。
魔物を排斥するのではなく、範囲外へ決して逃がさないための結

界である。

結界が完成した瞬間、爆音が響いた。

勇者の戦闘が始まったのだ。

凄まじい雷が快晴の空から降りそそぎ、大地を容赦なく破壊の矛先で抉り取った。爆発とともに風を巻き起こし、揺るがぬはずの大地が悲鳴のように震え揺らいだ。腹のそこから響く音に、口ずさむ星語の韻律を乱されそうになる。

轟(ごう)、と風が駆け抜け、砂礫を身体に打ち付ける。瞳を閉じてやり過ごし、不自然にならぬよう星術に拍をいれ調整する。

思った以上に初手の勇者の術が強かった。結界の強度を測りつつ、乱れた髪が顔を打ち付けるがそのままに星語に意識を再び向ける。呪文を継続しながら結界の様子を慎重に窺う。

綻びはない。

恐らく物質の指定をしていることがよい方向に働いたようだった。瘴気だけを通り抜けれないように指定しているのだ。瘴気、つまりは魔物だ。

爆発の中心から煙が流れ、うっすらと変貌した大地が姿を現した。まるで巨人が槌を振り下ろしたかのように、頑強なはずの大地にぽっかりと穴が開いている。地盤のみならず岩盤質を穿(うが)ったようだ。あの深さであれば、数ヵ月後には雨水が溜まり小さな湖が生まれるだろう。それは深い水をたたえ青い空を映すに違いない。想定される未来を幻視し、しかしそれを振り払う。今はそういう場合ではない。

爆発の中心にいたはずの勇者を探す。

が、目視できない。既に移動しているようだ。

ギャアという断末魔と鈍い音が聞こえた、すぐさま左側を振り向く。

そこには逃亡しようとしていた魔物たちを一撃の下で切り捨てる

勇者がいた。両腕に剣を構えている。防御よりも攻撃を選択したようである。両方の剣はまだ刃はつぶれていない。

勇者が戦っている場所は、ここからかなり遠い。勇者の姿は握りこぶしよりも小さくみえる。

が、これが神官と勇者がともに戦う際の本当に適正な距離だった。勇者が本気であれば、この距離でも危険だ。

今はこちらのことを視野に入れているようであるので、そこまで危険ではないだろう。

補助の術をかけようとしてかけられない距離ではない。それでいて勇者の攻撃がすぐには届かない距離。これを保つ必要がある。

この距離より近づけば、恐らく勇者の星術に巻き込まれる。彼は元々大雑把なところがある。それが星術に反映されているのだ。時折ひやりとする距離で星術が放たれる場合がある。真横を炎が駆け抜け、冷や汗を流したことは数知れない。最近はもう一人と行動するようになってからは慎重さが増していたが、それは今は振り捨てているだろう。

本来、深蒼（あお）の勇者は、対多数の広域殲滅（せんめつ）戦を得意としている。

勇者の戦い方はその代毎に異なるようだが、詳しくは伝承されていない。

勇者の動向に注意をしつつ、この場の術を継続させる星句を口にする。

勇者がまた大規模な星術を行う気配がした。身構える。次の瞬間、空を青い劫火が駆け抜けた。凄まじい熱量と光が弾け、空を覆いかけた黒い魔物の群れは紙を燃やすよりたやすく炎に食い尽くされる。空を燃やし尽くす焔は、波のように駆け抜け、確実に魔物を屠っていった。空から燃えカスが舞い落ち、途中で瘴気となりはじけ飛ぶ。まるで幾つもの星が落ちているかのような光景だ。人が見る風景ではない、そんな考えが浮かぶ。

この分であれば、想定した時間より早く終了するかもしれない。
ただ、こちらが早く終了したとしても、あちらが終了しているかどうかは分からない。

神子が消えて既に五時間、打てる手は全て打った。
5時間前のことを考えると、苦いものが浮かんでくる。

◆神官、五時間前の失敗に至るまで　（中）　（前書き）

神官視点続きです。

◆神官、五時間前の失敗に至るまで　（中）

そもそもブロンザイトを訪れたのは、討伐依頼の声が無視できない大きさになったためだ。

前回の街に逗留している際、星神殿より転送されてきた書簡が問題だった。

――荒野に魔物の群れが沸き起こり、物流が妨げられている。我らを餓死させる気か。早く戦力を派遣しろ。

簡単に言えばそのようなことを、美辞麗句を織り込みながら豪奢な文箱にいれ、商業国家アノーツクレスの現筆頭が送りつけてきた。

アノーツクレスは、星都より大陸中央部に位置し交易により栄えた都市郡がまとまり、商業国家として統合し成立した国である。

国、というのは便宜上であり主たる五都市が連合となったものとして考えたほうが早い。一応、五都市には代表商家がありその当主を「五人衆」とよぶ。首都はその五都市の中心にあとから建造された。流通の一大拠点として、首都は商人たちの狙い通りに栄えた。

そして、今回の魔物の被害を大きく受けた国の一つだ。

アノーツクレスの「筆頭」は、その五人衆から選出された国家元首である。

アノーツクレス筆頭が求めているのは魔物の駆除だ。

本来、星都にはそのような出兵義務はない。神殿にしてもいわずもがな、である。

ただ星都は、星原樹もあり星教の信仰拠点となっている。主神殿も抱え込んでいるため、他の国家より一ランク上に位置していると

認識され、自負している。
星都のおもな収入源は商業と観光業である。魔物の影響で観光業は落ちると思われていたが、逆に星神様にすがりたいということで、皮肉なことに星都は盛況らしい。
一応、俗世のものと神殿は切り離されていると建前はなっている。しかし、神官といえど空気を食べて生きているのではない。どうしても資金が必要であり、すました顔をした裏でこっそり布施を貰っているのが現状だ。その代わり、有事の際は星術の使い手として神官を派遣する。そういった共存関係が、不文律ながら成り立っていた。

いつも偉そうにしている分、またお前達に布施をしている分、働け。

丁寧な文言を連ねているが、これは逆に慇懃(いんぎん)すぎて無礼だった。何よりも内容が酷い。
アノーツクレスの筆頭の言いたいことが、上質な紙の裏を透けて見える。余りにもあけすけな書簡にあきれたものだった。子供でももう少し上手におねだりをする。これが一国の元首が出す手紙だろうかと頭が痛くなった。
もともと大陸中央部は何度か足を運んだことはある。しかし、勇者も私も個人である。大きな変革はすぐには出来ない。もちろん、一度大規模な浄化を行わなければならないだろうとは考えていた。
恐らく魔物が大発生した背景には、何かがあるはずだ。それも調査したが、いまだに原因は不明である。

星神殿では、夜闇(くろ)の勇者の時代以降、各地の情報収集を行う部署が設立されている。それを造ったのは夜闇(くろ)の大神官だった。目的は魔物の発生と発生した場所との関連性を調べるため、とされているが、かの大神官の狙いは分からない。当時から他国家の情報も収集

していたことを考えると、魔物は建前ではなかったのだろうかと推測される。

情報の伝達は星術を使用できるものとそれ以外では、速度において格段の差がある。夜闇（くろ）の大神官が創った組織は、その点は恐ろしいほど有能だった。問いかけるために星術を施した紙を送れば、すぐに調査結果が記されて帰ってくる。

アノーツクレスの被害については、首都は半壊、政治の中心だったおもな五大商家と筆頭達は速やかに護衛と家財を引きつれ辺境都市に避難したと報告を受けた。

あきれたことに、筆頭が避難済みだということは書簡にはそのことは全く触れておらず、首都の人民の困窮を切々と大仰な修飾語を用いて訴えていた。みていないのによく書くものだ。恐らく彼も現地の情報を集めて書いたのだろう。

商業国家筆頭とあろうものが、このようにすぐに嘘がばれる交渉をしてもいいものなのだろうかとあきれた覚えがある。

アノーツクレス筆頭については思うところがあろうとも、そこに住んでいる人々には関係のない話だ。そこで勇者と協議し、ブロンザイト経由でアノーツクレス首都へ入ろうと決定したのだった。

あらかじめ調査依頼していたブロンザイトに関する報告は、「治安に乱れが出ている、また誘拐、略奪が増え、難民の被害者が多数発生している」というものだった。そこに神子を連れて行くのはとても不安が募る。彼女は身を守る術を持たない上に、人懐っこい。すぐに誰とでも話せる半面、いつか詐欺に会うのではないかと心配でたまらない。が、彼女がいなければ大規模な浄化は決して行えないのだ。また、彼女を守護するという契約を私たちは交わしている。余り頻繁に置いていくわけには行かない。理由にもろもろあったが、彼女をブロンザイトに連れて行くことにしたのだった。

入ったブロンザイトの街は、想像以上に悪化していた。
空気に触れた途端、それを悟る。
入門の検査場である詰め所で、アノーツクレスの使いと名乗る青年から手紙を渡された。五人衆のうちの一人、ルース・サニディンが逢いたいという。彼もこの街に滞在しているとの知らせだった。押してある家印も確かにサニディンのものである。
「サニディン」は五人衆の四位に当たる人物だ。まだ若く、老練な者の多い五人衆では浮いた存在だと聞いたことがある。まだ逢った事はない。
使者はとある場所を告げた。あとでご足労を願いたい、との依頼だった。何かを依頼されるよりは、ただの顔見世としても逢っておいたほうがいいだろう。後々の判断の根拠になる。
もうこの街は長くないのではないか。人々の様子を観察し、結論付けた。用事が済めば、すぐに引き払うべき場所だ。
詰め所から戻ると、神子が不安そうに周囲を見回していた。そういえば、と思い出す。彼女のいた町は余りにも平和だった。こんな場所に来たことがないのだろう。少し説明をする。警戒心を持たせることに成功したようだ。
取った宿にも念には念を入れて防犯のために術を仕掛ける。
ここで勇者に出かける旨を伝えた。彼も神子を連れ出すには不安があるようだった。そこで、留守番のためにおいていくという選択を取ったのだ。
宿を出てから、勇者に今からの面会の件を話す。彼はいつも通り頷き、了解の意を示した。特に反論は無いようだ。神子を部屋においていく選択にも同意を貰う。
権力者と神子を合わせたくないのには二つ理由がある。純粋に騙されそうな神子をそういった場所に連れて行きたくないということ。彼女の身分が庶民であり、戦闘能力もない女性だということに問題がある。強引に婚姻を望む声も実際にある。実力行使で何かがあった場合、それを覆すにはかなりのリスクがある。

もう一点は、神子というものの特性に不安があるためだ。かつて、「神子を通して星神様が世界を見ている」と述べた本を読んだ。その本はある理由から疑う余地はない。確実に神子が星神様と接続されている以上、権力者との駆け引きは彼女に見せるべきものなのかどうかがまだ判断がつかない。

そうして神子を宿において出かけたのが五時間前だった。

宿であればまだ安全だろうと私たちが過信した結果である。

今から考えても悔やむ部分ばかりだ。

ひとこと、決して出かけるなと言えばよかったのか。それとも、もっと強力な星術を施した樹具（じゅぐ）を渡しておくべきだったのか。

ルース・サニディンと面会を終え帰って来た私たちを待っていたのは、空の部屋だったのだから。

◆神官、契約を行う（後）（前書き）

神官視点です。

◆神官、契約を行う　（後）

「買い物？」

「一応、片付けて出て行っているみたいだな」

部屋の以上を見回していた勇者が感想を述べた。争った形跡はないらしい。彼は以前、物の損傷を詳しく見る事が出来ると洩らしたことがある。勇者がそういうのなら間違いはないだろう。

初めはただ単に出かけたのかと思ったが、思いなおす。出かけただけでもすぐに迎えに行くべきだ。この街は危険すぎる。

私はすぐに呪文の準備に取り掛かる。念のため足取りを掴もうと考えたからだ。

結界に使用していた術は、一定の境界線を越えるとその人物を記憶する特性もある。念のために仕込んでいたものが役に立った。ただ、時系列に関する術式を仕込んでいなかったのが悔やまれる。結界に人が触れたのは三度。一度宿の男が触れ部屋を覗き、男と神子が同時に触れる。そして神子が境界を越えて出て行っていたことが分かる。時系列は分からないものの、男が部屋を見たときには確実に神子はいたということだ。手がかりの一つとして記憶する。

直ぐに術を切り替えて神子の現在位置を探る。

星語に登録された神子を指す単語【０／Ｍｖｖｖｋ０】を使用し精度を上げ彼女の居場所を探った。これで見つかれば杞憂に終わる。

だが、返ってきた結果は一単語だった。

――　該当無し。

すっと血の気が引いたのを自覚する。

星語に記された名前は、ただの名称ではない。世界で「唯一」を示す言葉だ。その名称を星語で名乗ることは、本人にしか許されない。例え本人が死亡していたとしても、その名前で検索をすれば見つかるほどのものである。

本人しか名乗れない名前――ただの迷信だと思われていたそれが、実際に効果を発した事件はあったそうだ。かつて勇者を詐称した男がいた。男を疑ったものが、偽勇者に星語で名前を名乗ることを求めた。偽勇者は渋ったものの、しぶしぶ星語の名前を口に出した。だが、偽勇者は口に出しただけで喉が裂け血を吐いたという。

それ以降、勇者を詐称するものが出た事はない。確かに、勇者は民衆からの支持は得られどこを訪れても王族かと思われるほどの高待遇が得られる。しかし、それが簡単にばれる上に命を失いかねないとすれば、それは旨味はないだろう。

それはともかく、星語での検索に存在自体が当たらないのは確実に異常な事態である。

捜索をかく乱するための術を使われているとしか考えられない。

しかし、それは神子自身が使えるものではない。第三者の関与があるはずなのだ。

私たちはまず宿の男から問い詰めた。私が読み取った情報から浮かび上がった宿の男は、落ち着かなさげに視線を彷徨わせていたが、自分は手紙を渡しただけだと主張した。宿の受付に少年が持ってきた手紙を渡しただけだという。

実際、それ以上でもそれ以下でもないだろう。念のため、男に知られないよう星語で印をつけるだけつけておく。これで逃げても検索することが出来る。

だが、これで神子が宿から消えていった先の手がかりは途切れることとなった。手紙を受け取って、どこへ行ったのか。

手がかりが失われた状態となり、私は次の手を打つことを選択する。

術で追えないなら、足で探すしかない。しかし、自分達には足りないものがある。土地勘と人数だ。

「ルース・サニディンにもう一度会いに行く」

次の策について説明をする。勇者がこちらをゆっくりと見た。彼にしては珍しく、焦りを感じているようだ。先ほどの宿の男を締め上げる際には、彼からの殺気がとても役に立った。

先ほど面会だけを行ったルース・サニディン。このブロンザイトはもともとサニディン家の店子が多くいる土地らしい。そのため、街道の確保にでてきたのだ、と言っていた。

「彼が関与している可能性は？」

勇者が問いかけてきた。

「低い。メリットがない。関与するならば、私たちに接触しない。街道の掃討作戦のために、彼は騎士団を連れて来ていると聞いた。協力を仰ぐ」

「対価は？」

「戦力で。騎士団をつれてきている理由をこちらで肩代わりする」

他者の戦力に依存して急ぐのには理由がある。

先ほど、神殿から報告と共にもたらされた黒い噂。

――アノーツクレス周辺で、人身売買が行われている。更に最近市場が拡大している。

人が人を商品とする。

かつて、人が人と戦っていた時代、それは当たり前のようにあったらしい。しかし、今はまずその概念がなくなっていた。魔物という外敵があらわれ、人間は人間相手に戦っている暇がなくなったからだ。まるであつらえたように、人間に敵が現れたのである。

それが、この魔物による蹂躙により、一気に闇の部分が噴出した形になったのだ。もともとアノーツクレス周辺では都市伝説のように闇市場の話が囁かれていた。

「どれだけいるか分からない魔物を、相手にすることになると思う。出来るか？」

僅かに高い場所にある勇者の蒼目を見る。勇者は頷いた。

「いくらでも」

そして、

「人間相手よりはその方が楽だ」

と呟いた。

結局、ルース・サニディンのもとに直ぐに赴くこととなった。先ほど帰ったばかりの私たちが現れたことに大きく驚きを露わにしていたが、状況の説明をし協力を仰いだ。

彼は灰茶色の頭髪をした穏やかな人物だった。こちらの要求と提示した事柄に関して吟味し、直ぐに結論を出す。

「ご協力いたしましょう。街道の魔物を掃討するには、騎士団のものから犠牲者が出る可能性があります。人手不足のために、恥ずかしながら錬度が不足しているものも連れて来ていますので」

後ろの騎士達の機嫌が悪くならないかとひやりとしたが、彼らが表にそれを出すことはなかった。

「それに元々、この街の掃除をしたかったのもあります。……この街からでているもののせいで、各地に混乱が広がっていますから」

言葉を濁しているが、なんとなくその先のことは察せられた。麻薬や人身売買の中継地となっているのだ、ここは。

「こちらにとてもよいお話です。契約しましょう」

契約紙という特別な紙がある。これは一度記入した文字を消すことは出来ず、また名前を書いてしまうと他に記入も出来なくなるのだ。契約が完了したときのみ消滅する。

その紙に今回の条件とお互いの名前を記入し、契約を完了する。
「神子様の特徴を教えていただけますか？」
騎士に私が説明をすると、彼らは互いの顔を見合わせて不思議そうに呟いた。
「薄茶色の髪、背は私の目ぐらいの高さ。目の色は――何度見ても覚えられないのが特徴」
どんな特徴だといわれても、それが彼女の特徴だから仕方がない。
神子は、見たら分かる。その一つがこの特徴でもあるのだから。
そのまま私たちは街道の掃討に出かけることとなった。

そして今、街道はすっかりと元の静寂を取り戻していた。
既に勇者により焼き尽くされた魔物の残骸が、燃え尽き、瘴気となって爆ぜる。
私はそれを浄化しながら、その情報が届いたことに気付いた。騎士団からの連絡の紙が、空から落ちてくる。それを開き、ようやく彼女が確保されたことを知った。ためしに検索をかければ、今度は先ほどと違い、検索の網に存在が引っかかることに気付いた。
どうやら、何とかなったらしい。
疲労により座り込みたくなったが、街に帰るために私は再び星原樹を封印するための術式に取り掛かった。

被害者C、もてなされる

――プリンは、人を詩人にさせる。

この思索にふけるような深い色のカラメルソースに、あわくほどけた陽の光を思わせるクリーム色がなんとも美しい。

そしてソースとプリン本体の境目、カラメルがじっくりとしみている部分は、時間の経過がもたらす芸術があるということを人にそっと教えてくれる。

本当にプリンって凄い。

スプーンでつつくと僅かに反抗するように震えるけれども、結局諦めたように受け入れていくさまはまさに圧巻。こんな震える食べ物が世の中にあっていいの？　こんなにはかないお菓子があるなんて！　スプーンで口に運べば、その優しい感触は舌の上でとろけて広がる。まさに楽園を口の中で演出します。

あー……しあわせ……。

何といっても新鮮な草牛（うし）さんのミルクと美味しい鳥の卵、そして高級品な何度か精製とかいうのをした砂糖をたっぷり使用しているものだから、一般庶民にはなかなか手に入らない代物！　全部好物ですよ！　ミルクもそのままで美味しい。ゆで卵もぽよぽよで美味しい。砂糖はそのままでもいける。

なのに、その黄金トライアングルが合体したらこんなに更に進化した恐ろしい食べ物が出来ちゃうミラクルなんですよ！　誰が作ったんですか！　美味しすぎる！

ウフフ、スプーンでつついちゃうなあ。食べたらもっと幸せになるけど、なくなるから悩むんだ。ちょっとずつ食べていこう。

一口ずつ食べてニヤニヤしていると、横に立って給仕をしてくれていたあねさんが、
「幸せそうにお召し上がりになりますね」
といつぞやのメイドさんみたいにあたたかい眼差しで見守っていましたあああああ！
あねさん！　存在忘れてごめんなさい！
とってもプリンに集中していました！　美味しすぎるプリンの罪深さよ！

ここは、あねさん達が現在本拠地にしているお宿だそうです。
もともといた宿に帰ろうとしたんだけど、私たちがいたところは、何かと差しさわりがあるため今は帰れないとか。何かあったんだろうか？　謎です。あ、部屋にお枝様を置いたままなの、後でとりに行かなきゃなあ。
あねさん以外は実は女性隊員がいないとかで、あねさんが私についてくださっています。ありがたいのに、なんともったいない！
ここに来た時、あねさんに給仕をさせるなんて焦ったけど、あねさんがにっこり笑って、
「お座りください」
というものだから、不思議な威圧感に素直に従っちゃいました。最近、笑顔なのに押しが強い人が多いです。私は押しが弱い人間の筆頭だよ！　正面から戦うなんて絶対無理です。ムリムリ。
プリンをつついていると、腕の金属がテーブルに当たってゴン！といいます。また当てた。そのうちこのテーブルがへこみそうだ。
手錠をまだなんでつけてるかって言うと、これさびすぎて上手く開かなかったんだよね。せめてと鎖を切ってもらったから、手かせと足かせだけが残っている状態です。ちょっと重いけど、我慢できないほどじゃない。鎖切りがないから、斧で鎖を切ってくれたお兄さん達の方が、切られる私よりびくびくしてたのが印象的だった。
これ、開かないのかなあ。ちょっと不便だし、すれて怪我が出来そ

う。そういえば、落ち着いてみてみたら手首や足首に怪我はまだ出来てないようです。よかった！　怪我とさびた金属のコラボなんてシャレになりません。

もしこれが外せなかったらどうしよう？　その時は新しい流行だと世界に旋風を巻き起こすしかないですね！　ニューファッション！　テジョウスタイル！　ちょっとデンジャラスでアバンギャルドなハードコアバイオレンスアクセサリ！　これがはやれば私の格好がおかしいとは誰も言わないはず。はやる要素がどこにも見当たらないから、ただの妄想だけどね。

今いる宿の部屋は、私たちが取った部屋よりは狭い。あそこに三人宿泊予定だったのもある。

部屋の中にはテーブルセットが一つと寝台が一つ。

掃除がよくされているからとても気持ちがいい。寝台の布とかも結構綺麗に洗濯してるみたい。手をかけられた部屋って違うなあ。換気もちゃんとしているから、部屋の匂いが違うんだよ！　私は違いが分かる庶民です。

「もう一つお召し上がりになりますか？」

目の前で微笑みながらプリンを勧めてくるこの男性、あねさんの上司だそうです。名前はえーっと……なんか、こう、サンルーム的な名前。サン……サニー……サム？　あー。ごめんなさい、上司のお兄さんでカンベンしてください。今本気で覚えていない自分の脳みそにビックリした。

お兄さんは紅茶にミルク入れたような色の髪に茶色の目をしています。爽やか系の顔立ち。喋り方がのんびりしていて、思わず警戒心を解いちゃいますよ。そう、一緒にお茶をしてしまうほどに！

……ん？　なんだろう一瞬過ぎったこの違和感。あっ、何で私は上司のお兄さんとお茶をしているんだろう！　今更この状況に疑問を

いただきました！　知らないひとに物を貰わない、ついていかない。あの誓いを立てて早数時間。

既に、知らないひとに、ついていって、お菓子をいただいている……？

私、もしかして誓いを破っていやしませんか？　なんと！

すでにプリン貰っちゃった。食べちゃったお菓子は返せない！

知らない人、つまりあねさんの上司のお兄さんにプリンもらっちゃっています。大変なことです！　本気で反省した事はどこへ行ったのか。自分で自分に突っ込みを入れなきゃやってられない！　上司のお兄さんは穏やかな声で神官様に保護を頼まれた、と仰いました。お二人に知らせてある、とも。私を探す代わりに、お二人は仕事をしていらっしゃるとか。大変申し訳ないことです！　この捜索隊の費用が掛かったなら、私も頑張って稼いで借金返済しますよ！

でも勇者様も神官様も知ってるらしい人物なら、これは貰っていいもの？　震える幸せの象徴（つまりプリン）を前にして、本気で葛藤しています。

上司のお兄さんは、

「他のお菓子のほうがよろしいですか？」

と私の沈黙を斜め上にとりました。セレブ発言ですね！　私はばっと顔を上げた。

「いいえ！　プリンはとても好きです！」

なんとなくこれ以上ものを貰ったらいけないような気がしたんだ。野生の勘です。例え、どんな美味しそうなものであろうとも、いただくわけには！

でももう貰ったプリンは食べる。いただいちゃったものは、仕方がありません。責任を持って消化いたしましょう。消化は得意です！

あれ、なんだか自分がとっても馬鹿になったような気がしてきた。白さんとかだったら、今更気付いたんだねとか言いそうです。想像してちょっとむっとした。白さんなんか少し禿げてしまえ！

とりあえず、プリンには罪がないのでありがたくいただきました。今度のプリンは口に入った時のフルフル感を味わいながら食べたらあっという間でした。何でお皿の上にもうプリンがないのですか。私が食べたからですね。

ごちそうさまです。

私が名残惜しくプリンの入っていた皿を見ていたところ、窓から紙切れが飛んできました。

上司のお兄さんのところへぽとんと落ちます。あねさんが飛ばしていた紙と同じような紙だった。あんまりじろじろ見るのも失礼だなと思ったけど、上司のお兄さんが紙を開いて絶句したので目が離せなくなった。上司のお兄さんは一言、

「もう、終了したんですか」

とつぶやいた。

何の話だろう？　でも聞いちゃ駄目な話だったら申し訳ないなあと思って、あねさんが入れてくれた紅茶を飲む。あねさん、紅茶まで美味しいなんて素晴らしすぎますよ！　さすがあねさんです。心の中で大絶賛ですよ。紅茶を飲んでほっこりする私に、上司のお兄さんがこう告げた。

「神子様、勇者様と神官様が帰ってこられるそうですよ」

私は思わず顔を上げた。

被害者C、お迎えに気付く

お二人が帰ってこられる！

その言葉に、嬉しさと同時に居たたまれなさが生まれた。私はとてもすごくかなり心配をおかけしているはず。しかも私を探すために、あねさん達のお仕事を肩代わりされているとか。

星原樹の選定を受ける前、雇用条件についていろいろお話したけれど、今更ながらなんだか申し訳なくなってきた。守ってくださるって言う条件があったんだ。

かなりお荷物だよなあ、って実感がじわじわとしてきました！できることはお枝様運びぐらい。何か役に立てることとって他にあるんだろうか。紅茶を見ながらむむと唸っていると、

「どうなさったのですか？」

と上司のお兄さんに聞かれました。はっ、よその方の前で失礼なことを！

「失礼しました」

いつもながらにお恥ずかしいところをお見せしましたっ。恥ずかしくないところが私にあるんだろうか。ないかもしれないですねそうですね！

「何かご心配事でも？」

上司のお兄さんは穏やかに問いかけてきます。私はそれに正直に答えた。

「お二人に心配をおかけしたので、申し訳なくなりました」

お兄さんは苦笑して、

「そうですね、でもご無事で何よりです。最悪の事態は避けられましたから」

最悪の事態かあ。あのままだったら、草牛さんのように荷馬車で

売られてしまっていたんだろうか。少年とおじさんの馬車以外からも私のような人が出てきていたのを思い出した。うつろな目をした人たち。私よりも小さな子もいた。泣いているとかよりも、その表情は深い絶望を思わせる。あんな年頃の子がする表情じゃないと思う。

「他の人も、同じように攫われてきた人だったんですか？」

お兄さんは直ぐには答えなかった。少しだけ考え、

「攫われた人と、……家族に売られてきた人もいますね」

家族に売られた？

私の想像を絶する答えに、言葉を失った。え、なんでそんなことが。

「この街はまだマシな方です」

お兄さんはこれ以上は言わなかった。私はグルグル考えながら、でも不思議と、ありえないことではないと思う自分がいることに気付いた。怖いですよ！

説明が面倒というよりは、私に聞かせられないと判断したんだろう。お気遣いありがとうございます！　確かにさっきの話だけで、私は恐ろしくなった。

でもですね。そんなことが横行している、ここでマシなほうなんですか！

世界が乱れているみたいなことを聞いたけど、想像ができていなかった。白さんに見せられた滅びを思いだす。私の知らないところで世界は確実にあの方向へ転がっているんだろうか。

世界って滅びるんですか、って口に出しそうになり、堪える。

滅びを止めるために勇者様達が頑張ってるんだから、私がそんなことを言っちゃ駄目だ。

でも、それがとても先の見えない戦いのような気がするのは、私だけだろうか。だって、人間がいる限り、暗い感情をいだく限り、魔物が増えていく。それを止めることがどうやってできるだろう？

今までの勇者様の物語は、一体どうだったんだろう？　白さんは

今回の第四期についてはさっぱり話さなかった。神官様ならご存知だろうか？　元々私の知識が無いに等しいのが問題だな。

私の沈黙をどうとったのか、お兄さんが、

「今回の一斉検挙である程度密売ルートが潰せましたから、しばらくは治安維持に力を注ぎます。また立ち寄られる際はもう少しマシな街になっているように努力しますよ」

と付け加えました。このお兄さんの自己紹介は簡単に名前だけだったけど、つまり何者なんですかっ。領主様にしては街の外からきたっぽいけど権力持ってそうだし。

……今更ながら、星都で教育されてたのってやっぱり必要だった気がしてきましたあああ！　よその国や地方のこと、ビックリするほど知らないよ！　そういえばここはどこの国ですか？　何も考えずにお二人に連れられていたことを再認識した！　私、もう少し自立します！　心の中で握りこぶしを作る。

そのとき、ふっと意識に何かが触れた。

反射的に頭の中に、帰ってきた、と浮かぶ。

お二人の気配っぽい。……なんで分かったのかは分からないけど、野生の勘並みに間違っていないことも分かる。

ど、どうしようかな。

そわそわしだす私に、あねさんとお兄さんが不思議そうな目を向けます。

「あの、お二人がお帰りになったみたいなので、外に出ていいですか？」

窓の外が騒がしくなりました。あねさんが宿の外を覗き込みます。そして驚いている。

「よく分かられましたね」

あ、間違ってなかった！　よかった！　これ違っていたら恥ずかしかったっ。

「お迎えに行ってきます。いろいろ、本当にありがとうございましたっ」

私は立ち上がってお礼を言う。椅子をちゃんと戻してから、失礼します、と部屋をあとにした。気持ちだけが焦ってなかなか早足で歩けません。足かせが地味に邪魔です。ダイエット器具になりそうだよ。そういやこれ、そのうち取れるんだろうか。靴はあねさんにお借りしました。足かせに邪魔にならないように、普通のぺたんこ靴ですよ！　私のブーツはどこに行ったのか。ちょっと気に入っていたから悔しい。

廊下を走らないことを守りつつ、はやる気持ちで外に飛び出す。玄関のところでちょっとだけ乱れた息を整えながら、お二人を目で探した。

いた！

ぶわーって嬉しさがこみ上げてきて、ドキドキしてきた！

あねさんの仲間達が勇者様達と話している。お二人ともいつもと変わらない。いつも通りの姿に、ものすごく安心する。勇者様はえせ笑顔モードです。そうですよね、人付き合いって大事ですしね！

私はここまで来たのはいいけれど、割ってはいっていいものかどうか悩んで踏みとどまる。なんか姿見ただけで安心した！　はやる気持ちが落ち着いて、でもまだドキドキしている。や、やっぱりあねさんたちのところで待っていたほうがよかったのかな？　声を掛けるタイミングとかいろいろ失ってます！　あのマッスルお兄さん達の壁を突破できる気がしない！　あねさん、同僚さんは何であんなにマッスルなんですかっ。

他の人と話していた勇者様の目がすっと動いて、私を捉えました。そうですね、勇者様は人の気配に敏感ですしね！

その瞬間、私はものすごいトリハダが立ちました！

勇者様の蒼い目が、かなり険しいのは気のせいですかあああああ！

はっきり怒りをたたえた目に、自業自得ながらも卒倒しそうです。

被害者C、保護者とご対面

に、逃げるべき？

一瞬その発想が出た。逃げれるなら逃げたい！　けど、いろいろ迷惑をかけている身の上ですから逃げ出すわけにはいけません！

とりあえず存在感を希薄にしてみる。じわじわと身長を低くして、お宿の玄関の端っこにしゃがみこみました。大きな宿だから、ちょっとだけ階段がついているんだ。そこの端っこで座るよ。こうしたらちょっとは視界から外れるかなーって。外れたら心の準備が出来るかなーって儚い希望ですがっ。

笑顔でマッスルの壁を突破した勇者様がこちらに向かってきているようです。ヒイ！　とりあえず怖いです。後ろから神官様も現れましたあああ。宿屋の玄関で震える私。さっきまでの攫われて怖いとかの緊張感とはこれは別だな！　明らかに悪いこととしてごめんなさいの恐怖ですよ！　だって勇者様怒ってる！

勝手に出て行ってごめんなさい！　あと、知らない人についていってプリン貰ってごめんなさい！

勇者様は私の前に立つ。元々見下ろされるぐらい身長の違う人だから、私は座り込んでいるせいでほぼ真上を見上げる形になる。勇者様の後ろに太陽が来ているせいでちょっと眩しいです。影の中に表情が隠れて怖いんですがあ！

私はゴクリと喉を鳴らした。

ち、ち、沈黙が痛い！

後ろのマッスルさんたちが静かなのは見守っているせいですか！

見てないで散って散って！　ホラ、皆さん仕事してください！

庶民が怒られるところなんて面白くもおかしくもないから！

「お……」

とりあえず声を出してみると、かすれた声がひょろひょろと出る。
「おかえりなさい……」
ごまかすように笑うと、じっとこちらを見る人は、まだ沈黙を続けますよ。沈黙したくないから頑張って口を開いたのに！　全くの無駄でしたあああ！
「……ただいま」
たっぷりの沈黙の後にいつも通りぶつ切り会話の勇者様がようやくお返事をくれました。……勝った！　何かに勝った！
「なにか会話おかしくないですかあなた達」
溜息をつきながら神官様の登場です。いや、もうちょっと早くつっこんでいただければ、怒りの勇者様にご挨拶なんて無謀な突撃はしませんでしたよ！
　でも、勇者様の眼光は衰えません。も、申し訳ございませんでしたああ！　平身低頭、心よりの謝罪を込めて、不肖私めが踊らせていただきます！　謝罪の舞を！！　ただの謝罪ではございませんよ！
　心の中だけではなく、現実にだらだらと汗を流しながら威圧感たっぷりに眺めてくる勇者様を見上げます。しばらくして、勇者様が私の前に座りました。階段一段下だから、丁度私の目線と同じぐらいに。
　勇者様が私の前に右手を出して、一言。
「手」
　はいっ！　お手をする勢いでぽすんと載せた手を、勇者様はおもむろにひっくり返しました。なんですか、いじめですか！　このまま手を雑巾絞りにする、捻りいじめですか！　勇者様の力でねじられたら実際ぽきんと行きますよ！　暴力はんたーい！！
　ねじられてビクッとした私の反応をよそに、なんどか手をひっくり返したりして勇者様は何かを見ているようです。うん？　手錠を見ているの？
　すると、勇者様は左手で手錠を軽くつまんだ。鍵のついていたところの少し手前、人差し指と親指でつまんだだけ。なのに、手錠が

ボロッと割れました。
わ、割れたあああ！
そして意外な慎重さでもう一箇所つまんで、完全に手錠を錆びた鉄くずに変えてしまいました。これを見ると、へえ、鉄って意外と脆いんだあって信じそうになりますよ！　衝撃の場面！　崩れ落ちる鉄！　あねさんやつぶらな瞳のお兄さんが結構頑張ってくれたけど、手錠は取れなかったんだ。でも、指二本で取れちゃったね……お兄さんのマッスルが飾りではないと思いたい。
「反対」
勇者様がゴトンと手錠を落としてから、もう一度手を差し出します。はいっ、反対の手ですね！　素早く出しましたとも！　素早さは大事！　反対側の手錠も見事に鉄くずになりました。あ、こんな風に宿屋の玄関汚してよかったのかなっ。鉄くずってゴミにするにも何か微妙ですが……。
勇者様が私の手をくるくるひっくり返して何かを確かめています。あれ？　縛られていた時、結構痛かったけどすれた跡が残ってない。よかったあああ！　縄の痕が残っていたらそれ何プレイしたんですかって言われかねないしね！
「痕は残ってないようですね。他に怪我はありませんか？」
わ！　思ったより近くで聞こえた声にビクッとします。神官様が中腰で覗き込んでいた。
「け、怪我はないです！」
私は慄きつつ答える。
何時の間に横に来てたんですかあああ！　この人も気配無いんですか！　いや、勇者様のビックリ指力に見入っていたせいかもしれない……。あっちが注目の的だった！
「足は……」
勇者様が私の手を離し、足かせに目線を移しました。あ、足ですか？　外していただけるんですか？　そう思って見やすいようにスカートをめくろうとしたら、勇者様に手をつかまれました。恐るべき

スピードに、わたしは息が止まりました。見えなかった！　わかんなかった！　ビックリするばっかりで、そのうちひっくり返りますよ私！

「足は……しまっておきなさい」

はっ。

勇者様達の後ろにはマッスルお兄さん達がこっちを注目していました。見ないでいいよ！

危ない危ない！　あまり見ごたえのない脚を披露するところでした！

あっ、勇者様、今そっと溜息をつきませんでしたかっ！　またあきれてますねっ。

そう思っていると、神官様が後ろのお兄さん達に向かって、

「これの片づけをお願いできますか？」

と声を掛けてから、私達に向き直り、本当にほがらかな声で仰いました。

「さあ、部屋の中で、洗いざらい話を聞きますから覚悟しなさい」

雰囲気が……雰囲気が黒いです神官様あぁぁあ！！

そして私は大事なことを言い忘れていたことに気付いた。

「あの！」

急に大声を上げた私にお二人の注目が集まる。

「申し訳ございませんでしたっ。ご迷惑をおかけしましたっ」

勢いよく頭を下げる。謝って済むことじゃないけど、とりあえずご迷惑をおかけしたのは確かだから、ちゃんと伝えたいことだ。

下げたままの頭に、軽く手が添えられる。すこしだけふわっと撫でる手。おそるおそる顔を上げると、勇者様だった。

「怪我が無くてよかった」

静かな声に、それと頭に乗った手の優しさに、じわりと目の奥から水気が滲み出してくる。堰を切ったように、ぼとぼと涙が零れ落ちる。止まらない。こんなところで泣いたら、困らせるだけなのに！

「とりあえず中に入りましょう」

そ、そうですね、失礼しました！　立ち上がりたいんですが、涙が止まりません！　なんだかほっとしたのと気が緩んだので、止まらないです。しかもしゃっくりが混じりだしました！　なんという三重苦。

勇者様が頭から手を退けた気配がする。すると神官様が、

「前々から思っていたのですが、女の子の運び方はこうじゃないんですか？」

と何か不穏な話をしています。でも顔を上げられない！　鼻もぐずぐずいったままで凄い顔になっているはず。涙が止まらない混乱の中にいるんだけど、頭の一角が凄く冷静ですよ！

でもこのときは根性で顔を上げておくべきだった。今なら断言できる。

ふわっと浮遊感がして、お二人の声がとんでもなく近くから聞こえてきました。

「こっちか？　両手が塞がるだろう」

「その誰かを抱えたまま戦闘をするという発想がそもそもおかしいことに気づいた方がいいでしょうね」

ぎゃあああ！　人生三度目のお姫様抱っこ！　もう、なんだか疲れてきた。というか、泣き疲れだろうかと思いながら、ふわふわする浮遊感の中、ぼんやりと安心を感じたのだった。

神子？、すっきり目が覚める

……うん。バッチリ寝ました。

おはようございます、職業神子の、元町民です。

今、ベッドの上で呆然としている。なんでこうなったんだろう。

というか、朝日が昇りかけている？　日之出鳥がどこかで鳴いている気がする。そういえば、街で生活していた時、毎朝、裏の日之出鳥のヒナちゃんと競い合ったものです。

まだ起き出す気になれず、シーツの中でゴロゴロする。

あれ？

何かを忘れている気がするよ……？

枕に顔を埋めてしばらく考えてみる。呼気のせいでちょっと枕があったかくなるのが好きなんだ。ちょっと息が苦しいけど。

うーん……あっ。

お説教受けてない！

ざあっと身体から血の気が引き、思いっきり跳ね起きました。寝ている場合じゃないだろう！

ヤバイ！　最強の、いや、最凶の神官様が現れてしまう！　まさに降臨ですよ！

というか、私あのまま運ばれてる途中で爆睡したようです。記憶があそこで途切れている！

拉致されて結構眠ったと思うんだけれど、やっぱり緊張感とかいろいろあったんだろうな。ぐっすり眠りました。ん、いつの間に寝間着に着替えているんだ。誰が着替えさせてくれたんだろう？　ありがたいことです。足をしまいなさいというぐらいだから、勇者様達ではないと思う。思いたい。いや、あれだけ迷惑かけて、挙句に

寝て、着替えさせてもらうとか。しかもお説教タイムを忘れ果てて眠りこけてましたしね！

それにしてもここは、と今更自分がいるところが気になります。覚えがない、いや、微妙に覚えがある。あねさんと上司のお兄さんがいる宿の内装に似ている。似ているからといって、あの宿かどうかは分からないかな。ごそごそとベッドを抜け出して窓際へ行く。窓は開いているのかな？　うっすらとした朝焼けの光がそこから部屋に入ってきている。裸足には床が少し冷たい。朝の空気は冷え切っているけど、肌を撫でる冷たさがなんか新鮮っぽくて好きだ。

窓は開いていたんじゃなくて、ガラスが入っていた。ビックリですよ！　まさかの窓ガラス。

窓から見下ろした外は、やっぱり見覚えがない。玄関の方だったら分かるかな、と思ったけど、違うようだった。裏側かな？　あ、あねさんの同僚発見！　見回りしているみたい。自己紹介のときにナントカ騎士団って言ってたから、それでおそろいの防具なんだろう。名称、恩人のぐらいは覚えたいと思います！　今後の課題かなあ。

窓ガラスに手を触れていると、その周りが水蒸気でじんわりと曇る。窓ガラスがはまっているぐらい、高級な宿ですね！　かなり透明なガラスだ。向こう側がよく見える。

窓の外は、濃い藍色から眩しい橙の光が滲み出している。日の出ですよ！　空には月が今日は二つ浮かんでいる。

もし、私が昨日あのままどうにかなっちゃったとして。

そう、あのまま荷馬車で揺られていたとして。

私一人が何かなったとしても、こうやってお日様は毎日同じように昇っていくんだろうな。それはとても悲しいような、でも当たり前の毎日がくることが嬉しいような不思議な感情が混じってくる。私が悲しくても、嬉しくても、怒ってても、毎日は勝手に過ぎていく。

当たり前の毎日って、ホントは凄く貴重なんじゃないかな！

何が欠けていても、その毎日にならないんだし。

昨日は一日でいろんなことを考えた。

白さんの話。

拉致されて、売られそうになったときの怖さ。

ぐるぐるまわって、寒気が這い上がる。なんだろう？　どうして皆仲良くできないんだろう？　誰もこの街では幸せそうじゃなかった。暗い眼をした人たちばかりが、よどんだ空気の中で生活を送っている。よくないだろうな、と思うけれど、私が何かできるのかといえば、できること自体が少ない。

でも、一つだけ考えた。と言うより、実感しました！

もっと勉強をしよう。世界のことを知らなきゃ、何でこんなことになっているか分からないしね！　それ以前に……常識が足りないと神官様にお説教されそうですがっ。護身術も教えてもらえればいいな。今度何かあったとき、少しは時間が稼げるかもね。知らない事や出来ない事を責める方達じゃないけど、それに慣れちゃ駄目な気がする。

窓の外はしらじらと明るくなってきた。

今日も一日始まりますよ！

まず、今日の仕事はお説教からですね……。自業自得。それにしても、お腹が空きました。ごはんを要求してもいいんだろうか？　むむ、勝手に出かけてああなったばっかりなので、部屋から出るのもためらうよ！

ぐーとお腹がなりました。これは恥ずかしい！　誰かがいるときに鳴りそうだよ。

そういえば、プリン二個以外食べてない！　お腹が空くはずだよ。

どうしようかなあ、と窓の外をじっくり眺めていたら、不思議なことに気がついた。

夜明けなのに、建物の間が暗い。
ふわふわとそこだけ夜が漂っているみたいに、暗い。
まさか、あれって。

白さんの言葉を思い出す。でも、あれはまだピンクじゃない。なんとかなるの？　でもお枝様は強力すぎるんじゃないかな！
じっくり見れば見るほど全身トリハダだよ！　怖い！　こんな量が！
思った以上に街は薄暗いそれに包まれていた。
我知らず、窓ガラスに当てた手に力が入って、爪を立ててしまう。
キイイイイ！
爪とガラスのハーモニーが響き渡る！　ぎゃあああ！　自分でやっておきながら、最悪の音を出してしまったあああ！
一人悶絶する私。あ、今気付いたけど足かせがなくなってる！
勇者様ありがとう。大変歩きやすうございます。
ひとしきり転げまわったら落ち着いた。ふむ。
今度は慎重に窓に手を当てて、外を覗き込む。見間違いじゃないよね、とじっくり街並みを見る。やっぱり薄暗いなあ。あとで神官様にお話しよう。たぶん説教つきだけどね！

そして、ふっと窓の下に視線を落とした私は、ようやくその人に気付いた。
あ、勇者様だ。中庭で何かをしている様子。何しているんだろう？
このままお腹が空いて寝なおしも出来ないし、よし、行って見よう！
知っている人が入るところに行くなら大丈夫！　と自分ルールを設定してみる。
私はベッドサイドで着替えを見つけ、手早く着替えて部屋を飛び出していた。髪結んで無くていいよね。

神子？、部屋を抜け出す

廊下を一歩出たところで、部屋に回れ右で帰ろうかと思いました！
思った以上に広い！　右も左も廊下が繋がっていてその先は折れ曲がっている。多分凹みたいなかたちのお宿っぽい。私がいるのはその真ん中の部分だった。えーっと、つまり左右の道、どっちが正解なんだろう。出口はどっちですか？
でもせっかく着替えたんだしここで引き下がることは出来ないっ。良く分からない対抗心を燃やしながら私は部屋の外へ一歩踏み出した。

早朝の廊下はまだ暗い。暗い闇が青い闇に変わるわずかな早朝の時間帯です。
所々の窓がガラスで出来ているから、廊下にほんのりと外の光が入ってくる。そのせいで怖がらず歩けるよ！
どこからか料理の匂いが漂ってくるから、従業員さんとかは起きているんだろう。朝ごはん……。朝ごはんのことを考えると、胸が一杯になります。そしてお腹は空っぽになります。今お腹がなったら響く！　絶対響く！　ならないでくださいお腹さん。自分のお腹に懇願しますよ。
宿のほかの部屋は静かだから音を立てないように頑張る。幸いなことに廊下は頑丈な板張りだった。ちょっとやそっとでは軋まない。宿泊客はまだ起きていないんだろうな。起こさないから、よく寝てくださいね！　私が言えることじゃないけど。

そして……今。私は絶賛迷い中です。
さっきここ通ったよね。この花瓶に覚えがある。
宿で迷うかって？　建物で迷うなんて、馬鹿じゃないのって？

じ、自分の足で部屋に来ていないからですよ。ほ、方向音痴じゃないよ！　実際、現在位置が何階かも分からなかったし。お迎えが来た時はちゃんと道順覚えていたから外にいけましたし！

早朝の静寂は嫌いじゃない。朝の静けさって、少し空気がピン、としていて気持ちいい静かさじゃないですか？　とても好きです。パン屋に出勤していたの、いつもこの時間帯だしね。早起きは得意技です。

行き止まりになったりどこか分からなくなったりしながら、なんとか玄関に着いた。

昼間見るのと、またエントランスが違った雰囲気になっている。ここまで誰にも逢わなかったのは、良かったのか悪かったのか。どう見ても不審者ですからね！

でも思ったよりも時間が掛かってしまった。まだ勇者様は外にいるのかな？

玄関の鍵は掛かっていなかった。出入フリーなんだろうか？　このままだと泥棒さんもフリーなんではないですか？

無用心というよりも、外に騎士さんが歩いているから大丈夫だと判断しているのかな。騎士さんたちが入ってこられなくても大変だしね。でも開けっ放しでいいのかな？　私の知識は役に立ちません。防犯知識については素人以下ですよ！　胸を張るところじゃないけど……。

ともかく、そっと扉を押すと軽い音をたてて玄関は開いた。その音すら大きく響いた気がしてびくりと身体を強張らせる。私が滑り込めるぐらいの隙間を空けて、その間から外を窺う。

外の冷たい空気が肌を撫でる。

少し先のお宿の門の所に騎士さんが立っているようです。お疲れ様です！　いきなり声を掛けて曲者扱いになったら困るから、心の中でエールを送る。立ち番、大変ですね！　頑張ってください！

玄関の隙間から滑り出して、そっと左側に向かう。

多分こっちに勇者様がいたと思う。いなかったら速攻部屋に帰ろ

う。部屋の場所は覚えている……はず。
お宿は想像以上に大きかった！　ぐるっと外周を塀で囲っている。これも防犯の一環？　塀の上には槍の穂先みたいな棘がついていて、簡単に侵入できないぜ！　っていう雰囲気だ。あねさんの上司さんが大物だとしたら、ここは結構いい宿なのかもしれない。もしかしたら丸ごと借りているとか。まさかねー。

さくさくと足音を立てながら庭を歩いていると、勇者様発見！　空を見てぼーっとしている様子です。鎧を脱いで、普通のシャツとズボンに剣をぶら下げただけの、普通の兄ちゃんモードでした。前に一度街で見たことがある。威圧感がちょっぴり減って、この方が近寄りやすいです。
さすがにぼーっとしていたとしても勇者様は勇者様でした！　私の足音に気付いて、直ぐに目線をこちらに投げます。
「おはようございます」
私は小声で声を掛ける。だって大声だったら凄く響きそうだし！　安眠妨害で訴えられちゃうよ！
「起きたのか」
そうだった、勇者様に運んでもらっている途中で爆睡したんでしたああ！　今更思い出すよ！
「そ、その節はありがとうございました」
大声にならないように早口で言う。恥ずかしいなあ。いつも眠ってばかりです。昔からこんなに寝てたっけ？　むむ、最近は特に寝ている気がしてきたっ。どこででも寝れるっているレベルじゃないです。
「体調は？」
お気遣い、ありがとうございます！
「大丈夫ですっ。バッチリ元気です」
握りこぶしを作って言えば、納得したように勇者様は頷き、また空を見上げてぼーっとする。

私も隣に並んで空を見てみた。
空にはぽっかりと二つ月が出ていた。月は三つあり、その周期は全部バラバラ。全部が出ていないことも滅多にない代わりに、三つが揃って出ることもあまりない。神官様が周期計算式を教えてくださったけど、私はさっぱり忘れてしまいました！　神官様ごめんなさい……なかなか身についてませんね。三つの月は大きさと色味で兄、弟、妹と呼ばれている。兄が一番大きくて黄色っぽい。弟は少しだけ小さくて白っぽい。妹は更に小さくて赤っぽい。いろいろ星術に密接な関わりがあるみたいだけど、専門的過ぎるから私はパスです。
今日でているのは兄と妹ですねー。朝の光の中では、月は青く白く輝いている。
勇者様は何を見ているんだろう？
高い位置にある横顔を見て、その視線を延ばして辿ってみる。やっぱりお月見ですか？　最近忙しいから、ぼーっとする時間が必要なんですか？　私もすることがない上に、なんとなく会話する雰囲気じゃないので隣に並んでぼんやりと空を眺めた。
空の端っこが金色に染まり、白っぽく光が闇を駆逐していく。パン屋に出勤しながら、いつもながめていた風景と重なって、ちょっとしんみりする。あの街は、本当に平和だったんだなあって今更実感した。帰りたいかといわれたら、分からない。不思議なもんです。なんとなく感傷的な気分になりながら朝焼けを見ていると、勇者様がぽつんと、
「怖かったか？」
と問いかけてきた。
何のおはなしですか？

神子、勇者と対話する

相変わらず主語が飛んでいる勇者様の言いたいことは、漠然と分かる。

日々の触れ合いで、推測することが出来るようになったのだ！

この場合、恐らく攫われたことを言ってるんだと思う。……その話だよね？　私は少し不安になって勇者様を見上げながら返答しました。

「怖かったです」

「済まなかった」

速攻で謝罪が来ました。逆に私が焦る！　勝手に……というのが正しいかどうかは分からないけど、攫われておいて迷惑かけたのに私が謝られるのは変じゃないかな。

「いえ、直ぐに助けていただいたし、大丈夫ですよ！」

私の返答に、何故か勇者様は沈黙した。ん？　私は不思議に思い首を傾げる。

そのとき、ゆるく風が吹いた。今日はみつあみをしていないため、風で髪が揺れて大変うっとおしいです。頬に掛かる髪を耳にかけて背中にまとめて流す。これはまとめてくるべきか、それとも後ろで一つに括るべきか。実は癖毛でふわふわしているため、みつあみでまとめているのですよ。切ったら切ったで、自由になり過ぎた毛先がとんでもない寝癖を生み出すので、それは出来ないっ。

髪に気をとられていた私に、勇者様が改めて、

「初めにあったとき、無理やり連れて行って申し訳なかった」

と長文を口にされました。おお、意味が良く分かる！　と言う事は怖かったかというのは、あのときの話ですかっ。

「あー」

私は理解が出来た喜びに、思わず手を打ちました。勇者様は神妙に

待ってくれてた。なんか、ごめんなさい。
「荷物担ぎは微妙に恨みに思っていますけど、それ以外は大丈夫です！」
とは言ったものの、今更なんであんなふうに拉致されたかが気になってきた。余り喋らない人ではあるけど、あんな理不尽な態度をとる人でもないことが分かってきたし。だから逆に気になります。
「なんで、あのとき何も言わずに連れて行こうとしたんですか？」
ちょっと話せば、私も話を聞こうかなーって思ったかもしれない。無理やり連れて行くのは、犯罪ですよ！　まあ、普通に話を聞いても話半分で疑いながら聞いただろうけどっ。未だに神子呼ばわりは慣れません。
　勇者様は少しだけ私の目から視線を外しました。何かを迷っているような仕草だ。ごまかしは通用しませんぜ旦那！　今日も絶賛睨めっこです。私はじっくり勇者様を眺めます。
「それは、お前が……」
何かを言おうとして、けれども勇者様はそれ以上口にせず、ゆるく首を振った。
「いや、判断ミスだ。……済まなかった」
摩り替えられた言葉は、なんだったんだろう？　私の微妙な表情に気付いているのかいないのか、別の話題を勇者様は口にする。
「お前はずっとあの街で暮らしていたのか？」
たぶん勇者様は、さっきの続きを口にするつもりはない。それが伝わるから、私はその話題の転換に乗った。空気読める子と絶賛してください。
「私は、両親と一緒にあの街で……」
ずっと住んでいたと口に出しかけて、私は大きく首を傾げました。
　あれ？　小さい頃から、本当にあの街に私はいただろうか？
　だって、友達と遊んだ覚えがありません。前にも似たようなことを考えた覚えがある。もの覚えが悪いって言ってもそれは別問題で、こんなに記憶が曖昧なことに変な汗が出てきました。

「た、多分、一緒に住んでたと思います……？」

思い出そうにも、両親の顔が曖昧になっていることに愕然とする。声も思い出せない。なんで？　あれ？　ぐるぐると思考の中に入り込みかける。

自分の記憶を逆行する。

最近の記憶。そして街を出た頃の記憶。街に住んでいたころの記憶。パン屋に勤めだした頃の記憶……徐々に曖昧になる、私の記憶。ぼんやりとも残っていない、昔の記憶――。

「大丈夫か」

掛けられた声に、遠のいていた現実の風景がぱちんと元に戻ったような感覚を受ける。勇者様が真剣にこちらをのぞきこんでいました。勇者様が私の肩に手を軽く触れました。その重みではっと現実に帰る。

はっ。

近いです！　近い近い！　失礼しましたああ！

思った以上に至近距離にあった蒼い目に、逆に変な汗が出た！

更に混乱するよ！

「余り考え込むな」

私の混乱を察してか、勇者様はかがんでいた背筋を伸ばして元の距離に戻ってくださいました。ふう。近すぎるのも怖いね！　びくびくするよ！

物覚えが悪いのは前からだけど、うーん、これはどうしたことでしょう。白さんならなんか知っているかな、とふと思いつく。歩く生き字引のおじいちゃんです。でもどこを徘徊しているか分からないのが問題だけどね！

白さんの言葉がふっと思い出される。

――酷くなると、自分の記憶がどこからどこまでか分からなくなる。

そうですね！　少し酷くなってますよ！　ううん、このままでいったら、若いのにボケですか私。ツッコミじゃなくてボケですか！　そうなったら一緒に旅するメンバーでツッコミがいなくなりますよ！

どちらにしても、この問題は私が考え込んでも解決しない気がする！　うん！　得意の丸無げだ！　今のところ困っていないから、今度機会があったら白さんに聞くという方向で。

心配そうに見る勇者様を見上げる。心配されているのがなんとなく嬉しくてニヤニヤしてしまう。

勇者様はそんな私を不思議そうに見たあと、大丈夫そうだと判断したのか肩から手を離しました。

なんとなく微妙に沈黙が落ち、私はさっきまでのことを思い出す。

「そういえば、何か考えていらっしゃったんですか？」

月を見ながらぼーっとしていただけだったんだろうか？　勇者様の行動も時々謎です。勇者様にとっては、この問いははぐらかすものではなかったらしい。

「人間が好きかどうかを、考えていた」

「な、なんか壮大な考えですね！」

スケールがでかいな！　個人単位じゃなくて、人間全体の話ですか！　やっぱり勇者様となったら、そういったことも考えるんだろうか。……でも、なんとなく、なんだけれど。勇者様は余り他の人といることは得意じゃないと思うんですが。あのエセ笑顔はたぶん社交スキルの一環なんだろうなと思う。

この人は人間を守るために、勇者という職責を受けて戦っている。人間が好きかどうか悩むって、かなり根本的な問題なんじゃないだろうか。戦う理由とか、なんかそのあたりのはなしですかっ。

「お前はどう思う？」

不意に質問の矛先が来ました！

え、そんな壮大な返事は出来ませんがっ。うーん。勇者様の求める答えじゃないかもしれないけど、考えたってたいした言葉が浮か

ぶわけじゃないから、正直に言うよ！

「私は、人によります！」

どーん。胸を張って答えたんだけど、勇者様は小首を傾げた。あ、今の仕草、小動物的でした！　背は私より大きいけどね！

神子、好き嫌いについて語る

私は人間といわれても、そんな曖昧な集団について語れるほど賢くはないです！　だから、分かる範囲で一生懸命答えてみた。

「たとえば、私を攫ったおじさんたちは、はっきり言って大嫌いです」

勇者様は神妙に私の話を聞いてくれる。

「でも、今まで面倒を見てくださった勇者様や神官様は好きだし、パン屋のおかみさんも好きです。一緒に働いていた同僚も友達だと思ってるし、いつも話していたおじいちゃんや大家さんも好きです」

上手く話せるかどうか分からないけど、言葉を探し探し伝える。

「でも、好きかどうかっていわれてわかんない人たちもいるんです。どうでもいいとかじゃなくて、そこまで深い付き合いじゃないしっていう人たちですね。姫様とか、嫌いじゃないけど仲良くするのはご遠慮したいとか、白さんみたいに変な人には近づきたくないとか」

あ、白さんとか言っても勇者様は知らないか。でもスルーして、とりあえず聴くことを優先してくれたみたいなので、私は話を続ける。

「だから、人間が好きかって言われたら、ひとによる、ってしか言えないんです。嫌いな人もいるし、好きな人もいるんです。でも両方とも人間だから」

だんだん自分で言ってて混乱しそうになる。でもなんとか伝えれたかな？　分かってくれたかなって勇者様を見上げたら、

「そういう考え方もあるか」

と仰いました。そうですよ、ありますよ！

「だから、嫌いな人がいたとしても、勇者様は無理に好きにならなくてもいいんじゃないんですか？」

もしかして、そういったことでは駄目なんだろうか？　全員を好きでいなきゃいけないなんて、そんな無茶なことを言われても困るよ

ね。私だって困るよ！　領主様が悪いひとじゃないかもって思うけど、大好きかどうかって言われるのと同じぐらい困るよ！　引き合いに出してごめんなさい領主様……でもオープンスケベ巨乳派はダメなんです。

「嫌ってもいいし、好きでもいいし、そのあたり、勇者様が思うとおりにすればいいとおもいます！」

必殺、やりたい放題！

私は好き勝手言ったけど、勇者様はしばらく考えていた。

そして、ぽつんと、

「そうか……そうだな」

と呟かれました。

勇者様はいろいろ適当でいいと思うよ！　でも適当で世界が滅びたら大変なことになっちゃうのかな。ううん、私の意見を振りかざしてよかったのだろうかってちょっと思ってきたけどもう遅い。

んん？　でも結局私が言っているのって、白さんが言ってた勇者様一人苦労させる世界の仕組みと似たようなことなんだろうか。人間全体で見たら分からないけれど、個人レベルならいい人間がいるかもしれないって言うヤツ。あのときは反発したけど、こういったことと同じことなんだろうか。そう考えたら、勇者様一人の苦しみを除外するとしたら、理に適ってるのかな？　いや、そういうことじゃないのかな？　むむむ。でも、実際勇者様が苦労しているはずだから、おかしい話なんだろうか。

あっ、なんか脳みそ使ってる気がする！

そのとき、空気を切り裂いてとある音が鳴り響きました。

ぐー。

お腹の音です！

しかも私の！

ぎゃあああああああ！

反射的にしゃがみこむ。
消え去りたいぐらい瞬間的に恥ずかしくなったのと、こうしたら次にお腹が鳴ってもごまかせるかなあって。いや、明らかに鳴ったからごまかせるも何もないだろうよ、私！
「お前は腹が減るのか？」
勇者様が不思議なことを問いかけます。私は恥ずかしさの余り頭を抱えながらやけくそのように答えた。
「減ります！　胃袋が筒状になりそうなぐらい減ってます！」
うおおお、もうお腹は鳴らないでね！　微妙にシリアスなことを考えていた気がするけど、全部吹っ飛んだ。お腹の音で吹っ飛んだ！
「選定はなされたが、欲求の抑制はない……？」
頭の上で勇者様がぶつぶつ仰っていますが、私はよく聞いていなかった。
「あ、すみません、今何か仰いましたかっ」
しゃがんで見上げると、首が痛くなるよ！　何を食べたらそんなに身長が伸びたんですか、勇者様。私もまだ成長期なはずだから、是非教えていただきたい！　私それ食べまくります。
「気にしなくていい」
「逆にそう仰られたら、大変気になります」
さっきもスルーされたから、ここで踏ん張ってみる。すると珍しく勇者様は微妙な雰囲気をたたえつつ、
「失礼かつ聞きにくいことを質問をしようとしたが、止めたところだ」
と仰いました。こ、これは気になる！　けど、聴いたら大ダメージな気がする！　これは寝る直前にかなり甘いお菓子を大量に置かれた時のような状況ですよ。今食べなきゃ腐るけど、食べたら後の自分に大ダメージ、見たいな。悩む！
でもここは踏み込んでみる。後悔は、あとで悔やむから後悔なんだ！　踏み込むっていっても、ちょこっと、つまさきぐらいだけで。どの話かを自分で想定して逆に問いかける！

聞きにくい、そして失礼と来れば、私の場合、身長か、
「……胸の話題ですか？」
この話題かなっ。
「なんでそうなる」
ま、まさかの勇者様からの突っ込み！　だんだん私の立ち位置がボケになってきている。
「いや、聞きにくい話題っていったらそれぐらいしか想定がっ。……別の話だったんですね」
まさに壮大な自虐ネタを発してしまったのか。反省します。
「……何故胸の話題が？」
ぐっ、まさかそこに反応するとは！　勇者様、見逃してやってください！　いたいけな町民をいじめないください！　じっと見下ろされるプレッシャーに私の心はちょっとだけ折れた。
「胸……あまり、無いほうなので気になるんです……」
自分から暴露しました！　これで何も怖くないよ！　どんとこいだ！　といいながら赤くなっている自分が恥ずかしい。うああ、奇声を上げて頭を抱えて転がりたい！
「そうか？」
勇者様はそれ以上はつっこみませんでした。つっこまれたら、私が大変なことになるがな！　ありがとう、勇者様！　感謝すべきなのか、逆に涙目で突っかかるべきなのか。
深呼吸して落ち着いてみる。すーっと息を吸い込んだら、冷たい空気が胸いっぱいに入って落ちついた。
胸の話題じゃないとしたら、何の話だろう。じーっと勇者様を見上げながら話題を探ってみる。勇者様は根負けしたのか溜息を付いて、白状しました。図らずも今日も睨めっこに勝ったようです。
「三大欲求の抑制の話だ」
「抑制、ですか？」
んー。そういえば、選定を受けたら抑制されるとか言うあれですか？　三大欲求というと、と指折る私に勇者様が先に並べてくれる。

「食欲はうせてない」
そうですねっ！
「睡眠欲は、」
勇者様に言われる前に自分で突っ込んだ。
「どこででも寝れます！」
しかし、私の渾身の自爆には勇者様は触れなかった。なんですと。
「最後の欲求については……」
あえて勇者様はぼかしてくださったようです。これが聞きにくいことだったのかー。納得。でも答えは決まっている。乙女の口からはいえませんっ！　いや、普通に言えないよ……しかも、相手が勇者様だ。なんか神官様だったら学術的な話になりそうで、言えそうな気がする。
「えーっと……まあ、その……」
こ、こ、この空気は微妙すぎる！　確かに踏み込んだこの話題は自分に大ダメージだ！　ごめんなさい勇者様！　勇者様がぼかした話題に関しては、あまりつっこまないようにします。ちょっと心に刻んだよ！
「気にしないでいい。こちらこそ申し訳なかった」
いや、私があえて飛び込んだせいですよ。微妙な雰囲気のまま、会話が途切れ、静寂が訪れる。
再び朝の爽やか空気に例の音が響きました。

ぐー。

あああああ。
しゃがみこむ体勢は、役に立ちませんでした。戦いはいつも空しい。無駄な努力だと分かっていても、人は頑張ってしまうものなんですよ。たとえ、お腹を押さえたら鳴らないかもしれないという程度の頑張りであっても、それが無に帰るとこんなに空しいものなんですね。

神子、やっぱり怒られる

「さあ、いろいろお話しましょうか」

にっこりと笑った神官様、笑顔、大変黒いんですがあああああ。テーブルを挟んだ距離でも、ひんやりとした雰囲気が漂ってきます。この怒り方は怖いです！　怖いです！　だって頭に血が上ったとかいう怒りかたじゃなくて、どんな氷よりも冷たい怒り方ですよおおお！！

「あ、あの、ご、ごめんなさい」

ガタガタ震えながら謝るけど、それだけじゃすまない感じです。当たり前ですよね。ですよねー……はい、私が悪いです。悪いです！！

何故こんなことになっているかというと。

庭でぼんやりと勇者様と過ごしていたとき、私の部屋では大混乱だったようです。

起こしに来たら部屋にいないとか。

攫われて次の日なもんで、皆さん大変慌てて、大捜索が始まろうとしたそのとき部屋に帰ろうとした私が発見されました。

まさしく「あっ……」って。

あのときの気まずさはなかったよ！

玄関で武装している何人かの騎士様と鉢合わせ！　何があったんだと硬直していたら、つぶらな瞳のお兄さんが、私を指差して「いた」って言ったんです。速攻であねさんに「いらっしゃる、だ！　あと人を指差さない」と肉体言語による教育を施されていました。

軽くですけど。

あねさんにもちょっと怒られました。起こしに来てくれたという

か、様子を見に来てくれて私がいないことに気付いたらしい。そりゃ焦る。私でも焦る。でも最後はあねさんはご無事で何よりと頭をなでてくれました。まさにあねさん！　あんな素敵な人になりたいものです。方向性が違うから無理っぽいけどね！　例えるなら、つぶらな瞳のお兄さんが、知性派を目指すぐらいの違いがあると思っています。あの騎士のお兄さんは勝手に肉体派だと思い込んでる。

神官様がいらっしゃったら私の居場所はすぐわかったんだろうけど、急ぎの余り捜索と報告を同時進行で進めちゃったらしい。丁度報告をしているときに私が発見されたそうです。まことに申し訳ございません！

そして冒頭のお説教タイムに入るわけでした……。朝食は一応食べさせてくれました！　神官様は怖いけど鬼畜じゃなかった！　私のお腹がグーグー鳴って大変微妙な空気が流れたせいもあるけどっ！　軽い食事の後、勇者様に見送られ（頑張れとだけ言われた）別室にてテーブルでのお説教タイムです。勇者様は陸馬さんの世話をしに行くそうです。いいなあ、私ももふもふしたい。

ゆっくり始まったお話は、終始穏やかにすすみました。

一度、勇者様に怒った神官様の姿を見たけれど、あれとは全く別物でした。

淡々と、心配したこと私の至らない点や気をつけるべきことをお話されました。そして、随所で「この場合なら、どうすればよかったと思いますか？」と質問があり、それに私が答え、更にそれに対して注意をされるという。とりあえず、知らない手紙で呼び出されることが駄目なことも分かった！　今度、一応神官様と勇者様の筆跡を見せてくださるそうです。あと、簡単なみわけ方の星術とか、偽造書類をどう防ぐかとか。知らない人についていかないという件はあねさん達の保護に関しては大丈夫だったようです。プリンを貰ったことは報告できませんでしたっ。

簡単に書けばとても有意義な時間なんですがっ。

怖い。
神官様の静けさが怖い！
ずっと硬直したままお話を聞いていたんで、握り締めた掌はじっとりと汗をかいているよ！
「私からの話はこれぐらいにしましょう」
一通りの注意事項とお話が終わったようです。
「ありがとうございました！」
涙目のままお礼を言うと、緊張の余り身体が固まっていたことに気付きました！　ばっきばきだよ！　でも肩を回すのとか、今の雰囲気では出来ない！　まだお説教の余韻が残っています。し、静かだ……。
すっかり太陽が傾き、お昼頃になっています。つまりお昼ご飯ですか？　窓から差し込む陽射しが大変あたたかそうです。私もお昼寝したい……。お外って、あんなに遠い世界だったんだね……。
「あと、思い出したくないかもしれませんが、誘拐されていたときの話を改めて聞かせてもらいます」
神官様が改めて切り出しました。簡単なことはあねさんたちに保護されたときにお話してます。でも、白さんに関しては明らかに意味が分からないひとだったから話してません。見学って、本当にわけが分からないし！　あのひとはたぶん暇なんだと思います。暇じゃないとか言ってたけど。
「えっと……。宿屋の鼻が大きい男の人が、伝言ですって手紙を持ってきました」
神官様は手元の紙になにやら書いていらっしゃいます。まさに取り調べですね！　うわああん！
「それで？」
うながしがいつもよりそっけないのは、多分書いていらっしゃるせいだと思いたい。
「それで、地図の場所に行ったら星術で眠らされて。気がついたら倉庫で転がっていました」

無言のうながしに、少しだけ迷った末に、
「で、白さんが見学に来て、帰って、誘拐犯のおじさんたちが私を売り飛ばす話をして、荷馬車に乗せて行こうとしました。そしたらしばらくしたら騒ぎが起こって、あねさんたちに保護されました！」
神官様はさらさらと紙に書いてから、一言だけ、
「白さん、というのは、【１／Ｓｈｒ】のことですか？」
と仰る。私はよく分からないので首を傾げると、神官様は、言い直した。
「ではこちらで名乗っていましたか？　【１／Ｓｈｖｖｖｒ０】（しろ）と」
「あ、そっちです！　変なひとでした！」
神官様はむずかしい顔をしてこめかみをぐりぐりしていました。

神子、神官の推測を聞く

こめかみをグリグリするのは、頭を悩ませている時の神官様の癖なんだろうね。たまに見ます。それだけ私が悩ませているってことかあああ！　理解しました。

「白さんとお知り合いですか？」

神官様があっさりと星別者名を口にするからそう思ったんだけど、

「そんなわけないでしょう」

とさっくり切り捨てられました。

「伝説上の人物ですよ。そもそも、一般学説では実在さえも疑われています」

「六〇〇〇年ふらふらしてても、印象に残ってないんでしょうか」

あんな目立ちまくりの格好なのにね！　おかしい。そもそもどこで生活しているのか謎だ。あのひとが食材を購入しているところを想像できない！　八百屋で値引き交渉をする白さん。……どっかの洞窟に住んでるとか言われた方が、まだ現実味がありますね！　想像の中だけでも、なんて街が似合わないんだあのひと。

「……六〇〇〇年と言っていたんですか？」

さらさらと何かを書きつけながら神官様。なんだろうな、本当にいつもより取り調べっぽいよ！　さあ、なんでも吐いちゃいますよ！　そもそも、白さんは口止めも何もしなかった。どっちでもいいんだと思うよ！　言ったらいけないことを口にするだけで沸いて出てきそうな気はするんですが。恐怖ですね。それが夜だったらあんな白い人がぼおっと浮かび上がるんだよおおお！　絶対怖いって！

あ、話が脱線した。

ともかく。

「はい、昔の話を聞きました」

「昔の話、ですか。たとえばどんな？」

「はい、世界が三回滅びたときの話です」
神官様の手が止まった。私のほうを見て、
「そうですか……。大災害の前の話ですか？」
と溜息に混ぜて仰いました。さすがに大災害は私も知ってるよ！
白さんの言うところの第四期が始まる前の、三期の崩壊のことだよねっ。
私はあんまり詳しくは覚えていないけど、白さんに見せられた幻視の話をした。
一度目の、世界を呪った女の人の話。
二度目の、人の欲望が戦乱を呼んだ時代の話。
そして、三度目の命が歪んだ世界の話。
支離滅裂になりそうな私の話を、神官様は書き物をしながら相槌を打って聞いてくれました。
でも、あの事は言っていいか分からなかったんだ。
神様が世界を滅ぼそうとしていることとか。勇者様のこととか。
とりあえず、三回の滅びについて話を終わり、私はグルグル悩んだ。他のことも言っておくべき？　白さん、中途半端な知識を与えていかないでください！　あのひとのせいにしてみる。
「興味深いお話を、ありがとうございました。うすうす考えていたことが裏付けられました」
ぱたん、とペンを置きながら神官様が言う。
「え、何か分かったんですか？」
「あなたが初めて瘴気を浄化したあの廃墟で、紙を拾ったのを覚えていますか？」
うっ……そんな、記憶力にチャレンジするようなことを仰るのですか！
私の微妙な表情を見て、明らかにこいつ覚えてないなということを理解されたようです。神官様は私の答えを聞かず、
「あの紙はとある学説をつづった紙でした。現代神話がおかしいのではないかと」

と続けられました。え、急に話が飛んだ。
「神話ですか？」
神官様はすらすらと諳うようにそらんじる。
「――初めに星神が自己を自覚された。全き存在から神となった。そして星を配置され、命の基盤を整えた。その上で子等を作り、この世の韻律を決定した」
うん、その文章を覚えています先生！　なんだろ、このもやーっとした気持ち。
「でも、やっぱり違和感があるんです」
そういえば、白さんとも似たような話をしていた気がする。でもそのときには何も感じなかったから、やっぱり順番が違うのかな？
白さんがどの順番で言ったかなんて覚えてないです！
……違和感といっても、私の覚え間違いかもしれないけどね！
「あなたは以前、こういいました。――星神様が神だと知覚した後、星の配置をされ、韻律を定め、命の基盤を整え、子等を野に放った。」
すらすらと神官様が仰る。うん、こっちの方が正解な気がするんだ。
「あ、そっちがしっくり来ます！」
私の記憶はそっちが正しいと囁く。
「私が始めにお伝えしたのが、現在星教で教えられる神話です」
私はどっちにしても同じじゃないかなって思う。どっちがどっちでも、結局神様が全部創ったんだよね？
「え？　うーん、順番が違うだけじゃないんですか？」
神官様はその答えに苦笑した。
「順番が古い方が、世界への影響力が強いんです。簡単に言えば、韻律……まあ、言葉としましょうか。言葉を知らない人間がいて、後から言葉が付け加えられた。これが今、一般に通用している、『命の基盤を整え、子等を作り、この世の韻律を決定した』です。人間より言葉が先行することがないんです。言葉は人間に影響をあたえられるけれども、言葉がなければ人間が存在できない、とはして

いない」
な、なんとなく分かる気がした。
「ですが、あなたが言った方だと、『言葉があり、言葉によって人間が生み出された』と解釈が出来るんです。韻律がなければ、生物が存在しない、と」
う、うん。
「……ここまでは、分かりますか？」
「た、多分」
必死で頷きますよ。つまり、えーっとなんですか？
「つまり、その教えを星教自身で教えているとすると、それはあえて間違えた解釈を教えているということです。お話にあった三期の滅びはまさにこの順番が違えば起こらなかったことなんです」
すなわち、人が命の基盤を韻律で捻じ曲げることが出来ないなら、あんなことは発生しなかった、ということ？
「え、じゃあ神様自身が違うことを広めているんですか？」
私はビックリした。けれども、神官様は首を振る。
「広めたのは星神様ご自身か、それとも人間か……分かりませんけどね。代々の大神官が否定をしていない。恐らく彼らものこの答えに行き着いていたと思いますし」
「え、今までの人はそれを残していないんですか？」
「残すのも危険な情報です。が、もっと確実な情報源が常に存在していたとするなら残さずともよいと思われます」
それが白さんですね！　さすがにピンと来ました！　歩く大百科おじいちゃんですしね。
「ここからは私の推測でしかないのですが、神話がすりかわったのは恐らく三期が原因でしょう。命の基盤に手を出したせいで滅びた。それが神話の隠蔽に繋がったのではないでしょうか。まあ、始原（しろ）の方に逢ったら聞いてみてください」
私は反射的に答えた。
「え、あんな変な人と会いたくないんですが！」

神官様は苦笑してこう仰る。
「恐らく勇者は逢っていると思いますよ。以前接触したと言っていた人物の背格好と一致しますし。名前は名乗らなかったようですが」
白さんどれだけ徘徊しているんですか。

神子、神官に質問する

「そもそも始原の勇者自体、謎が多いですからね」
と神官様。いや、あのひとは謎と根性悪の塊のような気がしますよ！　いたいけな乙女を床に転がしなおす男です。意外と私の恨みは深い。
「ただの変な人じゃないんですか？」
純粋に疑問に思い、神官様に問いかける。
「代々の勇者は、その名称に「色」をつけられているんです。これは、その時代の星原樹が染まった色らしいんですが」
そういえば、と思い出します。一度見た星原樹は薄く青い葉っぱが茂っていました。ほほう、それが勇者様の名前になってたんですね！　え、目が蒼いからじゃないんですかっ。鎧が蒼いからじゃないんですかっ。今更聞く驚愕の事実！　まあ、鎧はあとからでも好きに出来ますしね。
「紅蓮にしろ、深蒼にしても、色名と意味を持たせてつけられている。なのに、彼だけ意味が揃っていない。そもそも白が始まりを指すとは定義されていないんです」
おお、また難しい話になってきた。頭を回転させて頑張るよ！
「初めて勇者だーって名乗ったから？」
でも、と私はおかしいことに気付く。
白さんは、今の世界の仕組みについてとてもよく知っていた。それって、世界が滅びるのを防いだからとかじゃない。そもそもずっと存在していたのに、今期に限って勇者とか言っているのも変だなあ。
それに、白さんが勇者していたって事は、神様に白さんの働きが認められて世界が存続しているってこと？　それにしてはなんだか変な気がするんだ。あのひとは頑張る立場の勇者様とは別な気がす

る。なんだか逆の管理するひと、みたいなイメージが浮かぶんだよね。

結局一体あのひとはどんな立場のひとなんだろう。

神官様は白さんの変な点について、簡単に説明してくださる。

「そもそも勇者が現われるには、大神官が必要なんです。星神様の選定が必要ですから。ですが、六〇〇〇年代初頭、神殿の記録を掘り返してみても大神官が立ったという記述がないんですね」

あ、それで思い出した。この間からおかしいなーおかしいなーと思っていたこと。

白さんは、勇者様と神官様の話をするときに、勇者と大神官って言ってた気がするんだよね。気のせいかなーって思っていたけど、この際聞いてしまおう！　よし！

「はいっ神官様質問です！」

私は勢いよく手を上げました。神官様はさっき書き付けていた紙を見直している様子です。なぜか室内なのに手袋をはめている。めくりにくそうですね。

神官様はそのままこちらを見ずに、

「なんですか？」

とだけ仰る。私はずっと聞きそびれていたことを質問しました！

「神官様は、大神官様なんですかっ」

神官様は微妙な表情で私を見ました。

「……その質問はなかったので、ずっとあなたが知っているものとばかり思ってましたが」

そ、そんな目で見ないでください！　わたしは落ち着きなくもじもじしながら、

「ちょっと変だなーっては思っていました」

と早口で付け加えてみる。よく考えて察しとけ、という感じですか？　居たたまれない！　なんだかたまにおかしいなーと思った事はぽろぽろあるんだよね。神殿の人たちが凄い丁寧に接していたとか、セイヒツの間に普通に入れてたとか、あ、あと騎士団の人たちもめ

ちゃくちゃ丁寧だったとか。
「じゃあ、やっぱり神官様が大神官睨下なんですか？」
その呼び名に神官様は少し苦い笑いを浮かべる。
「星別者名上はそうですが、今は位を返上したことになっています」
え、そんな職業選択の自由があるんですかっ！　私は前のめりで聞きました！
「つまり、私も神子はイヤだなーって思ったら、返上できるんですか！」
「できませんよ」
えー。ばっさりと一撃で切られました！
いや、ちょっとできるかなーって思ったんだ。このキラキラしい肩書きとは一生はお付き合いできないしね。
「おばあちゃんになった頃には悲惨だと思います！　なんだかこの名前で超絶美人を想像する方がいらしゃいそうですし！　世の中の人の夢を守るために、是非返上しておきたいです」
と私は力強く主張しました。が、
「あなたは特殊ですよ。無理ですね」
二度目のばっさりです。神官様は容赦ありません。私はうなだれるしかない。特殊ってなんですか。なんだかそのイロモノ的扱いはイヤですよ！
「そろそろ呼び名に慣れてくる頃でしょう。大丈夫ですよ。ずっと呼ばれていたら、だんだんその気になりますから」
神官様、そのフォローは求めてませんよ……相変わらずフォローの微妙さが光ってます。
神官様はトントンと書類をそろえながら私に向かってにっこりと笑いました。そしてお話を元に戻します。
「どうやら黄金（きん）の時代、勇者の旅に大神官が付いて行って帰ってこなかったらしいのです。そのせいで随分神殿と国が揉めたとか。その頃から大神官は基本外出しないことに勝手に決められたようで」
「え、じゃあずっとその後は皆さん神殿にいらっしゃったんですか

？」

「その次の夜闇（くろ）の時代は、当時の司教に当たられる方で既に相当お年を召していらっしゃったのです」

へー、何故か大神官様は若いイメージがあったから意外です。

「あれ、じゃあ、大神官様はどなたが選ばれるんですか？」

すると神官様は皮肉な顔で、

「簡単な試験ですよ。セイヒツの間に入り、星原樹の葉を取ってくればいいだけです」

「あ、それなら簡単ですね」

私でも出来る試験ですよ！　お使いは得意です！

「あなたには簡単でしょうが、普通は近づくだけでも一苦労なうえに、星原樹に触れるだけでも大怪我する場合がありますからね」

明らかにあきれられました。というか、お枝様はそこまで危険物でしたっけ？　微妙に危険物だって言うお話は聞きましたが、大怪我ってなんですかあああ！　ちょっと、そんなに危ないものを、乙女に持たせているんですかっ。

「あ、そういえば枝は前の宿にあるんですか？」

「いいえ、持って来ましたよ」

神官様は笑みを苦笑に変えた。

「ですが、私も封印越しに持つのが精一杯です。手がおかしくなるかと思いましたよ」

手？　そういえば、神官様はずっと両手に手袋をはめている。書き物しにくそうなんだよね。注目してました！　いつもは手袋なんかしていません。

「手に怪我をされたんですか？」

「大丈夫です。直ぐに治りますよ」

神官様はやんわりとそれ以上の話題は打ち切る。話を戻しますね、と付け加えて、

「神殿に上がるものの中には、確かに大神官になることを目指してくるものもいるそうです。一気に箔がつきますからね」

と笑う。黒いですよおおおおおお！
「そんなにいいものじゃないんですが」
溜息に混ぜて言ったそれが、なんだか妙に耳に残りました。

「とりあえず、大神官では外に出られない決まりなので、一旦普通の神官へ身分を落として旅に同行しているわけです」
と神官様は話を括った。
「え、でも結局同じことじゃないんですか？」
いくらそういっても本質としては変わらないのに、変なの。大神官様って、『神の声』っていうなんか凄いことができる人なんだよね？　そんな風に選定された人だということに変化はないのに、一体何がしたいんだろうな。さすがの私でもおかしいって思う。
「そうですよ。同じことなんですがそれが分からない方が実に多いんですね。だからこんなごまかしが効くんですが」
おおっと！　含み笑いをする神官様はいっそ清清しいまでに悪い笑いですよ。いいんですか星職者。まよえる人々を導くお役目じゃないんですかっ。神官様は独り言のように続ける。
「ビンのラベルを張り替えたところで中身が変わるわけがないんですけれどね。ラベル自体に価値があると思っている方が多いので」
うっすらと笑うさまに貫禄すらあります。
そ、そうですか。あははは。としか相槌が打てませんよね！
「というわけで、一介の神官のはずなのに無碍に扱えないという、困った身分になっています。たまに面白いことになりますのでこれはこれで楽しいですよ。あえて知らない相手には公言もしていませんし」
その面白いですよ発言に薄ら寒いものを感じて私は笑顔が硬直します。神官様が面白い場面は、たぶん相手は生きた心地がしないと思われます。はい。
「……まあ、私の話はこれぐらいにして、他に質問はありませんか？」

神官様は私の固まりっぷりを眺めながらそう仰った。
質問かあ。今の大神官話でいろいろ吹っ飛びました！　えーっと。
そして思い出した。
さっき、朝に窓から見た街の風景が脳裏に浮かぶ。
「この街には、いつまでいるんですか？」
私は黒い靄を思い出して身震いした。私の微妙な表情に、
「……そうですね、あなたは早く出たいですよね」
と仰る。あ、違った意味で取られたかな？　悪い思い出しかないけど、そういう意味で聞いたんじゃないんですよ。私は慌てて付け加えた。
「あのですね、黒い靄が見えるんです」
「黒い？」
神官様がここでまた不審そうな顔をしました。
「以前、瘴気はピンクに見えると言っていませんでしたか？」
そうです、瘴気はピンクなんです。が！　ここで見えるのは黒い靄。黒い靄がたまったら瘴気になるの？
「えっと、黒い靄が見えるんです。悪いこと考えている人の周りに見えるというか。今は町全体が薄黒いというか……」
あの状態をどういえばいいんだろう。腹黒少年の周りを囲んでいた黒いもやーっとしたもの。あと、朝起きてみた時に街が沈んでみてた黒いヤツ。みるだけでトリハダもののあれですよ！
「あの黒いのが集まったら瘴気になるんじゃないかなって思うんです。白さんはもうすぐここも瘴気に沈むって」
白さんが言ったことを口に出した途端、神官様の表情が険しくなりました。考え込まれる神官様に、あのことを聞いていいかどうか悩む。
瘴気は人が生み出したもの。そして、魔物は瘴気から生まれるもの。
本当に乱暴な言い方をすれば、人間がいなくならない限り、魔物がいなくならないってことだよね。でもそのことはお二人は知って

いるんだろうか。考え込む神官様に聞くかどうか悩みます。
「始原（しろ）の方が言っていたなら、そうなんでしょうね」
ややあって、神官様は溜息をつきながらそう仰った。片付けつつあった紙をもう一度開いて、何かを書き付けている。
「物質コードで絞るとしたら瘴気は中和できる。けれどもそれ以前のものは一体何に当たるのか……浄化で定義されている効果は」
難しそうなひとりごとですよ！　私はとりあえず置物となっています。すみません、協力できなくて。神官様は難しそうな顔をして黙ってしまいました。そしてふと私に気づき、
「ああ、申し訳ありません」
と仰った。いいえ、どうぞ考えに没頭していただければ！　私はそのあたりにある置物程度だと思ってくださいっ。つまりあの花瓶と同じだと思っていただければっ。
「あの、やっぱりこの街って治安が戻らない限り黒いもやもやが消えないんでしょうか」
私は恐る恐る聞いてみる。多分、町全体がおかしいから、人もおかしいんじゃないかな？　悪いことがさらに悪いことを生み出して、どんどん悪くなっている気がするんだ。腹黒少年が言っていた、騙される方が悪い、って言うこととかがとても象徴している気がする。皆どこかおかしくなっているのは、町全体がおかしいせいかもしれない。
神官様は首を傾げた。
「治安が戻ると消えるものですか？」
あっ。話の繋がりが分からないですよね！　すみません唐突な話しっぷりで。私は覚悟を決めて、あのことを切り出した。
「人の心の悪いところが集まって瘴気になって、魔物になるって聞きました」
「誰に……というのは愚問ですね」
神官様は遠い目をしながらそう言った。そうです！　お察しの通り謎知識は大体白さんだと思います！　多分。いろいろ混じってき

ているから、どこからの知識か自信がないものあるけどっ。
神官様は溜息をついて、こめかみをグリグリされました。
あー。困らしちゃった。
「魔物が生物か非生物かは以前から論争がなされていたものです」
と言う事は、やっぱりこれも一般教養じゃなかったあああ！
デンジャラス知識ばっかりを置き土産にしてませんかまっしろしろすけさん！　今度逢ったらガクガク揺さぶって文句言いたい。相手が神官様だからいいものの、うっかり変なこといって私が微妙な目で見られるじゃないですか！

神子、釈放される

「詳細を聞きたいところですが……」
そういいつつ私をじっと見る神官様。私は万感の思いを込めてじっと見詰め返します。

分かって神官様！
私が白さんの小難しい話を詳しく覚えているはずがないじゃないですか！

二人で無言で見詰めあうことしばし。
神官様がそっと目を逸らしました。どうやら私の思いを理解されたらしい。これは神官様が勝ちを譲ってくださったようですね！
うむ。この戦いも空しかった。
なんだか勝負に勝って、人としての器に負けた……！
「それにしても、始原（しろ）の方はあなたに何を話にいったんでしょうね」
神官様が遠い目をしながら仰るので、私は元気に答えました。
「見学って言ってました！」
すると、微妙な表情をして、
「あなたの素直なところはある意味美徳かもしれません。が、言う事を額面通り受け取っていい人物かは、きちんと考えてくださいね」
と、ざっくり釘を刺されました。
……ウッ！
そういわれると、心にいろいろ刺さるものがありますッ！
「縄で縛られている史上初の神子を見学に来たのだと思いました……」
「どんな人物ですかそれ」
私の中で白さんの評価はどん底のようです。
「知らない人物については推測しか出ませんから、話としてはこの

あたりでいいでしょう」
　はっ、この流れは、まさか！
「長く話につき合わせてしまいましたね。お疲れ様でした」
　つ、つ、ついに釈放の時が！　やったね！　私、頑張りました。
内心花を振りまきながら踊り狂っている私に、神官様は神妙に告げた。
「この街にはあと二、三日滞在します。それは我慢できますか？」
「あ、はい！　大丈夫……だと思います！」
根拠のない自信は得意技ですよ

　何はともあれ。
　お説教が終わりました！　やったあ！
　自由の空気って、なんて美味しいんだろう。ありがとう神様！
　神官様のお話の後、私はようやく解放されました！
　ではここまで、と一旦終了宣言をいただいたので、心置きなくふらふらと出歩いています。宿の敷地から出ないという約束をして、壁の中をお散歩中です。これはこれで仕方がないよね。
　あっ、いろいろ聞き忘れている気がする。白さんが言ってたこととか、結局中途半端になっちゃったよ！　だって、神官様が大神官だということをようやく聞けたと思ったら、全部そっちに思考が持っていかれちゃったしね。ええ、同時にいろいろ考えられない残念な頭ですよ！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5611v/

町民Ｃ、勇者様に拉致される

2011年11月2日03時10分発行